HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究 ～観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けて～ (CATS叢書 ; 第3号) 全1冊
Author(s)	山村, 高淑; Yamamura, Takayoshi; 小林, 英俊 他
Description	編者：山村高淑、小林英俊、緒川弘孝、石森秀三
Citation	CATS 叢書, 3
Issue Date	2010-02-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42681
Rights	付属資料（１）（３）を除く、本書の著作権は、北海道大学観光学高等研究センター・財団法人日本交通公社に帰属します。また、付属資料（１）（３）の著作権は原著作者に帰属します。なお、出典を明記された上での学術・非営利目的の引用はこれを禁じるものではありません。
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	journal
File Information	CATSLibrary03.pdf

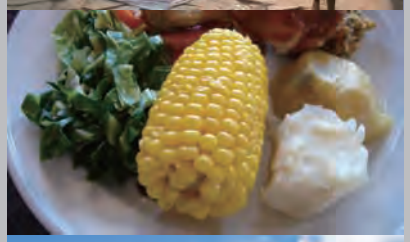
Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

CATS叢書第3号

コミュニティ・ベースド・ツーリズム

事例研究

山村高淑・小林英俊・緒川弘孝・石森秀三　編



北海道大学観光学高等研究センター
財団法人日本交通公社

CATS 叢書　第 3 号

コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究

～観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けて～

山村高淑・小林英俊・緒川弘孝・石森秀三　編

北海道大学観光学高等研究センター
財団法人日本交通公社

2010 年 2 月 1 日

CATS Library Vol. 3

Case Studies of Community-Based Tourism:

Towards a Sustainable Happy Relationship between Tourism and Community

Edited by
Takayoshi YAMAMURA, Hidetoshi KOBAYASHI
Hirotaka OGAWA and Shuzo ISHIMORI

Center for Advanced Tourism Studies, Hokkaido University
Japan Travel Bureau Foundation

February 1, 2010

はじめに

我が国では、明治から現在に至るまでの度重なる市町村合併や価値観の近代化により、伝統的なコミュニティのあり方･機能やコミュニティ意識は大きく変容してきた。また、少子高齢化や過疎化、昼間人口の減少など、特に我が国の地方都市・農村、中山間地域のコミュニティをめぐる問題は日々その深刻さを増している。こうした中、注目されてきているのが、観光による交流人口増大を通した、地域コミュニティの活性化・再構築である。

北海道大学観光学高等研究センター（以下、CATS）と財団法人日本交通公社（以下、JTBF）は、以上のような社会状況を踏まえ、コミュニティを基盤とし、コミュニティが主体性を持ち、自律的に観光振興を進めていくあり方としての「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」に着目、2006 年 4 月に同ツーリズムの先進的取り組みを調査・研究するための共同研究チームを発足させた。「地域の観光資源を守り、輝かせるのは、地域コミュニティの役割である。その一方で、観光には、地域コミュニティを元気にし、再生・発展させる力がある。」という理念の下、こうした「観光とコミュニティの幸せな関係」を構築するための要件を明らかにすることを目的として、本調査研究は進められた。

本報告書は、この「コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する共同研究チーム」の調査研究記録を広く一般社会に向けて報告するものである。

近年、地球規模から地域、産業及び企業に至るまで、持続可能性（サステイナビリティ）が問われ、資源の有効利用や環境保全などに関する施策や活動が活発化している。観光においても、観光が自然環境や歴史的遺産を利用する活動である以上、それらの資源に何らかの負荷を与え、劣化させ、最悪の場合は消滅させる恐れがある。そうである以上、それら資源の保全と観光利用を両立させ、持続可能性を維持することは、重要な課題のひとつであり、将来の世代への義務であるとも言える。

そうした課題に応えるべく提唱されてきた観光のありかたのひとつに、エコツーリズムがある。すなわち、旅行者は、自然環境や歴史的遺産等の資源をできるだけ損なわずに楽しみ、それらの価値と保全の意義を認識する。それと同時に資源を有する地域コミュニティは、経済的な効果を得て、地域社会の持続を図る、といった観光のあり方である。わが国でも、近年、多くのエコツアー商品や地域でのエコツーリズム・プログラムがつくられ、2007 年には、エコツーリズム推進法が制定されるなど、広くエコツーリズムという単語が認知されつつある。

しかし大きな問題がある。現在の我が国では、「エコツーリズム」という用語は、往々にして単なる「自然観察観光」「自然体験旅行」の意で用いられることが多いのである。本来、「エコツーリズム」とは観光における行動理念であり、生態学的に負荷の少ない

形式を採るとともに、地域コミュニティの伝統文化や社会・経済の持続可能性に対しても、十分な配慮がなされる観光のあり方であるはずである。しかしこのことが一般に十分に認識されているとは言い難い。

そもそも、そこで人間が生活していないような、原生的な自然が広がるエリアの場合、生態系や資源の保全範囲は設定し易く、保全のためのルールを定めることも、それを守ることも比較的容易である。しかし、人間が居住している地域においては、ことは容易ではない。なぜならそこでは、当然のことながら尊重されるべき地域コミュニティの生活があり、これを無視することはできないからである。つまり、生態系や資源の保護と同時に、地域の伝統文化や社会・経済面での持続可能性についても十分な配慮がなされるべきであり、両者の調和が求められるという難しさがあるのである。

わが国の観光資源を見た場合、自然資源、文化資源を問わず、ほとんどの資源は、人々が生活する地域の中にあり、それらは人々の暮らしとともに守られ、継承され、発展してきた。古都京都の文化財や白川郷・五箇山の合掌造り集落といったような歴史都市や伝統的集落のみならず、白神山地や屋久島などの自然環境でさえも、そうした資源を保全し、管理し、磨いてきたのは、地域で生活する人々＝地域コミュニティである。言いかえれば、観光資源の持続可能性は、地域コミュニティの持続可能性と運命を共にしているのである。

こうした意味で、コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する調査研究は、我が国の観光政策・観光研究において、非常に重要な意義を持つと考えられる。

なお、「コミュニティ」という用語に関しては、地域開発論や都市計画論、社会学などの分野において、様々な形で定義がなされているが、本報告書においては、それらについては具体的に触れないものとした。というのも本報告書では、現地調査を通して、実際に地域で何が起こっていて、何がコミュニティとして位置付けられ得るのか、そしてそのコミュニティがどのような役割を果たし得るのか、ということを抽出していくことに主眼を置いたため、厳密な用語の定義を行うと、こうした発見を制限する可能性があると考えられたからである。したがって、本報告書においては、「コミュニティ」という用語を以下のような用法で用いる、というに留めておくこととする。「国家よりも小さな領域であり、地域の自律的な活動が可能となる範囲」「人々が観光開発において自らを主体として位置付け、自律的な活動を展開していくための参加を可能とする小さな単位の場、あるいは社会」。

また、「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」という用語は、我が国においては未だ一般的ではなく、明確な定義はなされていない。この用語についても同様に、現地での発見を制約しないよう、敢えて厳密な定義は避け、上述のとおり、以下のような緩やかな用法で用いるものとする。「コミュニティを基盤とし、コミュニティが主体性を持ち、自律的に観光振興を進めていくあり方」。

本調査研究では、我が国におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムの構築に際し、参考となる事例を把握するため、世界に広く範を求め、2006 年度から 2008 年度にかけ、毎年 1 ヶ国、計 3 ヶ国を訪問し、現地視察や鍵となる人物へのインタビュー調査を実施、コミュニティ・ベースド・ツーリズムのあり方の検討を行った。

初年度となる 2006 年度においては、地域コミュニティが一体的に観光に取り組みながら、地域の伝統文化の保全・発展に成功している典型的なコミュニティ・ベースド・ツーリズムの例として中華人民共和国貴州省のミャオ族、トン族等、少数民族集落を採り上げた。

次の 2007 年度は、コミュニティ・ベースド・ツーリズムのプロジェクトに取り組み始めたばかりではあるが、地域コミュニティの持続可能性を高めるうえで最も重要な課題のひとつである、保護と開発のバランスというテーマに対し、「国民総幸福ＧＮＨ（Gross National Happiness)」という哲学を掲げて対応し、その哲学に沿った施策で一定の成果を挙げているブータン王国を訪問した。

最終年度の 2008 年度は、日本の観光地づくりにより近い条件での成功例を求め、古いコミュニティの仕組みをベースとしながらも、グローバル時代の観光に対応して、成功しつつある事例として、資本主義の先進国であるニュージーランドの先住民族であるマオリによる観光を対象として調査を行った。

本報告書は、これら 2006 年度から 3 年間にわたって行われた「コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する調査研究」における、共同研究メンバーによる現地視察記録、討議記録、成果物を、小林英俊（JTBF）・緒川弘孝（JTBF）・山村高淑（CATS）が CATS 叢書向けに編集し取りまとめたものである。

なお、「コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する共同研究チーム」は以下の 6 名から構成されており、本報告書はこれらメンバー全員の共同研究成果物である。

≪CATS≫
石森秀三（北海道大学観光学高等研究センター長）
山村高淑（同准教授）
≪JTBF≫
小林英俊（財団法人日本交通公社常務理事）
黒須宏志（同主任研究員）
相澤美穂子（同主任研究員）
緒川弘孝（同客員研究員）

本報告書で取り上げた事例はいずれも先駆的な事例として位置づけられるものであるが、社会背景や自然環境は我が国と大きく異なっており、直接我が国にあてはめられ

るものではない。しかしながら、こうした事例から、我が国に不足している理念や取り組みを謙虚に学ぶことで、我が国の地方が持つ潜在力を大きく引き伸ばす契機を得ることができるのではないかと我々は考えている。

本報告書が、日本の地方都市・農村、中山間地域におけるコミュニティの再生と地域振興、ならびに観光に関する研究の発展に、わずかでも寄与することができれば幸甚である。

なお、本研究は財団法人日本交通公社の観光文化振興基金の支援を得て実現したものである。関係各位に心から御礼申し上げる。

2010 年 2 月 1 日
編者

目　次

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・　*i*

１．中国・貴州省編　・・・・・・・・・・・・・・　1
（1）中国・貴州省 調査研究対象地の概要　3
（2）中国・貴州省 現地視察調査の日程　7
（3）中国・貴州省調査 研究会　9
（4）中国・貴州省調査に関する考察・検討・議論のまとめ　45

２．ブータン王国編　・・・・・・・・・・・・・・　55
（1）ブータン王国 調査研究対象地の概要　57
（2）ブータン王国 現地視察調査の日程　70
（3）ブータン王国調査 研究会　71
（4）ブータン王国調査に関する考察・検討・議論のまとめ　95

３．ニュージーランド・マオリ編　・・・・・・・・・・・・・・　107
（1）ニュージーランド 調査研究対象地の概要　109
（2）ニュージーランド 現地視察調査の日程　117
（3）ニュージーランド調査 研究会　119
（4）ニュージーランド調査に関する考察・検討・議論のまとめ　155

４．まとめ　・・・・・・・・・・・・・・　167
（1）コミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功の要件と課題　169
（2）コミュニティ・ベースド・ツーリズムの実践に向けて　179

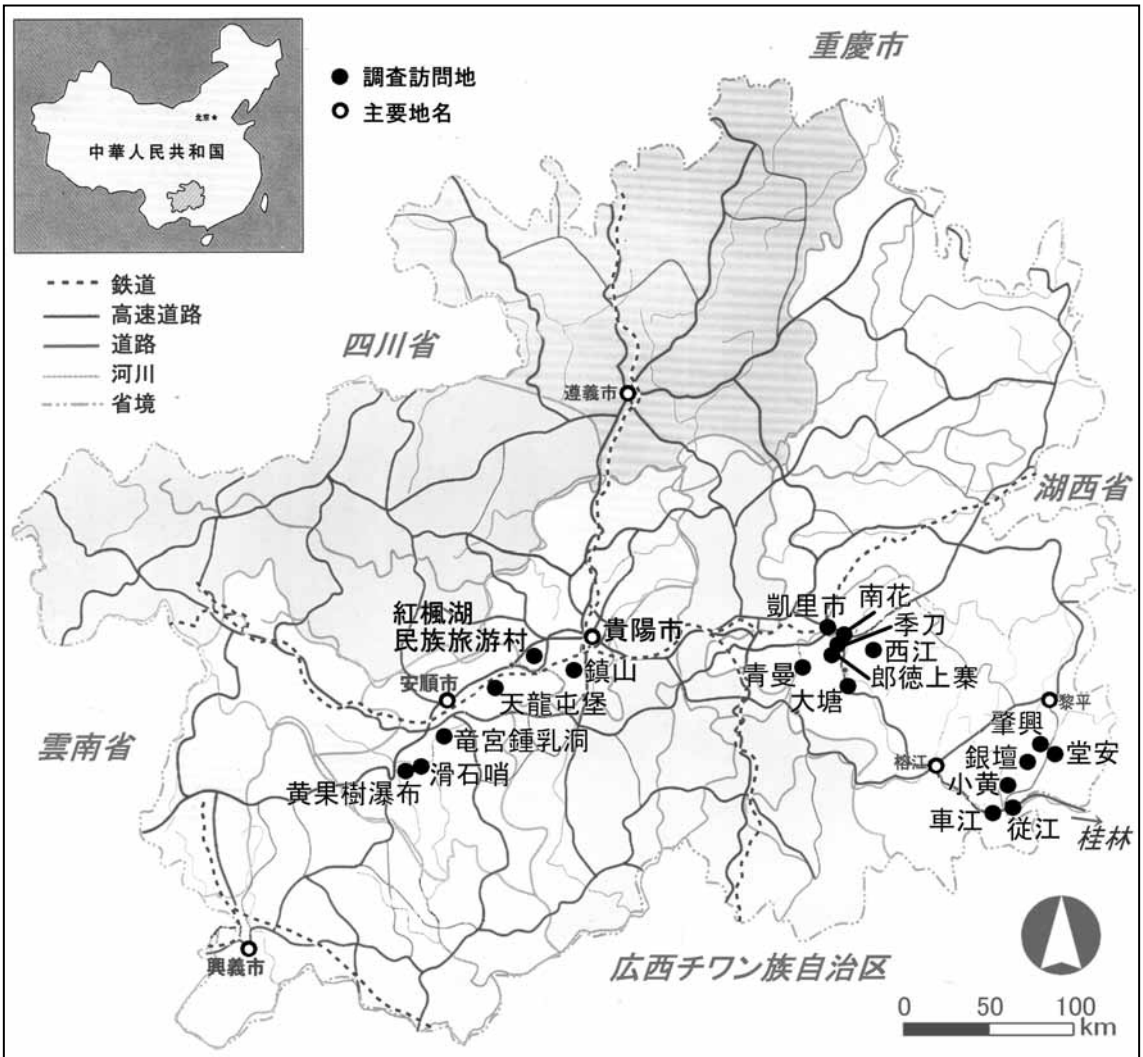
付属資料　・・・・・・・・・・・・・・　187
（1）貴州省の民族観光地と観光地ライフサイクル論　189
（2）曽士才教授インタビュー　203
（3）ブータンに学ぶ観光開発の哲学　211
（4）参考論文・記事・文献　217

調査参加者紹介　・・・・・・・・・・・・・・　223

１．中国・貴州省編

（1）中国・貴州省 調査研究対象地の概要

1）貴州省の位置と調査訪問地



ミャオ族の村で多く見られる風雨橋（南花村）

トン族の村で多く見られる鼓楼（銀壇村）

２）貴州省の概要

項目	内容	備考
省都	貴陽市	
面積	１７.６万 km2	日本の半分弱の大きさ
地勢	雲貴高原の東北部に位置し海抜は約 1,000m。省内を縦横に山地が走り、19 の盆地が形成されている。森林面積が約 14％を占める。	
気候	亜熱帯湿潤モンスーン気候で、冬の寒さも夏の暑さも厳しくない、穏やかな気候。貴陽市の年間降水量は 1,016mm、平均気温は 14.9 度。	
人口	３,９５５万人	2006 年末
人口密度	２２４人／km2	2006 年末
主要産業	農業では水稲、アブラナ、とうもろこしなどがさかん。工業は豊かな鉱物資源の開発を中心としている。水銀、リン、アルミの埋蔵量は全国トップクラス。	
ＧＤＰ	2,282 億元（約 3.4 兆円）	全国 26/32 位
１人当たりＧＤＰ	5,787 元（約 87,000 円）	全国最下位
実質ＧＤＰ成長率	11.6％	2006 年
都市居住者可処分所得	9,116 元/年（約 14 万円/年）	2006 年
農村居住者純収入	1,985 元/年（約 3 万円/年）	2006 年
固定資産投資	1,198 億元（約 1.8 兆円）	2006 年
社会消費品小売総額	690 億元（約 1.0 兆円）	2006 年
対外貿易　輸出	10.3 億米ドル（約 1,200 億円）	2006 年
輸入	5.7 億米ドル（約 660 億円）	2006 年
外資直接投資	0.9 億米ドル（約 100 億円）	2006 年実行ベース

資料出所：「貴州統計年鑑」等

3）貴州省の民族観光の概要

＜貴州省の民族観光の状況＞

・ 中国・貴州省では 1986 年から、少数民族の村落などコミュニティ・レベルでの観光振興が進められている。
・ 貴州省の少数民族観光には多様な形態があり、さまざまな少数民族の衣装、歌、舞踊、建築などを紹介し、イベント、アトラクションなども開催するテーマパーク（紅楓湖民族旅游村）、村全体を博物館とするエコミュージアムである生態博物館、村民挙げて旅行者を歓迎する体制を築いている民族観光村などが、それぞれの方法で観光客を集めている。
・ 歌、舞踊、民族衣装、宗教儀礼などの民族文化は、伝統的な形式をそのまま伝えるだけではなく、同民族でも省内他地域のものも利用したり、宗教色を薄めたり、伝統的なタブーを破ったり、あるいはより漢民族から遠い要素を選択するなどして、観光客向けにアレンジされたものとなっている。

＜民族文化の保護と観光開発の意義＞

・ このように民族文化が観光客向けにアレンジされることによって、文化の「真正性」が失われるという批判もある。しかし、貴州省をはじめとする中国全土の農村部は、急速な近代化や漢文化との同化といった大きな流れの真っただ中にあり、観光地化とは関係なく、各地の民族文化が失われつつある状況にあった。
・ 貴州省では、むしろ観光開放が、民族文化・伝統の継承のきっかけとなっており、さらに一部では民族文化の発展とも言える状況が現れつつある。

＜民族観光振興に関して指導的役割をしたキーパーソン＞

・ 貴州省の少数民族観光振興に指導的な役割を果たしたのが、貴州省文化庁文物処処長・呉正光氏と貴州省黔東南自治州副州長の呉徳海氏という少数民族出身の政府幹部である。
・ 呉正光氏は、文化財保護の立場の役職にいて、早い時期から民族文化の消滅の危機を強く感じていたが、その危機を回避させる方法として、積極的に観光開放を行い、民族間の相互理解を促し、民族文化の地位向上を図ることが重要と考えた。その手段として、民族博物館を建設するだけでなく、民族文化が豊かな村を指定し、村まるごと「野外博物館」とする構想を打ち出して実現していった。また、北京、上海等の大都市で宣伝活動を実施することにより、少数民族文化のイメージ向上を図った。
・ 呉徳海氏は、州政府の観光事業を担当し、州内に観光振興の重点モデルとなる 7 つの村を「民族風情旅游点」として設定した。そして、村人たちに対し、少数民族の

文化普及と経済発展のためには観光開放が重要であることを積極的に説明した。

＜民族観光の成功例＞

・ この両者の指導により、少数民族観光で大きな成功を果たしたのが貴州省東南部の山間に位置するミャオ族の村・郎徳上寨であり、人口 700 人あまりの小さな村に年間数万人の観光客を集めるに至っている。観光開発は、村民の収入を倍増させるなど経済的な効果をもたらしただけでなく、文化大革命等により途絶えようとしていた伝統行事や、銅鼓舞（ドラを叩きながら踊る舞）・蘆笙舞（芦で作られた蘆笙という楽器を吹きながら踊る舞）といった民俗芸能が、年配者から若者に伝えられるきっかけとなり、民族文化の維持に大きく貢献した。
・ 郎徳上寨の成功により、追随して観光開放を進める村や地域が増えるとともに、貴州省全体としても民族観光の気運が高まって来た。それにより、民族文化を学ぶ若者が増えるとともに、村や地域の間で競って技を切磋琢磨するようになった。また、特徴的なものについては他地域のものでも積極的に学び、アレンジして自分たちの村に導入するなど、新たな民族文化の創造、発展の例も見られるようになった。
・ その一例が「反排木鼓舞」と呼ばれるミャオ族の舞踊である。反排村出身の男性が伝統的な村の舞踏をアレンジして躍動感溢れる踊りを創造したもので、国内外に高く評価されるようになり、貴州省の民族文化をアピールする代表的舞踏の一つとなっている。

民族観光の成功地・郎徳上寨

（2）中国・貴州省 現地視察調査の日程

調査の期間：2006 年 8 月 14 日～23 日
参加者：北海道大学観光学高等研究センター　石森
京都嵯峨芸術大学芸術学部観光デザイン科（当時）山村
財団法人日本交通公社　小林、黒須、緒川
現地旅行社ガイド・通訳：貴州天馬国際旅行社　彭 旭 副総経理（8 月 14～15 日）
姚 沐 日本中心経理（8 月 16～23 日）

■旅程表

日付	旅程
14 日（月）	成田空港→広州市→貴陽市
15 日（火）	貴陽市→龍宮（鍾乳洞）→黄果樹瀑布（アジア最大の滝）→石頭寨滑石哨（プイ族石造家屋の村）→天龍屯堡古鎮（伝統劇団でも有名な老漢族の村/インタビュー）→貴陽市
16 日（水）	貴陽市→紅楓湖民族旅游村（少数民族文化のテーマパーク）→鎮山村（生態博物館指定のプイ族の村/インタビュー）→貴陽市（元貴州省文化庁文物処処長インタビュー）
17 日（木）	貴陽市→青曼村（ミャオ族の民族観光の村/インタビュー）→凱里市（州民族博物館）→凱里市内（元黔東南苗族侗族自治州副州長インタビュー）
18 日（金）	凱里市→南花村（後発のミャオ族の民族観光の村）→李刀村（観光開放間もないミャオ族の民族観光の村/インタビュー）→郎徳上寨村（貴州省少数民族観光の発祥地/元共産党書記インタビュー）→雷山県城
19 日（土）	雷山県城→西江鎮（千戸以上のミャオ族集落）→雷山県城
20 日（日）	雷山県城→大塘村（短裾ミャオ族・水上高床式倉庫の村）→車江村（巨大な鼓楼があるトン族の村）→銀潭村（山間のトン族の村）→従江県城
21 日（月）	従江県城→小黄村（歌で有名なトン族の山間の村）→堂安村（生態博物館指定のトン族の山間の村）→肇興村（トン族観光の中心的村/インタビュー）
22 日（火）	肇興村→桂林市
23 日（水）	桂林市→広州市（空港内にて現地研究会実施）
24 日（木）	広州市→成田空港 ※帰路の航空機整備不良のため予定より帰国が 1 日延期

（3）中国・貴州省調査 研究会

1）現地研究会

日時：2006 年 8 月 23 日水曜日 12:00～13:50
場所：広州空港内レストラン
出席者：北海道大学観光学高等研究センター長　石森 秀三 教授
京都嵯峨芸術大学芸術学部観光デザイン科　山村 高淑 助教授
財団法人日本交通公社　小林 英俊 理事
黒須 宏志 主任研究員
緒川 弘孝 客員研究員

○視察調査のポイント

黒須：長期間の旅でしたので、日程表を見ながら、主なポイントをまとめてみます。

最初は黄果樹瀑布に行きました。その後、訪問先としては最初の民族村、石頭寨（滑石哨）に行きました。プイ族の石屋根の村です。

同じ日に天龍屯堡古鎮という老漢族の村に行きました。ここは、村から出たビジネスマンが、故郷に錦を飾るといった形で、2001 年から石畳や川などが綺麗に整備されていた場所でした。ここでは、村のコミュニティと村の旅游公司の間を繋ぐ、旅游協会の役割について非常に興味深い話を聞くことができました。

次の日、鎮山というプイ族の生態博物館の村に行きましたが、生態博物館ということでの対応や整備は見られませんでした。村で入場料を取っていましたが、それと生態博物館の関係はありませんでした。湖畔にある湖水浴のリゾート地的な場所で、飲食関係の建物の開発なども、わりに無規則に行われて、散漫な感じがした場所でした。

紅楓湖の民族村は、行政の建設局が中心になって、もともとダム湖があったところをレジャー開発したものです。ダム湖の周りに別荘地があって、名前が知られてきたので、それに乗じて整備をしたという経緯で、建設局としても現金収入が得られるということで整備されている場所です。ここではいろいろな民族が働いていましたが、建築などはほとんど鉄筋コンクリートで、ホンモノではない典型的な例でした。

プイ族の村・石頭寨（滑石哨）

紅楓湖民族旅游村

次の日は、ミャオ族のエリアに入りました。そして青曼村で初めてミャオ族の歌と踊りの歓迎を受けました。ここでは、村の共産党書記に案内してもらい、話を聞くことができました。村では人民公社時代からの、“工分”の仕組みを応用した利益の配分システムがあり、それでうまくいっているということでした。また、本来、春耕の後に蘆笙を吹くと不作になるとされ、タブーとされてきたのですが、党書記自らが指示して、年中、吹くことができるようにしたということでした。

日が変わりまして、ＷＴＯ（世界観光機関）も援助をした南花村ですが、やや綺麗に整備をされすぎているという感じがありました。まとまった話を聞くことができませんでしたが、村としてショーを行うなどして、客が集まっているところでした。

季刀村は、非常に印象深いところでした。ミャオ族の観光化される前の純粋な形でのホスピタリティを見ることができて、すれ違う村人がみんな挨拶をしてくれたという印象が残った村でした。ここでは、村の長老と観光のプロモーターをしている人の話を聞くことができたわけですが、同時に巴拉河流域の広域圏で観光のプロモーションを行っているリーダーが彼であるということがわかりました。郎徳上寨に比べると後発であるわけですが、外国人など、彼らの文化に対して理解を示してくれるお客さんをもっと呼びたいということです。ＷＴＯが調査を行ったときに、他の村と差別化すべきというアドバイスを受けて、そういうことを考えたということでした。

郎徳上寨では、事前に物売りの問題などを聞いていたのですが、実際に行ってみると、佇まいの保存がよくなされていて、物売りにもしつこく付きまとわれることもなく、逆に村の党書記の陳正涛さんや鬼師（祈祷師、シャーマン）の陳玉輝さんの息子さんなどの歓待を受けることができて、詳しい話も聞くことができました。

ショーを行う郎徳上寨村の広場

翌日は、西江というミャオ族の千戸集落に行きました。まとまった話は聞きませんでしたが、観光客が数多く集まる古典的な観光地になっていました。中心街に沿って観光客目当ての店やゲストハウスが整備されていました。西江は、道の行き止まりに位置していますが、規模が大きな村ということもあって、外国人の

観光客も多く来ているようでした。

翌日、民族衣装がミニスカートの村・大塘を経て、トン族のエリアに入りました。車江というトン族の村としては最大規模のところでしたが、村の外側に鼓楼（時を告げるための太鼓を吊るした木造建築で集会場でもある各村のシンボル的建物）がありまして、村と一体感がまったくないところでした。コミュニティと一体的な観光が行われている場所ではないという印象でした。

肇興村の家並み

銀潭村は、山の奥深くにあって外からまったく見えない窪地のようなところに鼓楼を二つ持った集落でして、非常に景観的にも美しく、印象が深かったところです。そこでは、村全体の入村料を取っていました。子供たちからモノをねだられたり、写真を撮っていると撮影料を求められたりと、観光ずれしている面もありました。

次の日に小黄村に行きました。小黄村は、次に行く堂安村と似ているのですが、肇興が観光センターになっている半面、小黄村、堂安村は山の上の方にあって開発は手付かずの印象がありました。

翌日見た堂安村は、生態博物館となっていますが、鎮山村と同じように、生態博物館として具体的に何かをやっている印象はありませんでした。入村料は取っていませんでした。

最後に肇興ですが、周辺地域のセンターとして、レベルの高い宿泊施設も近年整備されています。しかし、それは貴陽の漢族の不動産会社が投資をしたものです。村の重要なアトラクションである歌と踊りのショーについても、もともと村がやっていたものを、その不動産の会社がやっています。鎮（中国の行政単位。省＞州＞県＞鎮または郷＞村というような関係がある）を形成する３つの村が県と契約し、県が仕切る形でその不動産の会社が動いているということがわかったものです。旅行の全体の流れは、こういったものでした。

○五感を通して幸せを感じる観光の時代へ

小林：貴州の後に最後に桂林に行ったのは、比較という点でよかったかもしれない。

山村：貴州の良さが引き立ちました。

小林：桂林と言えば、日本人の旅行先として、一時、北京以上に旅行者が行っていたところなんですね。中国が好きというより、あの景色の魅力に魅かれて行く人が多かったのではないでしょうか。

桂林の夜店

黒須：ある時期から中国観光は、歴史系から自然系の資源にシフトしたということも言われています。

石森：中国観光の変遷みたいなものがわかると面白いのでしょうが、万里の長城などの名所見物型から、五感を通して幸せを感じる観光の時代になるでしょうね。そういう意味でまさに貴州省は良いですね。桂林などは、来てしまえば、こんなものかなとなる。日本人にとっての中国観光のステージというのがあるんじゃないですかね。

小林：日本人の中国観光は、最初は、中国そのもの、あるいは中国共産主義に憧れる人が来ることが非常に多かった。それと、もう一つは、昔住んでいたとか、有名なところを一回見ておこうという旅が主流でしたね。

石森：中国における貴州省の位置づけは、空間的には桂林に近い。だが時間軸で見ると、桂林は最初に火が点いて、貴州省は今、ようやく観光客が来始めた。隣接する雲南省は先行しているが。そういう空間的な差異性と、時間軸の中でのスポットライトの当たり方という点に着目して整理できると面白いと思う。戦後における日本人にとっての中国観光の流れを整理した上で、今なぜ貴州省なのか、ということもわかるとよいですね。

小林：観光地としての雲南が日本人に知られるようになったのは、最初は石林ですね。その後、大理、麗江が知られるようになって、少数民族文化に触れる旅先としてシフトしてきた。四川の場合は、成都と峨眉山が中心だったのが、九寨溝が知られるようになってから、少数民族文化に注目が集まる方向に一気に変わったんです。自然景観と少数民族文化の双方を資源とする観光形態が現れてきたわけです。ですから、石森先生がおっしゃるように、今後貴州は、みんなの思っている中国西南のイメージとピッタリ合う目的地になっていくと思います。タイミングが早すぎたら、難しかったと思います。デビューとして一番良いタイミングだったのかもしれない。

山村：雲南省の麗江は、まさに自然景観と少数民族文化の双方が融合して観光資源となっている好例ですね。また同じく雲南の石林なのですが、最近は、石林だけ見に行くというより、石林付近に居住しているサニ族の踊りを見ることがセットになっています。やはりただ単に水墨画的風景を見るというだけではなく、その地の民族の文化に触れたいという欲求が、観光客に生まれて来ているのではないかと思います。

小林：それは面白いですね。桂林でも周辺の少数民族を巡るコースが開発されているとのことでしたね。

黒須：確かに観光地の発展プロセスに着目することは重要ですね。観光地の発展プロセ

スには、最初少数のコアな連中がやってくる、観光客数が増えてくると、その中でいろんな形態のリピーターが増えてきて、地域の側もオプションを増やしていく、という部分がある。そのあたりに着目して、事例を集められるといいですね。

○観光地の変遷とライフサイクル

石森：黒須さんがおっしゃったように、重要な視点の一つは、観光地のライフサイクルですね。明らかに盛衰がある。今回見た事例も、ここはライフステージの始まりですとか、ここは落ちかかっていますとか、ある程度、観光地のライフステージという中で位置づけることができるのではないか。もちろん厳密にはちゃんとした基準を決めないといけないが、今回は、予備的・仮説的な調査なので、まずは概観から始めたいですね。

小林：今回、面白かったのは、観光開発を始めてからの年月の違いで、いろいろなパターンが見られたことですね。

黒須：同時に感じたのは、1985 年あたりから観光開発を始めている村が多かった点です。西江村も 1985 年あたりから始まり、1992 年ぐらいから本格化したということでしたが、多分、他の村もほぼ共通したように思います。ただ、いずれの村も同じ頃から始まっているのですが、発達プロセスと言うか、内容がどうやら違うようです。そこら辺をどう整理したらよいのか。

小林：そうですね。面白いのは、同じ地域の同じ少数民族の村が、オープンの時期によって、どう変わっているかという点ですね。

石森：雲南省における少数民族と比べても、貴州省の場合は、村単位でしっかりしているという感じを受けましたね。世界的に見ても、これだけ村を挙げて観光に取り組むというのは、意外と少ないのではないでしょうか。

○確固たる本業としての農業生産とプラスαの収入としての観光

小林：石森先生の観光ライフスタイルの話を聞いていて触発されたのですが、郎徳上寨などは観光開発の開始から 20 年経っても、いろいろあるにしても、思ったほど“観光ずれ”していない。例えば、正業に重点を置いていて、それを主とすることによって、“観光ずれ”を最小限に抑えることができるという仮説が成り立つのではないか…

山村：おっしゃる通りだと思います。観光が主幹産業になってはいけないという逆説が成り立つのではないか。特に村レベルでは。

小林：今回、特にそう感じた。観光に走ってしまうと、一気に行くところまで行ってしまう。今回も観光に走っている村で、売り物の値段を誤魔化した売店のおばさんなどを見ると、放っておくと怖いなと思った。

山村：今回見たような農村部では、まずは農業の生産基盤がしっかりしている上で、プラスαの収入として観光を位置づけないといけないと思うんです。今回キーワードとして、「富の再配分」ということがあったと思います。「うちの村は観光立村で行きます」と言った場合、収入を観光のみに頼ってしまうと、それが非常に難しくなるのではないか。基盤としての農業生産があって、その上での観光収入をうまく分配するというシステムでないと、うまく行かないのではないかと感じました。

小林：観光で行きたかったら“観光立村”と言うな、ということですね。

山村：逆説です。

石森：肇興で印象的だったのは、夜中まで仕事をしていた縫製の工房です。朝一番でもやっていた。ああいう観光以外の産業のベースがないといけない。全てが観光に傾いてしまうと危ないと思う。

〇村における聖・俗２人のリーダー

小林：少数民族の特徴みたいなものでしょうか。今でも、歌や踊りを村人みんなで一緒にできるという“つながり”がありましたね。日本で言えば「結（集落等の住民が共同作業により相互に助け合うしくみ）」のような感じですね。貴州は、まだそういうものがうまく残っている。そういうところでないと集落観光の開発は難しいのかなと感じました。

山村：もう一つ重要な点は、村落の中に、対外的な交渉をする共産党の“書記”のような方と、内部の住民を説き伏せる“鬼師”という職業の方というふたつのまとめ役・相談役がいました。これは外と内をうまく使い分けるしくみとも言える。日本だと１人のリーダーでそれをやろうとするのですが、貴州の例を見ていると、それはやはり無理ではないかと思いました。“書記”と“鬼師”というように、両方の車輪でうまくやらないと、土着の信仰や風習に根差した住民の意見をうまく調整できない。書記には、政治的な合理性というものが常に頭にありますよね。いわゆるタテマエです。観光開発というときには、対外的に交渉しなければならない。そういうときは共産党の“書記”が出ていくわけです。ただタテマエや理屈だけでは共同体は動かない。この理屈でわからないホンネの部分を“鬼師”のような土着の伝統的なリーダーが説き伏せていく。先ほど出てきた観光のライフサイクルによる分類とは別に、村の中の指示系統と

ショーを行う広場は農作業と共用（肇興村にて）

いうかリーダーの組み合わせ等によっても観光集落の分類ができるのではないかなと思います。

郎徳上寨村遠景

小林：論文などからは、二人の呉さんが地域を動かしたイメージが強かったが、実際に現場でお話を伺うと、書記の陳さんと鬼師の陳さん、二人の陳さんが想像していた以上に重要な役割を果たしていた。陳さんに力量がなかったら、あそこまで観光開発は出来なかったのではないか。そうなってくると、日本で“鬼師”のような、精神的なリーダーの役割を果たせる人がいるのかどうか。あるとしたら、地元の学校の校長で地元のことを研究していて、かつ人望がある人、とか、郷土史家の人が、若干それに近い。日本の信仰というのは、もはや宗教ではなくなっているから、ある一定の役割を持っているのはそういう人だ。読み替えというのが必要になってくる。

〇地元と結びついた投資家の登場

黒須：山村先生の視点の中で、重要な要素にジェネレーションというのがありますね。

山村：肇興の 20 人の舞踊団に地元出身の人が十数人で、それ以外の人は周辺の地域から集まってきている。そういう意味で、あそこが伝統音楽の集積地になる可能性を秘めていますね。しかも、村の子供たちがパフォーマンスを聞いているというのが、非常に効果的だと思いましたね。

石森：若い人はお金が伴わないとね。我々は伝統文化を大切にしなさいと言いながら、伝統文化を捨てちゃったわけだけれど、彼らが文化を引き継ぐにはお金が大事ですよね。

山村：それも貴陽の投資家の方が、肇興に投資しているんですよね。その人が文化的な理解のレベルが高かったことが幸いしました。

石森：大学教授だった人ですよね。

小林：一つは、地元出身者でそういうことを意識できて、ある程度外で成功した人の存在というのが大きいですね。天龍古鎮もそう。そういう人が機能している。日本だと、金を儲けたら、故郷を忘れようとする。それを、戻ってきて故郷の文化のために投資をするというところが日本と違うなと思いました。

石森：先々への視野ということで言うと、中国におけるアントレプレナー、起業家のことも考えておく必要がありますね。今回の事例でも何人かいましたね。郷鎮企業（県

や市のレベルより小さい行政単位である郷や鎮における中小企業）やその前段階の人民公社がやる場合と、個人の投資家、起業家がやる場合。起業家の場合は、どこか狙いをつけて投資をする。郷鎮企業の場合は、村を挙げてやるという形で違いがある。天龍古鎮は村を挙げてやりながらも、地元出身の起業家が投資をしているという面白い形でした。

小林：肇興に投資した貴陽の投資家が最近、天龍古鎮の近くに投資したというから、今後、その関係がどうなるかというのが面白いですね。

黒須：生態博物館の鎮山村は、これから香港の投資会社が開発しようとしていて、まさにこれから観光地のサイクルが始まろうとしていますね。

小林：どういう意図でやるかだ。少なくとも地元エリア出身の人は、多少は地元の文化的なことを考えるだろうが、金儲けとしてやるとしたら、どうなるのかですね。

黒須：これからもそういう村は出てくるでしょうね。

小林：あそこは、人工湖があって、観光客が泳ぎに来ていたでしょう？だから、リゾート的な開発をしているのかなと思うのですが、そこが心配な点です。ちゃんと文化を残して人を呼ぼうとしているのかなと。

山村：投資をしている人間が、あまり地元と関係ないとうまくいかないことが多いですよね。

黒須：肇興への投資家は、そういう点ではなかなか文化に対する理解の高い人物のようですね。

天龍屯堡古鎮のメインストリート

紅楓湖民族旅游村

鎮山布衣族生態博物館（鎮山村）

○儲けの手段ではないホスピタリティが資本

小林：最初に呉正光先生の話を聞けたのが良かった。非常に理路整然と話してくれた。
石森：呉徳海先生の話も、文化の要素の説明が的確でした。家、服装、言葉、歌というように説明があってね。ところで、家が煉瓦やコンクリートづくりになっていたところがありましたね。
小林：青曼村ですね。１軒だけでしたが。ルールを作る前に建てたものを戻せというのは、なかなか難しいんですね。後から表面に板を貼ったりしていましたが…
山村：あの貼り方は、ちょっといただけないですね。
黒須：意識を持って指導している人がいるかどうかですね。
小林：手法とセットで指導しないと…
石森：民族文化衰退の中での観光という話は、迫力がありましたね。
黒須：呉正光さんの話の中で、郎徳上寨が観光客に対して村を開いてよかったことの第一番目に、「ミャオの文化には世界に誇れるものがある」ということを村人が理解してくれた、というのが印象的でしたね。あそこがミャオ族の文化のセンターとして象徴的な存在になったということでしたね。
小林：それから、ミャオ族は、ホスピタリティの点でも感心しましたね。ニーハオと言っただけで、村まで連れて行かれましたからね（笑）。二人で河原のところにいて、ミャオ族の人がいたから、「ニーハオ」と挨拶したんです。そしたら途端に来いと言われてね。で、一緒に階段をどんどんどんどん上がって行ってね。普通なら行かないですよね。で、行ってみたら、なんてことはない。お茶を一杯飲んだだけだった（笑）。二人でコップ一つしかなくてね。しかも、お茶というか白湯。でも、呼んでくれるわけ。ミャオのホスピタリティというのが、よくわかった。言葉も全然通じないんだけどね。農村観光と言っても、ベースになる気持ちを持っている人たちがやるのと、金儲けの

青曼村のコンクリート建造物

コンクリート造の家を木の板で隠す処理
(季刀村)

手段でやろうとするのとでは全然違いますね。そういうベースがないところは根付かないですね。

黒須：逆にその気持ちが失われてしまうと、それはミャオの文化そのものが失われる瞬間かもしれませんね。先ほどの話ですが、農業を一つの柱にすることでそういう気持ちを守ることができるのではないか、というのが一つの仮説になりますね。

小林：日本では考えられないね。外人が「ハロー」と言っても。

黒須：ミャオ族の特徴なのかもしれませんね。

〇観光収入の公平な分配のしくみ

小林：トン族も、最初に行った銀潭村はよかった。村人に素朴なところが残っていて。でも、ショーの値段は高かった。急激にそういう経済的な意識が入ってきているのかも知れません。

山村：写真を撮ったら、おばちゃんからお金を求められたりしましたね。

緒川：渡したら、「もっとくれ」と言われました…

山村：小さな子供も「チップ、チップ」と言ってきたりして。お金によって心が荒んで行くサイクルに入っているというか…

黒須：なるほど、観光地のサイクルと言っても一つの次元ではなくて、いろいろな次元があるわけですね。

山村：あると思います。それが複合的に作用して、観光客に「ここはイヤだ」という感情が起こったりすることにもなるのだと思います。

小林：あそこの村は、もっと正しく発展して欲しいですね。

石森：伝統工芸もありますしね。

山村：写真を撮っていると、おばちゃんに「アンフェア」と言われ、お金を要求されましたね。

小林：入村料を取って、みんなに分配されていれば違うのでしょうけれど。タイの首長族の村は、写真を撮っても嫌がらない。それは村に入るときに入村

銀潭村の家並み

堂安村を望む風景

料を取って、それがちゃんと分配されているからなんですね。モノを買ってくれと声をかけてくるけど（笑）。

山村：写真の撮り方でも解釈のされ方によって、どうしてあの人はお金をもらって、私はもらえないのか、あの人は美人だからもらえて、私はそうじゃないからもらえないのか、というような受け取り方をされてしまう。そうなると村の中でのいがみ合いが起こって来て、うまくいかなくなりますよね。

銀潭村の観光料金徴収を示す看板

緒川：あそこの村では、一応、写真１点あたりの値段が書いてありましたね。盛装 10 元、民族衣装５元、平服２元というように。

黒須：山村先生は、個別のビジネスが立ち上がってきて、モノを売ったりするよりも、収入源は一つにまとめておいて、それを分配するやり方の方が良いと思いますか？

山村：その両方があっても良いと思います。

小林：両方ないと、努力しなくなりますからね。人は金が儲かるから努力する、という部分もありますから。

黒須：でも産業として捉えるなら、宿泊なり、病院なりという機能を全員で共有というわけにはいかないですよね？

山村：いわゆる社会主義がうまくいかない場合と、社会主義をちょっと修正したらうまくいく場合とがあるのだと思います。そのへんのうまい配分というのがあるのではないでしょうか。まさにそこが、リーダーの考えるべきところだと思います。それから小林先生がおっしゃったように儲かる、という点も非常に重要で、良い工芸品が高く売れる、といったことは観光や文化の質を高めていくうえでも良いことだと思います。

小林：そうすると考えますからね。質を高めて利益を高くしようと。

○“開放型観光”が、文化を発展させる

小林：生態博物館というコンセプトはどうでしょう。フランスのエコミュージアムのように、住民みんなの意識が高いところだと実現できる。しかし現段階で村民に理解させることができるかどうか。ただ堂安村は、生態博物館の指定とは関係なしに良かった。あの村を上から見たときに、日本の斑鳩（法隆寺が建立され、聖徳太子以来の古い歴史を持つ奈良県の町）だと思った。三重塔が日本より高くなっているだけで、田んぼがあって、斑鳩の景色に似ていると思った。

山村：鼓楼の隣にみんなが使える泉があって、冷たくて気持ちよくて、お米を洗ってい

る人がいたりして。

小林：今も生きている、機能している村ですね。あのまま残っていけば生態博物館と言えると思います。

黒須：呉正光先生が、「生態を保護するというときに、自然と文化があって、自然はとにかくなるべくそのまま保護する。文化というのは生き物なのだから、“変わらずにいろ”ということはできない。逆に開放することによって発展して行くんだ」とおっしゃっていましたね。

山村：開放型保護と言っていましたね。

黒須：開放型保護のその先に発展がある。ナイーブなままでは、いずれ損なわれてしまう。開放する中でアイデンティティを確立して上のステージに行けるんだ、ということですね。

山村：肇興の歌などは、明らかに開放することによってレベルがはるかに上がっていますね。我々が「全部、地元の歌なんですか？」と聞いたときに、いや、地元の村だけではなく、トン族のいろんな集落から良いものを集めてきていると。それはそれで、すごく良いことですよね。

黒須：青曼村でも、お客さんを迎えるようになってから、ツバメの踊りなど、新しい歌を開発したと言っていましたね。

小林：そういう点では、今のところ観光の良い面が出ている気がしますね。

緒川：呉正光先生は、死んだ文化は保護しても仕方がないというようなことをおっしゃっていましたね。常に変わって行くべきだと。

小林：省の文化保護の最高責任者が、そういう進んだ考え方をしているんですよね。日本の文部科学省の人なら、そこまでなかなか言わない。

緒川：リアリズムですよね。“ここまでは守る”というものがある。服装と環境と建築が守られれば、とりあえずは良いんだと。後は、しょうがないと。

山村：そこははっきりと言い切っていましたね。

○観光の裏に見え隠れする目的

黒須：いろいろなことの背景に、中国の特殊事情が見え隠れするんですが、その一つの例だと思ったのが、肇興の文化的なプロパガンダです。人民公社みたいな組織があって、そういう土壌があるから村の統一が図れるのだという考え方もあると思うのですが、それ

堂安村の鼓楼と泉のほとり

については、我々としてはどう考えることができるんでしょうか？

西江千戸集落

山村：プロパガンダとあれだけ言い切ってしまっているところが、逆に気持ちよいなと感じました。日本が観光立国と称してやろうとしていることも、ある種のプロパガンダじゃないですか。それなのに、そう言わずに綺麗ごとですまそうとしている。逆に今、肇興の文化ステーションで働いている人にプロパガンダ的な意図ってそんなに強くないと思うんですよ。中央にとっては、少数民族地域が豊かになることで、共産党政権は民族差別していませんよ、という強力なアピールになるという政治的意図は当然ある。しかし結局のところ、中央と地方の双方に利益がありさえすれば、建前としては間違ってはいないと思う。中国人は、おそらくそういう建前をうまく使い分けているはずです。地元もそこまで馬鹿ではない。したたかに中央とやりとりしているはずです。逆にそこまでうまくできないと、そういう地域はダメになる。それが対外的なかけひきだと思います。

小林：今回の調査で注意が必要だと思ったのが、村では共産党の書物で観光の知識を得ていたとか、西江の碑文に観光開発が 1982 年からだとか、いろんな情報が錯綜している点です。人間の記憶は後からつくられるところもあるから、その点は気をつけないといけない。客観的に詰めていかないとわからない部分も多いですね。

石森：今回は 10 日間の調査ですからね。すべての面で完璧というのは難しいですね。

〇コミュニティがまとまる適正な規模～100 戸 500 人

小林：我々の研究の目的は、日本でどうしたらいいか、日本に還元できる知見を得ることにあるから、完璧ではないが、日本の参考になる報告をしなければならない。そういう点で、石森先生がおっしゃった「日本には農家観光はあるけど、農村観光はない」という話は、今回、ますます実感しました。日本では、個人レベルで観光産業をやっていて、村単位、エリア単位には全然なっていない。郎徳上寨では、誰か特定の家が観光業をやっている、というのはない。そこの違いは、人民公社の経験が生き残っていることが活きているのだと思います。

山村：陳さんが観光開発の三つのポイントについて触れていらっしゃいました。すなわち、一つ目は再配分の仕組みの“工分”。二つ目が指示系統。お客さんが来たら放送で村民に呼びかけて一斉に集まるという仕組み。三つ目が仕事をしながら接客ができる、

農業が基本にあるということ。まさに、そのへんが、一つの結論なのかなという気がします。

話は飛ぶのですが、今回、気になった数字が二つあります。一つは“500 元”です。ショーを見せるのが 500 元、月給も 500 元。そのへんが一つのキーになるのかなと思います。もう一つは、村の単位ですが、だいたい 100 戸、500 人というのが、一つの指示系統がうまくいく規模かなと感じました。

小林：確かに西江のように千戸のでかい集落だと、まとまりもなくて、旅行者としても面白くないですね。

山村：西江では、大きなゲストハウスをつくった主人が、ただそのでかさを自慢しているようなところがありましたしね。

小林：農村を見せるということを考えると、100 戸、500 人くらいの単位がいいかもしれないね。配分もうまくいくだろうし。西江だと、我々自身、どこを見たらいいのか、わからなかったですからね。最初は、千戸集まった様子を見せるというところから始まったと思うんですよ。そういう意味では、峠を越えて最初に見える場所から見ると、確かに絵になる。

山村：記憶が蘇ったんですが、私は７年前に確かに西江に行きました。凱里の旅行会社で近くのミャオの良い村に連れて行ってくれと言ったら、あそこに連れて行かれたんです。上から眺めて、少し道を歩いて終わりました。家などには一歩も入れてくれませんでした。

小林：見せるという観光から少しも変わってないということだね。そういう意味でいうと、あそこは段々客が減ってくるんじゃないか。体験や人の交流の面白さが他と比べると少ないですからね。

黒須：肇興のような観光の拠点が最初に開発されて、その周辺のあまり開発の波に荒らされてない村に徐々に手が伸びて行っているという様子が明瞭に感じられました。今後は、車が入らないところとか、トレッキングでないと行けないところに伸びていくんでしょうか…

〇観光における漢族と少数民族の関係

石森：つかみにくい大きな問題が、漢民族と少数民族の関係です。投資家は、基本的に漢族が多い。ガイドも漢族が多いですね。

黒須：凱里の方に少数民族専門の旅行会社がありますよね。あそこで日本語ができる人は、どれくらいいるのでしょ

肇興のメインストリート

うか。

緒川：２人です。黔東南国際旅行社という旅行社があって、元は州の旅游局系です。ミャオ族かどうかはわからないですが。

小林：次の段階として、少数民族の経営による旅行社がどれくらい出てくるかですね。見られる立場のままでいるか、案内する方にまわってくるかどうかだ。雇われていた人がその手法を学んで、自分の会社を起こして始めていくという、次の段階が重要だ。

車江村の鼓楼

山村：肇興の町でも、商店経営者に話を聞いてみると、結構、漢族の人が入って来ているということでしたね。どういう関わり方をするかですかね。

小林：そうすると、今、家を建て直している人が、どういう人か聞いてみたかったですね。急激に建て直しているからね。

山村：やはり、資本やノウハウがあるのは外部から来た人ですからね。

小林：そういう人々をどんどん受け入れていくかどうか。

山村：もう一つは、石森先生がおっしゃるように、地元から起業家をどう育成するかということですね。

小林：呉正光さんと呉徳海さんが、ミャオ族と漢族の中間にいて指導できたということは、ものすごく大きいですね。直接、漢族がやったら文化や社会についての理解も足りないし、心理的に違う。呉さんの場合は、国家の組織にいながら、なおかつミャオや少数民族のことを考えている。この立場が非常に重要ですね。

石森：国家の要職にありながらという。

小林：この二人の間でも違いがあって面白かったですね。トン族の方は、そういう立場の人がいないのでしょうか。元々、呉正光さんは、トンの風雨橋と鼓楼の写真展を北京でやられたんですよね。

緒川：当初はトン文化を売り出そうとしていたそうです。

石森：確かに、鼓楼は絵にもなるし、観光の空間の中心にもなる。

ミャオ族とトン族の比較ができると面白いですね。

山村：そうなると何年間か住み込む必要がありますね（笑）。

○自律的地域の生きた観光

石森：持続可能な観光ということが、世界的な課題になっていて、欧米の方が進んでい

るところもあることは事実だろう。しかし自律的観光ということで考えると、今回見た郎徳上寨のようなところは、自律的に村の観光をやっている。村を挙げてやっている。これは珍しいと思う。アントレプレナーはどの民族でもいるだろうし、国家主導型もよくあるのだが、村の中に知恵者がいて、外の力を借りながらも、村のルールでやっていくというのは珍しい例だと思う。村の中でも、書記と鬼師がうまく役割分担して観光開発を進めていた。

小林：地主がいて小作がいてという社会が、共産党の社会で一旦、崩されて、村のコミュニティが新しい形で作り直された。それがまだ生きている間に、観光に利用できたということが大きかったかもしれないですね。多分、第二次大戦以前だったら、絶対的な地主がいて…

山村：おそらく富がそこに集中する仕組みになっていましたね。

小林：それが、村としての自律性を持ちえた理由かもしれないですね。

石森：そういう点をみなさんに意識してもらいたいですね。自律性と他律性、内発性と外発性というものをね。もちろん「純粋に自律」「純粋に自発」というのはないでしょう。しかし一番重要な要素は、地元の側で決めていく、ということです。そういう点で今回の事例は本当に感心しました。中国は凄いところですね。また、あれだけの棚田をつくり上げるのは大変ですよね。

小林：棚田の棚の高さが高いですね。物凄く急峻なところに造っているからですね。もともとは一体どんなところだったのか…と思いますね。

石森：石組みですね。いくら石が豊富にあるとは言えね、あんなに積んでいるのは…負けますね。

小林：日本とスケール感が違いますね。

山村：管理も行き届いていましたね。

小林：どの棚田も綺麗でしたしね。“生きている感じ”ですね。

石森：世話しに行くだけでも大変でしょう。

小林：確かに農具を置いているような小屋が点々とあるのですが、少ないですよね。

石森：凄いですよね。それと、少数民族は、虐げられたイメージがあるんですが、あの地域に限れば多数民族になっていますね。

小林：我々も、漢民族的な見方に知らない間に慣れてしまっているのかもしれませんね。

山村：少数民族観光やエスニック・ツーリズムの本を読んでいると、どうしても、少数者に対する抑圧の状況を強調して、批判的に書いている

堂安村の棚田

ものが多い。もちろんそうした事実から目をそむけるべきではないのですが、実際に現地に行ってみてより強く感じるのは、少数民族は被抑圧者であるということ以上に、独自の文化を持った誇り高い存在である、ということです。その世界では少数者ではなくまさに中心なんですね。例えば今回見た貴州省のミャオ族居住地区も、あれはあれで一つの国家、ミャオ世界と見た方がよいですね。

〇訪れる側も作法を、迎える側も感動を

黒須：旅程の最後の方で、貴州を出て桂林に来たとき、食べるものにしても、何にしても、寂しいような感覚がして、一体この感覚はどこから来るのかなと考えました。

石森：それが、まさに観光なるものの原点となる、“感動”というものでしょうか。郎徳上寨で陳さんに会って、山奥にこういう立派な人がいるのかという感動、呉先生にしても、民族の誇りを持って、要職をこなしながら、仕事を超えることをやっている、そういうことを見て、聞いての、ある種の感動ですね。

小林：呉先生の方も我々とあったことを喜んでくれましたね。

石森：観光は、元々未知なる自然や人との出会いだから、双方共に感動がないといけないはずなんです。しかしだんだんとルーチン化して。それが観光の哀しいところですね。

小林：桂林に来たら、まさにその落差を感じましたね。

山村：それは食べ物に顕著に出ていますね。残念ながら桂林で食べたものの味は、観光客に媚を売りすぎている味でした。それより「食えなきゃ食えなくても良い」とでも言えるものを出してもらった方が私は気持ちが良いですね。

石森：同じ白菜でも味が違いましたね。白菜そのものの存在感がある。

小林：違いましたね。桂林では食べる気がしなかったですからね。

緒川：味気ないというか。

小林：観光もそうかもしれないですね。

石森：さっき山村さんが言ったように、「職業になってしまった途端にアカンようになってしまう」のかも知れないですね。

小林：それが一つの答えですね。今回見た貴州の村々は、農業をちゃんとやっている。

山村：私も観光は“目的”化させてはいけないんじゃないか、と最近思います。あくまでも観光は“手段”であって、“目的”になった時点で観光ではなくなるのではないかと。

石森：我々が予定にない客なのに迎えてもらえた村がありましたね。

山村：季刀村ですね。

石森：なんとなく迎える側も、ワクワクしていてね。もう来たのか！と飛んで出てきたよね。ある種の祭りなんですね。あれは。

小林：我々の後から来たツアー客の態度は、村に対して失礼だなと思いましたね。歓迎

の酒を飲まされたときに、ものすごく嫌な顔をして、すぐ水を飲んだりしていたでしょう？入っていく側も、そこの習慣に混じりきれないと、なかなか交流ってできないのかなと思う。

緒川：客の側の作法ですね。

小林：そういうことも見ることができて結果的に良かった。

黒須：そこで酒を飲み、迎える側と一体化することが、まさに観光の“スピリッツ”なんだということですね。

小林：観光というのは減るものではなくて、こっちも楽しいけど、来ている人にも楽しんでもらうという、そういう原点を見た感じですね。

緒川：曽先生の論文に、旅行社側、ガイド側にそういう教育がまだ出来てないと書いてありましたね。

小林：我々が見たツアー客も、全然出来てないようだったからそうなんでしょうね。

小林：さて、それでは、そろそろ時間が来ました。今回は、良いルートでしかも実り多い、中身の濃い旅行ができたと思います。皆様お疲れさまでした。

全員：お疲れ様でした。ありがとうございました。

2）事後研究会

日時：2007 年 8 月 10 日金曜日 13:00～15:00
場所：北海道大学観光学高等研究センター　石森教授研究室
出席者：北海道大学観光学高等研究センター長　石森 秀三 教授
北海道大学観光学高等研究センター　山村 高淑 准教授
財団法人日本交通公社　小林 英俊 理事
緒川 弘孝 客員研究員

○地域の自律性に基づく観光

小林：貴州省の少数民族観光の成功の要因として、いろいろと考えられますが、まずは、同じ民族の人が地元政府、あるいは中央政府のパイプ役になっていたということ、具体的には、２人の呉さんがそういう役職に就けていたことは、大きかったと思います。またその他の成功要因としては、住民みんなが関われるようにする、正業を大事にする、地域資源保護を大事にするといったことが挙げられます。

そしてこうした要因をまとめる概念として、“観光地の自律性”というものがある。観光地側の自律性をどうやって持たせるか、という大きなテーマだ。

この研究を通して、少数民族が観光をうまくやっているというだけではなく、日本においても、自律性というものをどうしたら地域は持つことができるのか、普遍化させて議論していければと思う。

○どこまで文化の変容を認めるか

小林：今後の重要な課題の一つとして、文化の保全・継承を、観光と絡めながらどうやって進めていくのかという問題がある。トン族の村で、本来は伝統的に女性が踊らない踊りを、観光客向けに女性が踊っていたりする例がありました。それはそれで面白いと思ったのですが、どこまでこのように伝統を柔軟に変化させることができるのかは非常に重要な論点だと思う。

たまたま黒須君から、トン族文化とミャオ族文化が混ざったような出し物を、桂林で観光客向けにやっていたと聞きました。桂林の町から１時間ぐらい離れた農村に大掛かりな舞台を造ってショーを上演しているそうです。元々トン族はいたけれど、ミャオ族はあまりいない地区なのに、完全に見世物化して、両方混ざったようなものをやっている。我々は既にミャオ族とトン族の集落を見ているから、ミャオ族とトン族の舞踏の違いがわかります。しかし普通、外国人はよくわからないから、そういうものがあると逆に魅力を感じてしまう可能性もある。

アボリジニでも、ドットで描くのは北方のアボリジニだけなのに、南方のアボリジニも、観光客に「そういう絵がないか？」と聞かれたことがきっかけとなって描き始めたという例がある。そういう文化の保存・継承の問題と、観光の問題とをどのように絡めて考えるのか。観光が今のところ文化の保存・継承に有効に作用していても、今後どうなっていくのか。もっと観光客が増えてきたら、どんどん似て非なるものが生まれてくる可能性もある。

緒川：紅楓湖でも、随分と新しいタイプの民族衣装があって、“モーニング娘。”のようなものもありましたね（笑）。

小林：それがどこまで許されるのだろうというのも研究対象になる。

石森：小林さんのおっしゃったのと同じで、サイパンにもいい加減なものがありました。小さな船でショーみたいなものをやっているのですが、内容がタヒチ風なんです。でも日本人にはわからない。専門的に見ると、全然違う。真正性はある程度、見る側がわかっていないと、「南太平洋風だな」で終わってしまう。文化にはそういう壊れやすさがある一方で、数年続けていると、それが一つの新しい文化になってしまうこともある。中国もそのへんは、わりと可変的でしょう？

山村：非常に可変的ですね。いい加減というか。著作権問題と絡めて議論できるかも知れません。ニセモノという感覚がちょっと我々と違うんですよね。

石森：ある種、知的所有権の問題ですね。

緒川：山村先生は、雲南省の方で民族衣装の研究もされていましたが。

山村：ナシ族の衣装などは、どんどん新しいタイプが出ていて、私は成功事例だと思っています。なぜかと言うと、私が勝手に「プロトタイプ」と名付けているんですが、伝統的に長い間ずっと着てきたものを「型」としてちゃんと保持した上で、新しいものを作っている。その役割分担ですね。保存すべきものと、新たに活用するもの。その両者の位置づけさえしっかりしていれば、活用する分は、いくら活用しても良い。オリジナルのここからこう取って、こうしているんですよ、という説明さえできれば、良いと思うんです。その二つの関係性をお互いにメリットがあるような形にできれば、一つの答えが出るのかなと思います。例えば観光で儲かった金を「型」の保存に回すとか。

逆に古典的な「型」を保持せず、どんどん形や表現、あり方を変えていっていると、結局何がなんだかわからなくなってしまう。例えばナシ族の衣装の場合、７つあった星のマークは必ず残しています。これだけは変えられない民族のデザインです、ということが自分で説明できる。それが一つのやり方なのかなと思います。観光客側も興味を持って「元々のものはどうなんですか？」と質問すると、隣でおばあちゃんが着ているとか、そういうあり方が良いのではという気がしています。

緒川：起源が説明できるというのが、一つのボーダーラインでしょうか？

山村：そうだと思います。

○外とつながりつつ保たれる地域の自律性

山村：小林先生がおっしゃった“自律性”に関して、私も同感です。上級政府と地方政府と地元の間が、どういうパイプでつながっているのか。町づくりでよく問題になるのが、こうした行政と住民との協働のあり方です。そして往々にして両者は乖離しているから、その間をＮＧＯやボランティアが結ぶことになります。しかし、貴州で見た例では、上級政府にも地方政府にも住民にも、個人的に繋がっている部分がある。うまく意思疎通ができていました。

小林：価値の共有ができていましたね。

山村：はい。

小林：地元の側が勝手に独り歩きしてもうまくいかない。地元が自主的にはやるのだけれど、上級政府が理解し、認めてくれたり、サポートしてくれたりしないと、なかなかうまくいかない。もう一つは、例えば郎徳上寨で、ある時期、上から肥料を配給しないと言われて、自分たちのお金で買ったという話がありました。こうしたぶれない芯が一本通ってないと地域の自律は難しい。価値の共有化と、揺さぶりがあったときにぶれないということ。この二点が、自律の要件ではないか。

○公平な観光収入の再配分と自由競争

山村：事例の成功要因を分析する際、自律性を獲得するための要件というふうに考えて、例えば再配分制度、資金に関するしくみづくりなど、関連する項目ごとに見ていくと全体像が見えてくると思います。

小林：観光収入の基本的な部分はみんなで公平に分けるが、その上で、それぞれの知恵でプラスαを稼げるという二重構造になっていたところが大事かもしれない。みんなに収入が入る部分とは別に、おばちゃんたちが個々の才覚で稼げる部分がある。ベースのところは全体で再配分。この二重構造性は、やる気を削がないし、利益に与れない人を出さないという仕組みになっている。再配分だけでなく、プラス自由裁量で知恵をお金に換える仕組みを同時に残している。

山村：人民公社が改革してきたプロセスで、そういう二重の収入の構造の仕組みが既にあったのが非常に良かったのではないでしょうか。

小林：日本で「再配分制度をベースにします」と言ったときには「え～」という反応になる。それを新しくつくるというのは大変。

石森：必ず反発がある。

小林：白川郷だって既に一番収入がある家では年間 8,000 万円ぐらい稼いでいる。家屋を直すときは９割ぐらい補助金など外の金で直せてしまう。それで良いのかという話になる。収入の半分は仕方がない。残り半分は地域に分けるという仕組みがないと。

山村：そういう意味で中国の農村部の共産党関係の人と話していると、都市部の共産党と全然違っている感じを受けます。都市部だと“金”なんですけれども、農村部だと自分は共産党員で「分配しないといけない」とか、「みんなに共通の利益を」という、昔の古き良き社会主義の理想というものをちゃんと持っている人が結構いますね。都市部の共産党員がどんどん金に走っている一方で、農村の共産党員には「あんなのは共産主義ではない。自分たちが守るんだ」という政治意識というものが、時代遅れなのかもしれないですが、あります。

小林：それはすごいね。それを哲学として信じているところが。それがなくなったときに、新たにつくりだせるのかなと思う。他にも自律的、再配分的なことをやっている地域を見つけてきて、それがどうやって出来たのかということの中から、共通する普遍性が何かを抽出する。これは重要なテーマになる。果たして共産主義の中国でないとできないことなのか。

〇観光以外の正業を大事にする観光地

小林：正業を大事にする観光地というのが、地域の観光としてあるべきだと思っていて、最近、地方の講演で必ず言うようにしている。自分の正業を大事にしない地域なんて、観光地としても魅力がない。

石森：そういうところに限ってね、えてして、正業を横に置いて、観光で何とかしようするが、それはあり得ないですね。でもそういうところが圧倒的に多い。

山村：資源あっての観光で、観光だけの観光というのは存在し得ないですよね。

小林：観光業で食える人の数というのは、知れていると思う。郎徳上寨で面白かったのは、拡声器で人を集めていたところ。「手が空いて参加できる人は参加して下さい」という感じで、全員参加の義務はない。来られる人だけ来れば良いという、あれが良いんだろうと思う。

〇迎える側の観光教育

山村：今後の課題で、旅行者ガイドの問題があります。発地側の問題もありますが、コミュニティ・ベースド・ツーリズムを考える際は、着地側、地元の側でガイドをどう育成するのかが、非常に重要な問題になります。しかし現状では、住民あるいは民族の中でガイドを育てたい、でも、ノウハウがない、というのが、多くの場所で問題になっていますね。

小林：カカドゥでは、あるサイトの説明につき、例えばガイド４人のうち２人はアボリジニを入れる、というような仕組みがある。アボリジニの土地所有概念の話を、白人がしても説得力がない。しかし正規のレンジャーではないけれども、説明員としてお

金が支払われてアボリジニが説明する。完璧でなくても、当事者が話すことによって意味がある場合もある。旅行会社でも、そういうふうにしていかないといけない。

緒川：陳正涛さんの息子さんが、貴陽の旅行会社に勤めているとおっしゃっていましたね。そういう人が地元に戻ってくれば、一つの核になると思います。

小林：“教育”と言うと、言葉として難しいね。旅行者を教育するというのは…。

緒川：“啓蒙”でしょうか。

山村：直接観光には関わらない人も含めてですけれども、子供とか住民に観光客との付き合い方のノウハウを教えていくということも大事ですね。観光客とか、ホストとゲストとか言ってしまうとわかりにくいのですが、要は他人との付き合い方や接し方です。また、ホスト・ゲスト双方に、マナーやしきたりがあってはじめて観光が成り立つんだということを、着地・発地双方でうまくつくりあげる必要性がある。

小林：宮崎では、「子供の観光読本」という教材があって、子供にとって宮崎の観光とは何かということが書かれています。これは、カリブのどこかの国でつくられた読本を参考に作られたものです。自分の国は観光で成り立っている。観光客が来たことでどうなってきたのか。そして、あなただって違う国に行けば観光客なんだよ、と書いてある。宮崎でもそうした読本を作って副教材にしている。沖縄でもつくっている。観光の意義というものを子供たちに教えていく。ツェルマットなども、観光局の局長が年に１、２回小学校に行って、説明する。そうすると子供たちは、自分の村に観光客が来るということは、どういうことかがわかるから、外国人を見たら挨拶するようになったという。そういうように変わっていく。そういうことを今の時点でやっていかなければならない。今のままだと、ただ好奇の目で見ているだけ。

〇旅行者にも必要な旅育

石森：最近は、子供の旅行離れも深刻だと思う。

小林：今年あった資料で、旅行が大変好きと答えた人が全体の 25％ぐらいいたというのがあった。そしてその人たちに小学校のときにどれくらい旅行したかと聞いたら、毎年１回以上という人が 45％ぐらいいた。子供の頃に良い体験をさせておくと、みんな旅行が好きになる。明らかに因果関係がある。旅というのは誰でもできるわけではない。旅なんか勝手に行けば良いと思っている人が多いけれど、楽器演奏と同じように、ある程度手ほどきしてやらないとできない。

山村：考えてみたら、私も旅好きなんですけれども、物心ついた子供の頃から、毎年必ず夏休みの頃、「この日程は空けておけ、旅行に行くから」と父親に言われていました。強制的な旅の教育ですね。

緒川：当時の日本人にしては、かなり稀有ですね。無条件に旅行が好きと考えてはいけないんですね。

山村：しかも他の行事と重なっても、絶対家族旅行が一番重要なんだから、他の用事は断りなさい、と父に言われていたんです。

石森：「旅育」という概念が必要なのではないでしょうか。

小林：海外旅行に何回も行く人を調べたら、子供の頃に親に連れられてよく旅行している。もっと大事なことは、旅行が好きな人が何回も旅行に行って、旅行者の主流となっている点です。旅行がまあまあ好きとか、どちらかと言ったら好きというような人は、逆に最近旅行回数が減ってきている。これが昨今、旅行者数が伸びて来ない大きな背景です。旅行好きや旅行の意義を知る人を増やさない限りは、旅行離れの問題は解決しない。休暇や金をどうするといった以前の問題で、マインドの問題なんです。

石森：旅育とは何か。一つは旅そのものが人を育てるのだ、という考え方。そしてもう一つは、旅をするということ、そのもののやり方をうまく教え、育ててあげるということ。旅の楽しさをいかに育むか、ということです。旅に出れば、確実に様々なことを学ぶけれども、それ以前に、旅の楽しさそのものをうまく育ててあげないと。僕は、旅行減税しろと提案している。確定申告で旅行に要した経費を控除する。すると裾野が広いから、経済的にも影響は大きい。観光立国には、“旅育”という面もあるし、健康増進にもなれば医療費も削減できる。政治家はそれぐらい言うべき。

○コミュニティがまとまる適正な大きさ

山村：人がまとまる単位として“100 戸 500 人”というのが、ずっと気になっています。白川郷荻町集落は 149 戸 604 人。竹富島が 172 戸で 342 人です。ただ竹富島の場合は集落が２つなんですね。そのあたりの規模が、うまくいく単位と言えるのではないか。

緒川：宮崎県に諸塚村というところがありまして、そこは人口が 2 千人ぐらいなのですが、村の自治公民館制度というのが全国的に有名で、村の権限を公民館にかなり委譲しているんですね。税金を徴収して徴税率 100％を達成したり、林道網密度が日本一だったりしているのですが、その林道の計画、整備、維持などにも住民が参加している。グリーンツーリズムや神楽などの伝統文化の継承も公民館単位でやっている。その公民館が全部で 16 あって、昔は１公民館あたりちょうど 500 人ぐらい。今は過疎化で人口が減少してきて、200 人弱になっている。そうなると、その公民館制

郎徳上寨の家並み

度が今の時代にも合わなくなっていて、役職がきついとか行事を村単位にしてくれという意見が出てきているんです。コミュニティの単位として、500 人の頃はうまくいっていた。

小林：ロードハウ島も人口が 300 人あまりで、それで島に入ることのできる観光客の数を 400 ベッドに設定している。そういう、まとまる単位というのはあるかもしれないですね。飯田などでもグリーンツーリズムがうまくいっているのですが、あれも公民館運動がベースですね。観光客の受け入れのようなことを公民館運動という一つの塊の中でやっています。一軒一軒口説いて行ったら大変ですが、集落ごとに 20 人受けてくださいというようにやるわけです。“100戸500人”という説は一つの仮説として面白いですね。どれくらいのまとまりが一番やりやすくて意思統一も図れるのか。あまり少ないと意思統一は取れるが、実質的な面で動けない。

山村：この仮説を考えていくと、受け入れ可能なキャパシティが見えてきて、地域がどう観光をコントロールするべきかという役割も見えてくるかも知れません。

緒川：今、山村先生がおっしゃった 500 人ぐらいだと、名前と顔が覚えられる範囲ですね。

山村：名前を正確にわからなくても、鈴木さんの息子だとか、誰々のお兄さんだとかと言うところがわかる範囲ですね。

緒川：田舎の人に聞いても、やはり村単位だと数千人の規模になので、そうなると村人はすべて「見たこと、あるなぁ」くらいでわかるのですが、顔と名前を全員覚えるところまではいかないらしいですね。

石森：そのあたり、地域の自律性と関わりがあるのかもしれませんね。ある程度、お互いを知っていないと。

山村：そういう土台がないと、利益の再配分もできないですしね。

〇コミュニティの自律が観光の基本

緒川：500 人のコミュニティでは、ある意味、今の時代では縛りがきつい面もあると思います。中山間地域や農村の旧来型のキッチリしたコミュニティは束縛がきついという意見もある。その結果、人口が流出し、地域の疲弊につながっている面もあります。都会から過疎の村に人を入れるとなると、多分、郎徳上寨型のような“キッチリ型”はきついなと。

小林：だけどコミュニティにおいて「最低限、こういうことをやろう」という、そういうルールを再構築することは重要だ。日本でも、水俣の集落の例がある。従来、集落の水を大事にするということは、みんな言わなくてもわかっていた。今はあえてそういうことを言わないとダメになってきている。河原のものを勝手に取っちゃいけないという暗黙の了解があったのに、どこかの業者が入ってきて勝手に取っちゃうとか。

そういうことをルール化したことによって、「ダメなんだよ」と言えるようになった。このように、暗黙の了解を明文化していくということで、ルールを再構築していくやり方はあると思う。昔のままのコミュニティのあり方だと確かに現代生活はきつい。ルールを破ったら村八分になったりするとか…しかし、「最低限こういうことをやろう」という確認をとりながら、コミュニティ意識をつくりあげていくことが、今は重要なことなのだと思う。現在は、きつすぎるという以前にバラバラになっていますから。

緒川：そういう点で、西欧か東欧かわからないですけれども、西洋型のコミュニティ・ベースの観光がどうなっているかということと比較すると面白いと思います。

山村：コミュニティ・ベースのまちづくりという観点ですと、アメリカで非常に活発な議論がされていますね。

小林：ウィスラー（カナダ西部の世界有数のスキー・リゾート地）では、スキー場を開発するときに、まずコミュニティをどうするかという議論をしているわけです。日本だと、まずリフトをどうするとか、どれくらいの規模のスキー場をつくるとかいう話になる。しかしウィスラーではそれができたときのコミュニティをどうつくるかという話から始ったという話を聞いて、全然発想が違うなと思った。

石森：本来、そうあるべきですね。

小林：もう少し研究したら面白いと思います。僕はコミュニティがしっかりしていないところに観光は根付かない、と言い続けています。

石森：“地域の自律”もそういう基盤がないとね。ごく数人が自律して頑張りますと言っても、現実には難しい。共同体というものは、わずらわしいものだけれど、何かあったときには大事な存在。共同体の表裏、功罪というか、悪い面だけではなく良い面を見ないといけないですね。とりあえず主婦は、朝起きたら火起こしして、煙を出しとかないと「あそこの奥さんは、まったく…」と言われる。だけど、本当に何かあったときに、皆が心配して良くしてくれる。一面では確かに村八分というものがあったりするけど、その裏返しとして何かあれば皆で助け合う。今は、わずらわしさから何かあってもお互い気づきもしない。何かやろうとしても、櫛の歯が欠けるように一部の人だけになってしまう。

〇再配分の様々な形

小林：今の日本は、アメリカの自由主義というものを勝手に拡大解釈しているところがある。自由放任、勝手放題に捉えているが、アメリカに行ったら全然そんなことはない。

石森：日本では、ある種、株主資本主義というように捉えている感がありますね。株主がすべてだ、会社は株主のためだけにある、といったように。

小林：一部だけ強調して取り入れた弊害かもしれませんね。

石森：会社は、まず社長がいて社員がいて、はじめて成り立っている。金があれば会社が動くかと言うと、それは論外。それと同じように、1人の優れた者がいればすべて何とかなるかというと、そうではないですよね。コミュニティがあって、はじめて成り立つ。

山村：歴史的に古いきつい仕組みというような言い方をされましたが、アメリカなど相対的に見て歴史が短いというか、そういう国でコミュニティの研究が盛んだというのは非常に興味深いと思います。アジアの中でも、日本の都市部や中国の都市部、台湾などでコミュニティ関係の議論が盛んです。そう考えると、今まで議論しているレベルとは違うレベルでのコミュニティの見方があるのかなという気もします。

石森：コミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功要因を考える際、まずはコミュニティがきちっとしているというのが大前提としてある。まずは、コミュニティがきちんとしているかどうか。コインの裏表のようなもので、優れたリーダーがいるところはコミュニティがしっかりしているのだろうし、そういうところは哲学がきちんとしていて、現実的な金に関わる面では、観光収入の公平な再配分がある。そういうふうに考えると、まずはコミュニティのコンセプトそのものをきちんと押さえないといけない。コミュニティとは何ぞや。コミュニティなるものがベースになって観光開発、観光振興が行われているのかどうか。それがうまくいっているところと、うまくいっていないところ。

　コミュニティがしっかりしている郎徳上寨では、我々から見てもなかなかの人物がいましたね。直接お話を聞くと、そういうリーダーには、なるほどという哲学があった。でも哲学だけでもだめ。美しい面だけでは観光は動かない。観光が怖いのは、もろに現金が動きますからね。結局観光開発がうまくいっているところは、利益の公平な再配分をやっている。そういう点で貴州省におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功要因というのは、ある程度共通しているものがあると思います。

　それから、段々畑の景観や藍染などの工芸にしろ、伝統的な正業で、きちんと仕事をしているところは、結果として、いろんな文化財、自然景観も守られるということがありました。この点も重要だと思います。

小林：今挙がっている成功要因を一つ上の概念でまとめていくことができれば筋道が立ってくる。再配分について考えると、皆が皆、儲けられるわけではないから、老漢族の天龍屯堡古鎮などでは、下水道の整備など違う形の再配分をしていて、あれは面白いなと思った。観光収入をどう使うかで――もちろんその全部ではないけれども――皆のために使っている。形を変えた再配分ですね。

山村：天龍屯堡古鎮は、外部に出た企業家が出資者なんですよね。これは漢民族の典型的な性格で、海外に出た華僑が自分の故郷に仕送りをする。今年世界遺産になった広東の街も海外に出た華僑が儲けたお金でその村に建物を立てて、その西洋式の建物が

登録された。本来は行政がやるべきことまで村の成功者がやるような文化があるんでしょうね。

小林：昔、日本でもそういうようなところがありましたね。

石森：人も育てたしね。成功者のところに居候してね。

山村：呉さんの話をみんなが聞くというのも、そういうところにあるかもしれませんね。

老漢族の村・天龍屯堡古鎮

石森：おそらく今話している点は、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功条件になるのではないか。

小林：そのへんは、もう少し広げて、普遍化できる要素は、貴州に限らず普遍化できる、というところまで考えてみたいですね。

〇祭りでまとまるコミュニティの単位

小林：高山などでも、町内別に祭りの屋台を持っていて、それを維持するための「講（同一の信仰を持つ人の結社）」がベースにあった。そこから、町内を綺麗にしようとか、宮川を綺麗にしようという運動があり、ポケットパーク構想や観光振興の面に広がっていった。そういう例のベースにあるものは、貴州の例と同じだと思うんです。その一つの講の大きさは、もしかしたら 500 人くらいかもしれない。それを調べてみたら、山村さんの仮説が適用できるかもしれない。京都でも山鉾ごとの規模というものを調べてみると面白いかもしれない。

石森：小林さんのお話を敷衍すると“祭り”なんですよね。まさにコミュニティであり、共同体であり、宗教的共同体であり、生活共同体である。祭りが維持されているところに、何事によらずまとまりがある。祭りを村として維持している範囲も調べないといけないんでしょうね。

山村：昔、人民公社だった範囲と今の村の範囲が一緒というのも、重要なポイントかもしれません。このレベルで物事をすすめるとうまくまとまる例が多いような気がします。その上のレベルでも下のレベルでも難しい。

石森：観光を手がけるのも、そういうレベルで手がけるべきというわけですね。

山村：言葉の問題ですけど、人民公社は、まさに「ピープルズ・コミューン（people's commune）」。そうするとコミュニティというのもそういう風に考えるといいのかなと思います。つまり、仕組みそのものをコミュニティと呼んでみた方が良いかもしれない。講やお祭りという仕組みもコミュニティ。人の集合体をコミュニティと考えよ

うとすると、これがなかなかうまくつかめないんです。ですからコミュニティ＝仕組みをどうつくっていくかという議論がわかりやすいのかなと。アメリカの開催された「コミュニティ・デザイン」の国際会議に参加したことがあります。コミュニティをいかに我々はデザインすべきかという議論をする会議です。そこでもやはり仕組みづくりに関する議論が多かったように思います。

石森：観光創造の一つのテーマですね。新しい観光をある地域でつくるときに、まず母体たるものがきちんと定められないとうまくいきませんね。

小林：そうですね。母体としてのコミュニティをしっかり定めること、コミュニティを再生することこそが、観光を再構築するきっかけとなり、そして観光を継続的につくりあげる力となるのではないか。そういう力を持って欲しい、と思っています。だからこそ地域は観光に取り込む意味があるのでないかとも言えると思います。

石森：かつては祭りを皆でやる制度が、共同体としてあった。今はそれも崩れてきているところが多い。だから、何か、観光を皆で考えて、つくってやっていこうというような動きが、次の新しいコミュニティを形成するという面もあるかもしれないですね。

緒川：郎徳上寨の場合は、シャーマンの祀りごとも、もともとの人民公社の単位でやっているんですよね。

山村：その重なり具合が、うまく一致しているんですね。

緒川：中国のどこでも、それが重なっているのですか？

山村：他の地域でも、そのようです。郷鎮企業で工業化がうまくいっている村というのも、基本的にそうです。郷鎮企業はうまくいくけど、都市部はうまくいかない理由はそこにあるのだと思っています。都市部は新中国成立後（1949～）、職場単位のコミュニティに改変してしまった。今までの居住地レベルのコミュニティを解体して職場で集合させて、そこで全員住まわせるということをやったので、旧来のコミュニティはメチャメチャになってしまった。

○日本でも可能な地縁をベースとしたツーリズム

石森：そういう意味では“社縁”なんですね。やはり今後は“地縁”の見直しが必要なのかもしれませんね。今、我々がやっているのは、“地縁ベースド・ツーリズム”かもしれない。“社縁ベースド・ツーリズム”もあり得るかもしれないけど（笑）。

小林：“社縁”＝“職縁”と言えば、“インセンティブ・ツアー”がそうかもしれませんね。取引先、社内などで成績が良かった人にご褒美で旅行に行かせるというものですね。

“地縁”について、なるほどと思った事例がありました。飯田でグリーンツーリズムがなぜ成功したかという例です。最初、まずはある地区をモデルにした。そこで子供たちの受け入れを行ったらうまくいった。それを「こんなことをやったらうまくいくぞ」と皆に知らせたわけです。頑張って成功したご婦人をスピーカーにして、いろん

なところでしゃべってもらった。そうしたら「うちの集落でもやらせろ」と気運が上がっていった。そこで希望者に手を上げさせたわけです。多分、これを市域全体で10 万人全部に声をかけていたら成功していたかどうかはわからない。一気にやってはいけない。300～500 人を単位にしてものを考えた方がうまくいくというのは面白いかも知れません。

山村：それが言葉を換えると、“口コミ情報”が広がる適正な範囲なのかもしれませんね。メディアが機械的なメディアではなく、人と人が１対１のコミュニケーションで言葉や真意が伝わるという範囲です。

緒川：昨今の市町村合併でそういうレベルのコミュニティはどうなるのでしょうか。やはり、あまり大き過ぎる抽象的なものには自分のアイデンティティの依りどころとしての実感を築けない。そういう意味では、日本の危機かも知れません。

石森：まさにこれからは“地縁ベースド・ツーリズム”が必要というわけですね。

小林：それは面白いと思いますね。

山村：エコミュージアムのコアとサテライトに当たるのが、“地縁ベース”だと“神社”とか“公民館”になるんでしょうね。そういう発想が面白いし、必要なことだと思います。

石森：現実にそうですしね。

緒川：あまり規模が大きすぎると、「自分が何かやってもどうせ変わらないだろう」と思ってしまうかもしれない。でも 500 人ぐらいの規模だったら、自分が何かやったら変わる。そうするとモチベーションが上がるという点もありますね。

石森：今回は貴州省の事例ですが、他の事例と比較する意味も出てきますね。

山村：これがうまくまとまれば、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの評価基準というか、判断指標が作れるかもしれません。チェックリストみたいな。

小林：自分たちがどこまで達成出来ているかチェックできるやつですね。

石森：もう少し普遍化する仕組みができれば、次に繋がりますね。日本の事例なども比較に入れると面白い。

小林：そういう意味では日本でも事例はある。祭りとか公民館が良い例ですね。沖縄なども公民館運動が盛んですから、良い事例があるかもしれない。飯田も公民館運動の名残が残っているから、集落単位での結びつきが物凄く強い。講演に呼ばれるときも、市民全体向けというより、集落単位で来てくれと言われる。そこでワークショップをやったら、物凄く熱心なんですね。300 人ぐらい来たところもあった。そこでカード会社の機関紙を通じてリンゴの木のオーナー制度を募集したら、去年は、名前の響きが良い安曇野村に 200 人ぐらい集まった一方、その集落には一組しか来なかった。それでも、集落みんなで大歓待したわけです。そうしたら、その一組が大感激して、編集部に「こんなにすごかった。安曇野村とは全然違うぞ」と伝えた。すると今度は編集部の人が取材に来て記事になった。そしたら、今年はみんながそっちの集落に集まった。何もないところだけど、何とかしたいと言うので、私はワークショップで「観

光というのは、観光客が来ることではなくて、地域を面白くすることですよ」と言い続けて来た。そしたら、皆乗っちゃって「リンゴの木のオーナー制度ぐらいだったらできるな」となった。今年、連絡が来てみんな喜んでいるわけです。何もないところにそんなに人が来て、やっぱりやったら効果があるんですね。そういうコミュニティ・ベースドの例ですね。何もないところに人が来ている。何もないけど、みんなの気持ちが連鎖、思いの連鎖がある。集落ごとにそういう動きが出てきて面白いことになってきている。そういうふうに、我々が考えるコミュニティを中心に、日本だってこんなにできるんだ、というところまでこの研究が拡がっていくと良いですね。本書を読んで下さる方に対して、「貴州は中国で人民公社があったからできたのだ」という話を伝えるのではなくて、「あなたのところでも、できますよ。それに近い例は日本ではこんな例がありますよ。」ということを伝えられれば良いと思います。その普遍化、エッセンスが何か、というところに至らないと“論”にならない。議論から芽として出していかないと。

●「観光地ライフサイクル論」上での貴州省の位置づけ

（貴州省の観光地をバトラーの観光地ライフサイクル論を軸に論じるあり方について、以下の議論が行われた。）

＜バトラーの観光地のライフサイクル曲線上での貴州省の観光地の位置づけ＞

小林：紅楓湖民族旅游村は、このまま行くと、衰退する方向に行ってしまうと思う。郎徳上寨の今後のあり方を考えたときに、村自体が、テーマパーク化してしまうということもあるが、もう少し他の選択肢があるはず。郎徳上寨をバトラーの観光地ライフサイクルの曲線上に落としてしまうと、曲線に示された通りに進んでいくと思われるのが嫌ですね。どう表していけばいいかな…

緒川：かなり悩むところですね。

小林：桂林などは、ライフサイクル上で再生段階にあるということは、実際言えそうですね。現在、都市観光的なものを付け加えたり、エンターテイメント、アミューズメント的なもの付け加えたりして、都市としての魅力を向上させようとしているからね。確かに、単なる風景地としての役割はある程度まで行ってしまっている。

緒川：単純に来訪客数で表したグラフにしてしまうと、郎徳上寨と桂林では来訪客数のレベルも全然違うので、同じ曲線には乗らないはずですね。誤解を生むようなら、同じ曲線に乗せない方がよいのですが…

山村：それぞれの事例について１枚ずつグラフがあった方がわかりやすいしもしれませんね。そして、それぞれ今後のシナリオとして、どうすると望ましいのか、として分析を行った方が、面白いかも知れない。

小林：いろんな発展の仕方があると思う。テーマパーク化して衰退するというのも一つ

だけど、そうならないようにするなら、コントロールをうまくやらないといけない、という条件がつくだろうし。あるいは、観光で得た金を保護の方に使っていく仕組みをつくらないと衰退してしまうぞ、とか。まだ初期の段階にある観光地は、今後、単純に同じように発展していくかどうかも、わからない。地域が方向性を選択していくということもあるからね。

緒川：バトラーが書いた 1980 年代の頃は、来訪客数が多ければ良いという考え方があったかもしれません。多分、郎徳上寨だと、来訪客数は既に適正規模に達していて、これ以上、数多く来る必要はない。必ずしも、人数を増やしていけば良いかどうかはわからない。ビジュアルにはしにくいですね。

山村：郎徳上寨は、許容収容力の限界の範囲に既にいるかもしれないですね。

緒川：一つの図にすると弊害があるので、やめた方が良いですね。

小林：誤解されるところがあるかも知れないですね。考え方は面白いのですが。やるのだったら、ケースでいくつか示すとかの方が良いと思います。

緒川：一つ一つ細かくやってしまうと、厳密に調査したわけではないので、精粗が激しく出てしまいますね。

山村：もしくは、最初に地名を抜いたこのモデルのグラフと説明を載せておいて、個別には説明する文章で書いていくとか…

小林：その方が良いですね。

＜観光地の発展と衰退の様々なパターン＞

石森：郎徳上寨などはある種、確立・成熟段階かもしれませんね。

山村：後は下降する可能性もありますからね。

小林：あれをどうやって維持するか…

石森：どこまで伸びるかですね。

小林：曽先生の論文に、「お金が増えている頃はみんな喜ぶ。絶対額は少なくても、始めた頃は、みんな喜んでいる。人間というのは、変化率で評価するから、２万円から２万５千円もらえる額が上がっても、少し嬉しい程度だけど、千円だったのが６千円になると「すごいことになった！」ということになる。」というようなことが書いてあった。「郎徳上寨でも、観光をやっていても変わらないと思うようになった」ともありました。面白いなと思いましたが、今はそれ以上の段階に来ているのかもしれませんね。

緒川：若い人などは、物心ついたときから観光客が来ているわけですからね。有り難味が減っていますよね。

小林：来訪者数的に見れば、郎徳上寨はまだ発展段階の始めと思われるが、内容的には既に停滞段階の入口と考えて良いかもしれない。このまま衰退しないようにすれば、どんな展開が考えられるのか。10 年経ったらどうなっているのだろう、ということ

も興味がありますね。桂林がまた上昇する可能性がある、というのも面白いですしね。
山村：面白いですね。桂林は 1990 年代、もう衰退するだろうという感じでしたから。
石森：桂林については、新聞に出ていましたね。ガイドがストライキを起こしたらしい。過当競争になっていて、生活ができないぐらいに賃金が下がっているとか。世界遺産でしょう？当局は強い態度で挑むと言っていました。収容力がいっぱいになって来ているということがありますね。世界遺産はみんな同じ傾向にあると思います。
山村：上って下がる期間が短いですよね。
石森：急ですからね。
小林：そういう研究をする人がいても面白いですよね。世界遺産の研究というのは、どちらかと言ったらプラスの発想でやっている。それを、どういう問題を抱えていて、どういう状態になっているのか、ライフサイクルの中で考えると面白いね。
石森：世界遺産というのは、容易に危機遺産になりますし、確かに、ライフサイクル的なことは感じさせるものがある。
小林：同じ種類のもので比較すれば、ある程度はこの曲線で言えるところはありますね。
緒川：紅楓湖などは、収容力の許容限界まで行っていないかもしれないが、観光地としては衰退段階に入っているかもしれません。
山村：おそらく紅楓湖は、確立の前の段階で、今のような状況なのだと思います。

＜旅行者側の成熟度の段階＞
山村：あと、中国の団体観光客について論じたところがありましたね。観光地のライフサイクルとは別に、旅行者の教育発展段階など、そういった図もできるかも知れません。旅行者側の成熟度というか。
小林：それは面白いですね。観光地は旅行者に育てられる。旅行者は観光地に育てられる、ということですね。十分あり得ますね。
山村：そう考えれば、観光客側だけでなく、着地側のコミュニティの成熟段階というものもありますね。
緒川：中国では、まだ観光旅行が普及し始めたばかりの段階ですね。
小林：日本も初期の頃はそう。「団体客を沢山呼べば良い。ちょっとくらい難があっても問題ない。どんどん来させろ。」という段階ですね。

＜持続する観光地について＞
小林：郎徳上寨では、観光地として持続させるための工夫として、自分たちの行事を大事にすることによって観光客の案内を結果的に制限していましたよね。それぐらいでしょうか？まだまだ中国の場合、観光客が沢山来た方がハッピーだというのが根底にあるのだと思いますが。
緒川：郎徳上寨で村の人が、観光よりも村の祭事を大事にするような発言をしていて、

面白いなと思った一方、本当かな？と私も思ってしまいました。

山村：「どんなお客さんに来て欲しいですか？」と聞いたときも、「誰でも来て欲しい。ウェルカムだ」とおっしゃっていましたものね。

小林：なかなかそういう制限する考えというのは、まだ中国にはないのではないか。安定して横ばいの状態に落ち着くのが良いことだと言っていたけれど、そうじゃなくて、まだまだ上昇していくのがもっと良いことだという考え方があると思う。

緒川：爆発的な観光ブームの後のソフトランディングが求められますね。

小林：爆発的に発展させないとかね。オーストリアのレッヒ村などでは、ヨーロッパのスキー大会の開催を断っているんです。住民の８割が反対した。一時的に客が来てもしょうがないのではないか、ということです。物凄く成熟してるんですよ。コミュニティがしっかりしているから、こっちに行くと危ないという場合は断るわけです。

＜観光地ごとのシナリオ＞

山村：そういう意味で、バトラーの曲線は、観光地のライフサイクルの現状を判断する指標として見るよりは、あるべき姿のシナリオと見た方が良いかもしれませんね。

小林：1980 年代までは、これが正しいと思われたシナリオとか。

山村：このバトラーの理論は、段階というものに着目してしまうものですから、どうしても「今はこの段階で、次はこういう段階になる」となる。そうじゃなくて、この表をもとに、自分たちがどういうシナリオで行くべきかという議論に持っていかないと意味がないと思うんです。

小林：それと、観光の意味も変わってきているわけです。さっき言ったように正業を大事にしながらやる観光と、観光地におけるいわゆる観光の問題とは違うかもしれない。つまり、例えばナイアガラなどは、コミュニティがなくても受け入れるしくみさえうまくつくっていれば、極端なこと言えば、沢山来た方が、うまくいくわけです。そう考えると、バトラーの観光地ライフサイクル論の今日的意味が出てくるかもしれない。この曲線の通りにいくのは必ずしもハッピーとは限らないと。違うシナリオを観光地の性格ごとに書き上げないといけないとか。

緒川：バトラーの後の研究者も、いろんなカーブを出したり、バトラー自身も自分の理論を発展させたりしていますね。

＜地域調和と観光魅力＞

緒川：今回、地域調和というのが一つのテーマだったかもしれません。それが観光地の魅力として大きいかなと思います。500 人という規模が、地域がうまく調和するものとして適当だとか、地域が調和しないと一時的に人が来ても、魅力がなくなって劣化してしまうとか。多分、地域調和の面は、バトラーの論文などでは十分に考慮されていなかったかもしれません。しかし現在は、地域調和が魅力に直結するような時代

になってきた。

小林："地域調和型観光"、それは面白いですね。今後の魅力ある観光地とは何か。"自律性"と"地域調和性"であるという。

山村：観光地の成功要因の判断指標の話に戻りますが、自律的観光を判断するためには、自律性や地域調和性が項目として使えそうですね。

小林：地域調和性、地域の中でトラブルを起こしていたらだめだ、という項目ですね。

緒川：そういう点で白川郷（世界遺産に登録された合掌造り集落で有名な岐阜県白川村）とか由布院温泉（従来の歓楽街的要素を避け田園風景に囲まれた佇まいを活かした温泉保養地づくりで日本最大級の人気を誇る大分県由布市の温泉地）などでは、そういう地域調和が大分崩れてきて、黒川温泉（露天風呂と温泉街の徹底した風景づくりで近年全国的人気を得ている熊本県南小国町の温泉地）みたいなこじんまりとしたところの方がうまくいっている現状は示唆に富みますね。

小林：黒川あたりの大きさだと、地域の中で誰がどういうことやっているかわかりますね。湯巡り手形なども、利益再配分の方式の一つかもしれませんね。日本においては、なかなか再配分が難しい。初期の由布院は、そのへんがうまくいっていた。旅館のクラス分けをうまくやっていた。客をお互いに取らないとかね。それも再配分のしくみの一つなんだと思います。日本の観光地の旅館というのは安いやつから高いやつまで、全部取ろうとするけど、あそこは分けたんですね。今、何でうまく行ってないかと言うと外部資本が入ってきて、自分のところだけ良ければ良いという業者がいっぱい入ってきたから、ややこしくなってたわけです。由布院の拠って立つ魅力に関係なしに、タコ焼き屋ができたり、オルゴールができたり、テディベアができたり。とにかく人が来るということで金儲けてやろうというヤツが沢山出てきた。何で大阪本場のタコ焼きを売らなきゃいけないのか。変ですね。結果、そういうものを買うような観光客が沢山来るようにもなっている。他の業者がいっぱい入って来ているから、コミュニティ、地縁も崩れている。

逆に地縁だけでは厳しい、という例を妻籠に見ることができる。妻籠・馬籠（いずれも昔の中山道の宿場町で全国でいち早く地域を挙げた景観保全活動により古い町並みが残されている）は「売らない、貸さない、壊さない」という三ない運動で成功した。これは地縁を守るということですね。しかし二世三世の考え方が変わってきた。それだけで喰えなくなってきた。単なる昔の街並みの保存だけで良いのか。次の段階をどうするか。この方向性を出せるかどうかです。

（4）中国・貴州省調査に関する考察・検討・議論のまとめ

1）民族観光地の様々な種類と差異

・ 貴州省内の観光地は、同じ民族観光をテーマにしていても、さまざまなタイプと性質があった。省政府が直接開発した紅楓湖民族旅游村のようなテーマパークと、既存の村をベースに観光提供する生態博物館や民族観光村とでは、資源の提供の仕方をはじめ多くの点で異なっているのは明らかだが、後者の間でも、以下のようなさまざまな違いがあった。

南花村の観光用広場

＜景観＞

・ 観光地化されていない幹線道路沿いの町や村では近代化が進み、コンクリート造りの家も目立っており、我々が訪れた民族観光村でも、都市近郊や幹線沿いに位置するところでは、同様に殺風景な場所もあった。

・ しかし、多くの民族観光村では山間部で近代化が遅れていることや、景観面への配慮を行っていることもあり、木造の伝統的な家並みが保全されており、一部コンクリート造りの家には木の板で覆うなどの処置を施す村もあった。

・ ただし、整備が行き過ぎて、木造でありながらも新しい家並みが目立ったり、村の規模に比べて豪華とも思える広場が整備されていたりするような村も見られた（南花村）。

＜設備＞

・ アクセス道路、駐車場、広場、散策路、トイレなどの各種設備の整備の度合いや規模も、相違があった。これは観光開発の出資者が誰であるかとも大きく関係しているようである。

＜ホスピタリティ＞

・ 民族観光村には、観光客が来ることがあらかじめ連絡され、村民総出で歓迎儀式を行う村もあれば、観光客が来てもほとんど対応しない村もあるというように、観光客を迎える体制にも大きな違いがある。また、村民の観光客に対する態度にも大きな違いがあり、村民全員で歓迎の笑顔を表してくれる場所もあれば、観光客に対して無関心なところもあり、モノを売ることを優先した“観光ずれ”が感じられる場合もあった。

＜出資者・組織形態＞

・ 村の観光開発にあたっては、省政府などからの補助金をベースにし、その後、村自身も設備整備の資金を負担するケースが多いと思われるが、老漢族の村・天龍屯堡古鎮では、都市で成功した村の出身者が、村に会社組織をつくって、そこに投資するという形態をとっていた。トン族の村・肇興では、省都の貴陽に住む漢族の企業家が村に会社組織をつくって経営している。生態博物館となっている鎮山村では、現在、香港の企業による投資の計画が進んでいる。

天龍屯堡古鎮の観光投資会社

＜民族観光地の差異と観光地のライフサイクル＞

・ このような民族観光地の間での差異は、村に残る伝統文化などの観光資源、地理的位置、最後に挙げた出資者と村との関係なども関係してくると思われるが、観光客を迎え入れてから経過した時間にも関係してくるのではないかとも考えられる。
・ 例えば、観光開発を始めて 10 年以上経つような村では、外国人が来ることに対する新鮮さも失い、観光客へのもてなしがルーチン化し、ホスピタリティも低下しているケースが見られたが、観光客を受け入れ始めてまだ２年ほどしか経っていない季刀村では、元々ミャオ族が持っていた旅人をもてなす精神が損なわれておらず、村民総出で笑顔で挨拶をして歓迎してくれる態度が見られた。
・ 景観面や設備面では、開発開始から間もない場合は、十分でない場合もあるが、逆に南花村に見られるように過剰な整備が行われている場合もある。
・ 一方で必ずしも開発からの時間の経過がマイナスに働くだけでなく、肇興村に見られるように開発から時間が経ち、外部の文化面とマーケティング面でセンスがある投資家が入ってくることによって、歌や舞踊などの民族文化がより洗練させた形で提供されるようになるということもある。
・ 以上のように、観光開発からの時間の経過とともに、観光地の様態が様々な面で変化していくことが推定され、その“観光地のライフサイクル”のどの段階にあるかという切り口で、貴州省の民族観光地を分析・評価することができるのではないかという視点が石森教授から提案された。

２）貴州省の民族観光の成功要因

・ 世界各地の観光地、特に文化を主な資源とする観光地では、一般的に見て、観光開発から年月が経つにしたがって、初期のホスピタリティが薄れ、明らかな商売目当

ての業者や住民が増え、宿泊、物販、飲食施設等の乱立や看板の氾濫などにより景観が荒廃するケースが多い。

・ また、当の文化資源についても、民俗芸能から宗教色や伝統色が薄れ、観光向けに俗化が著しいものになってしまうという所謂“観光ズレ”と称されるものが現れてくる。

・ 貴州省でも、その傾向が現れ始めていることは否定できないが、その一方で、郎徳上寨など一部の民族観光村では、開発から約 20 年が経つにも関わらず、その“観光ズレ”現象を大きく抑えることに成功し、魅力の減退を防いでいると感じられた。

●コミュニティの自律性

・ こうした貴州省の民族観光の成功のベースは、**“コミュニティの自律性”**であると考えられる。

・ 最も優れた成功例と言える郎徳上寨村をはじめ成功している観光地は、最初のきっかけこそ地方政府など、外部からの働きかけだったかもしれない。しかし、その後は政府の力は借りるものの、上から押し付けられたプロジェクトや計画をただ実施したというわけではなく、ほとんどの村民が参加する形で、村自体が方向性を決めて一つにまとまり、創意工夫を図り、さまざまな困難を乗り越え、自発的に努力を続けるといったことで、今日の成功を導いてきた。

・ 貴州省では、最初に民族観光に取り組もうとした際に、７つの村を「民族風情旅游点」として定め、支援やアドバイスを行ったが、７つの村すべてがその後、成功したわけではなく、自発性や自律性に欠けた村々ではその後、観光開発が続いていないことから考えても、このコミュニティの自律性が重要な成功のベースにあると思われる。

・ さらにこのコミュニティの自律性を支えながら貴州省の民族観光を成功に導いた要因を分析し、大きく以下の５つが仮説として考えられた。

①観光収入の公平な再配分制度

・ まず郎徳上寨で注目されたのは、観光収入の分配が不満を生まないように、公平・公正に配分される仕組みができていることであった。

・ 村に観光客が訪れると、男は蘆笙を吹き、女は歌を唄い、水牛の角の杯で酒を勧める村入りの儀式を行う。そして、儀式後に広場で多彩な歌と踊りを披露する。村は一括して歓迎儀式上演料として観光客から１グループあたり 500 元を徴収する。そして、この一連の観光の仕事に参加した村民は、民族衣装着用、盛装着用、踊り参加、蘆笙演奏、歌唱などといった役割ごとに、三角、四角、丸などの形の点数が書かれた板が渡される。そして、１ヶ月ごとに、観光総収入から蘆笙の修繕費や管理

費などを村の経費として 10～20％差し引いた後、各人の累積点数に応じて現金を分配する仕組みである。

・ これは、かつての人民公社時代の仕組み「工分（コンフン）制度」を活かしたものである。郎徳上寨の観光開発を始めた当時、現場で指揮をした村の元共産党書記陳正涛氏も、村民全員参加の原則と工分制度により、村民の間での収入の分け方が公平であったことが、大きな成功要因だったと振り返っている。
・ 観光地が発展すると、観光収入を得られる者とそうでない者、あるいは観光収入の不平等な分配などが、コミュニティに亀裂をもたらし、ひいては観光地の魅力を減退させる大きな要因となる場合があるが、郎徳上寨では工分制度により、それをうまく回避していると言える。
・ 一方で、公平なだけでは参加者の努力や創意工夫の意欲が衰えていく可能性があるが、郎徳上寨村では、土産物などの販売収入は各自の収入になるという仕組みも同時に採用して、工分制度との二重構造になっており、個人が伸びる余地と全体での公平性の両方を確保している。
・ この工分制度は、中国の共産主義に由来するものではあるが、本来、農業や工業に適用されていたものを、観光業にアレンジして適用したという点で地域独自のものであると考えられる。工分制度そのものではなく、観光収入の公平な配分を図る仕組みを地域の実情に合わせて工夫して、つくり上げた点は、他の国や地域でも学ぶべき点と考えられる。

②専業でなく兼業の観光地

・ 郎徳上寨や肇興など成功している観光地では、観光を専業とするのではなく、他に農業や手工業などの産業と兼業で行って、主産業と観光業を両立させていることが、成功要因の一つではないかという仮説が提案された。つまりは「観光で稼ぎたかったら“観光立村”と言うな」という逆説である。
・ 観光を専業とすれば、どうしても村の景観やビジネスの仕組みが観光客の興味や利便性に向けてつくられたものになる。しかし、旅慣れた旅行者にとって、それは逆に“観光ズレ”した地域に映り、魅力を大きく減退させるものになってしまう。今回の視察対象地での極端な例としては、紅楓湖民族旅游村が該当し、人工的に造成された村でスタッフはすべて観光専属であった。
・ それに対して、ほとんどの村では、観光収入を大きく増やしたとは言え、未だ農業が産業の中心であり、最も成功した郎徳上寨でも収入の半分は農業収入となっている。そのため、生活時間のすべてを観光に割いているわけではなく、観光客への接待と民俗芸能の披露は１日２回各１時間半に限定し、早朝などその他の時間は農業に従事している。これにより「何が何でも観光客から金を得よう」という態度は防ぐことができ、周囲ののどかな田園風景も維持されていくことになる。

・ また村全体としてだけでなく、個人ごとに見ても観光専業者はいないことになる。これは観光事業者と非観光事業者の間の溝をつくらずにすむことにもなる。これは、①で挙げた観光収入の公平な再分配制度が整っていることと併せて、コミュニティ内部での対立を避け、村全体、村民全員で観光客を歓迎する雰囲気づくりにも資することになる。

③地域資源保護に対する現実的だが、ぶれない哲学の存在

・ 前述のように貴州省文化庁文物処処長という文化財保護の立場にいた呉正光氏は、民族文化の消滅の危機を強く感じたがゆえに、村を閉ざして保護を図ることは得策ではなく、積極的に観光開放して民族間の相互理解を促し、民族文化の地位向上を図ることが重要と考えた。
・ その考え方を「開放型保護」と呼び、「死んだ保護はいらない」と言って、生きた人間が伴う文化の持続を第一に考えている。
・ 呉正光氏は、そのため、「絶対に守るべきもの」と「生きた人間が関わる限り時代の流れとともに変化しても仕方がないもの」とを区別して考えている。前者には、服装、環境、建築を挙げている。建築内部の生活空間をはじめ、その他のものは後者に入る。これは一見、乱暴なようだが、放って置けば近代化や漢民族化の流れに飲まれて、民族文化すべてを失ってしまう状況の中で、持続的に守りやすい現実的な防衛ラインであり、民族文化を最大限残す最適解である可能性もある。
・ また、一見緩そうに見える考え方ではあるが、その絶対的な防衛ラインは明確であり、地域資源保護が形骸化することも防いでいる。実際、郎徳上寨で現代的なデザインによる宿泊施設とそこに至る風雨橋の建設を州政府が始めた際には、呉正光氏ら省政府がそれに反対し、工事中止と宿泊施設計画の白紙撤回をさせている。
・ 一方、伝統文化の変化に対する柔軟な姿勢により、新たな文化の創造が見られる例としては、前述の「反排木鼓舞」のほか、我々の視察でも、青曼村では、新しく創造されたツバメの踊り、肇興村では、周辺地域の埋もれていた伝統歌謡を掘り起こし訓練してショーに取り入れるといった事例を見ることができた。

棚田に囲まれた郎徳上寨村の風景

④コミュニティの優れたリーダーの存在

・ ③に挙げた「文化保護に対する優れた哲学」が地方政府側にあっても、コミュニティの側でそれを受け止め、理解し、コミュニティを率いる優れたリーダーと、それを実践していける組織が

なければ、実現できない。そうした点で、貴州省各地の成功した観光地は、優れたリーダーと組織体制を持っているものと感じられた。

・ 郎徳上寨では、村の政治的トップである共産党書記・陳正涛氏と、シャーマンである鬼師・陳玉輝氏の２人の協力と役割分担によるリーダーシップが、村の成功の大きな要因として挙げられている。共産党書記である陳正涛氏は、省政府の呉正光氏の働きかけとその背後にある考え方や経済的メリットをよく理解して村の観光開放を決断し、シャーマンであり村の精神的なリーダーである陳玉輝氏が、当時ほとんど反対していた村人を説得するという役割を果たしている。
・ 共産党支配という“タテマエ”の権力構造の中では、人々は動いたとしても形式的なものに終わってしまう可能性があるが、シャーマンという村の精神的リーダーが働きかけることで、“ホンネ”部分から人々を動かすことができたと考えられる。郎徳上寨では、そうした権力の二重構造のホンネとタテマエが上手く重なるようにそれぞれのリーダーが協調し、村をうまく動かせたことも大きな成功要因と考えられる。

⑤パイプ役の存在（政府と住民、内と外）

・ 観光開発をリードする政府側に優れた哲学があり、地域側にも優れたコミュニティ組織があったとしても、両者を繋ぐパイプが存在しなければ、両者は結びつかなかったと考えられる。
・ 貴州省文化庁文物処処長・呉正光氏と貴州省黔東南苗族侗族自治州副州長・呉徳海氏の２人は、地方政府の要職に就くエリートである一方、少数民族ミャオ族出身として、少数民族住民の代弁者という立場にもあり、中央政府～地方政府～地域住民の間を繋ぐパイプ役として大きな役割を果たしたと言える。
・ 特に呉正光氏は、北京で貴州省のトン族の建築文化を紹介する展示イベントを開催したのを皮切りに、貴州省の少数民族文化を積極的に中央政府にアピールする役割を果たす一方、それまで閉鎖的な環境にあった省内の村々を、観光振興に向けて口説いて廻るという上下両方向への働きかけに積極的な役割を果たしている。
・ また、近年、老漢族の村・天龍屯頭古鎮やトン族の村・肇興村では、地域の文化を理解する村出身の成功者や省内の大学教授が投資家となって観光開発で主導的な役割を果たしている。この場合も、投資家は村の文化や事情を理解しつつ、外の事情や経営面にも明るく、内と外とを繋ぐ重要なパイプ役となっていると考えられる。

３）貴州省の民族観光および研究の課題

・ 貴州省の民族観光は必ずしも成功例ばかりではなく、また成功した観光地でも、今後の課題を垣間見ることができた。また、今回のように約 10 日間で貴州省各地を巡る短い視察旅行の中では、調査自体に大きな限界もあり、調査結果を踏まえた上で見えてきた研究の課題もある。以下に、その主なものをまとめた。

①コミュニティ・ベースド・ツーリズムの適切なスケール

- 今回の視察で概ね成功していると考えられる観光地の人口規模を見ると、概ね 100 戸 500 人前後というところが多かった。
- これに対して、千戸以上の伝統家屋からなる西江鎮は、見るだけの観光地となっている印象であり、コミュニティが観光にうまく関わっているようには見受けられなかった。
- 前節で貴州省の民族観光の成功要因を分析したが、成功の要因としてもう一つ、この集落規模というものが関係しているとすると、この 500 人規模より大幅に大きいコミュニティ単位や、逆に数十人規模のコミュニティでは、観光にうまく関わることが難しい可能性がある。
- 500 人という規模は、コミュニティ全員が互いによく知り合う仲である上限の規模とも推定され、一つのまとまりとして動ける最大限の大きさであるのかもしれない。これより小さければ、まとまった力を発揮しにくい。逆にこれより大きいと、一つにまとめるのが難しく、個人のコミュニティ全体に対する責任感や義務感が薄れてしまうということもある。
- このコミュニティの規模と観光事業の関係は、今後、検証が待たれる研究課題の一つと言える。

②旅行者規模の増大への対応

- 貴州省は、中国の内陸部にあって産業化、近代化の波に出遅れ、経済的な発展も遅れた。また、少数民族観光では雲南省が先にメッカとして発展し、それと比較して貴州省には少数の旅行者しか来訪しなかったことが、逆に伝統文化を良く保持し、資源としての大きな魅力を保ち得ることにもつながった。
- しかし、最近は国内外の注目を集めるようになり、特にこの数年は飛躍的に観光客が増えている。前述のように、これまでは 100 戸 500 人規模の村が、ほどよい程度の数の観光客に対応していたため、一定の村の秩序やホスピタリティなどを保ち得ていたとも考えられる。
- 郎徳上寨では、1 日 2 回しか観光客へ対応しないというスタンスを今後も変えないという発言が村関係者から聞かれたが、それでも、今後、さらに観光客が小さな村に押し寄せ自由に入って来るようになったり、周囲の村がマス・ツーリズムに対応して“老舗”の自分たちよりも多く稼ぐようになったりしたときに、ビジネスチャンス

多くの国内観光客が押し寄せる黄果樹瀑布

を逃すまいという欲求に抗し切れるかどうかはわからない。

・ そうした間近に迫っていると考えられる危機的状況に対して、村や地方政府がどのような対応を見せるのか、あるいはどのように対応すべきなのか、ということは地域の課題であり、今後の研究課題でもある。

③外部資本の流入の影響

・ 郎徳上寨とは別の形の成功例と言える天龍屯堡古鎮や肇興村の観光開発の構造や組織形態については、ヒアリング結果以外に詳しい情報が少ないため、それ自体、今後の研究課題と言えるが、その両者に共通するのは、外部資本による開発が行われている点である。

・ ただし、天龍屯堡古鎮に投資しているのは、村出身の企業家であり、村の組織と緊密な連携を持って観光開発を進めている。一方、肇興村で投資しているのは、外部の漢民族ではあるが、貴陽在住の貴州省出身者であり、元大学教授としての教養もあり、開発にあたって民族文化や景観に十分な理解と配慮を持ち、かつ一定のセンスを持ち合わせていることが見受けられた。

・ しかし、前述のようにこの数年、飛躍的に観光客が増えた貴州省は、多くのビジネスチャンスがあると見られており、今後は省内に限らず、省外、国外からの投資が大幅に増加すると考えられる。

・ そうした場合、民族文化の保護と観光開発を両立させるべく、どのように制限、規制、誘導して、コントロールするのかが、地域と研究、双方の課題である。

④文化の変化の許容範囲

・ 前述のように貴州省文化庁文物処処長・呉正光氏は、資源保護に関して、絶対に守るべきものと、時代の流れとともに変化しても仕方がないものとを区別して考えていたが、一般的にはそのラインは曖昧である。

・ 観光化が進んでくると、観光客が喜ぶと考えて、見栄えが良くショーアップしやすいものを求めて、隣の地域の文化やデザインなどを借用したり、自文化と融合させたりといったことが世界中で見られる。多くの場合、観光客側は、多少の地域的差異は区別ができず、むしろより強調された地域性を印象付けられることになる。

・ こうした現象は、文化の真正性や民族著作権の問題としてマイナス面と考えられることも多いが、その一方で、

漢族資本によるホテル肇興賓館

ドイツ人により伝統儀式などをアレンジして考案されたケチャック・ダンスがバリ島の新たな文化として定着したように、新たな文化創造として大きな意義を持つことがある。

・ 貴州省でも、反排村の伝統的な踊りを、ショーアップを意識しながら力強くアレンジした「反排木鼓舞」が考案され、他地域にも伝えられる過程で、少数民族の各村の若い世代が伝統的な踊りを積極的に習ったり、切磋琢磨して技を磨いたりといった伝統継承の一つの力になっている。
・ また肇興村では、周辺地域の歌や踊りを集めて、若い世代が覚え、訓練されることによって、歌や踊りの質が向上するとともに、観光化されなければ忘れ去られかもしれない伝統文化が、若い世代に継承されていくという効果も見られている。
・ しかしながら、文化の変化の許容範囲のラインが不明確であれば、何でもありの状態に陥るのは時間の問題であり、俗化したり地域性が希薄化したりするなどして、地域の資源価値そのものを失うことになってしまう。
・ それを防ぐためには、伝統的なものを「型」としてきちんと保存・継承した上で、時代や生活スタイルの変化に合わせた新しいものを創造するという役割分担を、明確にすることが考えられる。また、新しく創造したもので稼いだ利益の一部は、古い型の保存・伝承に回すという仕組みが望まれる。
・ さらに、新しく創造したものであっても、そこから伝統的な型がどうであり、それをどうアレンジしたのかということを、文化を継承する者がきちんと説明できるということが、変化の許容範囲のボーダーラインの一つとして考えられる。
・ こうした方法以外にも、文化の変化の許容範囲を考える手段もいくつかあると思われ、今後の大きな研究課題の一つと言える。

⑤旅行社・ガイド側、旅行者側の教養・マナー啓発

・観光地の劣化を招いた責任は、必ずしもすべて観光地側にあるわけではない。旅行者の地域文化を尊重しない態度やマナーは、観光地側や地域住民側に反発や悪影響を与え、ホスピタリティの悪化や商業主義、拝金主義の蔓延にも繋がる。
・また、旅行者を現地に連れてくる旅行社やガイドの側にも、旅行者に必要なマナーや民族文化に関する知識を啓蒙する役割が求められる。
・しかし、実態としては、旅行社やガイドは外部の人間であることがほとんどで、民族観光の対象となる場所の住民である少数民族を一段低く見る傾向があり、その民族文化を尊重したり、マナーを教えたりするどころか、自分たち自身が観光地の住民や文化を馬鹿にした態度を取ることもある。
・もともと貴州省の民族観光振興は、民族文化を、誇りを持って守ることを目的としたものであり、これでは本末転倒になりかねない。旅行者側の教育は日本でも難しい問題ではあるが、貴州省の民族観光の今後の大きな課題の一つと言える。

⑥地域側の観光受け入れのための啓発・教育

・観光客を受け入れた当初は、地域住民が熱烈なホスピタリティを示した村も、その後、観光客の来訪が恒常化して慣れが生じてくると、来訪客に対する新鮮な感覚や歓待の熱が冷めてくる。それによって、ホスピタリティやサービスの質が低下してくることを避けることは難しい。

・郎徳上寨村でも、観光客への村の開放から約 20 年が過ぎ、物心ついたときには観光客を目にしていた世代も成長して、村の観光の主役となるような時期に来ている。また、観光客側の性格も変わり、素朴さを求め、素朴さを失っていなければサービスの質には目をつぶるようなタイプの客から、ある程度のサービス水準を要求するタイプの客へと変化し始めている。

・そうした状況にある場合は特に、受け入れ側では今一度、観光の意義を確認し、観光客との付き合い方や接し方、マナーやルールを確立したり、地域独自の魅力や誇りとは何かを再確認したりするなどして、地域のホスピタリティやサービスの質の維持・向上を図る必要がある。

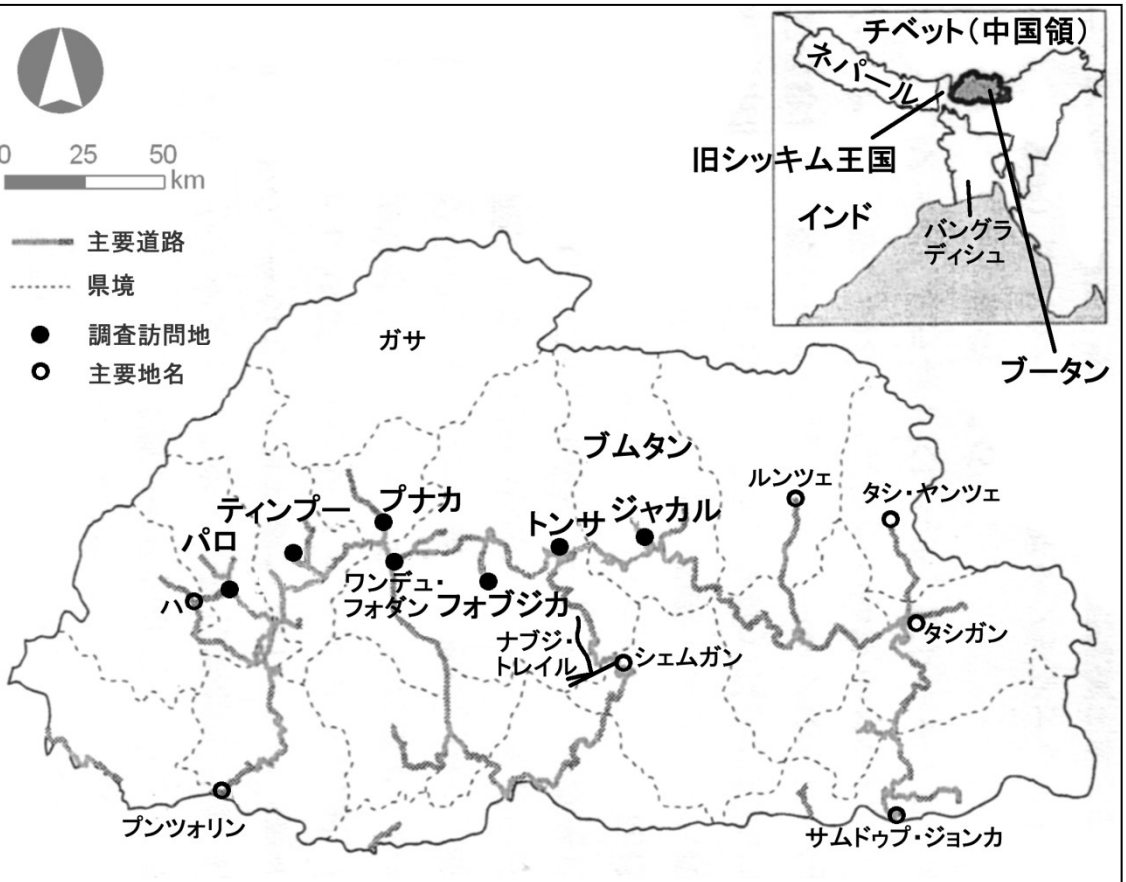
・また、地域資源の価値を失わず、旅行会社等の外部資本にも頼らずに、自律的な観光を持続していくためには、観光客を受け入れる様々な具体的なノウハウを地域側で身につけることが望ましく、特に自分たちの地域を地域住民自身がガイドし解説することで、真に地域の魅力を観光客に伝えることができる。

・そのためには、地域住民に対する啓発・教育活動が必要であり、観光には直接関係しない一般住民や子供も含めて、すべての住民が観光の意義を理解し、観光客をもてなす雰囲気を醸成して、ホスピタリティを維持するとともに、外部ではなく住民の中からガイドを養成したり、ツアー・オペレーター組織を立ち上げたりすることが望まれる。

２．ブータン王国編

（1）ブータン王国 調査研究対象地の概要

1）ブータン王国の位置と調査訪問地



パロ・ゾン（ゾンは、地域の行政と宗教の中心）

朝靄に浮かぶトンサ・ゾン遠景

2）ブータン王国の概要

項目	内容	備考
正式国名	ブータン王国	
政体	立憲君主制	王政から 2008 年に移行
元首	シグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王	2007 年即位、2008 年戴冠式
首都	ティンプー	
面積	38,394 平方 km^2	九州の 0.9 倍の大きさ
位置	北緯 26 度 45 分～28 度 15 分 東経 88 度 45 分～92 度 10 分	
標高	海抜 100m～7,561m	最高峰はガンカー・プンスム
地勢	北部：ヒマラヤ高地（標高 3,000m 以上） 中部：丘陵と谷間（標高 1,200～3,000m） 南部：南部は山麓と平野（標高 1,200m 未満）	
森林比率	72.5％	
気候	北部：ヒマラヤ山脈の高山・ツンドラ気候 中部：モンスーン気候 南部：亜熱帯性気候	
人口	672,425 人	2005 年国勢調査
人口密度	17.5 人／km^2	北海道の人口密度の 1/4
民族構成	2/3 がチベット系、1/3 がネパール系 チベット系は東、中央、西の３系統がある	
宗教	チベット仏教ドゥク派が国教。東部はチベット仏教ニンマ派、南部はヒンズー教も多い。	
通貨	１ニュルタムＮｕ＝約 2.8 円	2007 年 11 月
言語	公用語：チベット語系のゾンカ語 準公用語：英語、ネパール語 国内に 10 以上の言語があるとされる	
時間帯	ＵＴＣ＋６時間（日本時間－３時間）	
ＧＤＰ	9 億 8,300 万米ドル（2006 年） 1 人あたり 1,254 米ドル	International Monetary Fund, World Economic Outlook Database, 2007
産業構造	第 1 次 25％ 第 2 次 37％ 第 3 次 38％（GDP 比） 第 1 次 63％ 第 2 次 6％ 第 3 次 31％(就業人口)	2006 年 米 CIA『The World Factbook』
主要産業	農業（米、とうもろこし、ばれいしょ、小麦、サトウキビ、オレンジ）、水力発電	
主要貿易相手国	輸出：インド 75%、香港 16%、メキシコ 5% 輸入：インド 69%、日本 9%、ドイツ 4%	2005 年
対外債務	5.93 億米ドル	2006 年 米 CIA『The World Factbook』
政府財政規模	約 360 億円	2005/2006 年度歳入 うち 48％が海外援助

3）ブータン王国の観光の概要

①ブータンの観光制度

＜ブータンの観光開放の流れ＞

・ ブータンの観光産業は、初めて海外観光客に門戸を開いた 1974 年に開始された。2002 年から 2007 年の第九次五ヵ年計画では、観光が民間産業の重要な鍵を握ると位置づけされている。現在では、観光が水力発電に次ぐ第２位の輸出産業となっている。

・ 観光開放当初は、年間の入国者数を 5,000 人に制限していたが、1996 年に実際の入国者数がその枠を超えてもその制限枠は適用されず、1999 年にこの入国者数枠自体が撤廃された。

・ 1987 年には、外国人の登山が禁止され、1988 年には、寺院、聖地、聖山など宗教的な場所への外国人の立ち入りを禁止した。実際には、各地のゾン（県庁兼県の中心的僧院）や一部の寺院への立ち入りは許可されており、事前に特別許可を申請すれば入場できる場合もある。

・ 当初、観光事業はすべて観光公社ＢＴＣ（Bhutan Tourism Corporation）によって行われていたが、1991 年、観光事業への民間参入が許可され、1992 年にはＴＡＢ（Tourism Authority of Bhutan）が監督機関として設置された。その後、2000 年にはブータン政府観光局（Department of Tourism）と改称されて現在に至っている。

・ なお、2000 年には、ブータン政府観光局により促される形で、民間の旅行業者の団体であるブータン旅行業協会ＡＢＴＯ（Association of Bhutanese Tour Operators）が設立され、国政に対して観光業界の声を取りまとめる役割を担うとともに、観光開発やマーケティングなどの活動を行っている。また、同年、政府、ＡＢＴＯ、国営航空、民間セクター等の代表からなる観光開発委員会が設置された。

・ 観光事業の民営化以降、旅行会社は 35 社に制限されていたが、1998 年に自由化され、1999 年に旅行会社登録に必要だった 2,500 ドルの供託金制度が解除されて以降、大きく増加し、2001 年に 94 社、2004 年に 169 社、現在では約 300 社が乱立している。観光客数の伸びは限られているため、旅行会社のうちかなりの割合が、設立されたもののほとんど業務を行っていないと見られている。実際に業務を

８世紀に建てられた寺院・ジャンパ・ラカン

行っている旅行会社もその規模は小さく、平均では 10 人程度の従業員からなる。

ドゥルク・エアの航空機エアバス 319 型

＜公定料金制度＞

・ ブータンでは、観光の自然環境や伝統文化に対するマイナスの影響を最小限にとどめるため、“ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ”政策を採っている。その具体的手段は、ブータン内の旅行業者を通じて比較的高く設定された公定料金を、旅行者は前もって支払って手配することを義務とした制度である。

・ 旅行者は、多少の変更は行えるが旅程はあらかじめ組んでおく必要がある。旅行者が空港に着くとガイド、ドライバー、車が待機しており、出国まで行動を共にする必要がある。2001 年以降は、旅行者は片道の航空機使用（国営のドゥルク・エア）が義務付けられている。

・ 公定料金は１泊あたりで設定され、その中に、宿泊、食事、移動（自動車やドライバーの費用）、ガイド、入場料などが含まれる。公定料金は下表のように変遷しており、1997 年以前は、カルチュラル・ツアーとトレッキングで料金設定が異なっていた。

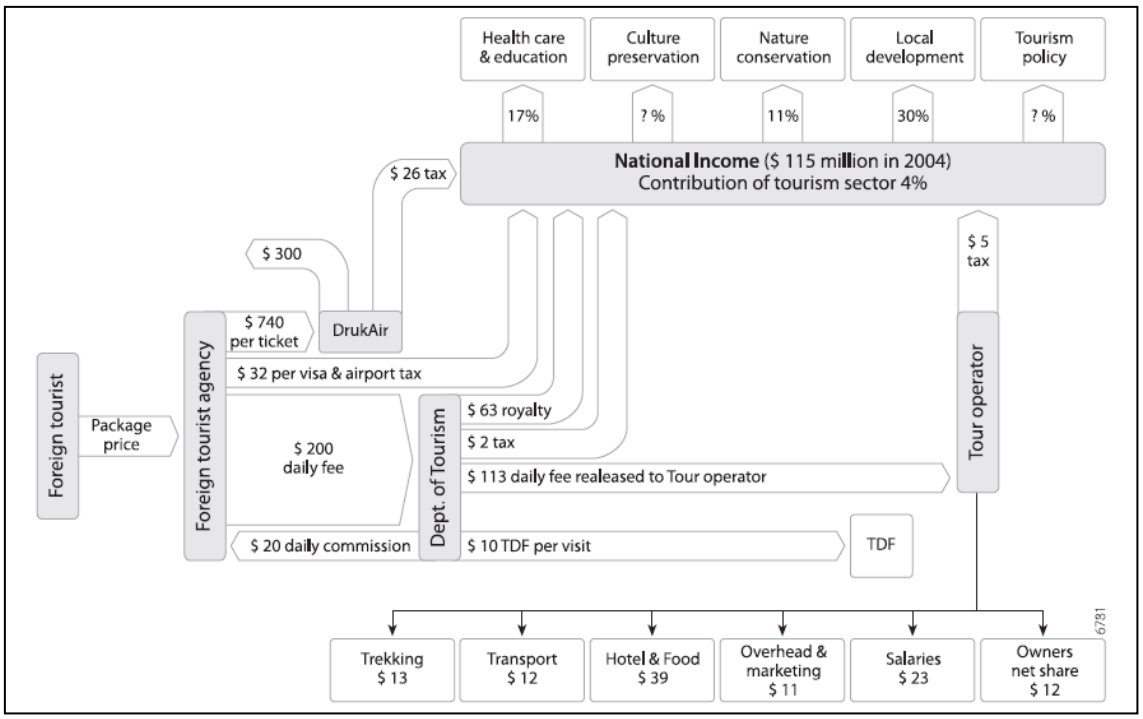
公定料金の変遷（１人１泊あたり米ドルで設定）

	カルチュラル・ツアー		トレッキング	
	シーズン	オフシーズン	シーズン	オフシーズン
1986 年	130	90	85～130	85～130
1995 年	200	200	120	120
1997 年	200	200	カルチュラル・ツアーとトレッキングの料金区分なし	
1999 年	200	165		
2008 年	220	185		

※1991 年以降、団体旅行以外も認められたが、２名以下での参加には追加料金が発生する

・ 公定料金は、我々の調査旅行時は、１人１泊 200 ドルであった。次のページの図の参考資料の調査によると、この 200 ドルのうち、まず 10％が海外の旅行業者のコミッションとして差し引かれる。35％は、政府へのロイヤルティや税として引かれる。また旅行者１人あたり 10 ドルが観光開発基金ＴＤＦ（Tourism Development Fund）のために差し引かれ、これはＡＢＴＯによって運営される。

・ 残りの約 53%にあたる 113 ドルが、旅行業者に入ってくることになり、そこから様々な経費が支払われる。同図の参考資料の調査では、そのうち宿泊費及び飲食費が 39 ドルと最も大きな割合を占め、次いで従業員の給与が 23 ドルとなる。



ブータンの観光収入の配分と流れ

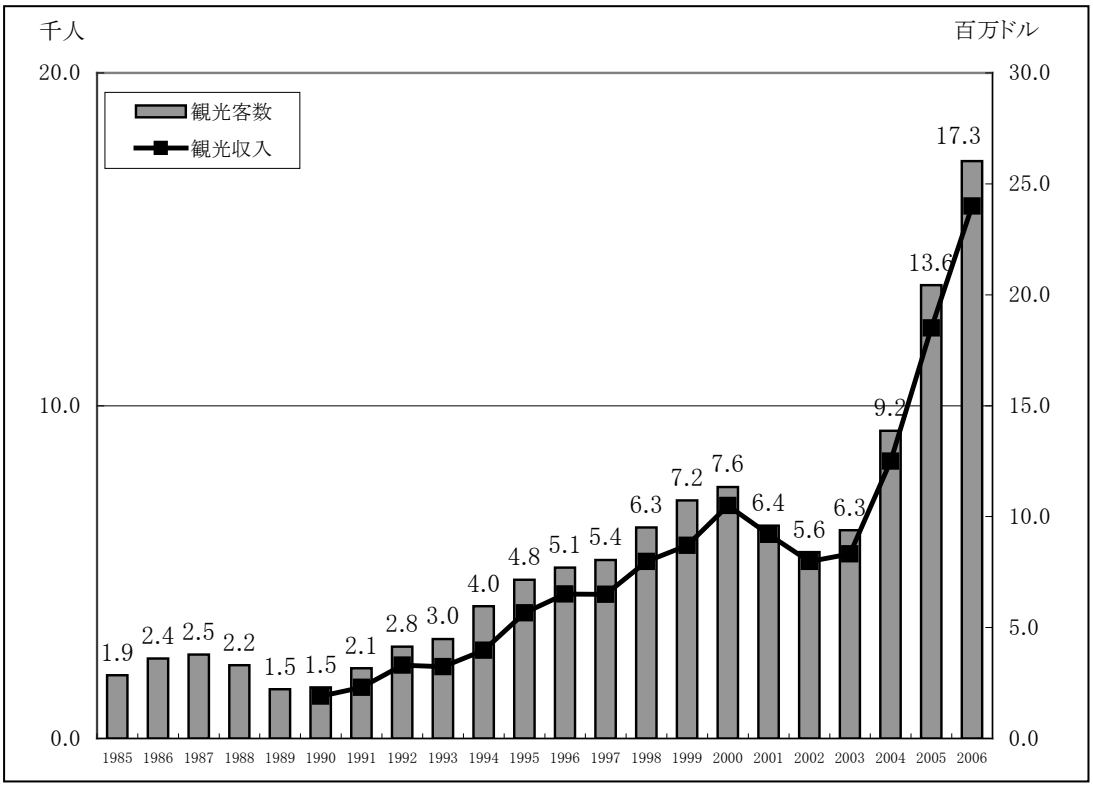
資料：Chhewang Rinzin, "On the Middle Path - The Social Basis for Sustainable Development in Bhutan", Koninklijk Nederlands Aardrijkskundig Genootschap, Copernicus Institute for Sustainable Development and Innovation, 2006

・ この公定料金制度により観光開放に一定の枠をはめる背景となったのは、ネパールにおける観光開放の負の影響を見たことによると考えられている。すなわち、ネパールには、伝統文化を尊重せずグローバルな思想を持ち込むヒッピーや、経済的にも貢献しないバックパッカーが数多く入って来ることによって、伝統文化の喪失や自然環境の破壊など観光のマイナス面だけを残していったという認識がブータン人にあるということである。それに対して、高い料金設定を行うことにより、安易な気持ちで訪れるヒッピーやバックパッカーを排除し、ブータンの伝統文化や自然環境を尊重してくれる、どうしてもブータンに来たい旅行者のみが訪れるようにするという狙いである。

②ブータンの観光の状況

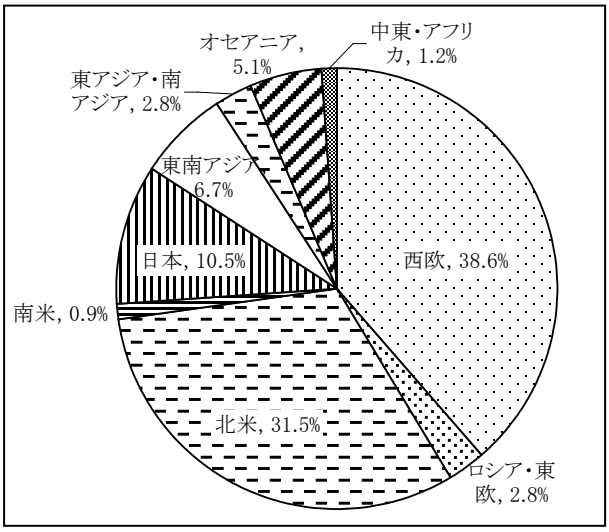
・ ブータンへの観光客の数は、1991 年の観光産業の民営化以降、大きな伸びを示しており、1990 年にはわずか 1,500 人だった観光客数は、2000 年には 7,600 人

と約５倍に増えている。その後、2001～2002 年は、アメリカの９１１事件の影響で落ち込むが、2003 年からは再び急増し、2006 年には、17,300 人となっている。

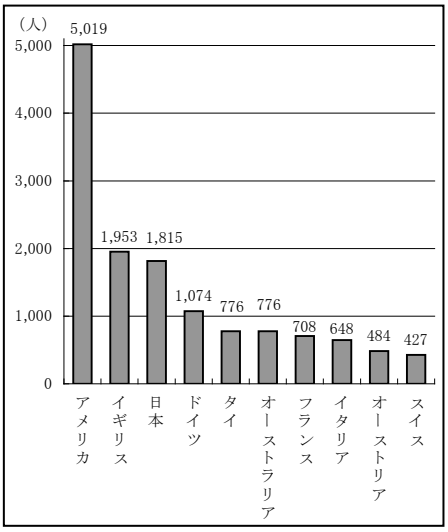


ブータンへの海外観光客数の推移（インドは海外観光客から除外されている）

資料：ブータン政府観光局等



ブータンへの観光客の発地地域別割合

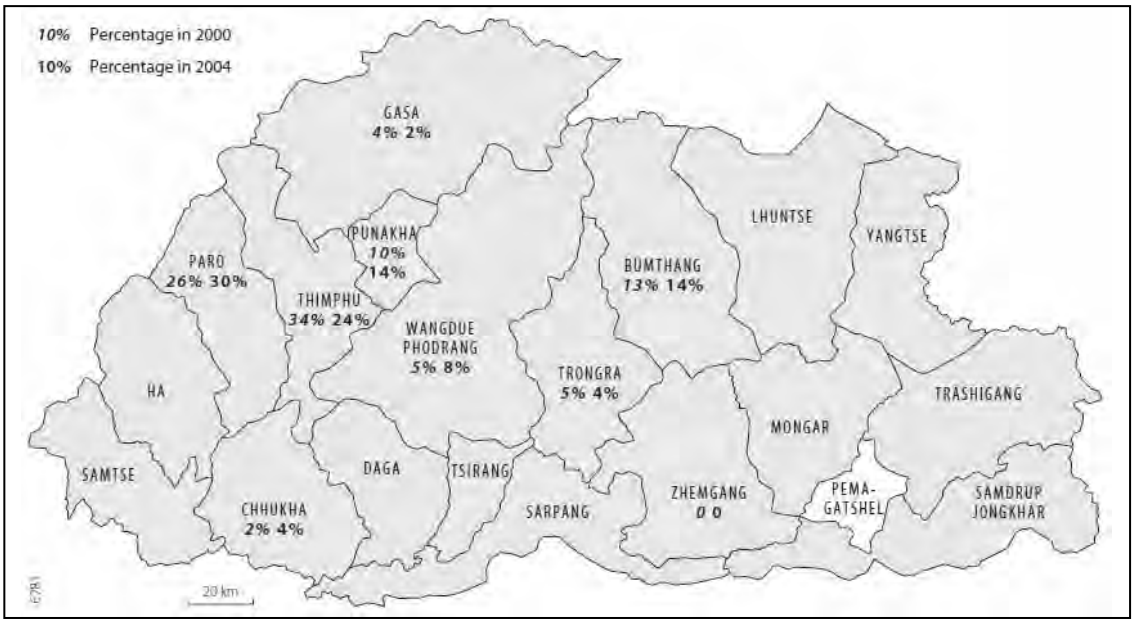


国別人数上位 10 ヶ国（2006 年）

資料：ブータン政府観光局　　※インドは海外観光客から除外されている。

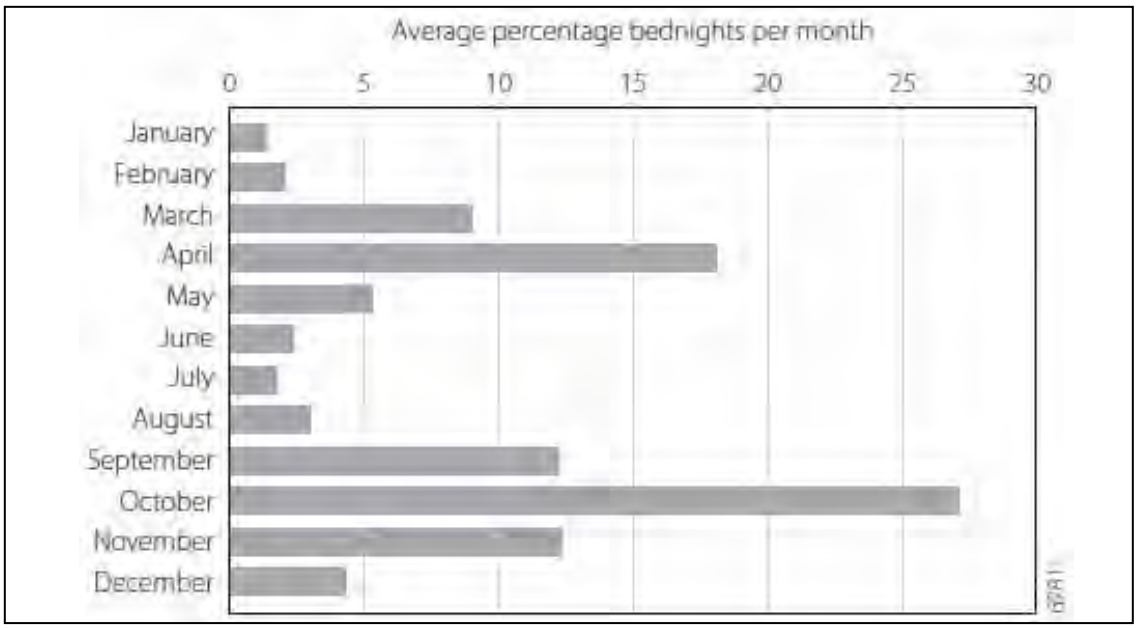
- この近年の急増の要因としては、ホテル開発をはじめとした観光インフラの整備、マーケティング、ツアーの新商品開発、世界の他地域でのテロの脅威の増大などとともに、2004 年に国営ドゥルク・エアが、それまでの２機の航空機（BAe146-100、席数 90）に加え、新たに２機の航空機（AIRBUS319、席数 180）を導入したことも考えられる。
- 2004 年には、シンガポールの２つの外資グループ「アマン・リゾート」と「ウマ・リゾート」の投資が受け入れられ、高級リゾート施設の整備が開始されている。
- 観光客の発地別割合を見ると、ヨーロッパが４割、北アメリカが３割、日本が１割で、先進国からの観光客でほぼ８割を占めている。国別に見ると、アメリカがトップで、２位のイギリスの倍以上の約５千人となっている。日本は以前は２割以上を占めていたが、景気低迷もあり第２位の座をイギリスに明け渡して第３位で約 1,800 人となっている。上位 10 位は、ほとんど欧米、オーストラリア、日本の先進国が占めているが、ブータンの皇太子（現国王）訪問によりブームが巻き起こったタイが、直接航空路線で結ばれていることもあり、第５位に入っている。
- なおインド人については、公定料金制度の範囲外であり、ブータンへの入国は無料で、自家用車などで自由に行動している。その数は年間約３万人と推測されている。
- ブータンの国土は、急峻な地形がほとんどで、道路整備も十分には進んでおらず、国内の移動には長時間がかかる。さらに、国を東西に横断する道路は主要幹線となっている国道１号線のみしかなく、観光客の入国地点は、国際空港があるパロか、インドと接する南東部の町プンツォリンに限定されているため、一筆書きのような周遊旅行が行いにくい。パロから入国した観光客が、東ブータンにも行くとするならば、移動だけで片道３日以上かかる道を折り返すか、出国のみ許された南東部のサムドゥプ・ジョンカに抜けるしか方法がない。観光しながら移動するならば、どんなに駆け足の旅でも１週間や 10 日間は必要となってしまい、十分な観光をするのであれば２週間以上は必要となる。
- このため、下図に見られるように、観光客は国際空港があるパロやティンプーに集中し、両者で宿泊数の過半数（2004 年：54％）を占めている。時間的に余裕がある観光客でも、パロから入って、国道１号線沿いにティンプー、プナカ、ワンデュ・フォダン、トンサを経由して、見所が多い中央ブータンのブム

15 世紀に再建されたブムタン地域の寺院チャカル・ラカン



観光客宿泊数の地域別分布（2000 年、2004 年）

資料：Chhewang Rinzin, "On the Middle Path - The Social Basis for Sustainable Development in Bhutan", Koninklijk Nederlands Aardrijkskundig Genootschap, Copernicus Institute for Sustainable Development and Innovation, 2006



宿泊数の月別分布（2000～2004 年平均）

資料：Chhewang Rinzin, "On the Middle Path - The Social Basis for Sustainable Development in Bhutan", Koninklijk Nederlands Aardrijkskundig Genootschap, Copernicus Institute for Sustainable Development and Innovation, 2006

タンで折り返すことが多いとされるが、これらの地域の宿泊数を合計すると、実に94％（2004 年）を占める。

- 西ブータンや中央ブータンとは、言語も文化も自然環境も異なる東ブータンを訪れる観光客は、統計に表れないほど少ないが、このことはブータン政府自体も課題として認識しているようであり、東ブータン地域での空港整備が検討されている。
- 宿泊数の月別分布では、寒さが厳しい１～２月や雨季である６～８月は非常に少なく、気候や景色が美しく、ツェチュと呼ばれる地域の祭りが多く開催される３～４月の春と９～11 月の秋の時期に集中している。この時期は、旅行業者、宿泊業者ともにさばききれないくらいの客を迎えており、季節変動の平準化が大きな課題となっている。

③ブータンにおけるコミュニティ・ベースド・ツーリズム

- 2002 年～2007 年を対象とした第九次五ヵ年計画で優先的な経済開発分野と位置づけられた観光に関して、以下の点が課題とされた。
  - ・コミュニティの参画の欠如
  - ・利益配分のムラ
  - ・新しい旅行商品（トレッキング・ルートなど）
  - ・季節格差
  - ・民間による投資がないこと
  - ・宿泊施設のレベルのムラ、低さ
  - ・政策ガイドラインや関連法制度の欠如
- 政府は、こうした課題を解決し、かつ社会経済的な利益を特に地方に住む人々を中心に広く国民にもたらすための持続可能なコミュニティ・ツーリズムを振興することを、目標とした。この目標のため、政府観光局、自然保護課、ブータン旅行業協会（ＡＢＴＯ）が連携して、オランダ開発機構（ＳＮＶ）の協力を得ながら、コミュニティ・ツーリズムのパイロット・プロジェクトを 2006 年から開始した。
- このプロジェクトは、ブータンでも最も貧困な地域の一つの中に位置し、政府が進める自然環境保全を目的とした森林の利用規制と、人口増加により増大する地域住民の森林利用が大きくバッティングし始めているジグミ・シンゲ・ウオンチュック国立公園を対象地としている。そこで、コミュニティが運営するトレッキング・トレイルを整備し、地域住民が森林利用に頼らないですむような収入源を確保することを目指した。それによって、貧困を改善するとともに、人口増加で森林伐採を伴う農地開拓が加速するのを防ぎ、生態系や文化の保全にも貢献すると考えられた。
- 2004 年、プロジェクト・チームは、ナブジ・トレイルの提案書を作成し、115,000 米ドルの総費用のうち地球環境ファシリティ（Global Environmental Facility）から 50,000 米ドルの支援を得て、2005 年からプロジェクトを開始した。

・ このプロジェクトは、以下のことを目的としている。
  ・トレイル沿線のコミュニティによって計画・運営され、トレッキングとコミュニティ・ツーリズムのために利用されるナブジ・トレイルを整備する。
  ・自然資源、エネルギーおよび廃棄物の管理に関する認知拡大や、地域コミュニティ、旅行者、旅行業者それぞれに対する文化的意識の啓発を行う。
  ・観光商品とサービス、小規模起業の強化も含め、観光マーケットの連関性を強めることをサポートする。
・ トレイル沿線の各村では、コミュニティ・キャンプサイト、文化プログラム、食事提供などを通じて稼げるようになる。また、各村から交代で人手を出して、ツアー客の荷物の運搬、料理、ガイドなどに従事したり、トレイル、キャンプサイト、展望ポイントなどの整備や維持管理、薪、工芸品、野菜やその他農産物などを通じて、収入を得ることができる。

ナブジ・トレイルの観光収入の予測(米ドル)

活動	1 人あたり	100 人	300 人	600 人
キャンピング	$2.33	$233.00	$699.00	$1,398.00
村のガイド	$0.23	$23.30	$69.90	$139.80
文化的な催し	$1.16	$116.00	$348.00	$696.00
食事	$2.33	$233.00	$699.00	$1,398.00
ポーター	$4.66	$466.00	$1,398.00	$2,796.00
キッチン・ガーデン	$1.16	$116.00	$348.00	$696.00
薪	$1.86	$186.00	$558.00	$1,116.00
1 村あたりの収入		$1,373.30	$4,119.90	$8,239.80

参考："Community tourism along the Nabji Trail in the Jigme Singye Wangchuck National Park: An example of sustainable rural tourism development in Bhutan" John Hummel, Netherlands Development Organisation SNV, 2007

・ 観光収入の一部は、村の観光基金（Village Tourism Fund）としてプールし、観光に直接関係しない例えば子供や高齢者のために使われることになっている。この基金の管理も、村ごとに各村自身が行う。
・ 初めにパイロット・ツアーが行われ、その結果から、このトレイルの将来の収入が試算された。それによると、年間 100 人のツアー客が訪れると、1 村あたり年間 1,400 米ドルの収入があり、1 世帯あたり年間 40 米ドルの収入増が見込まれた。年間 300 人では、年間 4,000 米ドルの収入となる。現状では 1 人 1 日あたり 1 ドル以下の生活しているこの地域では、かなりの収入増と言える。

④国民総幸福ＧＮＨと自然・文化保護政策の背景

・ ブータンの観光資源の魅力が保たれ、その魅力を活かす方向で観光開発がなされているのも、経済開発を最優先とせず、自然保護や文化保護に力を入れた政策を採っていることが、その大きな要因となっている。こうした保護政策のバックボーンとなっている哲学が、国民総幸福ＧＮＨ（Gross National Happiness）である。

・ ＧＮＨは、ジグメ・シンゲ・ワンチュク国王（当時。2007 年に譲位）が、1976 年、スリランカ・コロンボにおける第 5 回非同盟諸国会議に出席した際、「国民総幸福量（ＧＮＨ）は、国民総生産（ＧＮＰ）よりもはるかに重要だ」と発言したことが発端とされる。前国王はこれにより、経済発展や物質的繁栄を国の開発の最高目的や「豊かさ」の指標とする国際的認識に異議を唱え、代わりに国民の幸福を国家の目的とし、「豊かさ」の指標と見なすべきだとする概念を提唱したとされる。

・ 1998 年には、ジグミ・ティンレイ首相（現在も再び首相）が、国連開発計画（ＵＮＤＰ）のアジア太平洋地域会議において、ＧＮＨの構成要素として以下の「４つの柱（Four Pillars)」を提唱した。

○持続可能で公正な社会経済発展 ○環境保全 ○文化の保全と振興 ○良いガバナンス

・ ここで挙げられているように経済発展も、四本柱の一つとして位置づけられており、ＧＮＨは、必ずしも経済開発を放棄するものではない。しかし、自然保護や文化保護も国民の幸福を構成するのもとして、ここではっきりと位置づけられている。

・ その後、ＧＮＨの概念は、ブータンのすべての政策や計画文書、法案やさまざまな活動計画に内包されるようになったとされ、2004 年には国立の公式研究機関であるブータン研究センターで、ＧＮＨをテーマとしたセミナーを開催したり、80 篇を超えるＧＮＨに関する論文が発表されたりした。ＧＮＨは、国際的な関心を集めつつあり、世界各国でもＧＮＨに関するセミナーや、評価・計量のための議論が行われている。

・ この幸福を謳ったＧＮＨの概念は、一見、理想主義を追及したもののようにも見えるが、実際にはそうではない。ブータン政府の刊行物に、はっきりと次のように書かれている。

ブータン人にとってＧＮＨは国家としてのブータンの生存を左右するものだ。ブータンはあまりに小国であり、将来にわたって軍事面でも経済面でもとるに足らない存在でしかあり得ないからだ。ブータンが生き延びられるとすれば、それは他のどの国とも明確に異なる国家像、アイデンティティを力とする以外にないであろう。グローバリゼーションの波は、ブータンのアイデンティティを驚かしているが、ＧＮＨこそ、その伝統的アイデンティティを現代に即して翻訳したものなのだ。 『雷龍の王国ブータン』ブータン政府観光局、2005

新しい民族衣装のデザインも行っている
伝統技芸院

絶えず水害の脅威にさらされている
プナカ・ゾン

- また、研究者の中には、「もし開放体制の中でＧＮＰ成長を国家目的とすれば、小国ブータンの経済はたちまちインド資本とネパール労働力の世界にとって代わられることになろう。経済成長が自己目的化すれば、あっという間に豊かな森林は伐採され、隣国ネパールと同じく山という山は禿山になり、絶えず山崩れ、地滑り、土壌流出、岩石露出、そして洪水、砂漠化という災害の世界（多くの南の世界がそのような情況にある）にブータンが変身してしまうにちがいない」（西川潤「ブータンに見る『国民総幸福』－理論と実際」アジア太平洋討究(8),17～28,2005.10）と指摘する者もいる。つまり、ＧＮＨは、世界の中でブータンという小国が軍事的にも経済的にも侵略されず、国土や文化を守り、自立自尊を図るための戦略として創造されたものと見ることができる。
- ＧＮＨの四本柱の「ガバナンス」は言うまでもないが、「自然保護」と「文化保護」についても同様に、ブータンの国を守る戦略が背景にあると考えられる。
- ブータンとは宗教的にも文化的にも密接な繋がりがある北隣のチベットは 1951 年に中国の一部に編入され、また、ブータンの王室と血縁関係もある西隣のシッキム王国は 1975 年にインドの一部となっている。こうした状況下、ブータンは、独立を保つために、チベットやシッキムと自国の違いを強調し、独立国してのアイデンティティを強く確立する必要性に迫られたのである。
- そのため、婚姻法（1980 年）、新市民権法（1985 年）、センサス（1988 年）などにより、それまで曖昧なところがあったブータン人の定義をまず確立し、さらには、1989 年の国王布告により、民族衣装の着用、国語ゾンカ語の習得、伝統的礼儀作法の遵守を義務化して、ブータン人の文化的アイデンティティの確立を図ったのである。
- また、海抜 100ｍから 7,500ｍに及ぶ急峻な国土とわずか 70 万人の人口しかないブータンでは、自前で大規模な産業を興せる可能性はほとんどない。安易に外部に

経済的な依存をすると前述のようにインド資本とネパール労働力の席捲を許し、ネパール人の大量流入で民主化を要求された果てに崩壊したシッキム王国と同様の運命を辿りかねない。そうならないためには主力産業たる水力発電の保持は必須条件であるが、それは同時に国土の７割以上を占める森林を堅守すべきことを意味するのである。

・ 外国からの経済援助も、ブータンのような小さな発展途上国においては、重要かつ大きな歳入であるが、これも安易に受け入れれば、援助国の様々な要求やコントロールに抵抗することは難しく、自立自尊を危うくする。そこで、ブータン政府は、ブータンの自然環境は地球全体の財産であると位置づけ、『「地球社会のための環境保全政策」によってブータンの経済発展は犠牲になっており、国際社会はその代償を支払うべきだ」との論理を展開した（宮本万里「現代ブータンにおける森林政策の変遷と環境保全体制の成立」アジア・アフリカ地域研究(4-1),86～110,2004)。実際にブータンの環境保全政策のアピールと援助の呼びかけを始めて以来、外国からの援助額が飛躍的に増大し、現在では国家歳入の約半分を占めるに至っている。

・ こういった文化保護と自然保護の戦略により、自らの国際的なアイデンティティと名誉ある地位を確立し、国家の独立を図るとともに、国際援助を引き出しながらも、援助する側と受ける側の対等な関係を構築し、自立自尊を図っているのである。

パロの町

（２）ブータン王国 現地視察調査の日程

調査旅行の期間：2007 年 11 月 23 日～12 月 5 日
参加者：北海道大学観光学高等研究センター　石森、山村
　　財団法人日本交通公社　　小林、緒川
ガイド・通訳：シデ・ブータン・ツアー・アンド・トレック社 代表 ジュルミ・ツェワン

■旅程表

日付	旅程
11 月 23 日（金）	成田空港→バンコク
24 日（土）	バンコク→パロ（パロ・ゾン、木造屋根付き橋等）→ドチュ・ラ峠（108 基の仏塔）→ワンデュ・フォダン
25 日（日）	ワンデュ・フォダン→トンサ→Zungnye（織物の村、土産物店）→ジャカル
26 日（月）	ジャカル→ナラカール（地元の祭りツェチュ）→ジャカル（市街、ワンデュチョリン宮、ワンデュチョリン・リゾート、アマンコラ・ブムタン等）
27 日（火）	ジャカル（チャカル・ラカン、ジャンパ・ラカン、タムシン・ラカン等古い寺院、新しい寺院であるナムケ・ニンポ・ダツァン、スイス人経営チーズ工場、ジャカル・ゾン）→トンサ
28 日（水）	トンサ（トンサ・ゾン/トンサ県知事インタビュー）→フォブジカ（ツルセンター/インタビュー）
29 日（木）	フォブジカ（ゲストハウスのオーナー インタビュー、アマンコラ・ガンティ インタビュー、ガンテ・ゴンパ）→プナカ（アマンコラ・プナカ、棚田等）
30 日（金）	プナカ（プナカ・ゾン）→ロベサ（子宝寺であるチミ・ラカン）→ドチュ・ラ→ティンプー（現地旅行会社インタビュー等）
12 月 1 日（土）	ティンプー（伝統技芸院、ハンディクラフト・エンポリウム インタビュー、郵便局、週末市場、製紙工房、政府文化局建築遺産保全課インタビュー、民族歌舞団、現地旅行会社インタビュー等）
2 日（日）	ティンプー（ドゥプトプ尼僧院、ターキン動物園、アーチェリー場、アマンコラ・ティンプー、ブータン旅行業協会事務局長インタビュー、タシチョ・ゾン）
3 日（月）	ティンプー（王立自然保護協会本部インタビュー、政府観光局長インタビュー）→パロ（外資系リゾートであるウマ・パロ及びアマンコラ・パロ、国内資本リゾートであるジワ・リン、ブータン王国元首相インタビュー）
4 日（火）	パロ→バンコク（空港内にて現地研究会実施）
5 日（水）	バンコク→成田空港

（3）ブータン王国調査 研究会

1）現地研究会

日時：2007 年 12 月 4 日火曜日 19:00～21:00
場所：バンコク空港内レストラン
出席者：北海道大学観光学高等研究センター長　石森 秀三 教授
北海道大学観光学高等研究センター　山村 高淑 准教授
財団法人日本交通公社　小林 英俊 常務理事
緒川 弘孝 客員研究員

〇“関係性の中にある幸福”と観光戦略

石森：今回の調査の最後に、ジグミ・ティンレイ元首相にお会いしましたが、特に面白いと思ったのは、有機農業についてですね。オーガニック・ツーリズムというのもありだと思いました。パッケージで現地の人と交わらないような無機質的なものとは違う観光という見方もできますね。彼は、オーガニック・カントリーを目指すというようなことも言っていました。

小林：中国とインドが経済発展してきたことを踏まえ、自分たちの立場を違う方向で活かしていく戦略でね。“ブータン印のオーガニック”でモノを売りつつ、同時に人を呼ぼうという発想がすごいと思います。日本の中でも似たような事例はあるけれど、国を挙げてやろうというのはすごい。

石森：有機農法がなぜ良いのか。当然、健康に良い…

小林：それから仏教の教えにのっとっている。戦略性があると思った。個別のモノを売りにするのではなく、「そういう国だ」ということを売り物にしようというところが凄いなと。他の国では、モノとか場所とかで売るのが普通。

山村：観光局で頂いたパンフレットを読んでいたのですが、非常に良いことが書いてありました。「幸せとは何ぞや」というくだりです。私も開眼したのですが、「各個人が他者の幸福に貢献できるということ。それから、我々各人が自分の幸福を実現するためには他者の助けが必要であるということ。これらの権利をまず大事にしなければならな

ブータンの田園風景（ロベサ村）

い」とありました。このことが、先程話題に出た“オーガニック”という概念にも繋がり、観光におけるホストとゲストの関係性みたいなものに繋がる、というイメージなんです。

小林：個人の単体ではなくて、関係性の中に幸福があるんだ、としているところが面白いですね。

山村：「自分個人の幸せを実現するためには、他人が必要である。他人の力が必要である。」というところが、すごく良いなぁと思いました。

小林：持ちつ持たれつの関係で、人を助けることが幸せであるという…

石森：元首相がおっしゃっていた都市と農村の関係もそうですね。

小林：あれも凄い考えですね。都市と農村をセットで考えるんですよね？日本もそれを考えていかないといけませんね。

○ＧＮＰとＧＮＨ

石森：元首相は良くわかっていますよね。都市にばかり人が来てはダメなんだ。農村が如何にプライドを持てるか、自尊心を持てるか考えなければいけない、と。そう考えると、現代の日本人にとってプライドとは何ぞや、と思いますね。プライドをかなぐり捨てているところがありますよね。

小林：特に“観光におけるプライド”について考え直さなければいけませんね。

山村：昨日、元首相がおっしゃっていた「センス・オブ・プライド」ですよね。

石森：ブータンの人は毅然としていますよね。

小林：経済的な面以外では自分たちは負けていないんだと。あらゆるところで言い続けているところが凄いですね。

山村：しかも我々から見ても、貧困があるような感じがしませんよね。

緒川：ストリート・チルドレンとかいないですしね。

小林：「心が貧しい」ということがない。モノが「ある」「ない」という基準だけじゃない。そういう意味での貧しさというのを感じないですね。

石森：日本は 40 年前から高度成長に入って、良く考えずにいろんなものをかなぐり捨てちゃいましたからね。

緒川：ブータンは、ＧＮＨ（国民総幸福）だけではなく、１人当たりＧＤＰ（国内総生産）も南アジアでは上位ですよね。実際、生活のスタンダードも高いですし。

ティンプーの市場の様子

石森：豊かな土地なんですね。
小林：徹底的に貧しい人が、ブータンにはいない。
山村：ＧＮＨの四つの柱のうちの一つに、明確に「経済発展」を入れていますから、そこにＧＮＰも含まれる。ということは、ＧＮＨは、ＧＮＰ（国民総生産）などの上にある包括的な概念ということですね。それがすごいですね。
小林：「ＧＮＰではなくてＧＮＨ」とよく言われるんですが、そうではないんですよね。
山村：そうなんです。“オルタナティブ（ＧＮＰの替わりのＧＮＨ）”という概念ではないんですよね。
小林：先にあるものがＧＮＨだということですね。それが今回わかって、すごいなと思いました。ＧＮＰを伸ばすのは、ＧＮＨを満たすための手段でしかないんだと。
石森：日本は、ＧＮＰ・ＧＤＰについて相当のレベルを達成した。でも、今、目標を失ったわけです。それでこの先何なんだと迷っている。だから我々も、今、何となくＧＮＨに惹かれているわけです。ＧＮＨは、ＧＮＰのオルタナティブな概念ではない。今、ここで頭を切り替えられれば良いのですが、やっぱり、まだ日本はＧＮＰを見ていますね。
小林：日本は、まだまだそちらばっかりです。せっかく成熟社会と言ってるのだから、そのことの意味をもう一回しっかり考えることが大事だと思いますね。

○文化保護策が国防策

石森：日本では、道路特定財源をあくまでも全部、道路に使い切ると言い張っている政治家がいる。「まだ足らない」と。この前、ミシュランの東京版ができたけれど、あれは要するに、旅行をしてでも食べに行く価値がある店を紹介するものですよね。それを見て、自動車旅行を奨励して、結果としてタイヤの消費を促すというもの。それと併せて考えると、道路を造れ造れと言うことよりも大切なのは、道路を使うこと。僕は、道路特定財源の１％でも、地域の文化のために使うべきであると思う。道造りは大事な国の仕事だけど、人づくりをちゃんとしておかないと、道路栄えて国滅ぶことになりかねない。そういう点で、ブータンの元首相は、観光における文化の果たす役割を明確に位置付けていましたね。
小林：「文化を守ることは国を守ることとイコールだ」という考え方ですね。すごい考え方ですね。文化は文化としてあるのではなく、それをなくしたら国自体がなくなるというものなんです。あの考え方は凄いなと思いました。
石森：文化を守らなければ隣の大国に飲み込まれてしまいますからね。
山村：日本で言えば、防衛省の大臣が文化について語っているようなものですね。
小林：文化は国そのものだ、国が生き残るかどうかがそこにかかっている、というところが凄いですね。我々は「文化をどう保護していますか？」というふうに、分けて考

える。でも、生きるか死ぬかと同じ話だと。

山村：ゾンなどにしても、トンサのゾンは、ラサ（チベットの主都）のポタラ宮より古いそうです。ラサのポタラ宮は世界遺産なんですよ。世界遺産よりも凄いものが、世界遺産ではなく、そのまま生きて使われている。それも、世界遺産になると使えなくなるし、補修もうまくできなくなるということで、世界遺産に登録しない。そこがブータンの凄さだという気がしましたね。

トンサ・ゾン

〇“ハレ”だけでなく、“ケ”の魅力を見せるブータン旅行を

小林：日本などでは、世界遺産を単なる客寄せのブランドにしようとするでしょう？そこの違いが凄いですね。ブータンの観光では、今のような話をシンボル、ストーリーとして見せる。生きている文化遺産という意味で全部独自のものなんだ、そういう伝え方をもっとした方が良いですね。日本で売っているブータン旅行の商品は、驚くほどワンパターンなんです。客が祭りの時期に集中しちゃうとホテルも取れないし。ブータンの面白さをそういう一面でしか捉えていない。そこに限界がある。パロとティンプーとトンサに行って終わりという。それだったら、ブータンはわからない。

石森：日本における地域の観光振興は、何かというとイベントを考える。何をやったら良いか？みたいな。もちろん、イベントを成功させることは地域の大きな力になることは事実だけれど、日本では一過性のものとして考え過ぎですね。“オーガニック”ということの意味の一つに、“毎日のこと”というのがある。一日だけ何か飲んだり食べたりしても、元気になるというものではない。観光にしても、“ハレ”の観光だけで良いのか、と思う。

小林：ブータンの魅力は、“ハレ”の一過性の魅力だけではなく、“ケ”のところのライフスタイルの魅力ですよね。そういう“ケ”の部分が“ハレ”の中に現れているのだと説明できれば良いと思うのですが、祭りの仮面舞踊ばかり見るとなると…。

ナラカール村の祭り

山村：それだとシアターのエンターテイメントと感覚的に変わらないですよね。

〇地域づくりが目的の観光

小林：面白かったのは、観光局長が、我々はニッチ・マーケットを狙うんだと言っていたことですね。ニッチだからこそ、いろいろな思い切ったことができる。そう沢山人が来なくていい、数は来なくていい、という。それからもう一つ面白かったのは、自分の仕事はコーディネーターである、他の省庁と関係をうまくつくることだ、と言い切っていたでしょう？あれは凄いなと思いました。

ティンプー中心部の街並み

石森：彼は外交官だったんですよね。

小林：それも凄いなと思いました。ああいう人が観光セクターを統括している。広い視野から考えていくというのが凄い。「地域づくりの一環としての観光」と我々はよく講演で話たりしているけれど、彼はそれを本当に実践しているんです。あれは凄いなと思った。トレッキングの話（コミュニティ・ベースド・ツーリズムの構築を目的とした「ナブジ・トレイル」プロジェクト）も、まだまだスタートしたばかりだけれど、みんな知っていて、注目しているんですね。

石森：元首相は東ブータンの開発の話をしていましたね。

小林：現在、国の出入り口になっている西ブータンから、東ブータンに行って帰るのでなくて、そこから外に抜けるコースを国家として考えているんですね。でも逆に道が良くないことのメリットもあると思う。ツーリストは、評価できないものに沢山の時間をかけないわけで。そこに価値を見出しているから時間をかけて来るのであって。

山村：まさに高速道路ができる前の昔の白川郷みたいですね。

小林：そうそう。そういう人だけ来てくれればいいんだ、ってね。東ブータンに空港ができることにも当然そういう両面がありますよね。でもマイナス面をそれほど言わない。楽観的なのか、それとも自信があるのか…。本当はわかっているけれど、こういうふうにやっていく中で解決するのではないかという、あの自信というか、ブータンの知恵というか…。

山村：パロなどにどんどんホテルができていることについても、大丈夫かと聞いたのですが、それも心配いらないとおっしゃっていましたね。

小林：ブータンにおける外貨収入を得る手段としては、電力に次いで観光が２位。観光

の占める割合が大きくなればなるほど難しい問題も生まれてくる。利益誘導型の観光をやるようになったらですが。それを救う手立ては、コミュニティの意識がどれくらい追いつくか、にあると思います。

○理想へのステップ・バイ・ステップ

山村：インタビューをしていて、何度も「ステップ・バイ・ステップ」という言葉が出てきました。フィードバックをどうしていくか、一つ一つ決めながら進んでいるという印象を受けました。

小林：そういう意味で慎重な人たちなんでしょうね。自分たちの理念にちゃんと合っているかどうかが大事で、早くやろうとは考えていないですよね。

石森：そのあたりは、ベースに仏教があるからではないでしょうか。ちゃんとなすべきことをなしていれば、必ずきちんとした世になるんだ、という思想があるのではないか。「殺生は絶対いけません」「ハンティング・ツーリズムは、絶対ダメ」とか。観光以前のことです。昨日会った元首相なども、国の運営というより、人間としての生き方において悟ったようなところがある。

小林：人の役に立つことが結局幸せなんだという、その生き方を実践しているのだと思う。

石森：日本人も、本来そうなんでしょうが…

山村：「情けは人の為ならず」という言葉もありますからね。

小林：まだまだコミュニティがしっかりしているところに可能性がありますね。日本では、コミュニティの再構築をやらなければいけない。そのときの価値を何に持っていくかという点が、日本ではなかなか見えてこないですから。

石森：元首相は「観光省はつくらない」と言っていたが、それも、まったくその通り、同感です。

小林：観光が国で２番目の産業になっているとしたら、観光省をつくりたがると思うけれど、それをつくってはダメなんだという、あの考えは凄い。凄くわかっていると思った。あれで、ブータンは凄いと思った。利益誘導的に言えば、省をつくって利益を引っ張って来ようと思いますから。

ブータン政府観光局（ティンプー）

石森：昨日、彼と会って、私も反省しました。彼は観光のネガティブ・サイドも分かっているんですね。若者も放っておくと都市に集まって、娯楽に走る、

とか。重要なのは「センス・オブ・プライド」だと。農村を誇り高い場所として形づくる。そこに文化をベースとして観光を絡めていく。環境との調整も考えて。その困難さもわかった上でね。それで我々とも夢を共有しているんだ、と。あれはやっぱり凄いです。

小林：コミュニティ・ベースド・ツーリズムも、概念が出たときにやろうと思えば、もっと早くやれたはずなんです。でも、それをつい１年前からやっているということは、始めるに当たってかなり考えている。形だけつくろうと思えば、他のいろいろな国でやっているように、すぐにできる。それを去年までやっていないというのは、逆に凄いと思う。ずっと、どう進めていくべきか考えていた。しかも、みんながそういう発想をするまで待つんだと。「こうすれば良い」と絶対言わないんだと。アドバイスはするけれど、みんなで考えろと。

山村：まさにそのへんが、コミュニティ・ベースドというところですね。

小林：だから、時間をかけてそこまで持っていく。

山村：どこにインタビューをしても、「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」という単語が出てくるんですね。しかも「コミュニティ・ベースド・サステイナブル・ツーリズム」と言っている方もいらっしゃいましたね。自然保護協会で。日本では考えられないです。

小林：日本では「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」と言っても、「それ何？」という感じで、聞いてくれないですからね。これからの観光はどうあるべきかと信念を持ってないとなかなか難しい。日本では、観光振興を頼まれたら、「要は人を増やせば良いんでしょう？」となる。手法論に走ってしまう。だけど、自分でできるだけ歩いて、見て、議論してこないと信念にならない。

石森：理想と現実の間には難しい点もありますね。

小林：ステップ・バイ・ステップでやるしかないですね。できるだけ、日本の大学院生も含めて、見てもらって、同じ考えを持てる人を増やさなければいけないですね。

山村：哲学というのは大事ですね。哲学なき観光開発というのは、何のためにやっているのかわからないですからね。

小林：観光開発自体が目的化してしまいますからね。その先があるということを忘れてしまう。

山村：大学というところが本来その哲学を重点的にやるべきだと思うのですが…

小林：今の大学は訓練学校みたいになっていますね。ホテルのトレーニングとか。
ブータンに限って言えば、エコに関しては、実際はまだ始まったばっかり。でもベースがしっかりしているところだけに、今後広がりが出てくると思う。発展性がある。それがどういうふうになっていくか。他の国では草の根的に発展してきたところを、ブータンの面白さは、それを上が理解してやっている。その発展形は今後どうなるのか非常に興味があります。

○人づくりのベースとなる宗教と教育

山村：人づくりという点に関して、ブータンは人材が凄いですね。その辺が未来に対して一番重要なところだと思います。

小林：幼稚園から環境教育をやっているという点も凄いですね。仏教教育がそれに繋がっているという…

山村：哲学と通じる部分だと思うのですが、宗教というのは凄く大事ですね。宗教心というものが。

小林：去年の貴州では、鬼師（祈祷師、シャーマン）の存在が興味深かったじゃないですか。それに代わるものが、ここでは仏教なんですね。現実にものを進めて行こうという人と、それを精神的にバックアップする人、その二つのセットが、去年の貴州で認められたわけですが、ここでもあるんですね。

山村：それがブータンの場合、国王と大僧正というトップのレベルまであるわけですよね。完璧なシステムが出来上がっている。

小林：振り返って、それがない日本でどうできるんだろうと思う。アイヌの方ならば、森に入るときにお祈りを捧げる。そういう考え方を現代風に解釈しながら、入れていかなければいけない。先住民族の人たちにガイドをお願いする意味というのは、そういう哲学・精神性をしっかり伝えることにあると思います。

山村：森に入る前にお祈りをやるということは、精神性として非常に重要なことですよね。

石森：ブータンでもガイドは重要ですね。

小林：ジュルミさんが凄いのは、自分もお坊さんの家に生まれて、信心深いじゃないですか。訪れたお寺ではいつも真剣にお参りしていましたね。必ずお賽銭を出して、お供えものをして。あれは結構大変なことだと思う。毎日、毎日。

石森：それが、まさに生き方なのでしょうね。カネ、カネ、カネではないわけで…

小林：ブータンのガイドの難しさは、単なる知識ではないところにありますね。自分たちのライフスタイルを見せるのって、難しいじゃないですか。旅行者の一番そばにいる人が実践していなければ、旅行者には伝わらないですからね。

山村：それにしても、人口 70 万人の国で、どうしてあれほど凄い人材がどんどん出てくるのかということが不思議でしたね。

石森：人が実に大切にされていますよね。

山村：個人レベルでの責任感もありますね。それも「センス・オブ・プライド」が、子供のうちから育てられたというのがあるのでしょうか。

小林：ブータン人としての誇りとアイデンティティを持つという教育をしているわけですよね。

石森：日本ではそれをバッサリ切っている。点数にならないから。評価できない指標は

持ち込むなと。多分に人間の評価を点数だけで決めるところがありますね。それは評価する側の問題なんですよね。学校の成績が良いことも、基準としては大事かもしれないけれど、極めて特殊な評価ですよね。

小林：ブータンでも統一試験があって、家族でお寺に合格祈願のお参りに来ていましたが、試験で良い点を取ることがハッピーなんだと、そういう方向に価値の軸が変わっていくと怖いですね。我々が会った人たちは、そんなことはないと言うけれど、若くなるほどそうした軸の変化は怖い。現在の 30 代後半は、田舎に帰りたいと言ってるけれど、その子供たちで都会しか知らない人たちが出てきたとき、どうなっていくのでしょう。帰る田舎がなくなったとき、どうなるだろう。

山村：個人にとって何が幸せかわからない、ということになるかも知れませんよね。

緒川：ブータンの教育の中で、仏教や環境についてわざわざ教えるようになったのは、逆にそれが必要な状況になったから、あるいはそういう状況が来ることを見越したから、という見方もできると思います。コミュニティの中で、身体感覚で仏教や環境に対する気遣いを養うということが、段々、薄れてきているのではないかと思います。それに対して、学校教育でかなり前の段階から先手を打っているのかなとも思います。

〇英語教育の効果と懸念

小林：英語教育が進むと、英語の発想の仕方になって、伝統的な発想法とは違ってきますよね。

緒川：教育のベースを英語教育にしたというのは、国民の知識力や国力の向上を考えてのことだと思います。

山村：外交戦略上、インドと中国という二大国の間でバランスを取らなければいけないということもあるのでしょうね。

小林：それも大事だけれど、そのうち英語教育にしたことがボディブローのように効いてくるのではないかなと思う。

緒川：ゾンカ語では、いろんな複雑な概念を説明できないと言っていましたね。世界のトップレベルの学問を母国語で学べるのは、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、日本ぐらいしかない。その他の国は、最高レベルの知識を学ぼうとしたら、母国語以外の言葉で学ぶしかない。そういう点を考えると、軍事力以外の方法で国力を上げるためには、国民の知識レベルを上げる必要がある。そのためには、英語で教育を行うのが一番良いと思ったのだと思います。それで今や母国語と同じようにして英語を使えるので、高いレベルまで学べるようになった。

石森：その極端な例がシンガポールですよね。政府関係者も全部英語ですから。でも逆に、「シンガポーリアンって何？」というアイデンティティの問題に悩んでいるところもある…

山村：そうですね。私の友達でもシンガポーリアンがいますが、中国語と英語とがチャンポンになったシングリッシュという言葉でしゃべります。
石森：でもあそこのエリートは華麗な英語をしゃべりますね。
小林：留学経験がありますからね。我々が会ったブータンの文化局の若い２人も、インドに留学した後、イギリスに留学しているんですよね。ブータンのエリートは、みんな海外に留学している。
山村：ゾンカ語自体が、もともと西ブータンの言語ですよね。国家の共通言語としたら、英語を入れる方が早かったということもあるのでしょうか。
石森：私がかなり誤解していたのは、ブータンは単一性があると思っていたことです。実は言語だけとっても 18 か 19 もある。
小林：人口 70 万人で 18 言語だというのも凄いですね。
石森：小さい国だから単一性があって、まとまりやすいかと思ったら、そうじゃないんですね。
小林：一番話されているゾンカ語でも、人口の３割しかしゃべっていないと言っていましたね。語学に対する感覚が違いますね。
石森：中国も多分に似たところがありますね。シーサンパンナ（中国雲南省のタイ族はじめ少数民族の独特の文化と原始林などの自然環境で人気の観光地）に行ったときも、中国にこんなところがあるのかとビックリした。タイ文化圏だし、北京とは全然違う。二つ三つの言葉をごく普通にしゃべっていますからね。

〇仏教を自ら実践する質素な暮らしの王様

小林：王様が自ら貧しいところに住まわれて…という話も凄いと思いました。首都に住んで、口で「地域のために」と言うのは簡単だけれど、本当に地域の人の視点でモノを考えられるかどうか。昨日、その王様の話を聞いたとき、本当に凄いと思いました。そういうところに住まないとわからないじゃないかというお考えからなんですね。王子にも、そういうところに住まわせて、体験しろというのも凄いですね。王宮があまりに目立たなくて、我々が「王宮はどこにあるんですか？」って聞いたくらいですからね。あんな立派なゾンがあって、国会議事堂があっても、ご自分はログハウスのようなところに住んでいらっしゃる。
石森：それをご自分の考えとして実践されているところが凄いですよね。
小林：その実践に感動しましたね。
石森：そこが仏教だと思った。我々も仏教を勉強しないといけないと思った。
小林：せめてお寺に描いてある絵ぐらいは、わかるぐらいになりたいですね。ヨーロッパに行くときには、聖書を読んでいくとわかりやすい。アジアに行くときは、仏教の本を最低限の教養として読んで行こうなんて、あまり思わなかったけれど、今回お寺

に連れていってもらって、そういうものを読んで行かないとわからないと思った。ちょっと反省しました。

山村：ゾンの平面配置は、曼荼羅を表しているそうですね。こうしたことが見事にＧＮＨと整合性を持っているのだと思います。

○国際援助と伝統文化

小林：ブータンは、援助国を選ぶというところも面白いと思いました。日本の地方は、何でも良いから中央官庁から金を取ってくれば良いというところがありますが、ブータンでは「もらう側にも論理がある」と言って、デンマーク、オーストリア、オランダ、スイス、日本など、あまり細かなことに口を出さない国を選んでいます。日本の地方は、自立して「この金はいるけど、この金はいらないよ」というようにならないと、良くならないと思いますね。「もらう側の論理」というのは凄い。

山村：伝統技芸院でシニア・ボランティアの方が、伝統とあまり関係ない人形を作ってお土産にする技術を教えているという話もありましたね。

緒川：ブータン政府も何も言わないで任せっきりでした。教えている方も当惑していましたね…よほど日本のことを信頼しているのか、それともブータン政府の方がおおらか過ぎるのか。他にお土産にできそうな伝統的な人形工芸がないということもあって、日本からできるだけ材料を持って来なくても作れるようにするという形で、頑張っていらっしゃいました。

石森：新しい文化を入れるという割り切りも、あるのかもしれませんからね。そういう伝統がないから仕方ない、ということで。パラオでは、木彫りの技術がなかったのですが、日本の統治時代に日本のゴーギャンと言われる土方久功という彫刻家が教え込んで、お土産になったりしていますからね。伝統をベースに発展させるのが望ましいけれど、それがない場合は、現地で調達できるものを使ってやるというのは正しいと思う。

小林：今回の調査では、コミュニティ・ベースド・ツーリズムという考え方が間違っていなかったということに確信が持てました。

山村：テーマとしても素晴らしいと思います。

２）事後研究会

日時：2008 年 9 月 1 日月曜日 16:00～18:30
場所：北海道大学観光学高等研究センター　石森教授研究室
出席者：北海道大学観光学高等研究センター長　石森 秀三 教授
北海道大学観光学高等研究センター　山村 高淑 准教授
財団法人日本交通公社　小林 英俊 常務理事
相澤 美穂子 研究員
緒川 弘孝 客員研究員

〇ブータンのコミュニティ・ベースド・ツーリズムのプロジェクト

緒川：ＡＢＴＯ（ブータン旅行業協会）へのヒアリングで、ナブジ・トレイルのコミュニティ・ベースド・ツーリズムのプロジェクトについて聞きました。このプロジェクトが立ち上がる背景として、2002～2007 年を対象とした第九次五ヵ年計画があります。そこで既に観光分野の課題として、「コミュニティの参画の欠如」や「利益配分の斑（ムラ）」といったことが挙げられていたようです。

小林：コミュニティを既に意識していただけではなく、問題点についても考えていたんですね。

緒川：ナブジ・トレイルのプロジェクトは、政府やＡＢＴＯの他に、オランダ開発機構というところが支援をしているようです。また、プロジェクトの総費用のうち半分近くは地球環境ファシリティの支援を得ているようです。

小林：日本のＯＤＡのように大きなお金を出したり派手な整備をしたりするのではなく、このオランダの組織のようにノウハウを教える黒子のような役割を果たすという支援の仕方は理想的ですね。

緒川：それと面白いと思ったのは、観光収入の一部を村の観光基金としてプールして、観光に直接関係ない子供や高齢者のために使うようにし、その基金の管理も村自身が行うという点です。

小林：貴州で見てきた老漢族の村のようですね。あそこは観光収入の一部を、村の下水整備や学資保険などに使っていたね。そういうところまで行かないと、いけないかもしれないですね。ツーリズムをツーリズムに還元していただけでは、「ツーリズムのためのツーリズム」になってしまうから。だから、“コミュニティ・ベースド”と言ったときに、ツーリズムに限定されない広い考え方が必要なわけですね。

○国家の存亡を賭けた戦略としてのＧＮＨ

緒川：ＧＮＨに関しては、ブータン政府の発行している日本語の観光パンフレットに面白いことが書いてありました。「ブータン政府にとってＧＮＨは国家としてのブータンの生存を左右するものだ。」「ブータンが生き延びられるとすれば、それは他のどの国とも明確に異なる国家像、アイデンティティを力とする以外にないであろう。」というところです。私は、このようにＧＮＨが国の存亡をかけたイメージ戦略であるというようなことは、他国の人がＧＮＨに良い幻想を抱いてもらうために、隠しているのだと思っていました。ところが、このように国のパンフレットに包み隠さず、あからさまに書いてある。これに驚きました。

小林：国民向けのものとしてだけでなく、対外的なものとしても、ブータンのアイデンティティは、ここにあるんだということを示す必要もあるんでしょうね。密かにやっていられる余裕もなくて、脅威は目に見えていますから…。実際にシッキム、チベット、ネパールの状態が目の前にあって…。だから隠さず全部見せた方が注目されるということも、あるかも知れないですね。

緒川：それはある種の高等戦術かも知れませんね。企業の広告などでも普通は商品の良い部分だけしか表現しないですが、成熟して来ると、あえて商品の弱点を示した方が消費者の信頼を得ることができる。そういうところまで考えているとしたら、凄いです。

○国家戦略としての自然保護

山村：国内と国外の両方に通用する言い口というところも凄いですね。

緒川：ＧＮＨの他にも、“ブータンの自然環境は地球全体の財産”と位置付け、それを守るために「経済発展を犠牲にしているブータンに、国際社会がその代償を支払うべきだ」という論理を展開して、国際援助を引き出すとともに、援助に負い目を持つのではなく、国際的に名誉ある地位を確立する戦略を採っています。

フォブジカ谷

小林：フォブジカの場合もこれと同じ論理なのでしょうか。それとも本当に村民がツルを守りたいと思ってやっているのでしょうか？多分、昔から本当に思っていたと思うのですが、誰かがこれをアピールした

ら援助が得られるかもしれないぞ、と思いついたのかもしれない。根っこの本心の部分は疑いなくあるんだろうけれど、使えるものは使うという。したたかで賢いのかもしれないですね。自然保護についても、国家収入の大部分を占める水力発電を、今後も維持するためには森を守らなければならない。つまり、自分たちのためにも森を守る必要があるんですね。木を伐ったら自分たちの収入もなくなってしまう。でも、「実はこの森林は、みんなのために残しているんだよ。」と言う言い方をして援助を受けているわけですよね。ツルの話も、先祖がみんなツルを大事にしていたから、ツルを守りましょうという気持ちは、みんなある。でもそれだけだったら援助は来ない。だから「ツルのために電線を張らないんだぞ」と世界にアピールしている。結構すごい人たちかもしれない。今、何を言ったら、世の中に受けるかとか、自分たちが卑屈にならずに援助してもらえるのかという論理を作り出せるというところが凄いです。

緒川：風にすごく敏感ですね。

小林：日本の場合は、ものすごく頑張っているにも関わらず、厳しいＣＯ$_2$の削減目標を押し付けられて、達成できないから海外からクレジットを購入しなければならなくなって、どんどん追い込まれている。正しいことをやっているのに、「すみません」という感じで。ブータンでは、先に自分たちは正しいことをやっているんだと言って、金をもらっている。全然違いますよね。１億３千万人もいて思い付かないことを、わずか 70 万人の国で考えてやっている。

緒川：先手必勝ということが、わかっていますよね。

小林：先手必勝というのは、風が読めていないとできない。

緒川：フォブジカで聞いたのですが、オグロヅルよりもさらに貴重な絶滅危惧種があると言っていましたね。でも多分、アピール力という点で、オグロヅルを利用したのかも知れませんね。

山村：それがわかると、あのフォブジカのゴミの多さも説明がつくような気がします…

フォブジカのオグロヅル情報センター

○ＧＮＨの柱の一つ「ガバナンス」の位置づけ

小林：四本柱のうち、「カバナンス」というのがあるでしょう？他の三つはよくわかるのですが、この「ガバナンス」というのは、どういう意味だろう？

緒川：「統治」という言葉に訳してしまうと、ニュアンスが違ってしまう気がします。「ガバナンス」という言葉には、“統治”だけでなく、“自治”も入っているのだと思っています。“良く治まっている”という状態を、言っているのではないかと。何から何まで国家が人員配置して、お金を出してやるということは、そういう“良く治まっている”状態を実現する手段としては、効率が悪い。そうではなくて、自治意識が根付いて住民が自ら治める方が効率的だし、政府が上から抑える手段だけで秩序を維持するのは大変難しい。そういう、統治に限らず、良く治まっている状態を実現するあり方が“ガバナンス”なのかなと思っています。

小林：それぞれのエリアで良く治まっていること、という意味だとよくわかりますね。日本語で「ガバナンス」という言葉だと、ちょっとイメージが違うからね。

緒川：なかなか訳しづらいですね。あえて訳すとすれば、「良く治まっていること」とするのが良いのではないかと思います。

小林：良く治めることができない皇帝は、引っくり返しても構わないという昔の中国の国家観のように、上がただ偉いのではなくて、良く治まっている状態があるべき姿ということですね。

緒川：「ガバナンス」を分解して考えると、「安定している」「治安が良い」「平和だ」ということで構成されているのかなと思います。

小林：東洋的ですね。

緒川：そうですね。なかなか説明しづらい概念だと思います。独裁国家だと、重要な四本柱の一つなどではなくて、「ガバナンス」が最上位概念になってしまいます。ブータンでは、そうではなくて、その「ガバナンス」も含めた四本柱の上に国民の幸福があるということも、示しているのではないかと思います。

山村：「状態」という捉え方は良いですね。

○何のための観光振興か？手段と目的を取り違えないためのＧＮＨ

小林：ＧＮＨは、経済発展や開発自体が“自己目的化する”のを防いでいるという考えは面白いですね。日本の観光開発が、まさに自己目的化していますから。何のために観光開発、観光振興するんだ、ということが抜け落ちている。それを考えないといけない。そこが大事なところで、何のためにやるんですか？という議論をやらない。今度、観光庁をつくると言ったって、何のために観光振興をやるのかが抜けていると、自己目的化してしまうのでないかと思う。

緒川：ブータンに行って驚いたのは、みんなそこを忘れていないんですね。

小林：建前でも何でも、言っているうちに信じてくるところもありますね。そういうところが日本には全然ない。

緒川：なぜ、そうなってしまったんでしょうね？

小林：ある観光地のリーダーが、「観光というのは、地域の誇りと来る人の憧れが混ざり合うことだ」と言っている。ブータンでも“センス・オブ・プライド”という言葉を使っていたけど、地域が誇りを持って、それに対して外の人が憧れてやって来ることが、観光の本来の姿なんだということを、大学でも言い続けて欲しいですね。

山村：そうですね。頑張ります。

小林：そうでないと、テクニックを学ぶだけになってしまうからね。

山村：テクニックで思い出したんですが、手段が目的化してしまうということですね。いつの間にか、手段と目的が逆転してしまう。それが自己目的化だと思うんですけれど、日本の観光以外でも、例えば学校教育でもそうですね。良い成績を取れば良いという。「算数やって何するの？」というところを、みんないつの間にか忘れてしまう。根が深い気がします。

小林：日本人って、目標掲げて頑張るのが好きなんですね。目標を立てるときに「なぜ？」というところが抜けて、目標が数値化していって、達成することが目的になってしまう。この状態にいろいろなところが陥っている。

緒川：私は今、地球温暖化対策の仕事もしているんですが、環境先進国のスウェーデンでは、「なぜその温暖化対策をやらなければいけないかを、みんなで考えましょう」というところからスタートするんですね。

小林：それは日本と違いますね。日本だと、まず６％をどうやって減らすんだというところからやりますからね。

緒川：日本人は、すぐＨＯＷを求める。スウェーデンではＷＨＹから始める、と指摘する人がいました。スウェーデンでは、まずはＷＨＹで疑問を出して、みんなで何故やるかを確認してコンセンサスを得ることが最初のステップで、その次に、じゃあ、その目的のために何をしたら良いかというＨＯＷが来る。でも日本人はすぐＨＯＷから入ってしまう。ＩＳＯ（国際標準化機構による工業分野の国際規格）も、何のために取るか、わかっていない人が多くても、とりあえず取る。

小林：日本でＩＳＯを取るのは、取らないと貿易できなくなるというだけで、環境的な意義を考えていなかったりする。今の指摘は大事な点だと思う。

緒川：西洋人が全部、そういう大事なことを見失っているかと言うと、そうでもなくて、スウェーデン人もそういうことを見失っていない。日本は、西洋の真似をしているうちに見失ってしまった…。西洋でも、長い歴史の中で、ようやく気づいてきたということなのかもしれませんが。

小林：単純に、東洋とか西洋とかでは、括れないということですね。

緒川：西洋は、やっと 20 世紀になって気づいたのかもしれません。日本は西洋文明を追い求める中でも、一部の人は見失っていなかったのでしょうが…。仏教のお経も、素晴らしいことが書いてあるのに、なぜか音読することが目的になって、仏教の目指すものの中身が一部の人以外にあまり伝わってない。
小林：それもＨＯＷでいっていますからね。
山村：日本でハウツーものが売れるわけが、わかりますよね。

○「食えなきゃ、しょうがない」から、観光失敗学へ

緒川：観光分野でも手段の目的化ということが、よく見られますよね。
小林：確かにそうなんですが、そのことを現場でどのくらい自分たちの問題として認識しているかだと思います。「そんなこと言っても、明日、メシ食えなければしょうがないじゃないか」という話になりますからね。どういう風にそのことを納得させられるかですね。
緒川：なかなか難しいですね。
小林：実際の観光地で、どうできるんだろう。
緒川：日本の場合、原理原則や最高の目的といったことよりも、人間の方が大事だという人間中心主義、生活中心主義なんですよね。おっしゃるように、「明日食えなきゃしょうがないだろう」と言われれば、みんな黙ってしまう。西洋の人は、そこらへんの基本的な考え方が多分、違うと思うんです。
小林：日本は、人間より上位の概念がないということだね。
緒川：そうですね。キリスト教では、人間がどんなに理屈をこねたり、ロジックを突き詰めたりしても、神の考えには及ばない。神が不条理なことをやっても、それが理解できないのは人間が馬鹿だからで、神がやることには人智が及ばないことがある。そういう考え方が根底にあると思うんですね。日本人の場合は、神が何と言おうと、自分たちが生きていけなかったら、しょうがないじゃないか、というように、人間が生きていくための論理が、神の摂理の上に来ちゃうんですね。
小林：それも当たっていると思いますが、そうは言っても、我々は説得しなければいけないですからね。それをどういうロジックで言えば良いのか？
緒川：やはり、日本の社会や歴史的な条件を踏まえた、オリジナルなロジックをつくらないといけないのでしょうね。
小林：「食えなきゃしょうがない」を超え

ドチュ・ラ（峠）の仏塔

るようなものをね。日本は、痛い目に遭わないと、わからないのかも知れない。「ハイ・ボリューム、ロー・クオリティ」でダメになった観光地を、いくつも見つけてきて紹介するのかな…。良い例を見つけるのではなくて、悪い例を紹介するというのも、一つのやり方ですよね。結局、ハウツーしか興味ない人には、こうしたらダメになるよという意味のハウツーを見せるしかない…

緒川：失敗学ですね。

小林：これからは、失敗例を集めた方が良いかもしれない。

山村：観光失敗学ができたら役に立ちそうですね。

小林：失敗の本質から日本特有の考え方の問題点まで突き詰めることができれば面白いですね。

緒川：そういう本ができれば、減点方式が好きな日本人のメンタリティに合うかも知れませんね。

〇観光振興の上位目的とコミュニティの再生

山村：観光関係の会議では、観光に利害関係がある人ばかりが参加するんですよね。それ以外の観光産業に関わらない人をインボルブメントするには、観光よりも上位の概念がないと難しい。そこにコミュニティというものの意味があるのかな、と思います。

小林：エコツーリズムも、コミュニティがインボルブメントできないエコツーリズムは、いずれダメになる、と私はいつも言っています。そうでないと、もっと面白いものができたときに、みんなそっちに行ってしまうから。それに、人が来始めたら、もっと人を呼びたくなるんですよ。でも、直接、そこに関わっている人がいれば、それはダメだよと言えるわけです。それしか抑止力はないのではないかと思う。「エコツーリズムは、コミュニティ・ベースド・ツーリズムでないと日本で成り立たない」という持論です。でも、なかなか理解されないんですよね。

山村：今のお話と、ブータンのコミュニティ・ベースド・ツーリズムで、村の観光収入を観光以外の別のことに還元するというのも繋がってきますね。

緒川：日本では、一つのコミュニティでも、観光で潤っている人とそうでない人の間に溝ができてしまっている。潤っている人はハッピーかもしれないが、そうでない人はアンハッピー。それでコミュニティが調和できない。でも、ここがうまくいかなければ、コミュニティ全体としては決してハッピ

経文が書かれた旗・ダルシン

ーとは言えない。そういう風に考えると、コミュニティ全体としてのハッピネスは、一部の人が食えるか食えないかということの上位概念になりますね。観光に関する組織づくりも、観光関係者以外、観光公害を被る人も含めて、行う必要がありますね。

ナラカール村の祭りでの住民たちの昼食

山村：おそらく、そこがコミュニティにおける“グロス”なハッピネスの追求ですね。

小林：白川郷では、１軒で８千万円稼いでいるところがあるんです。そうすると、日本人は、自分もそうなりたいと思う人が多い。儲けそびれた方にならなければいいんだ、と考えてしまう。“グロス”を考える場合に、どれぐらい自分の問題として捉えられるかですよね。「成功組に廻りたい」という発想をしてしまうのではないか。それではハウツーなんですよね。

緒川：そういうメンタリティを持つということ自体、既にコミュニティが壊れているということの証左ですよね。

山村：儲かった人が施さなければならない義務を背負うというノブレス・オブリージュ（財産、権力、社会的地位などを持っている者が果たすべき高貴な義務）のようなものも、育っていないといけないですよね。

緒川：昔のコミュニティにはそういったものがあったんでしょうが…。

小林：昔と言っても、戦後まもなくまでは残っていたのだろうけれど…。

緒川：それをどう再生するかですね。多分、昔のままでは再生できないでしょうから。どういう仕組みでというのは、難しいテーマですね。

山村：戦後の平等主義からの反論も覚悟しなければならないですからね…。

緒川：昔のようなコミュニティだと、若い人は離れていきますしね…。

○京都の祇園祭に見る新しいコミュニティの形

山村：最近、聞いて面白いなと思ったのが、高齢化や都心部の空洞化で祭りの担い手不足に悩む京都の祇園祭の例です。建設されたマンションに入居した新住民が保存会に加入したり、オフィス街の企業が祇園祭の実務を取り仕切る“神事当番”を務めたり、地元の大学生が積極的に関わったりと、新旧住民や企業の協力関係が新たに構築されているんですね。それぞれの山鉾町が特色を出して取り組んでいる。こうした取り組

みの中に、コミュニティが現代に再生するためのヒントがあると思います。

小林：旧来のコミュニティだけでは成り立たなくて、もう少し枠を広げることによって価値を持たせることが必要ですよね。そこに観光が果たす役割がかなりあると思う。

山村：さっきお話がありました「誇り」と「憧れ」ということが、京都ブランドとしてうまくいった事例なのかもしれませんね。

小林：観光客が１日だけ来て楽しむというのではなくて、祭りを支える新たな人たちが育っているというところが素晴らしいですね。それぞれの山鉾町ごとに取り組みが違うというのも面白いです。これだけ社会が多様化してしまうと、同じ手法ではダメだということですよね。

山村：中でも、従来は町内に住む住民が引き受けてきた“神事当番”の役割を企業が引き受けた例は、非常に興味深いと思いました。

小林：そういう新しい縁が出来てきているのは面白いですね。それもコミュニティ・ベースド・ツーリズムですよね。新しい価値の中でのコミュニティの再構築ですよね。

緒川：逆に言えば、コミュニティが相当追い込まれていたんですね。

山村：そうですね。千年やってきたのに、鉾が自分の代で立たなくなるというのは地元の人にとっては大きなショックですからね。

小林：そういう意味では、日本には既に消えてしまったものも沢山ありますね…。

〇高くないブータンの公定料金

（ここから石森教授が参加）

石森：１日当たり１人 200 ドルという公定料金は高額でしょうか？考えてみたら 200 ドル出しておけばいいわけだから、逆に安いのではないでしょうか？バックパッカーからすれば高額かもしれないけれど、常識的に考えれば、かえって安いと思う。200 ドルさえ出しておけば、食事、宿泊費、ガイド、ドライバー、車まで付いている。すごくリーズナブルな感じもする。

小林：多分、自国から見たら高額ということでしょうね。１日１ドルで暮らしている人から見たら、とてつもなく高いでしょうから。

緒川：世界的な基準からすると安いですね。

石森：車で迎えに来てくれて、ホテルもそこそこ良いし、レストランでもちょっと言えば別のメニューの対応もしてくれますし。

小林：普通に考えたら安いですよね。例えばヨーロッパを旅行する場合ですと、１日 200 ドルでも難しい場合がありますからね。

○観光魅力に結びついたブータンの国家戦略

石森：それから、一つ象徴的なのは、世界遺産の問題ですね。確実に世界遺産の基準に達しているものが沢山あるのに、意図的に登録していない。何ゆえ、そういう考え方ができたのだろう？ジグミ・ティンレイ首相だけではなく、国王もそういうお考えですし。

小林：仏教の考え方が背後にあるのが大きいのかもしれませんね。物事は流転していくものだとして受け止めているから、ある時点で登録して、そのままで留めるということが、おかしいという考え方なのではないでしょうか？だから「リビング・ヘリテージ」という言葉を使った方が良いかもしれないですね。変化していく様に意味があるという東洋思想から見たら、登録してその形で残せという考え方は、おかしいということでしょう。使ってこそ意味があるという。

観光の成功要因ということであれば、ＧＮＨの考え方と分かりやすさと実践性があります。ＧＮＨの考え方が、行き詰った工業化社会を打破するものかも知れないということで、世界の知識層を惹きつけている。一方それ以外にも、観光的な視点で言えば、国王が昔の服を着なさい、礼儀を正しく守りなさいと決めたことが、“アイデンティティの見える化”を果たしたことがあると思います。アイデンティティを持っていると口で言うだけではなくて、アイデンティティを見える形にしたことが、観光的な魅力の一つになって、観光客を呼び込むことになった。そういった現象的なことも整理しておいた方が良いですね。

“ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ”ということは、逆の意味で客をくすぐっているのだと思います。行きにくいということで、価値付けしているところもあるから。限定商品に人々が飛びつくような心理とか、ブランド・イメージを確立するといったようなマーケティング的な意味で。

自然保護の戦略についても、結果としては森林を美しく保つことになって、それもブータンの魅力になっていると言えますね。蚊も殺さない文化が、結果として生物多様性を守ってきたということも。鳥の種類も多いということです。そういったことも結果として観光の魅力になっている。

チミ・ラカンと僧侶たち

石森：“ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ”というのは、観光客の質を意味していたんですか？

小林：「ブータンの文化を知るようなレベルの人たちに来て欲しい。」と何人も言っていたから、そういう意味で来る人

のクオリティを求めていたのでしょうね。「ネパールのようになりたくない」と何人も言っていたし、それは強調していた。ブータンを理解しない人は来なくて良いんだと。ブータンを理解する人は、イコール、ハイクオリティなんだと。それだけでは、もたないから、今度は提供側もハイクオリティでないといけない、ということになったんでしょうね。

山村：最初にハイクオリティ・ツーリストを想定していて、次にハイクオリティ・ツーリズムを目指して、最終的にはハイクオリティ・デスティネーションになりたい、という風に言っていましたね。

〇情報開放で懸念される影響

石森：仏教国であるということは重要だけれど、ブータン以上に敬虔な仏教国かもしれないラオスと比較してみると、ブータンの方がはるかにしたたかですね。ブータンは敬虔であるのにプラスして、したたか。だから仏教という要因だけではない。

小林：それは地政学的な条件があるんでしょうね。

石森：ブータンはインドに気を遣っていますよね。だけど一線を画している。そこらへんの賢さ、したたかさ、偉さというのは、何ゆえかと思う。仏教だけではないんですよね。そこが不思議なところですね。それともう一つ、将来どうなるのかが気になりますね。ドラッグが入って来たときにどうなるか。心もボロボロにしていくからね。それと携帯電話やインターネットが、かなり普及してきているからね。現実に、泥棒が多くなってきているし…。

小林：そういう動きは早いですからね。

石森：想像以上のテンポですね。実に賢く、国王、首相以下、人の心づくりもやっているけれど、その一方でインターネット、携帯電話、ドラッグといったものが及ぼす影響が将来どうなるか。

緒川：四代国王もある程度は覚悟していたのでしょうけれど、想定内のスピードだったのかどうか…。石森先生がおっしゃるように、ＧＮＨは、これから５年、10年が大事になってきますね。

小林：何が幸せかということはいろいろ絡むんですが、いろんな情報が入ってきて、いろんなことを知ることが、果たして幸せなのか。幸せというのは外から決めるものではなくて、自分が自分の中で満足することが幸せだとすると、いろんなことを知ってしまうと、

峠よりヒマラヤ山脈を望む

自分の判断が揺らぐわけでしょう？結局、自分で幸せが決められなくなってくる。他の人に、「私って幸せ？」って聞かなくてはいけなくなるようなものでね。ＧＮＨのＨのハッピネスの部分が揺らいでしまったら、難しくなるかもしれないですね。

緒川：「隣の芝生が青く見える」と言いますが、テレビやインターネットで、いろんな情報が入ってくるようになって、“隣の芝生”が沢山見えるようになりましたからね。

小林：知らなければ、自分の家が幸せだと思って生きていられたのにね。

山村：そこが、テレビやインターネットの普及で、どうなるかというところですね。

小林：最初の方に泊まったホテルの従業員のお姉さんが、テレビで一生懸命インドのドラマか映画を見ていましたね。

緒川：最近、情報が入ってくるようになってから、ブータンの人たちが、お金で何でも手に入ると考えるようになったと言われています。日本人のことも「すべてがある国で生まれ育った」とかいう情報があって、日本のことをうらやましがっている人もいるようです。

小林：せっかく、一周遅れの幸せを味わっていたのに、そういう風に思うようになったら、ブータンは、ただ遅れているだけの国になってしまう。これからどうなるんだろう。人間って、一旦、そうなってからでないと戻って来られないのかも知れない。伝統的なものがなくなったときのブータンって、どうなるんだろう。ティンプーで、みんなが普通の格好で、Ｔシャツ着てジーパンはいて、ウロウロしていたら全然魅力ない。よくある地方都市で、車も渋滞して、ゴチャゴチャした世界。

緒川：難しいですね。それでも、みんな楽観的でしたね。

山村：非常に楽観的でした。

小林：そうですね。観光のマイナス面もわかっていると言っていましたね。

○ＧＮＨの根底にある仏教的考え方

緒川：仏教の根本的なところでは、「幸せ」というのはないんですよね。幸せも不幸もないんです。現状を、ありのままを見るということを、大事にしますから。

山村：「幸せ」というものを、自我による幻想みたいに見てしまうんですよね。

小林：元々は、ブータンに「幸せ」という言葉がなかったということとも繋がっているのでは？

山村：そうかもしれませんね。おそらく「ＧＮＨ」という言葉に、我々が振り回されているのかも知れません。四つの柱について、ずっと考えていたのですが、「ガバナンス」というのは、統治ではなく、秩序とか調和のことなのかなと思うんです。何を調和させるかというと、他の三つを調和させることなのかなと。文化があって、社会経済があって、自然環境があって、そのどれか一つを取ろうとするとダメなんだ。その三つのバランスがうまく取れてることが一番調和が取れている状態なのではないか。

それを英語に訳すとハッピネスなのかもしれない。そういう気がしたんです。

小林：調和が取れて、心穏やかに生きている状態みたいなもの。それが治まっていること、ですね。それには環境も文化も経済も大事なんだと。幸せという言葉がないから、「あなたは、幸せですか？」ということが直接聞けずに、牛が子供を産んでよかったとか、そういう聞き方しかできないと言っていましたからね。

山村：確かに、仏教的に突き詰めると「ＧＮＨ」という概念にすら、囚われることは間違いですね。

緒川：そうですね。それから、自分の国の自然環境は、地球全体の自然環境でもあるんだという思想戦略は、もしかしたらそういう仏教的考え方の思考回路から来ているのかなとも思いました。自分と他人の区別なんかないんだよ、というのも仏教の教えの一つですから。

小林：他人の役に立つことが自分の幸せということも、そうかもしれないですね。

緒川：山村先生がブータンの観光パンフにそう書いている箇所を見つけてご指摘されていましたね。

小林：自己実現なんてことは、まだまだなのであって、他者との関係性の中に自分の存在があるということが幸せなんだ、ということですね。

緒川：考えてみれば、「他人が全員不幸で、自分だけ幸福」ということは有り得ないですからね。よく考えると当たり前なんですけれど…

小林：だけど、今の日本の幸せというのは、そういう相対的な比較の中での幸せを求めていますからね…

チミ・ラカンへお参りに行く少女たち

（4）ブータン王国調査に関する考察・検討・議論のまとめ

1）ＧＮＨの理念がブータンの観光政策に果たした役割

・ コミュニティ・ベースド・ツーリズムの大きな課題の一つは、観光開発と文化保護の両立であり、2006 年度調査では、それに成功している貴州省の少数民族の村々を訪ね、成功要因と課題の分析・抽出を行った。本年度の調査では、観光開発と文化保護の両立に成功している別の例としてブータンを取り上げ、貴州省のコミュニティ・ベースド・ツーリズムとの共通点や相違点などを検討しながら、日本の観光地域づくりにおいて応用可能なノウハウや基本的考え方を探った。

・ ブータンでは、観光分野に限らず、経済開発と自然保護や文化保護のバランスがうまく図られている。それとともに、実際に視察調査を行い、様々な関係者にインタビューを行って感じたのは、開発と保護の両立を図る観光政策も含め様々な国の政策の根底に、常にＧＮＨ（国民総幸福）の哲学が活かされているということである。

・ その要因の一つは、ＧＮＨという理念が、明快で実践的な観念であるということである(ＧＮＨの実践性については次節で述べる)。どのような政策を立案し、実施する際にも、常に最終的な目的を頭に置きながら、様々な要素のバランスを取っていくことが重要な点であるが、「経済発展」「自然保護」「文化保護」「ガバナンス」の四本柱が、国民の幸福のためにあるというＧＮＨの理念は、まさにそれをシンプルに凝縮して表現したものであり、ブータンで政治家や官僚が、常に国民の幸福のためになるか否かという視点を念頭に持って政策の立案や実施に当たるために有効な、生きた実践的な理念であると言える。

・ どこの国においても政治家や官僚は、少なくとも建前の上では国民の幸福のために奉仕する存在であるため、そうするように考えることは、一見、当たり前のことのようにも思える。しかし、一旦、国民の幸福のためには経済発展が必要であるという認識が広く共有されてしまうと、経済開発それ自体、あるいはＧＤＰや国民所得といった指標が自己目的化してしまい、本来の国民の幸福という目的は、政治家や官僚だけでなく国民でさえ忘れてしまいがちである。

・ 実際、日本をはじめ多くの国々では、経済開発を最優先させ、公害、環境破壊、景観破壊、伝統文化喪失、地域コミュニティ崩壊といった多くの代償を払ってきた。経済的には豊かになっても、本来の目的である国民の幸福が実現されたと胸を張って言える国が、世界には、ほとんどいない状況である。

ブータンの政治・宗教の中心タシチョ・ゾン

それに対して、ブータンにおいては、こうした世界の他の国々の経験を教訓として、目的と手段の転倒に大きな注意を払っていると言える。

・ ブータンの観光政策は、観光客の量を抑え、ブータンの自然環境や伝統文化を損ねないような、ブータンにとって質が良い観光客だけを受け入れる「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」政策を採っている。観光客が数多く来て、経済的に潤ったとしても、それによって、ブータンの豊かな自然環境が損なわれ、伝統文化が失われて、国民が不幸になってしまっては、本末転倒であるという考え方である。そして、その根底には、あらゆる政策の目的は国民の幸福であるというＧＮＨの哲学があるのである。

・ また、今後のブータンの観光政策の課題として、ジグミ・ティンレイ元首相（現在、再び首相）や観光関係者が挙げていたのは、現在、西ブータンや都市に集中している観光客を東ブータンや農村地域へ分散させることであったが、そこにも国民や地域住民の幸福という視点が根底にある。そのため、ただ経済格差の是正のための方策を挙げるだけでなく、地域住民が自分たちの地域に「センス・オブ・プライド（自尊心）」を持てるような価値付けを行う必要があると力説していた。幸せというものは、モノが豊かになるだけでは不十分であり、心も豊かにならなければならない。そういうＧＮＨの哲学が常に頭にあるために、「モノの充実」だけでなく、「心の充実」も決して忘れられることがないのである。

・ ＡＢＴＯ（ブータン旅行業協会）事務局長へのインタビューでは、2006 年度から開始したコミュニティ・ベースド・ツーリズムのプロジェクトについて聞くことができたが、そこでも、観光収入を地域住民に配分・還元するというコミュニティ・ベースド・ツーリズムの手法の基本だけでなく、自分たちのコミュニティに関することは、住民自らが決め自ら責任を負うというあり方を根付かせようという姿勢が見られた。

・ それは、地域住民の経済的豊かさの獲得という一側面の観点からのみ、コミュニティ・ベースド・ツーリズムを見るのではなく、地域住民に自立性・自律性を持たせることによって、コミュニティの持続可能性を確保する狙いだと思われた。経済的に外部に依存するようになると、援助する中央政府や支援機関、あるいは観光動向といった外部要因に左右され、結果としてコミュニティの自立性・自律性を失う傾向が一般的であるからである。

・ “国民総幸福”という概念は、“幸せ”という抽象的かつ理想的な概念を扱っているため、現実性を欠いた、ふわふわした夢物語か単なるお題目のようにもイメージされやすいが、ブータンに実際に足を運んでみて感じたのは、以上のようなＧＮＨの極めて実践的な側面であり、またその哲学が実際に有効に活用されている現実であった。そして、それは観光政策やコミュニティ・ベースド・ツーリズムにも応用されていたのである。

2）ブータンの観光の成功要因

・ ブータンの観光の成功要因は、観光政策をはじめとする観光分野の中だけに求めることは難しい。ブータンの観光魅力の大部分はその豊かな自然環境と伝統文化にあり、それらがうまく魅力を失わずに保全されていることは、開発と保護を両立させる国の根幹的な政策や、インドと中国という大国に挟まれた地政学的条件などにも密接な関係があるためである。そのため、本調査では、観光分野の現象だけに囚われず、少し視野を広く持ちながら、ブータンの観光の成功要因を分析する。

①“ＧＮＨ”の哲学のわかりやすさと実践性
②社会変化を先取りした規範醸成の学校教育化
③危機及び反面教師の現前性（ネパール、シッキム、チベットを他山の石として）
④援助と自立を両立させるバランス感覚
⑤「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」観光政策

①“ＧＮＨ”の哲学のわかりやすさと実践性

・ 国民の幸福を実現するためには、「経済発展」「自然保護」「文化保護」「ガバナンス」の４本柱の間のバランスが必要というＧＮＨの哲学が、政治家や官僚に広く浸透している。
・ この哲学は、市場原理至上主義にも、過激な自然保護主義や過度の伝統主義にも傾き過ぎず、適度なポイントを国を挙げて考える思考回路や理路を提供しているだけでなく、非常にシンプルでわかりやすい哲学であるため、政治家や官僚だけでなく、国民に広く知れ渡り、かつ誰でも常にこの４本柱を思い浮かびさえすれば、具体的な施策や行動の指針になりうる極めて実践的な哲学となっている。
・ また、「経済発展」「自然保護」「文化保護」「ガバナンス」それぞれが自己目的化せず、それらは「幸福」を実現するための手段に過ぎないことも意識され、国民や地域住民不在の経済開発、自然保護、文化保護、治安維持なども避けられることになる。
・ 観光に関する事項についても、ただ「観光客数の増加」「外貨の獲得」「地域経済の活性化」「文化財保護」「自然保護」といったようなことがらそれ自体が自己目的化せず、「国民や地域住民にとっての幸福のために、如何なるバランスを取りうるか」「どのあたりが適度なのか」を考えるような思考回

ＧＮＨの理念も示す四友人の絵

路が形成されている。これにより、無理な開発による自然破壊や伝統文化喪失、過激な保護政策による特定エリアや文化財からの人間の排除といった観光魅力を削ぐような事態が、自然と避けられることになる。

・ ブータンでは、伝統的建築方法について「自然保護」と「文化保護」がバッティングする場面もあった。従来のブータンの建築物は木造であるが、建築件数が年々増えていることもあって、森林資源の減少が心配される事態となったのである。その際に、伝統文化の継承や景観保全の点からは好ましくはないが、屋根だけは、腐食のために２年で葺き替える必要がある木材に代わりトタンを用いることとし、屋根用のトタンを無料で配布している。この措置は、森林資源の問題がクリアされるまでの暫定措置であるとのことだが、「自然保護」と「文化保護」のどちらか一方に傾くことにより、全体としてのＧＮＨを損ねないためのバランスを考えた措置であると言える。こうしたバランスを取る措置は、ＧＮＨの４本柱のいずれの間でも想定できるものである。

・ なお、この“ＧＮＨ”の思想自体も、行き詰った現代社会の処方箋として知識人を中心に海外の人々を大きく惹きつけ、ブータンに来たいと思われるアピール・ポイントとなり、観光魅力にもなっている。実際、観光局でも、外部から研究者などを講師として招いたり、ブータン人が講師になったりするなどしてＧＮＨを学ぶような旅行商品づくりを検討していた。

②社会変化を先取りした規範醸成の学校教育化

・ ＧＮＨの根底には仏教の教えがある。こうした仏教やそれをベースとした規範は、これまでは伝統的な家庭や地域コミュニティ、その中心的な寺院や僧などにより、ロジックや理論ではなく、非言語的な身体感覚や、非論理的なことわざなどによって伝えられてきたと考えられる。

・ そうしたコミュニティをベースとした規範や伝統は、近代化や都市化、農村から都市への人口集中などにより、継承していく力を弱めあるいは失われていく可能性が高い。しかし、ブータンでは 1970 年代に鎖国から開国へと方針を変え、徐々にではあるが近代化を志向し始めたときに、既にこの将来の社会変化を見越して、社会規範を維持するために必要な規範を、学校教育の中で教えられるように図ったと思われる。

・ その場合、従来の伝統的な非論理的方法による伝承だけでは学校教育には馴染まないし、近代的、西洋的な自然科学のもたらす論理に対抗しえない。そのため、民衆レベルでは情緒的に信仰されてきた仏教ではなく、論理学を重視する本来のチベット仏教のロジックが導入されたのではないかと考えられる。

・ 若者の信仰のあり方は従来とは変わり、様々な教えに「なぜ？」を問うようになったと言われる。近年の若者の服装や礼儀の乱れも指摘されているが、仏教の本質的

なところは信仰されているとも言われており、信仰の形は変われども、信仰の伝承、それによる社会規範の維持がなされていると思われる。同様に、形は変われども自然環境や伝統文化を保護するマインドも引き続き継承され、経済的な豊かさや外からの刺激を求めることに一定のブレーキを果たすことにもなる。

③国防危機及び反面教師の現前性（ネパール、シッキム、チベットを他山の石として）

・ このようにＧＮＨの哲学や仏教の教えは、ブータンの社会に大きな役割を果たしていると言えるが、そうした抽象的な教えだけで、高度な自文化重視の姿勢や意識を国を挙げて維持しているとは考えにくい。文化保護や環境保護の必要性を感じる具体的実感を提供しているのが、近隣のネパール、シッキム、チベットの例であり、これらの地域名（旧国名）は、ヒアリングでも頻繁に聞かれた。
・ すなわち、自らの国のアイデンティティを際立たせて自立した独立国であることを国際的にも強くアピールしていかないと、チベットやシッキムのように中国かインドに併合されるという危機感や、ネパールのように外国からの観光客、援助、文化を一方的に受け入れ過ぎると、自然環境や伝統文化が損なわれ、ひいては秩序や王国が崩壊しかねないという危機感である。
・ そうした近隣地域は、古来からブータンと人々の往来も多く、交易、宗教、縁戚関係などを通じても強い繋がりがあった地域であり、身近な存在だった国々が次々と消滅ないしは混乱をきたしている状況は、皮膚感覚に近い形でブータンの政府や国民に感じられているものと思われる。
・ ただし、こうした危機感から、伝統文化保護や環境保護を自国防衛の国家戦略として構築したのは、ブータンの国王と政治家の優れた戦略によるものである。決して、はじめに伝統文化保護や環境保護ありきで、そのためにこうした危機の現前性を意図的に利用したわけではないが、結果的には、それがブータンの伝統文化保護と環境保護の強いモチベーションとなっている。
・ 伝統文化保護に関しては、それが建築物の伝統的デザインへのこだわりや伝統衣装であるゴやキラの着用という“アイデンティティの見える化”により強い表現力を保持している。伝統的なデザインにはコストがかかるにも関わらず、「でも、伝統的なデザインの家がなくなったら、ブータンだかインドだかわからなくなる。」（平山修一『現代ブータンを知るための 60 章』明石書店、2006.2、P228）とブー

ダツェ（弓）を楽しむ人たち。伝統衣装は常に着用。

タンの建築家は明確な危機意識を持っており、国民レベルでも伝統衣装であるゴやキラを多少のアレンジを加えながらも着用し続けている。

・ このようにブータンの伝統文化保護や環境保護の政策は、単なる観光資源の保全とは次元が異なる動機により保持されてきたものだが、伝統的建築デザインや自然環境の保全が図られることによって、ブータンの美しい街並みや田園風景、森林景観などが維持され、結果として観光的にも大きな魅力となっている。
・ こうした危機感をベースにした文化や環境の保全戦略を、他地域で応用するとするならば、従来、地域の観光振興計画などでは優良事例だけが示される傾向にあるが、伝統文化保護や環境保護を行わず、地域振興の最後の切り札と言える観光振興を行わなかったばかりに地域社会が存亡・衰退したような反面教師的な事例を、その失敗要因の整理・分析も含めて身近な地域から示すことであろうか。

④援助と自立を両立させるバランス感覚

・ ブータンでは、多くの国やＮＧＯ、国連機関、国際機関などから、様々な種類の援助を受け入れている。しかし、どういう形であれ、外部から援助を受け入れれば、援助する側の要請、指示、論理を拒否することは難しく、また援助される側も負い目やプライドの喪失を感じる場合も多い。
・ ここでも他山の石となる例がネパールである。ネパールでは、様々な国際援助を受け入れて急速な経済開発と近代化を進めた結果、そのスピードをコントロールすることができず、大規模な森林破壊や伝統文化の衰退が起こった。
・ それに対してブータンは、自国の生物多様性が豊かな森林と自然環境を守ることが地球社会に貢献することであり、環境保全政策を採ることで、森林伐採、工業開発、採鉱、観光などで得られるはずの経済発展を断念するという犠牲を払っているため、国際社会はその代償を払うべきだ、という“援助を受け続ける論理”を構築している。（参照：宮本万理「現代ブータンにおける森林政策の変遷と環境保全体制の成立」『アジア・アフリカ地域研究第 4-1 号』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、2004.7）
・ さらにその論理を国際社会にアピールすることにより、国際援助を継続的に引き出し続けるとともに、国際社会的にも名誉ある地位を築き、援助を受ける側の負い目やプライドの喪失を回避している。
・ また援助国についても、外交政策上避けられないインドを除いては、大国の援助をできるだけ避け、国連機関、ア

伝統建築物の修復作業（プナカ・ゾン）

ジア開発銀行、世界銀行といった国際機関や、デンマーク、スイス、オーストリアといった大国でない国々や、援助の代償としていろいろと注文を付けない日本からの援助を受け入れている。

・ このような援助を受けながらも自立を図るという戦略により、ブータン国内の開発を自らがある程度コントロールできたことが、無秩序な開発や自然破壊、伝統文化破壊を免れた大きな要因の一つとなっている。
・ それが結果として、ブータンの森林をはじめとする自然景観を美しく保ち、またフォブジカのオグロツル（一時は生息数が世界全体で約 1,000 羽と推測された絶滅危惧種）をはじめとして生物多様性も保全することになり、ブータンの観光資源の価値と魅力を維持・向上させることに繋がっている。

⑤「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」観光政策

・ ブータンの輸出産業の第１位は電力であるが、輸出先のインドからは借款の返済として扱われたり、ルピーとしてその対価が支払われるため、実質的には観光が外貨を稼ぐ最も大きな産業となっている。そのため経済発展のためには、何よりも観光開発と観光客の誘致に注力したい誘惑も大きいと思われる。
・ しかし、ブータンでは、観光客の量を抑えて質が高い観光客のみを誘致する「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」の観光政策を掲げ、入国する観光客には１人１泊につき一定額（2009 年 10 月現在ハイシーズンで１人１泊 220 米ドル）の観光消費を義務付ける公定料金制度を導入することにより、観光誘致と観光開発に一定のブレーキをかけてきた。
・ この高額な料金設定により、わざわざそれだけのお金を払ってでも来たいと思う観光客だけを受け入れていることになる。そうした観光客は結果的に、旅行経験が豊かで、ブータンの文化に対して理解と尊敬がある“質が高い観光客”であると、ブータンでは考えられている。
・ 逆にネパールで数多く見られるヒッピーやバックパッカーなどは、あまりお金を落とさず、代わりに仏教思想とは異なる思想や文化を無秩序に持ち込み、ブータンの伝統的文化や社会を損ねるような悪影響がある質が悪い観光客と見なされているようである。実際に、公定料金制度により、これまでそうした観光客はあまり入って来ていないようである。
・ そうした質が悪い観光客の排除や観光客数の抑制により、世界中の多くの

フォブジカ谷を眺める

観光地で見られるような観光公害は未然に防がれ、ブータンの自然環境と伝統文化が、素朴ながらも魅力を損なわずに観光資源として保全され、維持されている。

・ さらには、「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」と謳い、ある程度のレベル以上に観光客を制限する手法は、限定商品に人々が飛びつくように、成熟した観光消費者のマインドをくすぐりながら、ブータンのブランド・イメージを確立する役割をも果たしている。

３）ブータンの観光および研究の課題

①“ＧＮＨ”から思想、規範、制度への展開
②外国資本参入への対応
③ブータン社会での観光の位置づけ
④「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」観光政策と公定料金制度の今後の展開
⑤西洋主導の“グローバル・スタンダード”から、東洋の論理を包含したスタンダードづくりへ

①“ＧＮＨ”から思想、規範、制度への展開

・ “ＧＮＨ”は仏教思想をベースにしているとは言え、新たな時代の波に対応するために打ち立てられた哲学でもあるので、細かい点を見ていくと様々な矛盾点が見出せる。例えば、伝統的建築物や文化財を保護するという考え方は、あらゆるものはいつかは壊れ永続的なものは何もないとし、モノへの執着や永続性を求める考え方を戒める仏教思想とは相容れない。この点に関連して、文化局へのヒアリングでも、文化財保護の必要性を僧侶に理解してもらうことがなかなか難しいという話も聞かれた。また、同様にすべてのものはいつか形を変え消えてなくなるという考え方の延長で、ゴミのポイ捨て行動に対して、現状ではほとんど心理的抵抗を感じていない。

・ このように、「経済発展」に限らずＧＮＨの柱である「自然保護」「文化保護」は、ともに仏教思想とは矛盾を抱えている部分もある。抽象的な議論では表面化していなかったそうした矛盾も、今後、民主化、情報化、近代化の中で、よりあらわになってくると思われ、思想の強度が試されるとともに、時代に対応した新たな規範づくりや、法令などによる制度化も求められると予想される。

②外国資本参入への対応

・ 一般的にのんびりとした気質のブータン人は、勤労意欲がインド人やネパール人よりも相対的に低く、ブータン社会が経済発展のみを望むようになって、市場開放をすれば、インド人資本とネパール人労働力が流入してブータン社会を席捲していく可能性が高い。

・ 既に観光産業においても、観光業界への就職を西ブータン人があまり好まないため、ホテルや土産品店などでは、ネパール系住民が働いている様子が多く見られ、多くの国内旅行業者が海外との仲介をインド系、ネパール系に頼っているとの話も聞かれた。
・ 現在は、外国企業がブータンに進出するためのハードルが高く、出資比率もブータン資本が半分以上でないと許可されない。外国人の労働も原則として認められていないなど、外国資本や労働力の影響は限定的ではあるが、近年は、アマン・リゾート（東南アジアを中心に世界展開する最高級リゾートホテル・チェーン）をはじめ、外国資本への開放へと向かっていることは確かであり、今後、観光産業がさらに成長していく際に、外国資本の強い影響は避けられそうにない。
・ しかし、外国資本が自らの論理で主導する観光がブータンの中で高い割合を占め、外国人労働者さえ数多く働くようになり、観光に関わるブータン人が主導権を失っていけば、ブータン人が今もっているホスピタリティをはじめとした魅力の多くを失っていくであろう。
・ まだまだ観光産業が未成熟なブータンでは、外国企業の資本やノウハウの導入も必要であるとは思われるが、その一方でそうした外国資本のコントロールの手段もどこかで担保しておく必要も感じられる。

③ブータン社会での観光の位置づけ

・ ジグミ・ティンレイ元首相やブータン旅行業協会（ＡＢＴＯ）などへのヒアリングによれば、人口の都市集中や農村の過疎化への処方箋として、都市に働きに出なくても農村地域に居ながらにして稼げる手段である観光産業への期待が大きい。
・ 農村地域が観光の場となり、地域住民主体の観光が提供されるためには、地域側で観光を受け入れのための啓発や教育活動が必要であるし、ガイド養成、起業促進なども求められる。
・ また、その前提として、これまで“巡礼”を行ってはいても、まだ“観光”ということがらに馴染みがない多くのブータン国民に対して、観光の意義付けを示し、観光振興の必要性と観光産業の重要性について国民のコンセンサスも形成し、ブータン国民の観光への参画を促していく必要もある。
・ また、現在はブータン観光の目的地が、ゾンや寺院の観光や祭り見物、トレッキングに集中しているが、それを農村にも向けるために、ブータンの農村の価値付けを図る必要がある。これについてジグミ・ティンレイ元首相は、農業体験、有機農産物、健康、自然の知識豊富なガイド等を、農村の新たな価値として示唆していた。
・ また、ブータンでは土産品開発がまだ始まったばかりであり、伝統工芸品や農産加工品などを土産品として売れるようにしていくためには、まだまだ技術の向上、職人や指導者の養成、商品企画・開発などで問題が多いと感じられた。こうした観光

関連産業の育成も大きな課題である。

・ なお、現在のブータン観光の最も大きな課題の一つは、道路や空港などのインフラが未成熟なため、国内の移動に長時間かかることであるとされている。このため、ほとんどの観光客は西ブータンに位置するパロから入国し、東に向かうものの中央部に位置するブムタンで折り返して帰っている。東ブータンへの誘客のためには幹線道路の整備や東ブータンでの空港整備が必要である。
・ しかし、こうしたインフラ整備は両刃の剣である。独特の文化を持つ東ブータンの民族や集落の文化が、インフラ整備により失われる危険性も孕んでいる。しかし、観光客がまったくアクセスできなければ、観光がもたらす恩恵を受けることもできず、都市・農村格差の拡大を防ぐこともできない。こうした課題は、ブータン国内でも議論の的ともなっている。

④「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」観光政策と公定料金制度の今後の展開

・ １人１泊 200 ドル（2007 年視察時）と定められ、観光客が支払った公定料金は、そのうち、65 ドルを政府に納めるほか、さらに２％を税金として納め、また年間の売り上げに対して別途、法人税などが取られる。さらに料金の残りについても、原油高、国内ホテル料金、労働賃金及び物価上昇等によりコストが上昇し、ブータンの旅行会社の利益は非常に薄いものになっている。このため、2008 年１月、公定料金が 220 ドルに値上げされ、その後も値上げすることが予定されている。
・ この公定料金の値上げにより、今度は市場からブータン観光の質が問われるようになってくる。「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」の「ハイ・クオリティ」とは、これまで観光客の質を意味していたが、これがこれからは提供する側の観光の質を意味するようにしなければならないと、ジグミ・ティンレイ元首相やラト・ワンチュク観光局長は語っていた。それは、「ハイクオリティ・ツーリスト」から「ハイクオリティ・ツーリズム」へ、そして「ハイクオリティ・デスティネーション」を目指すということであった。観光の質を高めれば、高い料金を取れるようになり、必然的に質が高い観光客が来るようになる。そしてブータン自体が質が高い国であるという認識とブランドが確立できるようになるという考え方である。
・ そのために、ガイド、ホテル従業員、シェフなどへの研修を充実し、サービスの質の向上を図ることが検討されている。なお、ホテルに対しては、格付けなどの認定制度の導入を行い、ホテル業者などの業界自体が基準を設けて品質を管理することも検討されている。
・ しかし、現状でもガイドの質の向上を図るよりも、安く売ることで客を集めようとする旅行業者がおり、１人１泊 200 ドルの公定価格は必ずしも守られていない。公定価格を上げれば、抜け駆けしようとする業者はさらに増えることも予想され、価格設定と規制・監督は一体的に検討する必要がある。

・ また、公定料金から 35％近く政府に徴収される仕組みとなっているが、その政府での用途は不明瞭であり、一部は文化財保護などにも利用されているとされるが、十分ではない様子である。今後は観光収入が、観光の質を高めるために利用されることも求められる。

⑤西洋主導の“グローバル・スタンダード”から、東洋の論理を包含したスタンダードづくりへ

・ ブータンでは、世界遺産級と思われるゾンや寺院を多数持ちながらも、それを今も利用する人々のことを考えて、世界遺産登録に慎重な姿勢を保っている。世界遺産登録をすると、修理や改装などに対して厳しい条件があり、その建築遺産を今も利用する人にとっては、極めて不便が生じる事態となるからである。
・ しかし、世界遺産に登録しないことが逆に、ブータンの数々の文化財を、博物館の標本のようにではなく、生きた遺産“リビング・ヘリテージ”として、みずみずしい魅力を放つものにしている。
・ 見方を変えれば、ブータンでは「世界遺産登録」やそれに伴う「観光客増加」といった手段や目標が独り歩きして、本来の目的である国民や地域住民の幸福を忘れ、人々を文化財や交流から疎外する事態が、未然に防がれているとも言える。
・ そもそもユネスコによる世界遺産に関する基準も含めて、できるだけ人の手に触れないように、そのままの形での保存を主体とする文化財保護の概念や手法は、永続性がある石造建築を主体とする西洋的な考え方をベースにしていると考えられる。それに対して、木造建築や仏像をはじめとして木材を用いた文化財が多いアジアでは、修理、改築などにより、絶えず更新を行う必要がある。博物館の標本のような静態的な保存形態よりも、むしろ人々の生活と一体となる形で利用され、運営される方が、その保全技術とともに建築文化が継承され、より広い目で見た文化保護になる場合も多い。
・ つまり西洋的な基準では、そのモノ自体が古くからあるか否かが重要な基準となるが、東洋では、そのモノ自体が古い“ホンモノ”か新しく入れたモノであるかは問題ではなく、そのモノを維持していく技術があるか否かが重要になると言える。ブータンの文化財が世界遺産に登録され、現在の世界的基準という名の西洋的基準の下にブータンの生きた文化財が管理されれば、ブータンの状況にそぐわず、逆に伝統文化の断絶という事態にもなりかねない。

祭りを観覧する外国人観光客

- そのためブータンの内務文化省文化局では、世界遺産登録は目指すものの、利用者が疎外されず、自分たちが思う管理ができる体制が築けることを優先するために、非常に慎重に登録へ向けての作業を進めており、ユネスコの幹部とも議論を繰り返している。
- こうしたテーマは、ブータンの課題というよりも、日本も含めたアジアの課題とも言うべきものかもしれない。日本の場合は、伝統的な知や道徳の体系は、江戸末期の開国以降、西洋の科学や論理に圧倒され、抵抗する間もなく、むしろその急速な吸収・消化に勤めてきた。しかし、ブータン人は、西洋の論理に対抗しうるチベット仏教の論理学の素養を持ち、国際社会の中で生き抜く強度を持った論理を展開し、世界に対して臆することなく議論をして、より良い答えを得ようとしているのではないだろうか。
- 和や情緒を重視する日本では、論理を重視するチベット仏教が馴染まなかったとされるが、現代において、西洋の科学を導入しながらも東洋の風土を持つ日本は、この両者の論理を理解しうる立場にいる。ブータンを近代化の後輩と見るのではなく、西洋主導の“グローバル・スタンダード”に対抗しうる東洋の論理を包含した新たなスタンダードづくりの有力な同士として、連帯していくことが望まれる。

※「ミリンダ王の問い」ミリンダ王と仏教僧ナーガセーナの対論

- 仏教の古典『大蔵経』に収められている「ミリンダ王の問い」では、紀元前 2 世紀後半、西北インドを治めていたギリシャ人の王ミリンダと仏教僧ナーガセーナが対話をする。その冒頭に仏教僧ナーガセーナは王に対して、「賢者の論」なら対論をするが、「王者の論」を以いるなら、対論をしないと条件を付ける（『ミリンダ王の問い』中村元、早島鏡正訳、平凡社刊、東洋文庫、1963.11）。「王者の論」とは権力者の立場からの論で、一つのことだけを主張し、それに従わないならば処罰するという論理である。それに対して、「賢者の論」とは、「解明がなされ、解説がなされ、批判がなされ、修正がなされ、区別がなされ、細かな区別がなされるけれども、賢者はそれによって怒ることがありません」というようなものである。
- 「ミリンダ王の問い」は、西洋の論理と東洋の英知との対話であると言われているが、これは現在のグローバル・スタンダードとブータンが国際社会の中で展開しようとしている論理との関係にも似ている。西洋の論理は、自然科学や民主主義をベースとして、「人権」「生命」「健康」「地球環境」といった一見抗い難い絶対善（一つのこと）を、欧米中心の先進国の権力と経済力を背景として押し付け、逆らえば様々な制裁手段も持っている。それに対して仏教の論理では絶対的な前提を置かず、対話の中で真理を見出していく。

３．ニュージーランド・マオリ編

（1）ニュージーランド調査研究対象地の概要

1）ニュージーランドの調査訪問地

２）ニュージーランドの概要

項目	内容	備考
国名	ニュージーランド	
政体	立憲君主制	
元首	ニュージーランド国王 （政府の助言に基づき国王により任命されたニュージーランド総督が国王の職務を代行）	ニュージーランド国王とイギリス国王は同一人物だが、王位は独立して存在する。
首都	ウェリントン	
面積	268,680 平方 km^2	ほぼ本州＋九州の面積
標高	海抜 0m～3,754m	最高峰は南島のクック山
地勢	北島と南島の大きな２つの島と、多くの小さな島々で構成される。北島には、険しい山脈はないが、火山活動が活発である。南島の中央には南アルプス山脈がそびえ、3,000m以上の峯が 18 ある。両島とも温泉地が各地に点在する。	
森林比率	31.0％	世界森林資源調査 2005（FAO）
気候	ほぼ全土が西岸海洋性気候に含まれ、夏は涼しく、冬も極端な寒さではなく、１年を通して温暖な気候である。	
人口	4,266,000 人	2008 年（ほぼ四国と同じ）
人口密度	16 人／km^2	北海道の人口密度の約 1/4
民族構成	ヨーロッパ人 68%、マオリ人 15%、アジア人 9%、太平洋諸島人 7%　（ニュージーランド人 13%）	2006 年国勢調査 「ニュージーランド人」は、自らをニュージーランド人とする人で、そのほとんどがヨーロッパ人
宗教	英国国教会 14%、カトリック教会 13%、長老派教会 10%、メソジスト 3%、バプティスト 1%、無回答または無宗教 38%	2006 年調査
通貨	1 NZ ドル＝約 55 円	2008 年 11 月
公用語	英語、マオリ語、ニュージーランド手話	
時間帯	ＵＴＣ＋12 時間（日本時間＋３時間）	夏時間はさらに＋１時間
ＧＤＰ	1,777 億 NZ ドル（2007 年４月～2008 年３月末） （１人あたり 42,000 NZ ドル）	ニュージーランド統計局 ほぼ広島県の GDP と同規模
産業構造	第１次 4％ 第２次 27％ 第３次 70％（GDP 比） 第１次 7％ 第２次 19％ 第３次 74％(就業人口)	2006 年 米 CIA『The World Factbook』
主要産業	食品加工、木材・製紙製品、織物、機械、輸送機械、金融・保険、観光、鉱業	
主要貿易相手国	輸出：豪 22%、米 12%、日本 9%、中国 5%、英 5% 輸入：豪 21%、中国 13%、米 10%、日本 10%	2007 年 米 CIA『The World Factbook』
政府財政規模	約 5.5 兆円	2008 年度歳入 東京都予算の約８割

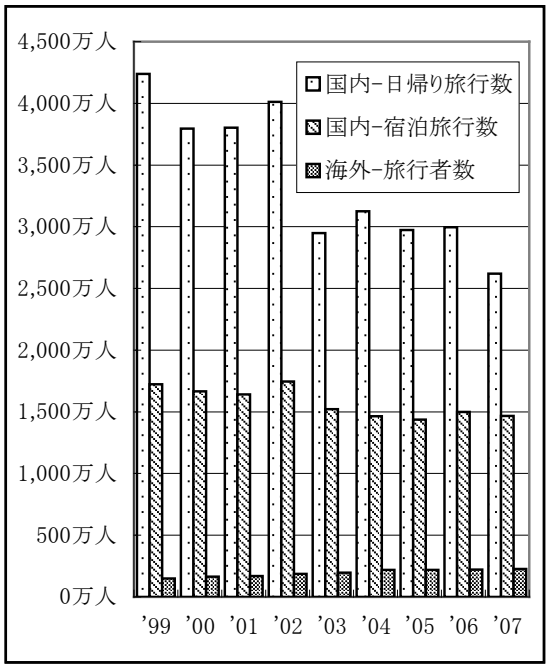
3）ニュージーランドのマオリ・ツーリズムの概要

＜ニュージーランドの観光の概要＞

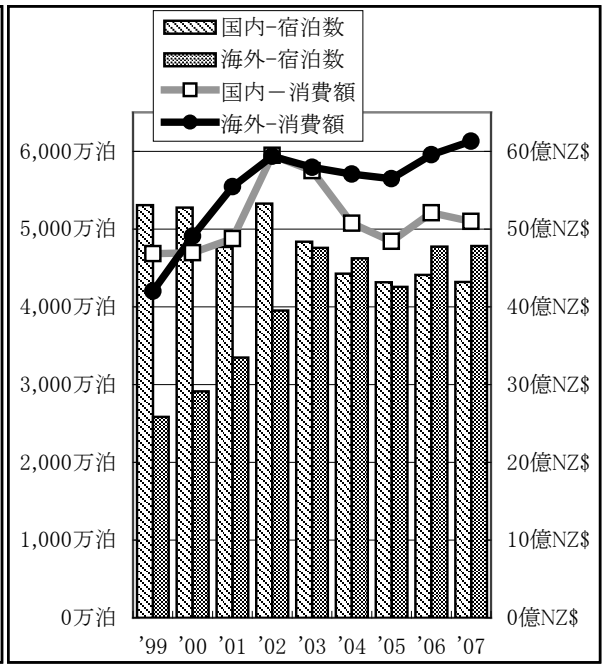
・ オーストラリアやニュージーランドでは、1950 年代末に長距離ジェット機による定期航空路線が開設されても、しばらくの間は、インバウンド観光が遅れていたが、1988年のオーストラリア植民200年祭やブリスベン万博をきっかけに大きく増加をし始めた。近年では、ロード・オブ・ザ・リングなど世界的なヒット作の映画のロケ地として有名になったことやエコツーリズムなどが、観光魅力をアピールするのに貢献している。なお、ニュージーランドを訪れる海外客の約４割がオーストラリアを訪問している。

・ 海外からの旅行者数は、ニュージーランドの人口約 430 万人に対して、約 226 万人（2008 年度）となっている。これは日帰り・宿泊併せた国内旅行者数の約 4,087 万人と比較すると 18 分の１程度（下左図）だが、海外客の増加と１人当たり滞在泊数が 17 泊から 21 泊まで伸びたこともあって、総宿泊数では、国内客を海外客が上回るようになっている（下右図。海外客の消費額は、約 61 億 NZ ドル（約 3,400 億円）と国内客の消費額約 51 億 NZ ドル（約 2,800 億円）を上回り、現在のニュージーランドの観光産業におけるインバウンドの重要性は極めて高い。

・ なお、両者を併せた観光収入はＧＤＰの約６％を占め、関連産業も含めると観光がニュージーランドにとって大きな産業であると言える。



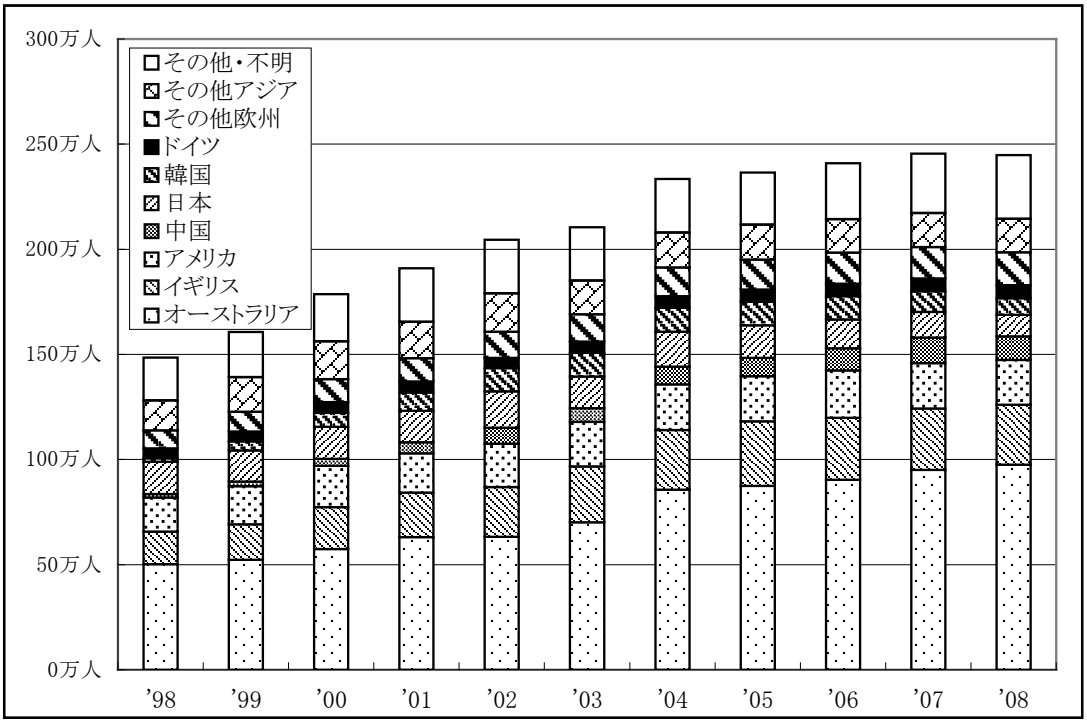
旅行者数の推移（各年４月～3 月）



宿泊数と消費額の推移（各年４月～3 月）

資料："Domestic Travel Survey","International Visitor Survey"Ministry of Tourism

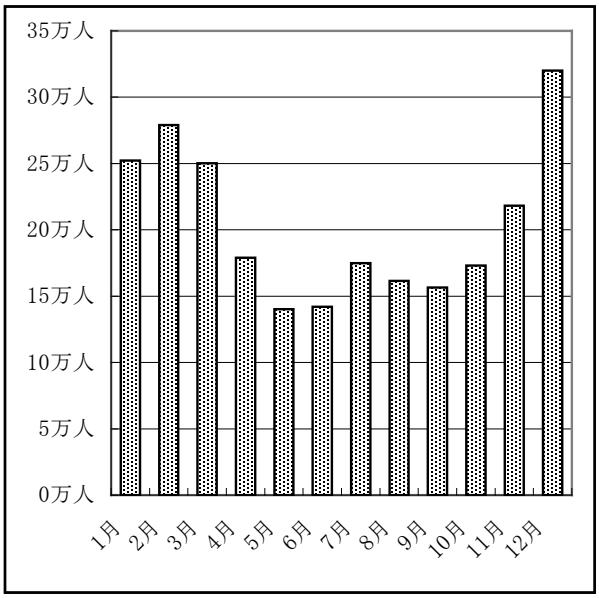
・ 海外客の発地上位５ヶ国は、オーストラリア（40％）、イギリス（12％）、アメリカ（9％）、中国（5％）、日本（4％）となっており、特に中国は 10 年間で７倍近くに伸びている（下図）。



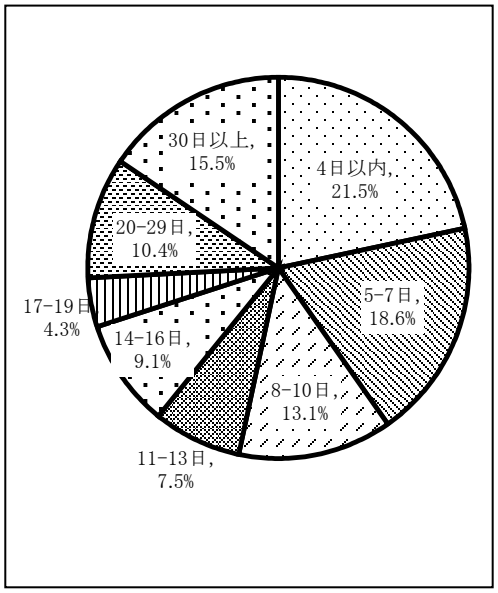
海外客の内訳の推移

資料："International Visitor Survey" Ministry of Tourism（以下、次頁図まで）

・ 時期別の海外客数では、夏季の 12 月～3 月で年間の 45％が訪れている（下左図）。
・ 滞在日数は、長期が多く、11 日以上滞在する海外客が半数近くを占める（下右図）。

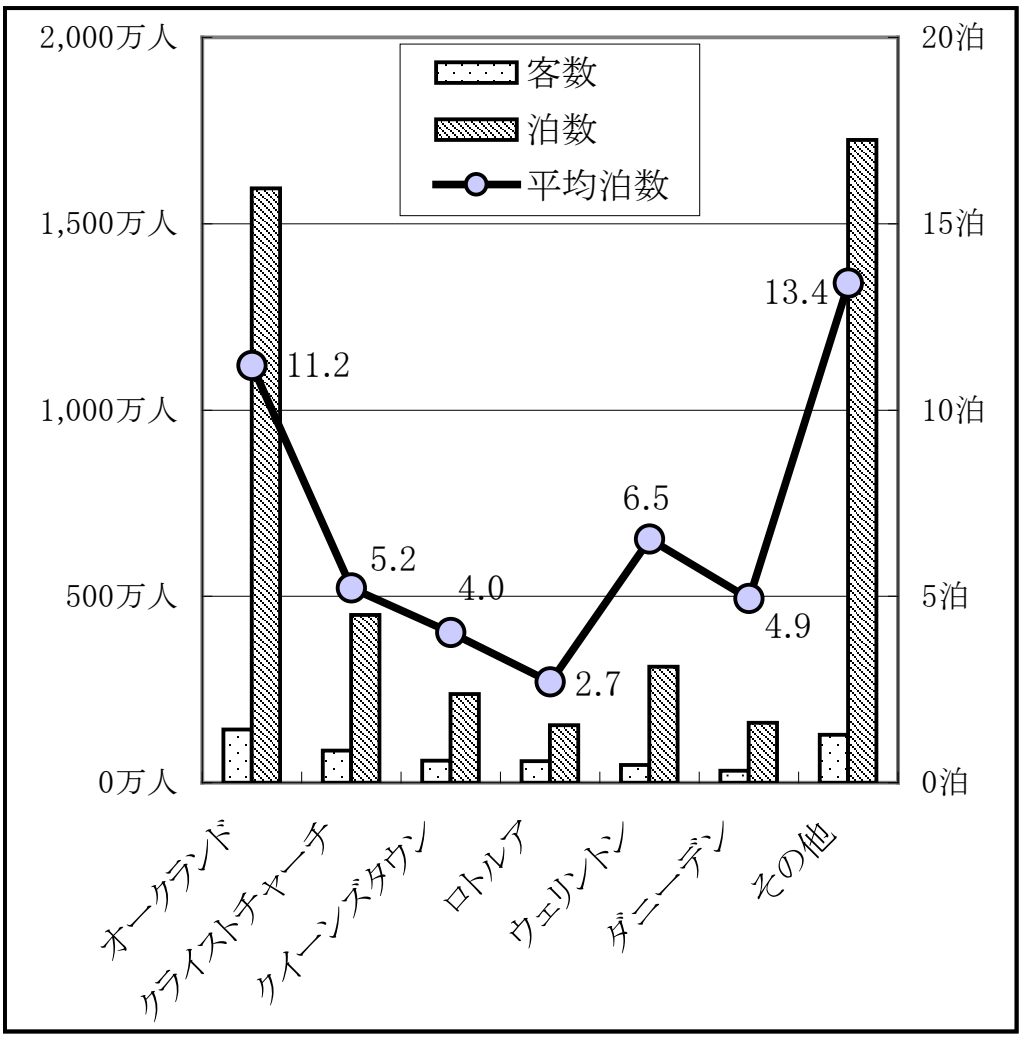


月別海外客数（2008 年）

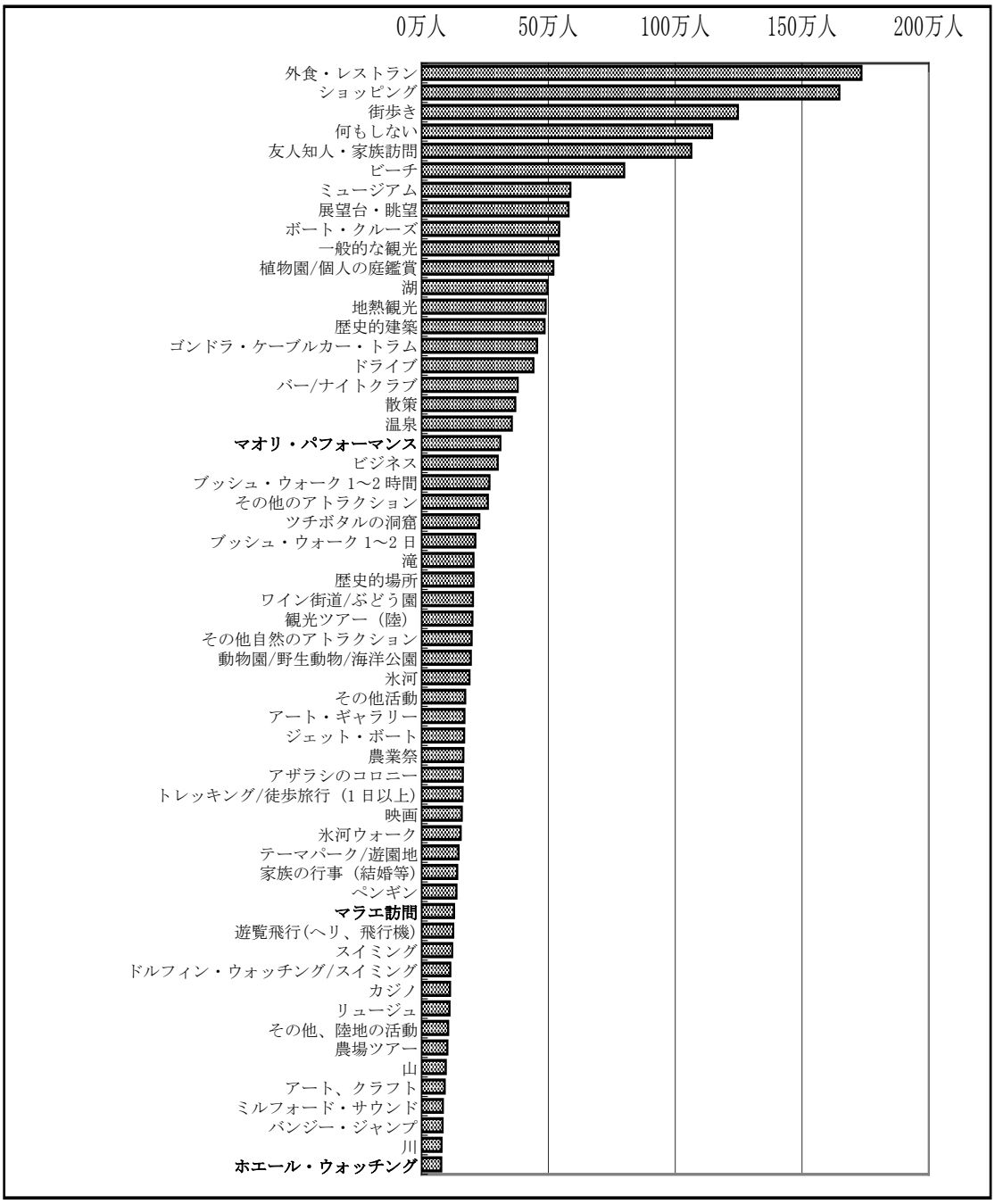


海外客の滞在日数

- 観光地別の海外客数では、大半の航空機が到着するニュージーランドの玄関口であり、また最大の都市でもあるオークランドに 142 万人が訪れ、宿泊数でも 1,600 万泊と、他を引き離して多くなっている（下図）。
- クライストチャーチ、クイーンズタウンといった大都市がそれに続き、マオリ観光と温泉で有名なロトルアは 57 万人でそれらに続くが、宿泊数は 154 万泊で、平均宿泊数は 2.7 泊と、相対的に短い。
- 海外客の活動では、一般的な観光行動に混じって、アウトドア・スポーツや野生生物鑑賞などが目立っている（次ページ図）。



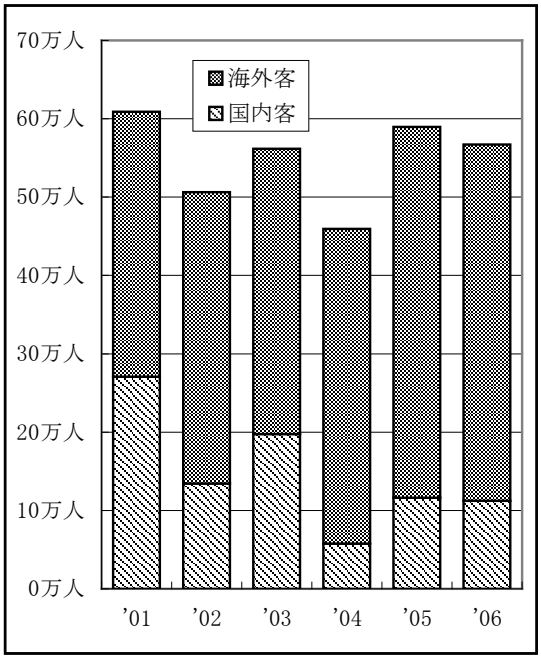
観光地別海外客数（2007 年 4 月～2008 年 3 月）



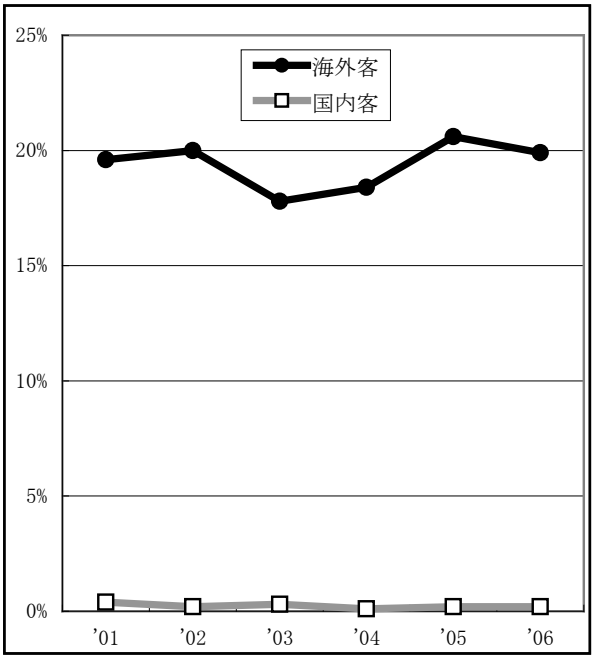
海外客の観光行動（2008 年 4 月～2009 年 3 月）

＜マオリ・ツーリズムの概要＞

・ マオリの観光の歴史は、ヨーロッパ人が到来するよりも早く、ロトルア地域の温泉の効能を求めて、全国からマオリが旅をして訪れるようになったときから始まっているとされる。ヨーロッパ人に対しても、この地に住む部族であるテ・アラワ族の伝統的な旅人の受け入れ作法の延長線上にあったようである。
・ ロトルア地域には、当時、世界八番目の不思議と讃えられたピンクテラスとホワイトテラスと呼ばれる階段状の石灰棚があり、1830 年頃からヨーロッパ人が観光に訪れるようになった（公式の旅行者の記録は 1970 年代が初。二つの自然のテラスは、1886 年に起こったタラウェラ山の大噴火により破壊された）。
・ ロトルア地域は、土地が痩せていて、アクセスも不便なため、他のニュージーランドの地域と異なり、ヨーロッパ人が移住しようと思わなかった。そのため、ロトルア地域の観光の経営は、当初からマオリのファナウ（拡大家族）やハプ（準部族）が行い、この頃からマオリのガイド業、宿泊業、土産物業が発展し、マオリ文化をベースとした歌や踊りなどのパフォーマンスも行ってきた。また、交通手配や料金設定、テラスのイメージ保護のため写真や描画の管理など、当時からこの地域の観光をうまく管理していたようである（資料：Ngaroma Tahana, Karen Te O Kahurangi Grant, David G Simmons, John R Fairweather "Tourism and Maori Development in Rotorua" Tourism Research and Education Centre (TREC) Report No. 15, Lincoln University, February 2000）。



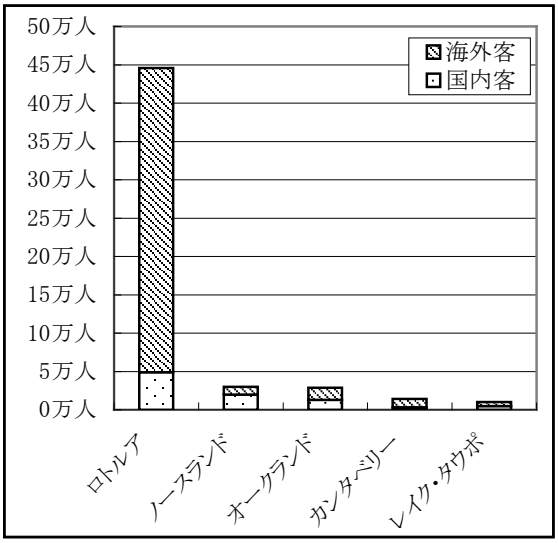
マオリ文化観光客数



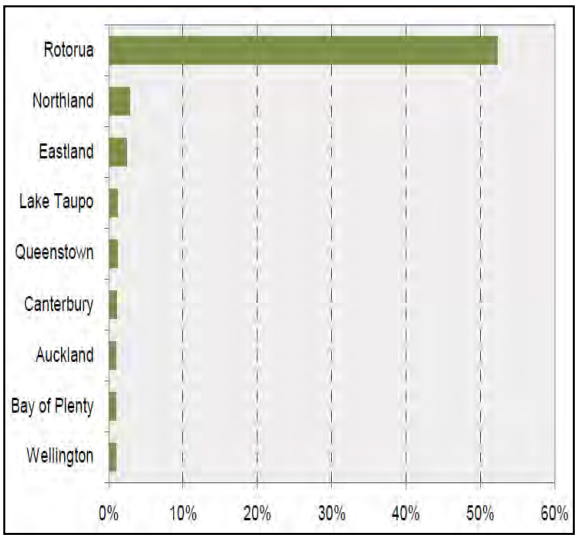
マオリ文化観光体験率

資料："Domestic Travel Survey","International Visitor Survey"Ministry of Tourism

- その後、現在に至るまでマオリ文化を資源とする観光は、ロトルアを中心としてきたが、近年、ガイドツアーやマオリ文化をベースとした新たな祭りであるマタリキ祭などが、ロトルア以外の地域で行われるようになるなど、マオリ・ツーリズムは全国的な広がりを見せつつあり、国内客・海外客合わせて、毎年約 60 万人が体験している（前ページ左図）。
- ただし、海外客がマオリ文化観光を体験する割合は 20％前後であるが、国内客はわずか 0.2％前後に過ぎない（前ページ右図）。
- マオリ文化観光を体験する地域を見ると、ロトルアが約 45 万人で全国の 77％のシェアを占める（下左図）。またロトルア訪問者の半数以上がマオリ文化観光を体験しており（下右図）、現在もマオリ・ツーリズムにおけるロトルアの地位は重要である。



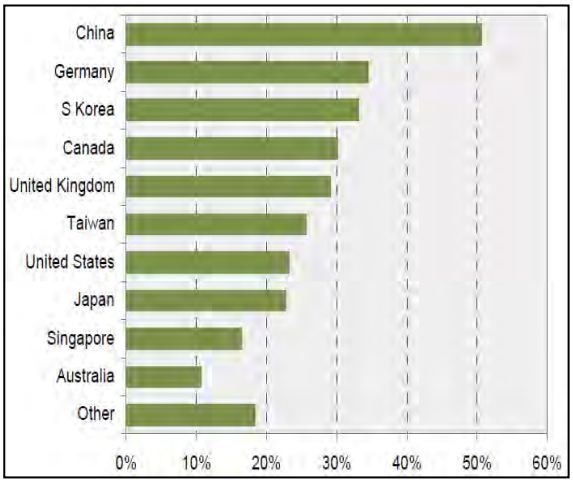
地域別マオリ文化観光客数



地域別マオリ文化観光体験率

資料："International Visitor Survey" Ministry of Tourism

- 海外旅行客の国別に、マオリ文化観光の体験率を見ると、ニュージーランドを訪れた中国人の半数以上が体験していることがわかる（右図）。
- ドイツ、韓国が 30％台でこれに次ぐが、オーストラリアは 10％程度と低い。



国別マオリ文化観光体験率

（2）ニュージーランド 現地視察調査の日程

調査旅行の期間：2008 年 10 月 19 日～10 月 31 日
参加者：北海道大学観光学高等研究センター　山村
　　財団法人日本交通公社　　小林、相澤、緒川
ガイド・通訳：藤澤ゆうふう氏(10/20～28)、加藤タカシ氏(10/29～30)
アレンジ：ジェネラル・トラベル社（ニュージーランド）

■旅程表

日付	旅程
19 日（日）	成田空港→（オークランドへ）
20 日（月）	（機内泊）→オークランド→クライスチャーチ（タマキ・ヘリテージ・ビレッジ）
21 日（火）	クライストチャーチ（タマキ・マオリ・ビレッジ創業者インタビュー）→カイコウラ
22 日（水）	カイコウラ（マオリツアー体験、旅人の木インタビュー、マオリツアー社インタビュー）
23 日（木）	カイコウラ（ホエールウォッチング、ホエールウォッチ・カイコウラ社インタビュー、カイコウラ市グリーン・グローブ 21 担当者インタビュー）
24 日（金）	カイコウラ→ブレナム→ウェリントン（ニュージーランド・マオリ・ツーリズム・カウンシル インタビュー、国立博物館テ・パパ ガイドツアー参加）
25 日（土）	ウェリントン（ピピテア・マラエ）→ロトルア（タマキ・マオリ・ビレッジ等）
26 日（日）	ロトルア（温泉観光施設ヘルズ・ゲート、トラベル・インフォメーション・センター、トゥノホプ・マラエ、ミタイ・ビレッジ等）
27 日（月）	ロトルア（マオリ美術工芸学校テプイア、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ等）
28 日（火）	ロトルア（ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ営業開発マネージャー インタビュー、マオリ語教師インタビュー）→オークランド
29 日（水）	オークランド→ワイポウア（ワイポウアの森、樹齢数千年のカウリの巨木）→オポノニ（フットプリント・ワイポウア インタビュー）→ワイポウア（ナイトツアー参加）→オポノニ
30 日（木）	オポノニ（フットプリント・ワイポウア インタビュー）→オークランド（オークランド市内喫茶店にて現地研究会実施）
31 日（金）	オークランド→関西空港

（3）ニュージーランド調査 研究会

1）現地研究会

日時：2008 年 10 月 30 日金曜日 17:00～19:00
場所：ニュージーランド・オークランド市中心部ホブソン通りの喫茶店
出席者：北海道大学観光学高等研究センター　山村 高淑 准教授
財団法人日本交通公社　小林 英俊 常務理事
相澤 美穂子 研究員
緒川 弘孝 客員研究員

○コミュニティとプライドに基づいたツーリズム

小林：今回、視察できたところはどこも適切なところでした。全体の印象をはじめに話しましょう。コミュニティ・ベースド・ツーリズムという観点から見ると、ニュージーランドは非常に参考になりました。思っていた以上に収穫がありました。マオリでは、ツーリズムの重要性の理解が進んでいました。日本では、ツーリズムに対する理解が、まだまだ表面的で、物見遊山か金儲けのツールとしてしか捉えていない人が多いと思います。最初に、マイク・タマキが、「ツーリズムは、ビークルだ」と言った話がすごく印象的でした。みんなツーリズムを通して、何をやるかということを語っていました。日本では、そういうことを語る人が、事業者や自治体にほとんどいないですね。そこが非常に勉強になりました。

それから、チャリタブル・トラスト（主に公益的な活動やそのための支援を行う非営利組織）という組織が、何度も出てきました。みんなを巻き込んで、みんなに利益がある仕組みをつくれるかどうかが、今後、日本で適用する場合の課題だろうと思います。仕組みまで、どうやって落とし込めるかを考えないと、理念だけでは、しょうがないわけで、そこが我々の課題だろうと思います。

ワイポウアの森のナイト・ツアー

私は、今回の旅でマオリの皆さんを尊敬しました。基本的に自分たちの民族や文化に誇りを持たないと観光は成り立たないと思うのですが、短い時間、特にワイポウアの森のエコツアーをやっているコロさんのところは４年ぐらいしか経っていないのに、それであれだけの自信と誇りを持てるよ

うになったというのは、すごいと思いました。そういう意味で、観光の原点に戻って、観光で何が大事なのかということを改めて確認できました。

山村：同感です。私は、全体を通じて、気になったキーワードを挙げていったら、10個になったので、それを紹介します。ざっと羅列すると、「コネクト」「パッション」「インヴォルヴメント」「トラスト」「リスペクト」「シェア」「パートナーシップ」「トゥモロー」「ビークル」「マナ」です。この中で「トラスト」には、信用するという概念も含まれているのかなという気がします。

今回の調査を通じて、最終的に日本に当てはめられるモデルをつくっていかないといけない。そのときに、トラストというのは、非常に参考になるのではないかと思います。トラストがニュージーランドでうまくいった背景には、直感的に二つあるのかなと思います。一つは、移民のキリスト教的な慈善の感覚。もう一つは、ファナウ（拡大家族）、ハプ（準部族）、イウィ（部族）に至る血縁のコミュニティに根を下ろした、自分の所属する先、魂の在り処というものがどこにあるかが、はっきりしているマオリの感覚です。家族という概念を拡張していく中で、自分の属するコミュニティをうまく理解して位置づけられるということが非常に重要だと思います。それを日本に当てはめると、我々はどちらも、非常に難しい。じゃあ、一体どうすれば良いのか、というところが議論のテーマになってくるのかと思います。

拠って立つべきコミュニティを、マラエ（マオリの集会場であり祭祀場）やファナウなどを通じて、マオリの人たちは明確に持っています。それがすごく重要だと思いました。根本的なところに家族がしっかりとあって、そして、コミュニティの最小単位の家族というところからしっかりと考えていかないと、コミュニティ・ベースド・ツーリズムというのは難しいのだと思います。ファミリー・ビジネスとか、スモール・ビジネスという言葉が、非常によく出てきました。ビジネスをしていく単位も、突き詰めるとファミリーです。それは、今後、個人単位をツーリズムが重要視していく中で、個対個の関係性を保つ上で、一番良いやり方だとおっしゃっていた方がいた。それはまさにその通りかなと思いました。その辺を考えていくと、ファミリー、ファナウ、トラストといったものを、より理解できる気がします。

ロトルア・オヒネムツのマラエ

小林：もしかしたら、逆にツーリズムが、家族の再構築のきっかけになってくれるんじゃないかとも思っています。崩れちゃったものを再構築するきっかけに、ツーリズムがなれば面白いと、ツーリズムに期待しています。正直に言って、難しい部分もあると思います

が…

相澤：私が印象に残ったのは、「プライド」という言葉です。ツーリズムが、部族の誇りを守るためのツールであるということを、何人かの方が言われていて、印象に残りました。「ペニー・ハカ（昔、西洋人がマオリの村を観光で訪れ始めた頃、村人が歓迎の踊りである「ハカ」を踊り、１ペニーをもらっていたことから、観光用のハカのことを指す）」の話がありましたが、それが恥ずべきことではなく、誇りを失っているわけでもなく、観光客に対して迎合して何かを変えているわけでもなく、やっている。逆に誇りを持ってやっているというようなことが、日本ではできていないなと感じました。部族を日本でどのように適用するかというのが難しいですね。今後どう展開していくかは、何を誇りとして共有できるかにかかっていると思います。

小林：誇りのないところにツーリズムはないのですが、そういう原点に帰らずにツーリズムをつくろうとしているところが間違っていると思います。ツーリズムは、誇りを取り戻す運動で、そういうことがぐるぐる回って行くんだと思う。ツーリズムがうまくいけば、誇りが育つし、その誇りがツーリズムの魅力になる…というように。最近、誇りということが観光において、如何に大事かということを語るべきだと思っています。今回、そういうことを感じました。

○百年後を考えるツーリズム

緒川：今回の調査のポイントを、６つぐらい考えてみました。一つ目は、小林常務がおっしゃられたことと同じなのですが、観光や地域振興よりも上位目的を持っているということです。マイク・タマキさんは、マオリ文化を伝えたいという目的が上にあって、観光はその道具だということでした。コロさんの話も、ブータンでの話に似ていると思うのですが、地域の幸福が上にあって、観光はそれを実現するための道具だということです。そういう上位の目的があって、観光に対する考え方や哲学がしっかりしています。

二つ目のポイントは、それとも重なるのですが、「観光振興」と「マオリ文化の保全」の二つのバランスを保つ感覚を持っているということです。自分たちでは、あまり意識していない、というよりも、観光が文化を壊す可能性について、あまり心配をしていない様子でした。今日、コロさんが「タイミング」とおっしゃっていましたが、もしかしたら、ラスト・チャンスだったかもしれないですね。伝統的な文化を維持する感覚をまだ失わずに持っている、自分たちの文化を守るのは当たり前だという感覚が残っている、もしかしたら最後の世代かもしれません。そういうタイミングで、自分たちで観光をマネジメントするチャンスを掴んだ。そしてそれをプライドを育てるために使ったり、若い人を育てるために使ったりした。自然との付き合い方を失いかけていた若い世代も、観光を通じて、自然との繋がりを学び直すチャンスになってい

るかもしれない、と思いました。日本では、自然との関係をかなり切り離されてしまったところがあるので、それをどうやって復活させるかという問題があるかもしれません。

小林：タイミングは大事だと思います。コロさんも、「実は 20 年前から考え方はあったんです」という話をしていました。由布院だって、本多静六が既に 80 年前に「由布院はドイツの温泉地のように、自然と村落の暮らしとを融合した温泉保養地を目指すべき」ということを既に言っているんですよね。だけど、いろんな条件が整わないと、形にならない。

今日、車の中で聞いた緒川君の話で面白かったのは、イスラエルでは、２千年間ぐらい使ってなかったヘブライ語を復活させて、今では、みんな普通にしゃべっているという話。多くの先住民族言語は危機に瀕しているけれど、百年単位でものを見て、情熱があれば、復活できると思った。その話を聞いて、タイミングというのは、与えられるものだけれど、つくることができるものでもあるということを、改めて思った。

緒川：イスラエルでも、１人の情熱ある人から始まったんです。ヘブライ語を復活させるにあたって、現代社会の新しいものに対応した単語を何万語も作ったんですね。昔のユダヤ人だったら、こういう風に新語を作るだろうと推測しながら。

小林：伝統は大事だけれど、今に生きるものにするには、どうしたら良いかということですね。それは凄いことだと思う。それに何年単位で見るか、ということですね。近い現実だけを見たら、「言葉の復活なんて、できるわけない」と言うかも知れないが、「百年単位で見たら、できるんだよ」という話ができる。文化というものは、それぐらいのスパンで見なければいけないのかもしれない。なくすのは簡単だけれど、創り出すのは時間がかかるから…

山村：昨日のナイト・ツアーでコロさんが、五百年後を考えて、カウリの木の種を蒔くという話をしましたが、その五百年という言葉が頭に残りました。普通、なかなか出てこない発想ですね。

小林：日本のエコツーリズムは、あまりそういう話をしないんですよね。南島にニュージーランドのエコツーリズムの権威がいて、そこに行くと、セルフ・ガイドの紙をくれる。それを持って歩くんですが、そこにはこう書いてあるわけです。枯れた木がある。それは多分、まだ百年後も立っている。その頃、あなたは多分、死んでいるだろう。百年後は、どうなっているか考えてみよう。あなたの人生のスパンより、はるかに長いスパンでこの森は生きているんだよ、と。そういうことを考えさせるエコツアーは、極めて少ない。昨日の夜も、哲学的な話をしていました。日本では、ある意味、知識のことしか教えてないわけです。その違いが面白いなと思った。知識なんてものは、帰るときは忘れてしまっているけれど、そこにあるストーリーは覚えている。そういう話を日本でもやっていかないと深みがないですよね。コロさんの話で、もう一つ面白かったのは、自然のパワーとかそういう話じゃなくて、「サイレンス」と言っ

たよね。「それを感じてもらえればいいんだよ」と。とかく自然の驚異とか、環境の話とか、そういうもっともらしい話になるんだけれど、静けさや暗闇を感じて、それを大事にするところから始めて、そこから自分で考えれば良いと言っていたのを聞いて、本当のエコツーリズムだなという気がしましたね。

山村：考えさせるきっかけをつくるということが、非常に大事ですね。知識を与えると、そこで思考が止まってしまいますからね。

○民の自立のきっかけとなった大不況と行政改革

緒川：三つ目は、ニュージーランドの 1980 年代の財政改革の波や小さな政府化ですが、それがかなり、大きな影響を与えたのではないかということです。実際、カイコウラでは、それがきっかけだと言っていましたが、おそらく、それが官主導でなく、民主導の大きなきっかけになったのではないかということです。チャリタブル・トラストというのも、政府ではなくて、民間の側での動きです。その頃の行政改革は、失業率が 10％を超えるなど大きな傷を残したとも言われていますが、政府は当てにならない、自分自身でやらなければならない、というところに火を点けたのかもしれないとも思います。マオリも、その頃、沢山、失業者が出て、深刻な問題になったと思うのです。

小林：それは面白い視点ですね。新潟県の安塚町も合併してなくなるというので、町全体のＮＰＯ組織をつくった。このように、マイナスをプラスに活かすきっかけにしたところもありますね。平成の大合併の悪い面ばかり言われていますが、それをきっかけに何ができるかを考えると、一つのチャンスかもしれない。

緒川：秋田県の湯沢市というところに、稲庭うどんで有名な稲庭というところがあります。そこも、平成の大合併のときに大きな町に吸収されてしまう危機感を持って、平成よりさらに前の昭和の大合併前の町村単位での自治区をつくりました。その一つが稲庭自治区です。その区長さんに、お話をうかがったのですが、小学校区単位で２千人ぐらいの今の方が、地域のまとまりがあるし、それをきっかけに、官は当てにならないから、自分たちの地域のことは自分たちで考えて、自分たちでできることは自分たちでやろうという意識が強くなってきたそうです。地域コミュニティのまとまりは、100 戸 500 人があるという山村先生の説がありますが、日本の田舎では高齢化

駅舎を利用したホエール・ウォッチ・カイコウラ社の建物

が進んでいるので、もしかしたら、マンパワーを考えると２千人ぐらいが、良いのかもしれません。

小林：私も、山村先生の“100 戸 500 人説”をあちこちで話していますが、現場でやっている人は賛同しますね。

山村：子供の頃に参加していた地元の神社のお祭りなどを考えてみても、だいたいそれぐらいの単位で動いていました。字ぐらいの範囲でしょうか。

緒川：それぐらいの規模の小学校区単位だと、子供を通じての繋がりもあるし、丁度よいのかもしれません。

小林：いろんな人が入ってきているから、昔の 100 戸とは違うのかもしれないですね。

山村：顔が見える範囲というのが重要ですね。

小林：少なくとも、あの人は同じ地域の人だなとわかる範囲ですね。

○女性がイキイキできるコミュニティ

緒川：四つ目が、女性がイキイキしている印象を受けたことでした。マオリ・イン・ツーリズム・ロトルア（マオリ・ツーリズムの地域組織）の代表の方も女性でしたけれど、マオリのコミュニティは、割とオープンなイメージを受けました。元掛川市長の榛村さんがよく言っているのは、日本の田舎のコミュニティは、女性が生きにくい場所で、だから、女性から先に出て行く。それがコミュニティ崩壊に繋がる。ニュージーランドでは、世界で初めて女性参政権が認められた国でもあるし、コミュニティの中で女性が窮屈な思いをしていない印象がありました。コミュニティが生き残るために必要な条件かもしれません。

小林：海洋民族というのは、そういう意味でオープンなのかもしれない。シルクロードなどの交易都市もオープンですね。

緒川：日本だと、過疎だから外の人を入れようと言っても、来ないですね。

小林：来ないし、入れたがらないね。

山村：今まで、あまり“コミュニティと女性”というテーマについて俎上に上らなかったですが、女性の地位というのは極めて重要ですね。

小林：特にツーリズムの分野では、女性の方が頑張っていますし、重要ですね。

相澤：ニュージーランドでは閉鎖的な感じがあまりなかったですね。

緒川：日本の田舎のコミュニティでは、女性は発言権がないのに、やる仕事が沢山あったりしますね。今の若い人たちには耐えられない…。

小林：確かに女性の地位が違うのかもしれませんね。

緒川：男たちが戦争に行っている間に、女たちがマラエで観光をやって伝統を続けるという話がありましたね。

○過去と未来を繋ぐ現世代の責任

山村：過去と未来を繋ぐという役割があるという話も出てきましたね。過去の伝統を引き継ぐのが自分の責任であり、さらにそれを百年後、五百年後に渡す責任もある。責任だけじゃなくて、文化そのものが自分の中にある。自分が生きていく中で、その自分の中の文化を何らかの形で実現していかないといけない。そういうようなものを感じました。

小林：それは、文字がなかった民族の強さかもしれないですね。今は、文字にできるけれど、そういうものがないところでは、そうやって伝えるしかないですからね。

相澤：昨日のナイト・ツアーで感じたのは、死んだ巨木のところでの話です。生と死の概念が根底にあって、引き継いでいくというところから、リビング（Living）の概念が私たちと違うのかなと思いました。死んだ人も、そこから生を与えていくというところが、伝統を受け継いでいく概念と結びついているような感じがしました。

小林：日本人も、昔は輪廻などの概念を持っていたのですが、そういうものをどんどん切り離していったのかもしれないですね。

山村：でも日本に来ている外国人観光客は、日本にそういうものを見ているところがありますね。先日、外国人向けの日本のガイドブックを読んでいたのですが、アイボなどのロボットなどの説明のところで、日本人のアニミズムと結びつけて書いてありました。日本人には、モノに魂が宿るアニミズムの感覚があるから、作業用のロボットだけでなくて、愛玩用のロボットがある、というような文章が書いてあるんです。案外、私たち自身はそれに気がついていない。

小林：気が付いてないけれど、あるかもしれないね。いろんなものに、そういうものが宿ると思ってないと、愛玩用ロボットなんてアホらしいかもしれない（笑）。

山村：西洋科学で考えると理解できないですね。そういうところを再認識して、我々自身でアピールしていくことができるかもしれないですね。

緒川：西洋人は、最初、ロボット技術に対してタブー意識があったらしいですね。何かに生命を与えるのは、神だけに許されることだということで。

小林：森林の倒木更新みたいなものを解説して、死んだものが次を育てるということなら、日本のエコツーリズムでも話をするんだけれど、それを昨日のナイト・ツアーでのように“命のジャーニー”なんだと言うと全然違ってくる。死んで、栄養が次の生命を育む、という話より、もうちょっと上のレベ

樹齢数千年の巨木タネ・マフタ

ルの話なんですよね。あれは面白かったですね。

ワイポウアの森での巨木を鑑賞するベンチ

〇文化を通じて楽しんで見る自然

山村：日本のエコツーリズムは、自然鑑賞・自然観察になってしまいますね。こちらでは、自然と人間が対等でいて、その付き合い方こそが文化である。自然を見るときは、その文化を通して見なければいけない、ということがよくわかりました。

小林：違う文化でも、その見方は自然を見るヒントになりますね。それに自然鑑賞の仕方について見ても、ワイポウアの巨木のところにベンチが置いてありましたね。ツーリズムができることは、巨木をゆっくりと感じる場と時間を提供すること。そこで、感じるのは旅行者自身、といったように。

緒川：ああいうベンチの置き方を見ると、つくり手が楽しみ方を知っているような感じでしたね。

小林：ホキアンガのホテルでも、木の下にベンチが置いてありましたね。

山村：あそこでお茶を飲みましたが、最高に気持ち良かったです。

小林：あの木も命を感じる木で、その下にベンチがあって、しかも、材質感が同じなんですよ。

山村：ベンチの背もたれが、魚の形にくり抜いてあった。

緒川：それも絵心があって良かったですね。あの場所に木があることも良いですね。私は、あの場所に木がない風景を想像したんでずが、全然ダメですね。

山村：マオリ・イン・ツーリズム・ロトルアのルネさんが、言葉が通じなくても、触ってもらって感じてもらえば良いんだと、言っていましたが、まさにそれですね。

小林：マオリの人たちに教養、素養があった。江戸時代の日本人が持っていた品格というものが、ヨーロッパなどに行っても尊敬されていたように、そういうものをマオリは未だに持っているんじゃないかと思う。私たちはそうした考え方などの芯の部分に感動したのだと思う。

山村：それは、プライドの問題でもあると思う。自分たちがマオリであることに否定的な感情を持っていたりすると、それは難しい。

〇求められるコミュニティの入れ子構造

緒川：五つ目ですが、コミュニティが入れ子構造になっているのが面白いと思いました。

アメリカの社会学者エツィオーニが発表したコミュニタリアン綱領の中で、一つのコミュニティの権利ばかりを大事にし過ぎると、下手すると地域エゴになってしまうというようなことが指摘されていました。他のコミュニティと対立することにもなります。そうした場合に、仲立ちしたり調整したりする立場にあるのが、上位コミュニティです。マオリの場合は、拡大家族である「ファナウ」、その複数のファナウからなる準部族である「ハプ」、さらにいくつかの準部族からなる部族「イウィ」というように、コミュニティが入れ子構造になっていました。そういう上位コミュニティがあると、コミュニティに問題があったときに、上の公の視点から調整することができます。公の概念も、小さいものから大きいものまで入れ子構造になっているんですね。

小林：それは面白いですね。それがないと暴走してしまう可能性がありますね。暴走しているものを止めるときに、その上のものがあるかないかで変わる…。

緒川：一つのコミュニティが健全に機能しているだけでなく、上位のコミュニティも健全に機能していないと、間違った方向に行くのを正すことができない可能性があります。

小林：マオリだとコミュニティが生きているけれど、そうでないところは、どういう風にすればいいんだろう。公益性について、日本人は鈍感なところがありますから。そういうところで、上位の公の概念がないと問題がある。上位の公の概念がないと、どこかで折り合いを付けるということができずに、個人の権利の方が正しい、というような話にもなってくる。確かに「コミュニティが大事だ」というだけでは解決できないというその視点は、大事だと思う。

山村：そのマオリの入れ子構造も非常に面白いのですが、一つの地域を見ると、そこにマオリかノン・マオリかとはまた別の切り口の、いくつものコミュニティが入れ子構造になっている点も興味深かったですね。

緒川：縦糸と横糸のような感じですね。

小林：同じ地域にいくつものトラストが重なっていましたね。ある意味、抑止力にもなっているし、互いに協力関係にもなるし、両方にメリットがある。

緒川：地域の中で人間関係が淀みがちなところに、別の切り口の組織があると、風通しが良くなりますね。

小林：コミュニティの再構築の難しさは、そこにもありますね。一つのコミュニティをつくるのでさえ大変だから。入れ子構造でつくるのはさらに大変。

山村：私の田舎では、自治会の班の下部に、10 数軒程度からなる隣保（隣組。隣保組織）があります。面白いのは、近所に某自動車の本社があるのですが、そこに転勤で転入してきた人も隣保のメンバーになる。そしてお葬式も手伝いに来てくれます。隣保の上に班があってその上に字、そして字が 4 つ集まって昔の村の単位があります。さらにこの字の単位ごとに神社があって、お祭りもあるんです。

小林：それはマラエと似ていますね。

山村：私の感覚からすると、マラエは自分の子供の頃の神社と重なるんです。境内の中でお祭りのお囃子の練習をしました。先輩や上の人から教わるんです。そういうことが、日本にもちゃんとあったと思うんですが、それが戦後、メチャメチャになってしまって、地縁社会がなくなって、会社・職場が本位になってしまった。そうすると職場は男性社会だから、当然、女性や子供が切り離される。結果、地域の中で女性や子供がどうしたら良いかわからなくなる。そのあたりが、戦後日本の大きな問題だと思います。

小林：戦争のときに、隣保＝隣組と言いながら監視組織にしてしまって、それへの反省が逆に行き過ぎたというのがありますね。

緒川：掛川市では、新幹線の駅を新設するときに、市内の各家庭が 10 万円ずつ寄付して大きな力になりました。それもコミュニティの組織がしっかりしているからです。しかし、コミュニティの縛りがキツイと、それはそれで住みにくい地域になってしまいますしね。

山村：あそこは、お金を出してない…となりかねないですからね。噂もあっという間に広まってしまいますし…。

小林：良い面と悪い面と両方ありますね。

相澤：札幌から小さな町に引っ越したときに、常に監視されているような気がすると、母は具合が悪くなったみたいですね。男の人は働いているので、職場に居る時間が長いですが、専業主婦などだと、女性は直に地域コミュニティにさらされているので、きついところがありますね。

○「エコツーリズム＝コミュニティ・ベースド・ツーリズム」となるべき

山村：コロさんに聞いた話では、ビジネスのコミュニティ、マオリのコミュニティ、地縁のコミュニティなど沢山あって、そういう人たちが集まって話し合う機会がある。いくつかのコミュニティがあって、その間で共同歩調が取れる場もある、というのも興味深かったですね。企業自体も、自分たちの利益だけでなく、その上位目的のところに利益を還元する考えがあるようでしたね。

小林：日本のエコツーリズムの会社でも、地域のためという考えはありますが、なかなか実践できないし、地域の側でも受け入れてくれない場合が多いですね。もっと地域のためにできるのに、なぜできないんだろうと疑問を持っている人が多いようです。

緒川：地域というのが、単なる行政界になってしまっているところがありますね。マオリは、何か地域というものに実体的な感覚を持っていますね。

小林：地域に対する考え方の違いというのがありますね。欧米のエコツーリズムの本に「地域のために何ができるか考えよ」と書いてあると、それは自分の仕事と全然関係

ないことでも、地域で問題があったら、それを一緒に考えることを意味している。でも日本では、エコツーリズムに直接関係するような、例えば自然の保護とか利用とか、そういう地域の問題しか考えない。その本を読んでいると、「そのコミュニティが困っている課題について、考えたことがあるか？」という質問があって、認定基準の項目に入っていたりする。それは凄いなと思った。西表島で、早くからカヌーのツアーを始めた中神明さんは、地元の公民館活動を一生懸命やっているんです。それをやらないと地域から受け入れてもらえないし、やっているうちにどんどん面白くなって、地域活動をやっている。

飯田のエコツーリズムがうまくいっているのも、地域の公民館運動がベースにあるからです。それがしっかりとしてあるから、観光が集落に受け入れられる。観光公社をつくっただけではできなかったし、やはりコミュニティがベースだなと思う。資源が特別豊かなところを除くと、エコツーリズムは、コミュニティ・ベースドでないと成り立たないと思う。環境とツーリズムに対してコントロールできるのは、地域のコミュニティがしっかりしているところであって、それがないと好き勝手やられてしまうと思う。外から来てエコツーリズムをやっている人に、「その場所に責任を持て」と言っても難しい。それで資源が荒れたら、別の場所に行ってしまうかもしれない。コミュニティの人が、「ダメだ」と言えるように、コミュニティがしっかりしたところじゃないといけないと思う。

○輸出できる“エクスポート・レディ”の観光クオリティ

緒川：六つ目は、国内市場が小さいことですね。だから必然的に海外市場を相手にせざるをえない。そうすると、最初から競争が厳しい世界に入らなければいけないので、鍛えられる面があることです。

小林：それはものすごく大事で、日本のほとんどの産業が、国内市場が大きいおかげで甘えてきたところがありますね。ところが、国際競争にさらされるようになってきた。特に観光業は、国内客しかいらないと言っていたので、国内基準でしか考えていなかった。そこは、これから変わってくるだろう。

緒川：製造業などでも、国内市場が小さい韓国が頑張っていて、世界市場で日本の企業は苦戦していますね。ニュージーランドで、お土産物を見ても、センスがあるものが多いし、世界に通用するものを考えているように思いま

ファカレワレワ村のマラエ

す。

小林：ツーリズムの範囲についても、もっと広く考える必要があるのかもしれないですね。観光客だけでなく、年に１回スキーに来る人、別荘を持っている人なども、入れて考えて良いのかもしれない。日本だとあまりそういう人たちを入れて考えないでしょう。そういう議論をしている中で、もっと広い視野で考えられることもあるかもしれない。何がスタンダードだという考え方も、変わってくるかもしれないですしね。

緒川：ブータンでも、国内市場がないに等しいから、国際的な品質基準を意識していましたね。

小林：日本の観光も、明治のときは、そうだったんですけどね。

山村：戦争が終わって、旅の大衆化が急速に起こって、それがこの数十年間続いている。でも、この状態の方がむしろ普通じゃない状態であって、これから先は以前のように海外市場を見る必要が出てくるのでしょうね。

小林：異常な状態だと思っていないのかも知れませんね。昭和のはじめの頃は、金持ちが結構、ヨーロッパに行っているんです。戦争がなかったら、上流階級の旅文化が日本で育っていたかもしれない。ところが、実際には大衆化が良いことのようになってしまった。ヨーロッパのように、上流階級の人が旅のモデルを示せれば良かったけれど、大衆の旅行の方ばかり向いてしまったから、面白くなくなったところがある。質の良い旅文化を創っていかないと、ツーリズムに対する尊敬とか、ツーリストに対する尊敬は出てこないと思う。

山村：日本のものは、ある意味、悪平等みたいなところがありますね。こちらでは、例えば、ルネさんが、マーケットを明確にセグメントに分けて考えていました。日本では、みんな、お客さんは神様だという考え方ですね。

小林：誰でもいいから、できるだけ来てくれればいいというようにね。

山村：望ましいお客さんにだけ来て欲しいと、あれだけハッキリ言っていたのが、すごいなと思いました。そういうマーケティングが、日本ではまだまだできていないですね。

緒川：特に公のセクターでは、やっていないですね。

相澤：話を聞いていると、マオリでは、結構、調査やデータに基づいたマーケティングをしていますよね。部族などを説得するときに、根拠となる資料が必要だということもあるのではないでしょうか。

小林：その気にさせるには、パッションも必要だけれど、ロジカルな部分も大事ですからね。日本はロジカル・シンキングに弱い。

山村：タマキさんが言っていた、「80％の感情と 20％のロジック」ですね。

小林：コロさんだって、ビジネスを始める前に１年間、調査をしたと言っていましたね。仕事がなくて故郷に帰ってきて、それでも１年間、ウォッチングしていたというのがすごいと思った。タマキ・ビレッジでも、ミタイ・ビレッジでも、場を盛り上げなが

ら、お客さんにどこから来たか聞いていたけれど、あれもマーケティング調査の一種じゃないかと思いますね。あれを毎日やっていれば、どこからどれぐらいのお客さんが来ているかわかりますからね。

緒川：ロトルアでは、お店でモノを買うと、どこから来たかと聞かれましたね。ロトルア博物館でも温泉でも聞かれましたし。

山村：あれはマニュアルがあるんでしょうね。

小林：そういうのは大事ですよね。みんなにマーケティングの発想を植え付けるという点で。

相澤：情熱が大事と言いながら、情熱だけじゃなくて、しっかりしていますね。

小林：それは、緒川君が言ったように、国内市場だけで成り立たないところから来ているのかもしれないですね。ルネさんが、「エクスポート・レディ（Export Ready：輸出準備完了）」という言葉を使っていたのも面白かった。日本では、絶対言わない言葉。日本では、外国から人を呼んでいる観光地やホテルを、物好きだという目で見ているようなところがある。

○仕組みではなく、“人”が動かしている観光

小林：それにしても、今回も、熱い人が多かったですね。ある程度、成功するには、情熱が不可欠なのでしょうね。ただし、仕組みが出来上がってしまった後に担当者になった人は、少し違う。同じ場所に話を聞きに行っても、どの段階から関わったかによって、聞ける話が全然違った。カイコウラでも、何のために木を植えるかといった当初の目的の話が、以前と違って、あまり明確でなかったですしね。

山村：「システムをつくってしまえば、人が代わっても、うまくいく」という考えもありますが、私はそれは違うと思います。人というものにフォーカスしないといけないと思います。旅人も、「その人に会いに行く」というところがありますから。観光は“付き合い”だと思うんです。

小林：観光は“人”なんですよね。それを“仕組み”にしてしまうとダメですよね。

山村：コロさんも、ワーキング・グループのメンバーは、現場を知っている熱い人だと言っていましたね。

小林：パッションを伝えるには、システムだけでは難しいんですね。

山村：サステナビリティを保つためには、うまくバトンタッチがされてい

ロトルアの観光案内所

かなければ、なりませんから。次の世代、誰を育てるかという意識がないと、難しいです。

小林：カイコウラでも、創成期の話を皆に伝えるようにしていくと言っていたけれど、そのときの気持ちを共有できるようにしないといけないんですよね。

〇経済と道徳のバランスを保つ“マナ”の概念

小林：国際化と繋がる話で一つ面白かったのは、ある程度、外国から人が来るようになると、あまり「マオリ文化」「マオリ文化」と前面に出すのではなくて、自然観察などの中に、さりげなくマオリ文化を入れている、という話です。

山村：見せ方の戦略性がありますね。特にマオリのような先住民族が自らを語る際、重要なポイントになるのではないでしょうか。当然、負の歴史を語る必要もあるのですが、そこを強調しすぎると、入口で興味を持った観光客が引いてしまう。そうすると、結果として良いクライアントを手放してしまうことになります。

小林：「リスペクト」という言葉には、いろんな意味がありますが、「尊敬する」だけでなく、感謝のニュアンスがあったりして、日本語よりもう少し広い意味がありますね。以前、エコツーリズムの本を訳すときに、どう訳したら良いか難しかった。「尊敬」と訳すと狭い意味になってしまうから。感謝の気持ちを持つということに近いかもしれない。

山村：すると、マオリ語の「テナコト（Tēnā koutou）」に似ていますね。面白かったのは、「マナ」ですね。権威（authority）、影響力（influence）、力（power）、威信（prestige）などを意味するようです。それと、マオリ・ツーリズム・カウンシルやルネさんが言っていた「マナアキタンガ（Manaakitanga）」という言葉がありましたね。それは調べてみると、英語では「ホスピタリティ」と訳されていました。すると、マナとホスピタリティが結びついているんですね。面白いなと思いました。

小林：それは面白いですね。ホスト側がしっかりしている。迎え入れるには、度量が広くないといけない。そういうことかもしれないですね。

相澤：ガイドの方が、テプイア（間欠泉の展望所とマオリ美術工芸学校、マラエ、野外博物館などからなる複合観光施設）ではマナが失われたから、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ（地熱を利用しながらマオリが生活しているロトルア地域の集落）の方に移ったというようなお話をされていましたね。

緒川：文化を守るときに、マナという概念が大きな役割を果たしていますね。経済だけに走って、マナがなくなったら、尊敬されなくなるというように。

小林：マイク・タマキが、ラインがあると言っていたことに関係するかも知れませんね。それを超えてしまったらダメだというようなライン。

緒川：それがマナがあるかないか、なんでしょうね。

小林：いくらビジネスと言っても、マナがなくなったら、金は儲かるかもしれないけれど、自分たちの大事なものがなくなる、というようにね。
山村：文化をどこまで商品化してよいか、その線をどこに引くかの基準ですね。
小林：そういう線が、それぞれの人の気持ちの中にある。
緒川：だから、マイク・タマキに対する評価も、人によって違うんだと思います。私は、マイク・タマキも自分の中にその基準を持っているんだと思います。他のマオリから見ると、行き過ぎだと思っている部分もあるのかもしれませんが。彼自身、宗教的な伝道活動も熱心なようですし、彼は彼なりに経済と道徳のバランスというのを考えているのだと思います。日本の場合は、経済的に稼いでいると、地域の人たちを食わせてるから、それだけで偉いかのように言われることがあって、経済と道徳が対立軸でなくて、一致して考えてしまうようなところがあります。
小林：日本では、経済的な軸が強すぎますね。金儲けすれば、地域の雇用を増やしているから良い奴だというように。全然、違う軸があって、マオリはそちらも大事にしている。
山村：上の層の責任感というか、ノブレス・オブリージュというものがありますね。マイク・タマキもそうですが、成功したリーダーは、お金を儲けたら、何か社会的に貢献しなければいけないという意識が非常に強いと感じました。
小林：当たり前にやるんだという感じでしたね。
山村：そこが戦後の日本で失われた大事なものの一つですね。
緒川：二宮尊徳の報徳思想では、「道徳のない経済は犯罪である。経済のない道徳は寝言である。」と言っています。道徳と経済の両立ですが、それは道徳を自然保護か文化保全と置き換えても成り立つものだと思います。
小林：道徳が、こちらの場合ではマナですね。自分が拠って立つべき尊厳を大事にしなければならならない。それとビジネスとの折り合いをどの辺で付けるかということ。
緒川：日本でも、報徳思想のような思想がある。まったくないわけではありません。
山村：復興しようと思えばできるはずですね。

〇観光は、ビークルだ！

小林：それと、「観光は、ビークル」という考え方を、日本でもっと広めたいですね。最終目的は、自分のところの振興だけではないんだということを、もっと考えないと。
山村：「ツール」とか「手段」という言葉よりも、「ビークル」という言葉の

テプイアの間欠泉

方が、わかりやすいですね。

小林：「運んで行くものだ」という意味でね。なるほどと思いました。

緒川：日本の場合、観光振興や経済振興の上位目的を何にするかですね。戦後、「国」を最終目的にすることがタブーになり、欧米に追いつけ追い越せが自己目的化して、それが果たされると目標を見失いました。

小林：山村先生から問題提起があったように、「地域振興」とは何かというときに、地域に金が落ちることではなくて、地域の人々がウェル・ビーイング（Well-being）になることですね。それを上位目的として持ってこないとダメですね。観光によって、皆がどれぐらい心豊かに生きられるか、ということに行き着くと思うのですが…。

山村：「ステイク・ホルダー」から、「シェア・ホルダー」へというのが、一つのキーワードになるかもしれません。「シェア」と考えると、何を「シェア」するかという問題が出てきます。それを考えると、上位目的を探せるのかもしれません。我々は、何を共有し、分かち合えるのかということ。それは文化かもしれないし、言葉かもしれないし…。

小林：その文化を生かすことによって、どういうことが起こっているかということですね。

〇明治に失われたコミュニティの中心

山村：戦争で神社が利用されなければ、戦後、文化のベースとなる良い位置づけになったと思います。

緒川：最近、南方熊楠の「神社合祀に関する意見」という文章を読んだんですが、それを読むと、明治時代に政府が、字ごとにあった神社をかなり潰して、一村一社というように大幅に減らしてしまったようですね。南方熊楠が、神社合祀に反対したのは、環境保護の観点からだけでなく、地域コミュニティが中心を失うからでした。神社は、地域コミュニティの集会場として利用されていましたし、お祭りをやればコミュニティ内で経済が循環する。そういういろんな観点から反対しています。明治時代に、コミュニティの中心となる神社を潰してしまったのは、その後に大きな影響を与えたと思います。

小林：戦後だけでなくて、明治時代の政策も尾を引いていると。

緒川：平成の市町村合併よりも、神社合祀は破壊的だったかもしれません。

小林：平成の合併にも私は反対しているのですが、逆に、大きくなってしまったがゆえに、もっと小さな単位も大事にしようという運動になれば面白いと思う。

山村：中途半端な線引きが消えて行くと考えると、昔の藩の時代の区域に戻って行くかも知れません。廃藩置県で引かれた県境は必ずしも、地域の歴史や文化を反映していませんから。案外、かつての律令国（令制国）や藩のまとまりというものが歴史や文

化、アイデンティティの依りどころとして再認識・再評価されるのではないかと思っています。

緒川：その中で、入れ子構造が出来れば良いですね。

ファカレワレワ村のマラエ

○生きた景観と“リビング・ビレッジ”

小林：オーストラリアと比べると、ニュージーランドの方が、よりコミュニティ・ベースドだから面白いですね。オーストラリアは、自然資源が凄いから、それをガイドすることに重点が置かれている。ニュージーランドは、マオリ文化を大事にしようとしているだけに面白い。

山村：コロさんが、「我々はガイドだけど、ガーディアンである」と言っていましたね。

小林：森に対する付き合い方が、元々そうでしたからね。今は、たまたま環境保全局が持っている土地だけれど、元々は自分たちの森。オーストラリアとでは、エコツーリズムが違う発展の仕方をしていると感じました。日本も、ニュージーランド型の方向に行かないと、一部を除いてエコツーリズムがビジネスとして成立しないと思う。つまり、文化であり、集落を含めて見せて行くというやり方でないといけない。それは本当の意味でのグリーン・ツーリズムですね。農業体験ではなくて、集落の自然を楽しむというように。地域文化と併せて見せないといけない。

山村：そういう意味で、温泉と文化を併せて見せるファカレワレワは、一つのモデルケースになり得ますね。

小林：白川郷も、入村料を取っていれば、もう少し違うようになっていたかもしれないですね。

山村：そうだと思います。それが日本の伝統的建造物群保存地区制度の限界かもしれません。あまりに建物や街並みに、保存の観点を集約し過ぎているところがあります。周囲の景観や水田がなかなか真っ当な評価をされない。

緒川：それも上位目的がないからですね。何のために景観を残すんだ、何のために建物を残すんだ、というところがないからですね。

山村：その議論がなされないまま、多くの地区が伝建地区になってしまった

温泉と共に生活するファカレワレワ村

と思います。

相澤：最初に保存ありきになってしまっていますね。こちらでは、保存という概念が、意識されているわけではなくて、自分たちの生活の中で、自然に守っている感じですね。

山村：必要だから、守っている。

緒川：それと、マナを守っていると、自然とそれが守られているのでしょう。

山村：ブータンでも、世界遺産に登録できるけど、我々はしない。だって、使えなくなるじゃない。というようなことを言っていましたね。

小林：だから“リビング・ビレッジ”ですね。そこで生活している様を見せていましたよね。白川郷も本来は、リビング・ビレッジのはず。だけど“合掌造り”のような“モノ”で見せるから、写真を撮るときに、そこにいる地元のお爺さんに「邪魔だから、どいてよ」となる。

山村：西洋の石造りの街並みを保存するやり方と同じなんですよね。建物は石だから、ずっと残れば良いというように。

小林：ハウステンボスもダメだと思いましたね。生活感がまったくない。ヨーロッパの町とは違いますよね。お客さんはそんなことは見抜いてしまう。人が住んでいる面白さとか、猥雑感とか。それがない街なんて、二回目は行きたくない。

山村：ファカレワレワは、「洗濯物がある風景」でしたよね。ツーリズムがある場所に、地元の子供が来て、私たちが観てるし、地元の子供たちも観て学習する。あの仕組みですよね。仕組みじゃなくて、自然とやっているのでしょうが。あれがまさに、観光を活用した文化の継承の仕組みの一つですね。

小林：だから、「自分たちは続いている」と話していましたね。「ツーリズムについて、どう思う」と聞いたら、「子供の頃からあったから…」と言っていたでしょう？あれは面白かったですね。

山村：19 世紀のガイドさんが尊敬されていましたしね。あのガイドさんたちも、みんな女性でしたね。

小林：さっきまで踊っていた子が、お店にアイスを買いに来ていたりしてね。

山村：ショーをしている人の素顔を見ることができて、そのギャップも楽しいですね。それも貴州省肇興のトン族の合唱団と同じですね。ショーをやっているときに、地元の子供が集まってきて、我々の隣に座って、一緒に歌いだしていましたね。

ファカレワレワ村の洗濯物がある風景

緒川：鼻水垂らしてね（笑）。

〇“オーセンティシティ”ではなく、“マナ”による基準

小林：アロハさん（ロトルアでインタビューしたマオリ語教師）が、タマキ・ビレッジなどでは、知らない歌をやっていると言っていましたよね。観光が盛んになると、そうやって取り入れていって変質してくるんですね。それは必ずしも悪いこととは限らない。それもトン族の観光と同じで、あそこでも周囲の地域の歌を取り入れて練習していると言っていましたよね。

山村：昨日も、コロさんが一番好きな曲というのが、かなり現代風にアレンジされた曲でしたね。マナさえ、しっかりしていれば、その線引きができるのでしょうね。我々は、コレを守っているから、というものがあるのが重要なのでしょう。

小林：オーセンティシティというのは、外の人間が評論することではないのかもしれないですね。

山村：そうですね。ユネスコの世界遺産でも、最近、「オーセンティシティ（authenticity）」と「インテグリティ（integrity）」というのがキーワードですね。

小林：アロハさんの話を聞いていて、面白いと思いましたね。自分たちがどう思っているかが重要なようですね。私などが観ると、テプイアなどは、随分と簡略化した歓迎儀式のように見えたけれど、アロハさんによると、そうでもないと言う。

相澤：マナの基準が姉妹の間でも、違っているようでしたね。

小林：姉妹が、それぞれファカレワレワとテプイアで別々に働いていましたね。

緒川：割合、大らかな部分があるのかもしれませんね。

小林：それは、生きてる文化だからなんですよ。基準をキッチリ決めて、そのラインを超えればオーセンティックだとか、そういうことをやること自体、意味がないのかもしれない。

山村：マオリ・ツーリズム・カウンシルでも、オーセンティシティという言葉自体使いませんでしたね。「インテグレイティッド・カルチャー（integrated culture）」と「リビング・ランドスケープ（living landscape）」という言葉を使っていましたね。その「リビング・ランドスケープ」は何かと質問したときに、「それぞれマナが宿っていることが、リビング・ランドスケープだ」と言っていました。ルネさんが、「私たちのビジョン」と言って挙げた５つの項目（強いリーダーシップ、質の高い体験の提供、熟練したスタッフ、相応しい顧客、持続可能なビジネスの５項目）の中にも、オーセンティシティは入っていませんでした。

小林：当然オーセンティシティと言うのかと思っていたら、言わなかったですね。

緒川：つまりオーセンティシティの基準が、形式的ではなく、感覚的に生きたものなのだということだと思います。

小林：外の人が本物かそうでないかが分かる基準があるのではなくて、自分たちの感覚の中で分かるのではないか。
相澤：失われていないから、オーセンティシティという概念が出てこないのかもしれませんね。失われて初めて、「守らなければ…」という動きが出てくるので。
緒川：基準をつくったり、明文化したりして…。
小林：時代によって変わって当たり前なんですよね。
山村：世界遺産でも、オーセンティシティというのは、保護・保全のための基準ですからね。
相澤：こちらでは、失われる危機を感じて、というのとは全く違うようでしたね。
小林：ホテルでやっているショーだって、それを一生懸命やっているんだったら、それはそれで良いというようなことを言っていましたね。
山村：そうでしたね。それも、「まがい物ではない」と言っていましたね。
小林：「あれは違う」と言うのかと期待していたのですが、違いましたね。どこまで、マナに準じてやっているかということですね。もしマナを捨ててしまったら、たとえ形だけ伝統的にやっている村の行事だとしても、実は本物じゃないかも知れない。
山村：惰性でやっているだけかもしれませんね。

〇日本が世界に示せる“マナ”は？

山村：逆にマナというものに、どうやって、気づいたらよいか、気づかせたらよいか、という課題がありますね。
緒川：それは難しいですね。意図して作ってしまうと、それは違うものですからね。
小林：それは自分たちのプライドとか誇りの中から自然と出てくる。それを壊したら自分たちではない、というようなものですよね。自分たちで、そういうところを探すしかない。
山村：アロハさんは、そういう仕事はその家族の仕事だと言っていました。お祖父さん、お母さん、私…というように、そこがしっかりしていないと、引き継げないんですね。
小林：だから、社会制度そのものや家族のあり方に基づいているんですね。「お祖母ちゃんが４人の孫を背負ってやっていたのを背中から見ていたから、できるんだ」と言っていましたね。
緒川：日本でも、職人とか京都の人などには、残っているのかもしれませんね。職人のプライドとか、家のプライドといったようなものですね。宗教的なところにも残っているのかもしれないです。神楽とか、魂を込めてやっているものも多いかもしれません。
山村：イウィなども、みんな自分の家系を辿っていけば、祖先のカヌーに行き着く。我々は、そんなことを気にすることは、ほとんどないですね。

小林：それも、マオリの特色かもしれないですね。ニュージーランドに来る前の島でも、そんなことを言っていたのでしょうか。あれは命懸けでニュージーランドに来た人たちに特有のものじゃないか。死と直面する極限の体験をした人同士の繋がりというのが、ずっと生きている気がする。

山村：面白いのは、自分たちのルーツを言うときに、「島」じゃなくて、「カヌー」を言うところですよね。日本も、２千年ぐらい前に舟で流れ着いた人が一杯集まっているはずなんです。それが、あまりにも古いので、消えてしまったのではないかと思いますが。

〇公の概念を醸成するマオリのコミュニティ

小林：もう一つ面白かったのは、タマキ・ビレッジが、成功モデルとして見られているかと思ったら、必ずしもそうでないというところですね。日本の感覚で言えば、ヒーロー物語だけれど、一般の人がそうでもない価値観をしっかり持っているところがすごいと思った。

緒川：そっくり真似しようという発想はなかったですね。

山村：いくつかのマオリのビジネスを見ても、お互いのマーケットを侵食しないようにしていましたね。

緒川：カイコウラでも、そういう話をしていましたね。

相澤：他のビジネスもできるけど、敢えて手を出さないと言っていました。

緒川：あれも、自分たちのビジネスを一つ上の視点から見ていますよね。自分の取り分はここで、他の人の取り分はあそこだから、そこには手を出さないと。不思議に思ったのは、なぜみんなそういう上の視点を持っているんだろうということです。

小林：それは、コミュニティの入れ子構造があるからでしょうか。

緒川：ホエール・ウォッチ・カイコウラは、53％の株をハプで持ち、47％の株はその上のイウィで持っていましたね。それも、そういう視点が入っているんでしょうか。自分たちの準部族だけで分配するのではなくて、もう一つの上のレベルの部族レベルでも利益を分配するという意識もあるんでしょうか。

山村：コロさんの話からも、そういうところが感じられました。集会で集まる人たちが、補完関係とか相互関係をつくっていく。自分たちの利益のためではなく、地域に雇用を如何にしてつくってあげるかが、自分たちの仕事だとおっしゃっている方が、今回、かなりいらっしゃいましたね。

小林：ホエール・ウォッチング・カイコウラも、最初はみんな無給で手伝っていたというのも、凄いと思いますね。

相澤：部族があったから、部族を守るために家を抵当に入れてまで、できたのかなと思います。それを日本でやるとしたら、どうしたらよいのか。部族じゃなくて、地域だ

けだったら、そこまで強く思えたのかどうかはわかりませんね。

緒川：そうかもしれませんね。血というものが持っている、マナというか、精神性というか。

○日本の新しいコミュニティの形成

山村：日本だと、血縁的なものは難しいと思いますが、最近、京都で面白いことがありました。祇園祭の担ぎ手がいなくなって困っていた町が、町内にオフィスを構えている会社に「神事当番」を任せることになった。会社がコミュニティに加わったわけです。祭りを守るというのが、一つのキーになるかもしれませんね。

小林：青森のねぶた祭りも、企業がお金を出したりしていますよね。元々、祭りは、講の組織のようなもので、お金を集めて参加したりしますよね。祭りのようなシンボリックな結びつきというものが、大事かもしれないですね。

緒川：マオリのような血縁コミュニティを、そのまま日本に導入するのは難しいとは思います。韓国や中国は血縁を大事にしますが、元々、日本の場合は、血の繋がりよりも、家の方を大事にしていました。家を守るためには、血縁と関係ない養子を連れて来たりしていました。だから、日本には元々、血縁でないものにも身を捧げるという発想があるんだと思います。それが戦後、会社になったのでしょうが、それをうまくつくり変えれば、人の繋がりの仕組みができる可能性はあるのだと思います。血縁が、さほど重要視されないことが逆に幸いするかもしれません。

山村：それはあり得ますね。

小林：職縁の次の概念がつくり出せるかだね。

山村：職場コミュニティ絶対主義をどう崩していくかが、次のツーリズムを考えるヒントかもしれません。

小林：会社中心というのは、戦後作り上げられた虚像なんですよね。地縁や血縁の次のものを職場に求めて、それも幻想だった言ったときに、次に何が来るかです。

緒川：今は、終身雇用と年功序列が崩壊していますから、次がないと危ない状態にありますね。

小林：拠り所がないですからね。一つは趣味縁でしょうか。

緒川：ネット・コミュニティを育てていくということもあるかもしれません。

山村：ネット・コミュニティは、まだ個人がそこに拠って立てるかと言うと弱過ぎますね。

緒川：そうですね。

山村：家族というところに戻るのかもしれないですね。

小林：もう一度、そういうところを大事にしないと、組み立てられないかもしれないですね。

山村：おそらく、若い人たちが、カップルとか、子供連れで旅行に行き始めているのは、そういうところを感じ始めているからかも知れないですね。

小林：どう考えても、最小ユニットは、家庭ですからね。あるいは、もっと「個」がしっかりしていたら、いろんなカップルの形もあるのかもしれないけれど。

２）事後研究会

日時：2009 年 9 月 8 日火曜日 14:50～17:10
場所：財団法人日本交通公社 会議室
出席者：北海道大学観光学高等研究センター長　石森 秀三 教授
北海道大学観光学高等研究センター　山村 高淑 准教授
財団法人日本交通公社　小林 英俊 常務理事
黒須 宏志 主任研究員
相澤 美穂子 主任研究員
緒川 弘孝 客員研究員

○国の大きさと自立心、責任感

緒川：まず、今回の調査対象であるニュージーランドという国を見た場合、人口が約427 万人で四国程度、ＧＤＰは広島県と同程度、政府財政規模は東京都の約８割と、総じて小さな国であることも、前提として考えた方が良いのかなと思います。国力が大きいとは言えませんので、人々が国に依存するにも限度があり、民間が自立的にやろうと意思を持つ傾向にも関係してくるかもしれません。

小林：国の大きさという話は面白いと思う。“小さい”ということにも、意外と意味があるのかもしれない。日本の様々な産業が、世界で伸び悩んでいる一つの理由として、日本の内需が大き過ぎたということもある。１億２千万人以上の人口があるから、その市場だけで今までそこそこ食ってこられた。携帯電話が典型で、日本の企業は国内市場だけで何とかなって来たから、逆に外の市場に対応して来なかった。それが、フィンランドのノキアなどとの大きな違い。観光でも、とりあえず国内客だけで食えるから、インバウンド観光にもあまり対応して来なかった。

緒川：ニュージーランドでは、旅行者数では国内旅行者が当然多いのですが、2000 年代になってからは、総宿泊数や総消費額で、海外客が国内客を上回るようになりました。

小林：ブータンも人口 70 万人ぐらいの小さな国だったし、インバウンドの重要性が日本とはまったく違いますね。３年間の議論で、コミュニティの適正規模という話が何度か出ましたが、「自分たちの文化だ」「自分たちの国だ」という意識を持っている範囲なども考えると、国の規模の話も面白いと思う。

緒川：ブータンでは、官僚やエリートの人たちの優秀さが目立ちました。自分たちが何とかしないと、この国はやっていけない、という意識が強いのだと思います。それは国が小さく、国民１人１人に掛かってくる部分が非常に大きいということがあるのだと思います。日本ほど国が大きいと、大学を出たぐらいの人間１人が、どうこうしよ

うと、それで国が左右されるという意識はないと思います。

〇観光振興は、「手段」であって、「目的」ではない

緒川：今回の調査で、まず印象的だったのは、我々が会った人たちが、みな観光振興を手段に何を実現したいのか、という目的意識が明確だったことです。

黒須：貴州では、「観光を本業にしない」「農業が本業である」「観光を本業にした途端におかしくなる」という意識がありました。郎徳上寨などがそうでしたね。

小林：コミュニティ・ベースド・ツーリズムに共通するものとして、そういうことがあるのかもしれないですね。日本の伝建地区では、ほとんど土産物で食っているところがある。ああいうのは、どうなんだろうと思う。時間が経てば、破綻して来るのではないか。地域の生業と観光が通じるという視点が大事だなと思う。

緒川：日本の場合は、目的と手段が逆転したり、手段が目的化したりする傾向があります。

黒須：観光振興が最終目的になってしまっているということでしょうか。

小林：ただし、それを言い過ぎて誤解されると困りますね。「観光を専業とする人が誰もいなくて良いのか」と言うと、そうではない。例えば、全体をプロデュースする役割の人は、専門としていた方が良い。だから、観光振興を目的としてはいけないという言い方と、観光振興より上位の目的が必要という言い方で、若干、ニュアンスが違ってくるかもしれないですね。

黒須：観光振興を主目的にしてはいけない、ということでしょうか。

小林：そうですね。あまり極端な言い方をすると、今までやってきたことを全否定されるように捉えられて、混乱するかもしれない。

緒川：観光を手段として、「地域の人々の幸福」を目的とするならば、観光振興は、それを達成するためのサブの目的だ、という言い方はできますね。

石森：日本政府は、“観光立国”を打ち出したけれど、“観光立国”を目指した途端に観光はダメになるという議論なんですよね（笑）。それは、新しい政権に提案しなければいけないと思っている。観光立国は手段であって、「暮らしと命が輝く国づくり」のために観光をやるのだ、というように。

小林：「住んで良し」とは何か、とか、「地域が元気」とは何かとか、そういうところも、もう少し明確にする必要がありますね。「豊か」と書くと、とりあえず皆が納得するから書くというのではダメで、「豊か」とは何かと書かないと。

黒須：「暮らしと命が輝く国づくり」というのは、ホストとビジターの境界線が曖昧になって行く中で、石森先生が、以前、おっしゃっていた、「ビジター自身が輝く観光」に通じるのかもしれませんね。

小林：「命」というのは、時間の流れの中で存在するのであって、瞬間で切っても存在

しないもの。「命が輝く」というのは、生命が“動的平衡なシステム”であることを前提として考えないといけない。

石森：「観光立国」は、あくまで手段であって、それが目的化しているから、おかしいのでしょうね。

小林：だから、数値目標を出して１千万人だとか２千万人だとか言う話になってしまう。

〇伝統を守る“マナ”の概念

緒川：今回、観光と文化保全のバランスという視点で大きなヒントとなったのは、マオリの人々が持っている「マナ」という概念でした。観光事業で、マオリ文化が守られているかどうかを聞いたときに、マナがあるか否かが判断基準のようでした。文化伝承は、形式には囚われず、ホスピタリティ精神を表現する価値観“マナアキタンガ”を伝えれば良いとしていました。

小林：「オーセンティシティとは何か」という議論がありますが、それは外の人が決めるものではないと言えますね。マオリの人たちは、自分たちで、マナがあるかどうかで、判断することができる。現地である観光施設について、「本物性を失っているのではないか？」と聞いたときに、「マナがあれば、それが本物なんだ。」「丁寧にやっていても、マナがなければ、形だけなんだ。」というようなことを言っていました。最近、歌舞伎役者も、同じようなことを言っているのを聞きました。歌舞伎で伝承されるのは、“性根”だと。役を演じるときに、どういう性根でやるかを伝えるのであって、形を伝えてしまうと、どんどん崩れてしまうと。性根がちゃんと伝わっていけば、それぞれの人が、その性根に沿って、どう表現すれば良いかを考える。それは時代によって変わっていく。しかし、性根は変わってはいけない。形だけ伝えると、伝わって行く中で変わってしまうと。マオリにおけるマナと、日本の歌舞伎の性根は似ているなと思った。

緒川：歌舞伎も、どんどん新しいものを取り入れていますものね。

小林：けれども、芯の部分が変わらない。その変わっていけないものが、性根だと。面白いと思った。

黒須：貴州でも、「文化というのは博物館に入れて保存しておくようなものではない。創造的に変わって行くべきものである。」と言っていましたね。とにかく形式を保存するようオーセンティシティを外部から押し付けるのではなくて、受け継ぐ人たち自らによってしか文化は守られない。守るべきものは、人間の内部にしか求めることはできなくて、表現の形は変えながら受け継がれるということだと思います。

小林：重要な点で、これも“動的平衡”と言えるものかもしれないですね。

相澤：人間というものも、細胞や内部の物質もすべて、どんどん入れ替わっていく。その平衡状態が人間なんですね。しかし、人間は魂を持っているので、「その人だ」と

いうことは変わらないわけです。それと似ていますね。

小林：人間は、“モノ”ではなくて、“状態”のことなんですよね。

黒須：目で見ると静止しているように見えるけれど、実は絶えず動いているということですね。

石森：その“魂”というものが重要ですね。マナも、魂に関わるものですからね。しかし、医学でも、身体的な部分しか見ようとしないところに問題があります。人間は体と心と魂が一体のものであるべきなんです。ＷＨＯでは、1948 年に健康の定義として、「身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態」を挙げて、心の部分も入れているんですね。そして、1999 年の定義の変更では、「身体的・精神的・霊的・社会的に完全に良好な動的状態」というように、“スピリチュアルな（霊的な）”要素も取り入れた。マオリの人たちは、パケハ（白人）の人たちと変わらない容貌や生活の人たちもいますが、明らかに違うものがありますね。マナは、一つの表現として、電流みたいなものです。触れると痺れるようなものです。強いマナを持っている人を、直接触れることはできないし、強いマナを持っている人は、自分の手で食べ物を食べてはいけないんです。他の人が、棒に串刺しにしたものを食べさせてもらわないといけない。チャールズ皇太子がニュージーランドに来たときも、マオリは彼に対して舌を思い切り出して威嚇するような動作をしていましたが、あれも皇太子という強大なマナを持った人間から自らを守る行為です。そういうマナというものは、今も、脈々と受け継がれていて、それがマオリたらしめている。

小林：我々が会ったマオリの人は、ある観光施設について、「人は沢山来ているかもしれないけれど、マナをなくしている」という表現をしていました。日本の観光を考えたとき、誰もそんなようなことを言う人はいないですよね。

石森：でも、魂に触れたら、魂が震えるということが起きる。

小林：日本の観光では、そういう概念はなくなったのでしょうか？

緒川：四国のお遍路や昔の伊勢参りでは、もてなす側のホスピタリティ精神として、“マナアキタンガ”に似たようなものは、あったのではないでしょうか？

小林：もてなすこと自体が、もてなす側の功徳を積んでいるということですね。

○日本を日本たらしめているものは何か？

山村：石森先生が「マオリたらしめているもの」ということをおっしゃいましたが、我々も自問自答して、「何が日本人たらしめているのか？」ということを、もう一度、考えてみるべきものかもしれませんね。

小林：それがないと、“インバウンド”と言っても、「日本の変わったもの」を見せているだけで、「日本」を見せていないんじゃないかと思いますね。今回、マオリの人を改めて尊敬しましたが、日本に見せるべきそういうものが、あるんでしょうか。

石森：1840 年のワイタンギ条約以降、マオリは、どんどん土地を追われて、戦争で負けて、酒に溺れて、文字もわからないのに契約書にサインさせられて土地を奪われて、抑圧されて行くんですが、「このままパケハの言いなりになっていいのか？」ということで、“マオリタンガ”という概念が生まれ、マオリをマオリたらしめているものは何かと考えるようになりました。マオリ語、儀礼、ことわざ・格言、神話・伝説、ゼスチャー、踊りなどのマオリ文化がそれに該当すると考えられました。しかし、一番、コアにあるのは、マナの観念かもしれませんね。日本のインバウンド観光を考えるときに、日本たらしめているものは何でしょうね？本当は、みんなそれを求めて来るんだろうと思います。「アメリカやヨーロッパと違う日本は何か？」と。

小林：先日、北海道を代表するフレンチ・シェフの中道博さんのお話をうかがいましたが、フランス料理を作っているけれど、「日本をどう見せるか」という気持ちで作っていると言っていました。和魂洋才の“和魂”がないと、単なるフレンチの真似と言われてしまう。それを打ち破るには、どうしたら良いかと。面白いなと思いました。

石森：台湾に、日本のことが好きな哈日族（ハーリーズ）という人たちがいます。彼らが好きなのは、日本のアニメーションや漫画やドラマだったりするのですが、それらを通じて、台湾にはない何かを感じて、求めているんじゃないかと思います。

山村：アニメやドラマは、あくまで、きっかけでしかないかもしれませんね。最初は、アニメが好きになって、そのオープニングの歌が歌いたいから、日本語を勉強するというように。そうすると、段々、小説も読んでみようとか、漫画に出てくる日本食を食べてみようとか、そういう感じでドンドン入ってくるんです。それが実は、鷲宮（漫画及びアニメ『らき☆すた』の舞台として町おこしをしている埼玉県鷲宮町）などで起きている現象とも重なるところがあります。最初は、アニメが好きで入ってくるんですが、段々、商店街の人とやり取りするのが面白くなって、仕事を手伝うようになるとか。そういうことが、スピリチュアルな交流になっていくのかもしれないですね。

石森：北大の大学院の留学生の１人に、台湾から来た女性がいて、「何故、北大に来たのか？」と聞くと、今年１月、北海道に旅行に来たときに、北大を訪れたと。そのとき、たまたま入試をやっていて、みんなで受験生を温かく応援している様子を見て感動したと。それで、一挙に気に入ったみたいで、北大を受験したと。元々、哈日族でアニメが好きだったらしいのですが、一番のきっかけは、それだったということです。その応援している様子が魂に触れたんでしょうね。最近の我々はなくしている部分かもしれないけれど、お遍路のお接待の伝統なども欧米にはない日本のものかもしれないですね。

相澤：今まで、当たり前のことだと思っていましたけれど、確かにセンター試験のときなど、甘酒を振舞われたりしましたね。

○マナと表裏一体の道徳のライン

石森：マオリにとっては、マナを抜きにして、マオリ・ツーリズムは成り立たないというのは、重要なポイントですね。しかし、普通の日本人は、マナという概念さえ知らないので、難しいことですね。

小林：はた目から見ると、入村儀式で迎える側が４回も行ったり来たりしている方が、丁寧に歓迎しているように思えてしまうけど、マオリの人に聞くと、マナがあれば、１回でも良いという。形式ではないと。外の人間が言うことではなくて、自分たちが決める。そういう話が、とても面白かったですね。非常に勉強になった。観光が文化を変容させてダメにしたという議論もありますが、そういうことではないと思いますね。

黒須：日本の場合は、精神性が所作の細かい点に表れると言ったりしますが、マオリの場合は、どういうところでマナを失ったと感じたんでしょうね？

小林：難しいですね。同じことをやっていても違うみたいですね。

黒須：以心伝心でわかるんでしょうか？

小林：質感というか、クオリア（内観によって得られる現象的側面及びそれを構成する個々の質感）なんでしょうね。茶道では、持っているものが違うと、まったく同じようにお茶を立てても、空気や緊張感が違う。相手に伝わるものが全然違う。

石森：“心”と“魂”は、また別というところもありますね。心の方は精神科学や心理学などで解明されつつある部分がありますが、魂の方は解明が難しいかも知れない。言葉も通じない者同士が、心を触れ合わせるということがありますが、その奥には魂というものがあるのかもしれないですね。

山村：現地で「マナがなくなった」と言っていたときに、私には、「誇りを失った」とか「魂を売った」とか、そういうニュアンスにも聞こえました。

小林：私もそれに近いと感じた。

山村：そうすると、スピリチュアルな部分とは別に、道徳とか倫理的な要素もあるのかなという気がします。例えば、ホエール・ウォッチング・カイコウラでは、自分たちの会社で地域の観光関連事業を全部やれる力はあるけど、地域全体で富をシェアするために、あえて手を広げないと言っていました。それもマナの一つなのかなという気がします。

緒川：マナを持っていると、自然と道徳的基準を満たすのかもしれません。

石森：マナを沢山持っている人ほど、タプ（禁忌）があるんですよね。マナとタプは、表裏一体でセットなんです。だから、形式的な法律はいらないわけですよ。マナが規定するから。してはいけないことが、自ずとわかる。

小林：日本でも「お天道様が見てる」と言っていたように、理屈じゃなくて、みんなが

共通に持っているものがあったのかもしれないですね。

石森：日本では、今は残念ながら、なくなっているけれど。昔は武士道というものもあった…。

緒川：“大和魂”というのも、近いものだったのかもしれませんね。

○コミュニティの核となる場所の復活を

緒川：もう一つ、マオリの人たちに残っているものは、血縁コミュニティの繋がりでした。

小林：それは重要だと思って現地でも議論したのですが、我々がちょっと行ったぐらいでは、分からないものがあると思います。

石森：それは日本人より、はるかに強い繋がりがありますよ。白人が入ってくる前は、50 ぐらいの部族に分かれて争っていましたから。ただ、時代とともに変わって来ているとは思う。グローバル化の中では、意識的にコミュニティの繋がりを大事にする必要があると思う。

小林：マラエがあるということが大きいかもしれない。観念的なだけの絆というのは難しいですからね。コミュニティを具象化する場所があるということが、絆を守っていくポイントかもしれないですね。マラエの中に、先祖を象徴するものが彫られていて、夜、松明で照らされたりすれば、その空間に入ったら、みんな信じると思う。そこにコミュニティの構成員が集うということが、物凄く意味があることだと思う。

緒川：宗教施設であり、集会所であり、憩いの場所であり、コミュニティの中心的な場所であるというところですね。日本でも、昔は神社がコミュニティの中心の場所でしたね。イスラムの国でも、モスクはお祈りの場所でもあり、くつろぎの場所です。キリスト教国の田舎でも、教会がコミュニティの集会場やコミュニケーションの場でもありました。

小林：そういう場所の復活がポイントかもしれないですね。温泉地では、共同浴場の復活をやっていますが、そういうコミュニティの核となるものが必要ですね。地域コミュニティの核となる場は何かということを、議論した方が良いと思います。

山村：温泉地で外湯がなくなってしまったところというのは、ホテルが内湯で客を囲い込んでしまったところですからね。

小林：昔は、共同湯があって、裏に温泉神社があって、地域の核になっている。それらが全部なくなっちゃったんですよね。

○観光資源を観光に提供するために必要なプロセス

石森：今、中小企業庁が、2007 年に制定された中小企業地域資源活用促進法に基づい

て、地域資源活用新事業展開支援事業というのをやっています。それぞれの地域で、地域活性化に繋がる活用可能な地域資源を挙げてもらったところ、1 万 1 千ぐらいの候補が挙がって来ました。農林水産物、鉱工業品、観光資源といった分類の中で、それらの候補の半分近くが観光資源でした。ところが、中小企業庁が 120 億円の予算で、千件の新規事業を補助することになって、既に 600 件ぐらいが動いているんですが、そのうち、観光資源を使った新しい事業は全体の７％に過ぎないんです。農産品などは、活用しやすいのでしょうけれど、観光資源はどうも活用しにくいようなんです。それは、コミュニティの問題なのかも知れませんが、どうも一致団結して利用するのが難しい。なかなか、観光資源でうまく行っている地域は少ないですね。

小林：観光資源は、そのままでは観光に提供できずに、それを本当に観光化するには、もう一つ、二つのプロセスや工夫が必要なんじゃないかと思います。それは、「観光創造士」資格の創設というものと関係するのかもしれませんが、その必要な観光化のプロセスを突き詰めると面白いのかもしれないですね。今、観光資源を活用した事業が７％しかないというのは、何かが必要なんですね。そこには、どういう道筋があるのでしょう。

石森：そういう点でも、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの研究は重要ですね。

小林：観光化した後だけ見て回っても分からないのですが、資源があるだけではダメなんですね。観光化に至るプロセスを、失敗したケースも含めて研究する価値はあると思いますね。

石森：この研究の最後には、コミュニティ・ベースド・ツーリズムを成功させるための条件というものが、提言されないといけないんでしょうね。もう一つ重要な側面は、農商工連携ですね。しかし、一つの地域で農商工連携をするときに、例えばヨーロッパなどでは、観光が根っこにあるのが当然だったりするのですが、日本の場合、観光は除外されて考えられているんです。本来、農商工観光連携でないといけないはずなんです。そのときに、農商工観光連携をうまくやるための条件は何ぞや、という問いが必ず必要になりますね。

小林：美瑛に、ＪＡとフレンチ・シェフの中道博氏が共同で立ち上げたプロジェクトで、地域の農産物を使ったレストランがあるのですが、ＪＡの組合員には、それを認めてない人も多いらしいです。東京で売るルートをもっと広げたいと言う人ばかりで、消費する量がわずかなレストランに何故そんなに力を入れるんだ、という考え方をしてしまう。美瑛で地元の農産物を食べてもらって、東京に帰ってからも買ってくれる。それが重要なんだという話が、なかなかわかってもらえないらしい。いろいろな地域で、どうしようもないお土産ばかりつくっていますが、例えば、野菜を使ってセンスの良いスイーツを作る。そういう“センスを売る”という発想が必要なんですよね。

石森：農業の人は、頭から観光なんて関係ないと言いますからね。観光関係者が地域で信頼を勝ち得ていないということもあります。ＪＡが、商工会とは手が結べても、観

光協会と手を組む気がないという地域が多いですね。

〇チャリタブル・トラストと地域の多様なコミュニティ

緒川：今回、地域の組織づくりのヒントとして面白かったのは、「チャリタブル・トラスト」というものでした。チャリタブル・トラストという組織が、観光事業に出資し、観光収入を地域に分配する役割を担ったりしていました。

小林：観光収入を地域に還元する仕組みとして、非常に面白いと思った。地域のインフラのメインテナンスや、保健、教育、住宅など、観光以外のいろいろな面で還元しているようでしたね。

緒川：貴州省で見た老漢族の村（天龍屯堡古鎮）の観光会社も、観光収入を村の下水道整備や学資、保険などに使っていましたが、それと似ています。

小林：そのチャリタブル・トラストも入れ子構造みたいになっている。チャリタブル・トラストと血縁コミュニティが重なるようにあって、他にもＮＰＯがあったりして、地域の組織が平面的ではなく、いくつもの種類の組織が重なり合っている。このチャリタブル・トラストは、今回、初めて知ったもので、あまり詳しくはわからなかった。もう少し勉強してみたい。

かつての観光ガイドを顕彰するファカレワレワ村

緒川：これからの時代、地域が地縁コミュニティだけで担えなくなって来ているとしたら、血縁、職縁、ＮＰＯも含めて、いくつものコミュニティ組織が絡み合って補完し合うというのも必要かと思います。

山村：それにネットでの繋がりというものもありますね。若い人たちも「ネット・コミュニティ」という言葉を使うようになって来ています。

〇観光へのプライド、観光の基盤となるプライド

緒川：今回、印象的だったことの一つに、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジの入口に 19 世紀に活躍した伝説的な観光ガイドの写真入りのパネルが、大きく誇らしく掲げられていたことがあります。マオリ自身に対するプライドだけでなく、観光事業そのものに対しても、プライドを持っているようでした。

石森：今、日本の観光関係者は、すぐに「余裕がない」「金がない」「時間がない」と言いますね。それで、ずるずると来ているところがある。しかし、観光は、金を稼ぐた

めだけにやっているんでしょうか？観光は、その国のプライドを見に来ているとも言える。日本人にとってプライドというのは何なのでしょうね。

緒川：プライドを生み出す場は、コミュニティなのだと思います。良い意味でも悪い意味でも「世間体」という言葉がありました。

山村：教育というものが大事だと思います。今の日本は、家庭でも地域でも、教育を学校に任せてしまっていますよね。昔は、近所のオヤジに怒られたり、まわりが見ていたりということがあったかと思うんです。明文化できないルールというものが消えてしまっている気がしますね。電車の中で騒いでいても、誰も怒らないですし。

黒須：それと絆がセットになっていますね。他の人を、自分に無関係な人と見てしまえば、その無関係な人にわざわざ怒ってあげたりすることはないですからね。

山村：関わらない方が良い、となってしまいますね。

相澤：殺されたりすることもあると、注意したりできなくなってしまいますね。

山村：そういう環境になっているところが異常です。

石森：コミュニティが崩壊していますしね。

緒川：欧米の場合は、コミュニティが機能しなくても、宗教というものがありますが、日本の場合は、無宗教に近いですからね。

山村：ですから、心の拠り所がどこにもなくなっているんですよね。教会は、地域の核でもあり、困ったときに逃げ込め、守ってもらえるところだと思うんです。日本では、どうしようもなくなったときに、自分の居場所がない感覚に囚われますね。誰も助けてくれないから追い込まれるということにもなります。家庭にも、職場にも、地域にも、守ってくれるところがなくなっています。「守る」「守られる」というコミュニティの定義が重要かなと思います。チャリタブル・トラストでも、弱者や収入が低い人を助けてあげるというものだったりします。欧米では、お金を持っている人に、そういう意識があったりします。

石森：統計数理研究所で、1953 年以来５年ごとに「日本人の国民性調査」というものを実施しているのですが、昨年の調査結果を見ると、20 代や 30 代で「人のためになることをしたい」という回答が、かつてないほどに上がっているんですね。なかなか捨てたものじゃない。そういう若者の気持ちをうまく導くことができれば、意外な力になっていくと思う。大人たちが、それを活かせるように社会の仕組みを変えていかないといけない。観光という局面で考えたときには、ボランティア・ツーリズムというのも、その一つかもしれませんね。

小林：カイコウラの「旅人の木」で、事務局が２人しかいないのに、どうやって木を植えるんだと聞いたときに、募集すると世界中からボランティアが集まるんだと言っていました。それも一つの方向性でしょうね。

石森：欧米では、慈善文化やノブレス・オブリージュという意識があるけれど、日本では、そこらへんがあまりないから、どううまく仕掛けるかが課題でしょうね。日本に

は、お遍路のお接待の文化というのもあって、ボランティアの精神はあるんです。観光におけるプライドの問題は、もっと正面から扱うべきものでしょうね。

愛知万博でも、始めに目標数値ありきでしたね。本来は、世界にアピールしたいことというのが始めにあって、それを伝えるために何をやるかということになる。それが良いものだったら、結果として人は来る。数値は結果論にしかならないですから。ただ目標数値ありきだったら、「地域で入込客数が減りました。どうしたら良いでしょうか？」「安売りしたらよろしいやん」となりますよね。現にそうなっている。それで数字は持ち直しても、今度は「余裕がない」と言う。「何のために生きてるんだ？」と、いうことになりますよね。田舎で暮らしているのに「余裕がない」とは、もうどうしようもないですよね。「暮らし」も「命」も、両方、英語で書くと“Life”ですが、観光というのは、そういう生き方に関わってくるものだと思います。誇りというものも、そこに関係しているのではないかと思いますね。

小林：行き着くところ、そこだと思いますね。

石森：いろいろな地域で、「名もないけれど、こんな素晴らしい人がいるんだ」という人が、まだ、いるんじゃないかと思います。誇りを意識しなくても、誇りがあるような。素晴らしい生き方だなと思わせるような。

○「ビジット・ジャパン」から、「エンジョイ・ジャンパン」へ

緒川：マオリの人たちは、西洋人からの抑圧の歴史を持っているわけですが、クライストチャーチのタマキ・ヘリテージ・ビレッジでは、被害者としての歴史を前面には押し出すようなことはせず、観客が野外劇の中に取り込まれるような形で歴史を疑似体験し、観客自らが考えるのに任せているようなところがありました。情報・知識とエンターテイメント性を融合した一つのエデュテーメントが、逆に伝えたいことを効果的に伝えているように感じました。

石森：観光はまがいものだとか言われたり、オーセンティシティ論でも、細工することが良くないと言われたりするけれど、さりとて、基本的に楽しくないとね。いきなり、旅先で誰かの人生と真正面から向き合っても…（笑）。結果として、その出会った人の人生に触れ、自分の人生について考えるようになるなら良いのだけれど、「このツアーに参加したら、人生考え直すようになれます」なんて言われても困りますよね。エンジョイしながら、人生を考えることができたなら、もう一度来てみようと思ったり、誰かに「凄いよ～。何か考えさせられ

カイコウラ・旅人の木

たよ。」と伝えたりできるけれど。「ビジット・ジャパン」と言っても、ビジットは当たり前で、来てくれただけで良いのか。「エンジョイ・ジャパン」とならないといけないですよね。

小林：「とにかく来いよ」じゃ、次の展開がないですからね。「金を落としてくれ」って、言っているようなものです。外貨を落としてくれたら良いという途上国の観光政策と同じです。

石森：それではとんでもないですね。しかし、こうやって、いろいろ大きな課題もいくつか浮かび上がって来るような重要な切り口もあって、今回の調査は、観光の核心とも言える部分に迫るものだったのではないでしょうか。

（4）ニュージーランド調査に関する考察・検討・議論のまとめ

・ マオリの観光の成功要因は、観光政策をはじめとする観光分野の中だけに求めることは難しく、マオリの社会構造やマオリの観光リーダーたちの哲学や考え方に起因する部分も大きいと感じられた。本調査では、観光分野の現象だけに囚われず、少し視野を広く持ちながら、マオリの観光の成功要因を分析した。
・ また、成功したマオリの観光の事例を見ていくと、日本の状況と対照的と感じられることが多かった。今回の調査では、マオリの観光を学ぶことで浮かび上がってきた日本の観光の課題についても検討した。

1）マオリの観光の成功要因

①“観光は手段”という位置づけ
②観光と文化保全のバランス感覚
③コミュニティの入れ子構造
④“民”の自立
⑤観光のグローバル競争への適応

①“観光は手段”という位置づけ

・ 今回の調査で、最も印象的なことの一つは、ほとんどのインタビュー対象者が、異口同音に「ツーリズムは、ビークル（乗り物）だ」と語り、観光を何故やるのかという目的を、しっかりと持って、常に意識していたことである。
・ マオリ・ツーリズムで大成功したと言われ、国内外で事業展開するマイク・タマキ氏は、マオリ文化を伝えたいという目的がまずあって、観光はそのためのビークルだと語った。また、ワイポウアの森でエコツアーを行っているコロ・カーマン氏は、観光は地域の幸福を実現するためのビークルだと語っていた。
・ いずれも、観光振興より上位の目的があって、その目的を達成する手段としての観光は、どうあるべきかという考え方や哲学がしっかりしている。これは、前年調査のブータンで学んだ、経済発展も環境保全も文化保全もすべて、国民の幸福のためであるというＧＮＨ（国民総幸福）の考え方にも似ている。
・ 日本の場合、戦後、経済発展自体が目的化し、何のために経済的な豊かさを求めているのかが見失われてしまった。また、観光振興も、地域振興の手段として位置づけられることはあるが、その地域振興が何を意味するかがあまり明確に意識されず、ただ漠然と地域の経済発展が志向されるのみで、観光振興や地域振興自体が自己目的化され、観光客数や域内消費額の増加のみが目的とされることも多い。
・ しかし、観光客が増えたり、域内消費が増えたりしても、地域の秩序が乱れたり、環境を損ねたり、地域に根ざした伝統的な文化や生活が失われたりして、地域住民

の幸せから遠ざかるのであれば、何のために観光振興をし、地域振興をしているのか、わからなくなる。

・ マオリやブータン人は、目の前のことに囚われることがないよう、文化の伝承や地域住民の幸福といった観光振興の目的を明確に意識して、見失わないようにしているために、その本来の目的から外れるような方向へと観光事業が向うことに釘を刺すことができるし、地域住民不在の本末転倒にもならない。それは、観光への取り組み自体のモチベーションを高めることにもなる。
・ その上、観光の奥にある地域住民に根ざした文化や生活を敏感に感じるようになった現代の観光客は、自己目的化した観光事業には魅力を感じなくなり、むしろ逆説的ながら、観光だけが目的でないものを観光することに、強い魅力を感じるようになって来ているのである。
・ わが国においても、まず観光振興や地域振興は手段であり、その上位の目的は何かを明確にし、さらにそうした目的を地域で共有することが、地域の観光を成功に導く近道であると考えられる。その目的とは、必ずしも地域に金が落ちることだけではないはずである。地域の人々がウェル・ビーイング、すなわち、身体的、精神的、社会的に健康で安心でき、満足できる生活状態となることをベースに、地域に誇りを持って生きることができるように、地域それぞれの固有の条件や課題に合わせて、検討されるべきものである。

②観光と文化保全のバランス感覚と生きた境界線

・ マオリの人々は、それぞれ観光振興と文化保全のバランス感覚を持っていたが、これについては、特に共通した明確な基準を持っているようには見受けられなかった。その代わりに頻繁に聞かれた言葉が、「マナ（Mana)」という言葉である。このマナの概念は、翻訳が難しいものであるが、人間や聖なるものに宿ると信じられる超自然的な力である。威信、権威、格、精神、影響力なども意味するが、「魂」「霊」「気」などにも近い概念のようにも思われる。
・ マオリたちに、観光事業でマオリ文化が守られているかと聞くと、「あそこは、マナを失った」「私たちは、マナを大切にする」というような言い方をし、「マナ」があるか否かが、自分たち本来の文化であるか否かの重要な判断基準であることがうかがわれた。いくら経済的に成功しても、マナが失われたと判断されたら、尊敬されないようだった。また、自分たちの文化を観光提供するにあたって、どこまでアレンジして良いかの基準も、外形的、形式的なものではなく、このマナがあるか否かに拠っているようだった。
・ ただし、基準と言っても、部族や個人ごとに感じる基準のようであり、どこに境界線があるかは、必ずしも明確ではない。西洋的な基準の概念からすると、曖昧で頼りないものかもしれない。しかし、この主観的な基準は、タプ（タブー、禁忌）の

概念と表裏一体性の強いものであり、マナの有無の差は大きい。その一方でまた、生きた人間がＴＰＯに合わせて臨機応変に現実に対応していくのに適した、柔軟性を持ち合わせているものであるとも感じた。

・ 我々は、今回の調査中、マオリの口から、オーセンティシティ（Authenticity）という言葉を一度も聞かなかったが、それは、このマナがあるか否かの価値観と、オーセンティシティという概念が馴染まないからではないだろうか。
・ ロトルアで 18 世紀から行われているマオリ･ツーリズムでは、西洋の楽器や音階、新しく創作された歌や踊りが取り入れられたショーが、様々な場所やホテル内などで毎日のように行われている。それらも、必ずしも、マオリの伝統に背くものと考えないという意見も聞かれた。
・ マオリ・ツーリズム関係者の全国組織であるマオリ・ツーリズム・カウンシルは、マオリ・ツーリズムの中核となる価値観の一つとして「マナアキタンガ（Manaakitanga)」を掲げている。それは、お客様には最高のホスピタリティを提供する義務があるという、先祖代々伝わる精神である。その価値観の継承を、形式の伝承よりも遥かに優先させている印象であった。いくら伝統的な形式を守っていても、マオリの中核となる価値観や精神を失ったものであれば、意味がないのである。
・ 形式的な基準は、一度決まって明文化がなされれば、より多くの人間がその基準を参照して守りやすいという利点がある。しかし時代や状況の変化に応じて臨機応変に対応することは難しい。また形式主義に囚われ、エッセンスが失われ、死んだ文化になったり、地域で生活する住民の現実を疎外したものになったりしかねない。また、往々にして、こうした形式的な“オーセンティシティ”を守るための基準は、西洋を中心とした外来的な基準をベースにしたものになりがちであり、外在的・他律的な性格がある。
・ それに対して、マオリのマナによる基準は、そこに住む人々が自ら決める内在的・自立的なものであり、地域の生活に根付いた活き活きとした文化を維持し、観光魅力の維持・創造に繋がっているものと感じられた。

③コミュニティの入れ子構造

・ マオリ･ツーリズムのリーダーたちに共通して見られた発想は、何事も“シェアする”という発想である。観光客と自分たちで、「楽しみをシェアする」「知識をシェアする」という表現がよく聞かれたし、観光事業によって得られた利益を、「地域でシェアする」という言葉も、ほぼ共通して聞かれた。そのシェアをする仲間は、自分たちの親戚や部族に限られない。

飲食店やショップが並ぶカイコウラの町並み

- 特にホエール・ウォッチングで成功したホエール・ウォッチ・カイコウラ社では、経済的な利益を地域でシェアすることを会社の方針とし、ホエール・ウォッチング以外にも、飲食店や宿泊施設などを多角経営できる力を持ちながらも、あえて行っていない。地域の他の企業が行っている事業に参入することは絶対ないとも言う。ホエール・ウォッチングのために訪れる観光客がもたらす富を、地域住民全体で共有できるようにし、また地域の雇用を増やすためである。
- 実際に、小さなカイコウラの町には、同社の成功以来、多くの飲食店や宿泊施設が立地するようになり、ドルフィン・スイミングやアザラシなど野生生物のウォッチング、エコツアーやウォーキング・ツアーなど、様々な観光産業のスモール・ビジネスが増え、カイコウラの観光魅力は、多様化して来ている。
- この自分たちだけの利益に囚われず、富を地域に広く還元して共有しようという公の精神とそこから来る発想は、マオリ社会の血縁社会に起因するものではないかと我々は考えた。マオリの個人や家族は、拡大家族と訳される「ファナウ」に属する。複数のファナウから、準部族である「ハプ」が構成される。さらにいくつかのハプから、部族である「イウィ」が構成される。このような血縁コミュニティの入れ子構造である。
- マオリは、血縁を重要視する血縁コミュニティが根強いが、その血縁コミュニティに明確な入れ子構造があるが故に、個人やグループ単位でのエゴが許容されにくくなっているのではないかとも考えられる。すなわち、自分１人や自分の身近な家族だけのことを考えられるのは、ファナウの間で許されないことである。また自分のファナウの利益だけを考えるのは、その一つ上位のハプの社会では許されないことである。また、自分のハプのことだけを考えるのは、さらに上位のイウィの中で許されない、というように、公の概念も、小さいものから大きいものまで入れ子構造になっているのである。
- また、何か自分たちの間にトラブルや問題が発生した場合や、特定のグループが暴走を始めた場合にも、上位の血縁コミュニティがあると、より上の広い公の視点から調整することができる。そういったコミュニティの入れ子構造が、より上位の公の視点でものを見る発想を養うのではないだろうか。
- ホエール・ウォッチ・カイコウラでは、会社の 53％の株をハプで持ち、47％の株はその上のイウィで持っている。自分たちの準部族だけで分配するのではなくて、

もう一つの上のレベルの部族レベルでも利益を分配するという意識があるのである。しかも、富をシェアする範囲をマオリの血族の中に限定せず、白人やアジア人なども含めた地域住民全体と考えていた。

・ マイク・タマキ氏は、マオリ・ツーリズムの成功で得られたビジネスモデルを、全世界の先住民族の間で共有したいという発想を持っていたが、そのような発想も、マオリ社会の入れ子構造の“公”を敷衍した考え方なのかもしれない。

・ 1991 年にコミュニタリアン綱領を発表したアメリカの社会学者エツィオーニは、「地域共同体が独善的で偏向した集団とならないために、その共同体を越えた包括的共同体の存在を意識し、場合によっては自己の地域共同体における過度の特殊性を修正する必要」があり、また、共同体を超える「超共同体」の意識を持つ必要があると主張している（参照：宮平望「アメリカの「コミュニタリアン綱領(1991)」の解説」『西南学院大学国際文化論集 第 13 巻 第 1 号』西南学院大学、1998.9)。マオリの入れ子構造型の血縁コミュニティは、既にこのエツィオーニが語るコミュニティのあり方と、超共同体意識をも実現させているのかもしれない。

④“民”の自立

・ 日本の成功した観光地と共通することであるが、マオリの成功した観光リーダーたちには、国や地方の政府に頼ったり、補助金がなければ何もできなかったり、という姿勢は無い。主体となるのは政府ではなく、自分たちであるという意識が強く、政府にはパートナー以上の大きな役割を期待していなかった。

・ ニュージーランドは、最大の輸出相手国だったイギリスが 1973 年にＥＣ（ヨーロッパ共同体）に加盟して、ニュージーランドとの貿易量が激減したことと、第一次オイルショックをきっかけに経済危機に突入した。経済政策の失敗も重なって、政府財政も危機に陥り、高福祉・高負担の社会主義的政策を捨てて、補助金の全廃、国有財産の売却、国営企業の民営化、規制緩和、自由競争の推進といった行財政改革に踏み切った。

・ その混乱により、一時は失業率が10％を超えるなど大きな傷を残したとも言われるが、このことがニュージーランドの経済体質と産業構造を強化するきっかけとなった。ホエール・ウォッチ・カイコウラも、国鉄など国の事業の民営化により、地域で多くのマオリが職を失ったことをきっかけに、雇用創出を図ってマオリが都会へと出て行くことを防ご

１日１往復２路線の観光列車のみとなった南島の鉄道

うとしたことが起業の理由である。

・ 不況や失業自体は、好ましくないものであり、ニュージーランドの行財政改革も評価が分かれるものであるが、カイコウラでは、官に頼らない民主導の起業の大きなきっかけになったことは確かである。この時期は、ニュージーランド人に、政府は当てにならない、何事も自分自身でやらなければならない、という意識を形成させた可能性がある。
・ また、今回、視察したカイコウラ、ロトルア、ホキアンガ（ワイポウアの森のある地域）のいずれの地域でも、観光事業に資金を提供し、また最高の意思決定を行うチャリタブル・トラスト（主に公益的な活動やそのための支援を行う非営利組織）という組織の存在が大きいことを確認したが、そのチャリタブル・トラストも、公益的な視点から事業を行うものの、政府ではなく、民間の組織である。
・ こうした“民”の側の自立、さらには民が公益性を担う意志や動きが、観光事業の主体性や自立性を担い、また市場のニーズや変化にも対応できる魅力ある観光の創出に繋がっている可能性がある。

⑤観光のグローバル競争への適応

・ マオリ・ツーリズムの中心的存在であるロトルアの町で驚いたことの一つは、いくら国際観光の町とは言え、どの観光事業者も海外観光客の動向を強く意識していることである。タマキ・マオリ・ビレッジやミタイ・ビレッジでは、集まった観衆を盛り上げることを兼ねながら、どの国から来たかを挙手させながら確認していた。街中の土産物屋で買い物した際には、ほとんど必ず出身国を聞かれた。これらはマーケティングに活用する理由もあるものと推測された。
・ これは、ニュージーランドが、人口わずか 427 万人（2008 年）の国であり、国内市場が小さく、必然的に海外市場を相手にせざるをえないためであるとも考えられる。競争相手は、海外の他のデスティネーションであり、しかも、観光客の大量供給源であるアメリカ、ヨーロッパ、日本などに対して、ニュージーランドは地球の反対側とも言えるほど地理的に非常に不利な条件にある。
・ このため、世界を相手に常に非常に厳しい競争に晒されるわけであり、国際的なスタンダードに耐えうる観光魅力を創造し、品質を維持・管理しなければならない。そういう環境の中で、各観光事業者が大いに鍛えられているものと思われる。
・ 国内市場がないに等しいブータンでも、国際的な品質基準を意識していたが、ロトルアのマオリ・ツーリズムの地域組織であるマオリ・イン・ツーリズム・ロトルア代表のルネ・ネイサン氏は、マオリ・ツーリズムの地域組織の目的として、観光事業者の提供する商品の品質を「エキスポート・レディ（Export Ready：輸出準備完了）」にすることを挙げていた。
・ 日本では、観光業を含め、ほとんどの産業が、国内市場が大きいおかげで、海外市

場を二次的なものと考えていた部分がある。しかし、人口減少や経済低成長の時代を迎え、マオリのグローバル対応に学ぶ面は大きい。

2）マオリの観光から学ぶ日本の観光の課題

①観光を手段として成し遂げる目的の明確化
②情熱とロジックのバランス感覚の醸成
③コミュニティの重要性の認識と再生
④自分たちの地域や文化に対するプライドの醸成
⑤情報・知識とエンターテイメント性の融合（エデュテーメント化）

①観光を手段として成し遂げる目的の明確化

・ マオリ・ツーリズムの成功要因として挙げた『観光は手段”という位置づけ」は、観光戦略や観光計画を立てる場合、不可欠の前提であるにも関わらず、日本では、あまり意識されて来なかった部分である。観光は、あくまで国や地域の幸福を実現するための手段であるという意識がないと、観光戦略や観光計画を何故、行うかが不明確で、場当たり的で、どこへ向うかの方向性も曖昧であり、観光魅力や地域ブランドの形成に繋がって行かない。
・ 「なぜ、地域で観光に取り組むのか？」マオリの観光リーダーたちは、地域住民の幸福、マオリ文化を若い世代に伝承し、世界に伝えていくことなどを挙げていた。観光の目的は、ただ個人や観光事業者の経済的利益だけではなく、より広いコミュニティや地域、さらには国全体や世界まで視野を広げて、考えるべきものである。また、現在だけでなく、将来に至るまで持続的な社会を築くことを前提に考えるべきものであろう。すなわち、観光の目的を考えることは、同時に観光の世界戦略や長期的戦略を考える前提であり、出発点ともなる。
・ また、観光分野での細かい戦術や手法だけを地域全体で共有することは非常に難しいが、観光をなぜやるかという目的と、それに基づく大まかな長期的で広い視野を共有すれば、自ずから、関係者や地域住民１人１人が、自分のやるべきことを理解できる。そして、考え、魅力ある地域づくりへ向けて、大まかにではあるが、正しい方向に行動していくことが可能になる。
・ 多くの先住民族では言語をはじめ文化の存続が危機に瀕しているという。特に言語は、一度、失われるとそれを復活させることは不可能に近いが、２千年間話されていなかったヘブライ語は、情熱ある１人の研究者から日常語としての復活が始まり、そのおよそ百年後の今ではイスラエルの公用語として誰もが使う言葉となっている例もある。このように、短期的には不可能なことでも、情熱と長期戦の覚悟があれば実現できることもある。

②情熱とロジックのバランス感覚の醸成

・ マイク・タマキ氏は、通常のビジネスであれば、「80％のロジックと 20％の感情」で対応する必要があるが、マオリの観光事業では「80％の感情と 20％のロジック」で対応しないといけないときもあると語った。いずれにしても、情熱だけでも、計算だけでも、うまくいかず、その両者のバランスを取ることが成功のために必要としていた。
・ マオリ・ツーリズム・カウンシルでは、マオリが、物質、自然、精神、そして文化資源などを守る伝統的な保護者たるべしという「カイティアキタンガ（Kaitiakitanga)」をはじめとした「カウパパ（Kaupapa)」と呼ばれるマオリの価値観を、組織の理念として掲げ、その実現を重視しているが、その一方で、マオリがビジネスのセンスやスキルを身につけるための支援にも力を入れていた。また、情熱的に地域での観光振興に取り組むコロ・カーマン氏も、自らがビジネスを始める前には、１年間、観光客の調査やデータ収集をし、冷静な分析を行っている。
・ いずれの場合も、情熱が大事と言いながらも、情熱だけではなく、冷静なビジネスのロジックも踏まえており、我々が会ったマオリたちには、環境原理主義者や文化保護原理主義者はおらず、あるいは経済優先主義者もいなかった。いずれの観光リーダーたちも、熱い理念と冷静なロジックの両面を持ち合わせて、バランスを取る努力をしていることがうかがえた。
・ ビジネスのロジックを保持することは、経営者として当然必要な能力なのかもしれないが、一方で、マイク・タマキ氏は、マオリ文化や道徳を伝える講演や教育活動を盛んに行い、コロ・カーマン氏は、わずかな報酬で地域の起業支援などに多くの労力と時間を割くなど、社会貢献にも熱心である。
・ 日本の場合は、それとは対照的に、経済的な成功は、地域経済を潤し雇用を創出しているとして、それだけで社会貢献しているかのように捉えられる場合も多い。それは、下手をすれば、地域住民の生活を守ることを口実にした経済優先主義になりかねず、環境保護も文化保全も、経済に余裕があるときに取り組めば良いといったような、経済に従属した優先度が低い存在にもなりかねない。
・ しかし、本来は、その両者のバランスが取れてはじめて、地域の幸福があるのではないだろうか。すなわち、ロジックの中身に置いても、経済と道徳のバランスが必要なのである。二宮尊徳の報徳思想では、「道徳のない経済は犯罪である。経済のない道

ゴミ分別とリサイクルを徹底するカイコウラ

徳は寝言である。」と言っている。この「道徳」という言葉を、「自然保護」や「文化保全」と置き換えても良い。日本でも、このように経済と道徳の両立を重視する思想は存在する。

・ 自然保護や文化保全といった道徳を無視し、経済を優先した観光には、観光客も魅力を感じなくなって来ている今日、観光事業でも、経済と道徳の両立を重視する考え方やバランス感覚を再興していくことが求められている。

③コミュニティの重要性の認識と再生

・ 人間が居住せず、生業も営まれない原生自然環境の地域を除けば、自然環境や景観、文化や佇まいなどの観光魅力を保全し、管理し、磨いて行くのは、地域で生活するコミュニティであり、その働きを他の手段で代替することは難しい。すなわち、観光は、コミュニティ・ベースドでないと成立しないのである。まずは、その認識を共有することが求められる。

・ また、マオリの観光の成功要因「③コミュニティの入れ子構造」のところで述べたように、個人や観光事業者が地域や社会に貢献する意識の背景に、コミュニティの入れ子構造があることを見たが、その前提にまず、コミュニティ組織が生きているということが重要である。

・ 日本の場合、明治から現在に至るまで、度重なる市町村合併や価値観の近代化があり、地方においては過疎化・高齢化が進行して、コミュニティの多くは機能不全をきたし始めている。また、戦後、地縁コミュニティの代替物的役割を果たしてきた企業など職場の職縁コミュニティも、近年の終身雇用制や年功序列制度の崩壊により、大きく弱体化しており、地縁、職縁に留まらず、何らかのコミュニティ組織の再構築、再活性化が課題になっている。

・ その一方で、今も残る旧来型の地域コミュニティでは、人間関係の煩雑さや窮屈さが、現代の価値観と合わない。特に女性は、発言権が弱く拘束されるしきたりも多いのに、共同作業などの労力は男性以上に多いなど、女性にとって住みにくい地域社会も多い。それも過疎化や困難な結婚相手探しなどの問題に繋がっており、強固な地域コミュニティには、良い面だけでなく、改善すべき欠点も多い。

・ 今回の調査では、世界で初めて女性参政権が認められたニュージーランドの政治的土壌もあってか、マオリの女性たちが活き活きと表舞台で活躍している様子がうかがえた。

・ 一つのヒントと思われるのは、訪れたいずれの地域でも、観光事業に出資し、利益を地域に分配する役割を担っていたチャリタブル・トラストという組織があったことである。マオリのファナウ、ハプ、イウィといった血縁コミュニティ組織とは別に、地域のチャリタブル・トラストなどの組織や、各種の住民組織、マオリ・リージョナル・ツーリズム・オーガニゼーション（ＭＲＴＯ）などの職縁組織、さらに

は自治体といった様々な地域組織があり、それらがときには連携・協力し、ときには組織間で協議して、異なる利害関係を調整しているように見受けられた。

ファカレワレワ村の入口で顕彰される 19 世紀のガイド

・ このような多様な地域組織があることが、閉塞的になりがちな地縁コミュニティや血縁コミュニティの風通しを良くし、縦糸と横糸のような関係で、互いの欠点を補ったり、チェックしたりする機能を果たしているとも考えられる。
・ 日本でも、京都の祇園祭などでは、地縁コミュニティだけで担いきれなくなり、地域の企業などの職場単位で参加する動きが出始めているが、そうした地縁以外のコミュニティとの補完関係の構築や、コミュニティの最小単位である「家族」や学校、趣味縁、さらにはネット・コミュニティなどの複合的な組み合わせや協力などに、コミュニティ復活の可能性があるように考えられる。

④自分たちの地域や文化に対するプライドの醸成

・ 我々が出会ったマオリの観光関係者は、マオリ民族であることや、自分たちの地域や文化へのプライドを強く持っていた。そのため、観光客を楽しませるために、歌や踊りのアレンジはするものの、決して客に媚びることはない。そのため、ときには、ルールを破って儀式の最中に笑顔を見せた観光客を殴ってしまうという、行き過ぎた事件もあったようだ。しかし自分たちやマオリ文化へのプライドが、アトラクションの質を高めるモチベーションにもなっているし、客に迎合した見世物に飽きた観光客には、奥深い本物性を感じさせるものになっている。
・ 自分が自分であることに否定的な感情を持っていたり、誇りを持ってなかったりすると、自分たちの文化を観光に提供する際に、どうしても演技じみた装いの見世物になるし、伝統文化の持つ精神が失われることを避けることはできないであろう。
・ また、マオリの観光関係者たちに共通していたのは、観光という産業自体へのプライドである。特に印象的だったのは、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ（地熱を利用しながらマオリが生活しているロトルア地域の集落）の入口に、19 世紀からの観光の歴史やかつて活躍した 19 世紀の伝説的な観光ガイドが、写真入りの大きなパネルで誇らしく展示されていたことである。
・ 日本では、最近まで観光産業が不要不急の産業として軽んじられる傾向が強かった。しかし、マオリ・ツーリズムの成功要因の「①“観光は手段”という位置づけ」で述

べたように、マオリにとって観光は、地域住民の幸福や伝統文化の継承などの崇高な目的を実現する手段であり、さらに世界中の人々と交流して、自分たちを知ってもらえる素晴らしい手段であるとも認識していた。また、観光が、マオリのプライドを育て、そのプライドが観光の質を高めてきたという好循環もある。

・ 日本の過疎地域などでも、まずは自らやその文化にプライドを持つとともに、観光の目的を明確に持ち、観光事業にもプライドを持つことが必要である。それとともに、外部の人々に地域が認められることによって、地域の人々のプライドが育っていくという、観光が持つプライド醸成のプロセスとその効果に対しても、広く認識を共有すべきだと思われる。

⑤情報・知識とエンターテイメント性の融合（エデュテーメント化）

・ 我々が見て来たマオリ・ツーリズムは、自分たちの文化や歴史を伝えたいという思いが強く感じられたが、しかし、決して、その思いを客に押し付けたり、沢山の情報を詰め込んだりするようなことはなく、観光客にまず楽しんでもらうことを必要条件と考えているようだった。

・ マオリと白人の間の歴史を描いたタマキ・ヘリテージ・ビレッジ（2007 年にクライストチャーチに開設されたマオリの歴史物語を野外劇等で演じる観光施設）でも、観光客の大多数を占める白人に対して、被害者としてのマオリの歴史を強調することはなかった。観客は、白人とマオリが出会った歴史の中に入り込むような形である。そこでは、白人やマオリがそれぞれ、どのような立場を持ち、どのように感じたかが示され、またマオリの内部であった対立などを描くなどして、白人を一方的に糾弾するようなことは避けられていた。そして、観客自身がそれぞれ自分で感じ、考えるに任せているように見受けられた。

・ また、野外博物館を舞台に、野外劇や歌や踊りなどのエンターテイメント的要素を散りばめ、情報・知識とエンターテイメント性を融合した一つのエデュテーメントであるように感じられた。

・ これは、一つの見せ方の戦略であると考えられ、「自分たちは、被害者だ！」ということを前面に出せば、多少の興味を持った観光客も引いてしまうし、そもそも訪れる客自体得られず、結果として、自分たちの思いは伝えられない。逆に、歴史調の舞台で観客自身に疑似体験して考えてもらう仕掛けの方が、抵抗感なく観客の心に入って行ける。

・ また、カイコウラのマオリツアー社のエコツアーでは、ひたすら自然の中を巡って、自然や文化に関する知識を解説するのではなく、ガイドであるモーリス・マナワトゥ氏の自宅に参加者を招き入れる時間がある。参加者がお茶と軽食でリラックスして歓談し、交流して楽しむ時間を重視する。その中で、マオリ族の文化では、一緒に食べるということを重視するのだということを、さりげなく体験させ、伝えてい

た。

- フットプリント・ワイポウア社のワイポウアの森のナイト・ツアーでは、森に関する自然やマオリの民話・伝説などに関する解説はあるものの、より強い印象を受けたのは、森の暗闇の中で捧げられるマオリ語の祈りを聞き、その後、ただ静けさを感じるという体験である。何も語らずして、森への畏敬の念を参加者に伝えることに成功している。
- いずれの場合でも、文字にできる情報量は少なくても、知識を情報として伝えるより遥かに多くのことを伝えることができている。また、そのエンターテイメント性や感動を与えるやり方は、人気を呼び、来訪する客を増やすことにつながっている。
- まず「面白い」と思ってもらうことや感動体験は、より記憶力を高めるもので、直接的な情報伝達や主張よりも効果的である。結果として、マオリの歴史や文化を伝えたいという思いを、最大限、達成できる方法となっている。
- 確かに観光には教育的側面もあり、特にエコツーリズムには、科学教育の一翼としての期待もある。しかし、参加者が楽しむこと、感じることで、より深く伝え、長く記憶されるものも多く、結果として高い教育効果も得られることを考えると、知識・情報とエンターテイメント性がバランス良く融合したエデュテーメント化も、観光の重要な課題となる。

４．まとめ

（1）コミュニティ・ベースド・ツーリズム成功の要件と課題

1）コミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功のための５つの要件

３ヶ国のコミュニティ・ベースド・ツーリズムの調査研究において、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功要因の分析を行い、各国それぞれ以下の５項目を挙げた。

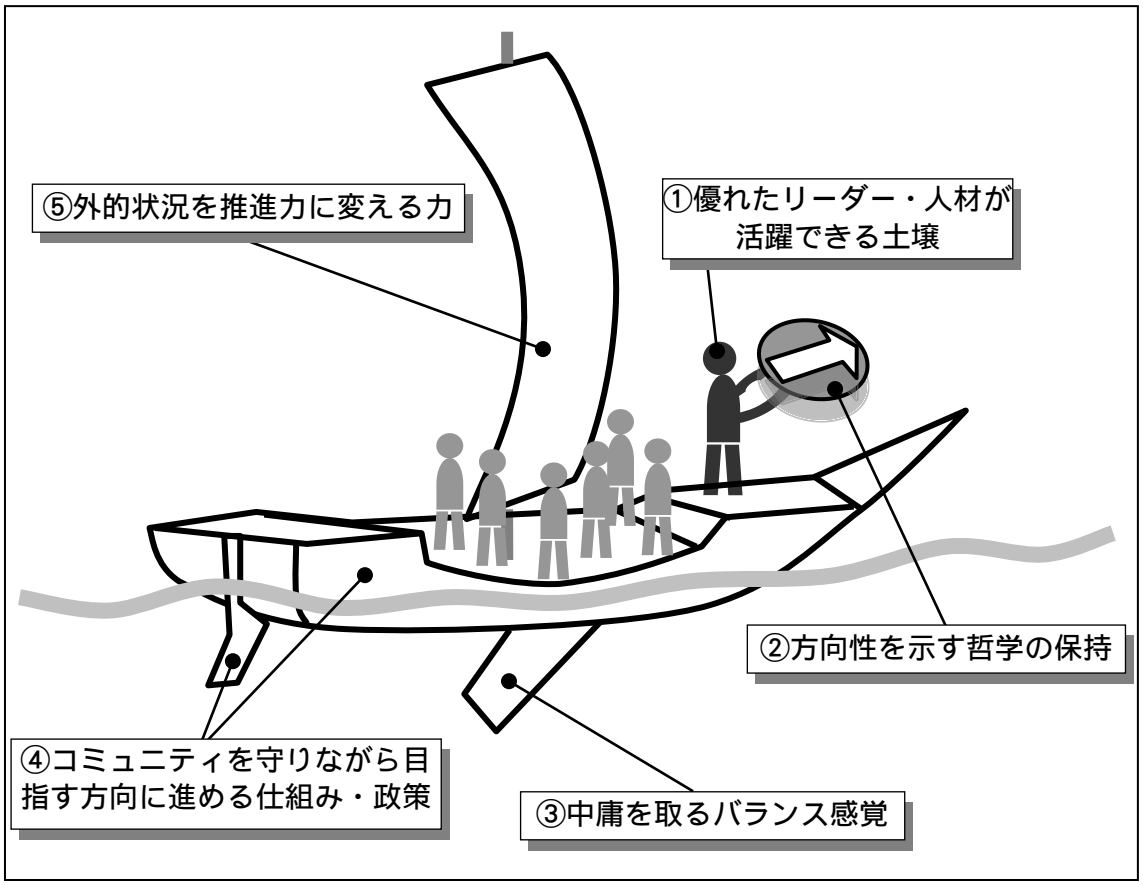
1）貴州省での成功要因
① 観光収入の公平な再配分制度
② 専業でなく兼業の観光地
③ 地域資源保護に対する現実的だが、ぶれない哲学の存在
④ コミュニティの優れたリーダーの存在
⑤ パイプ役の存在（政府と住民、内と外）

2）ブータンでの成功要因
① “ＧＮＨ”の哲学のわかりやすさと実践性
② 社会変化を先取りした規範醸成の学校教育化
③ 危機及び反面教師の現前性
④ 援助と自立を両立させるバランス感覚
⑤ 「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」観光政策

3）マオリでの成功要因
① “観光は手段”という位置づけ
② 観光と文化保全のバランス感覚
③ コミュニティの入れ子構造
④ “民”の自立
⑤ 観光のグローバル競争への適応

それら成功要因は、さらに以下の５項目に集約できる。

① 優れたリーダー・人材が活躍できる土壌（貴州④）
② 方向性を示す哲学の保持（貴州③、ブータン①、ＮＺ①）
③ 中庸を取るバランス感覚（貴州②③、ブータン①④、ＮＺ①②）
④ コミュニティを守りながら目指す方向に進める仕組み・政策（貴州①⑤、ブータン②⑤、ＮＺ③）
⑤ 外的状況を推進力に変える力（ブータン③、ＮＺ④⑤）



（図）地域を幸福に導くコミュニティ・ベースド・ツーリズムの５つの要件

① 優れたリーダー・人材が活躍できる土壌（貴州④）

コミュニティの中心は人間の集まりである以上、その中心は人間である。貴州省の民族観光の成功例では、いずれも優れたリーダーがコミュニティを率い、コミュニティの側でも、そうしたリーダーを生み、その言葉に耳を傾ける土壌があった。そうしたリーダーシップとコミュニティのガバナンスが確立されることによって、一度、方向が定まると、コミュニティは、その方向に着実に進んでいく力を持ったと言える。コミュニティの安定のみが求められる時代から、必要な安定を維持しながらも、時代の変化に対応していくことが求められる時代にあっては、こうしたリーダーの存在が不可欠であると言える。

国全体がひとつのコミュニティとも言える人口 70 万人のブータンでは、国王や官民のエリートたちが優れたリーダーシップを見せていたし、ニュージーランドのマオリ族でも、地域の観光組織や民間事業などを優れたリーダーたちが率いていた。

② 方向性を示す哲学の保持（貴州③、ブータン①、ＮＺ①）

調査対象３ヶ所の観光関係者は、いずれも観光に対する哲学や考え方が明確であった。

貴州省の民族観光の指導的役割を果たした呉正光氏は、民族文化消滅の危機を回避する手段として“観光開放”を選択したが、「死んだ保護はいらない」と言って、生きた人間による生きた文化を守る考え方を明らかにした。その考え方に基づき、服装、自然環境、建物の外観といった絶対に守るべきものと、建物の内装など、時代と生活様式の変化に応じて柔軟に変えていくべきものとを区別して、開発と保護を両立させる明確な方向性が示された。

ブータンでは、観光開発をはじめとする「経済開発」は、「自然保護」「文化保護」「ガバナンス」と併せて、国民総幸福（ＧＮＨ）を実現するための四本柱であると明確に位置づけされ、それが観光関係者の中でも広く浸透していた。「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ政策」をはじめとする観光政策も、そのＧＮＨをベースとする基本的な哲学に基づいていたし、また政策の大まかな方向性を関係者や国民の間で共有している様子が見られた。

ニュージーランドのマオリの観光関係者の間で、度々聞かれたのが、「ツーリズムは、ビークル（乗り物）だ」という言葉である。「マオリ文化を内外に伝えたい」「地域の幸福を実現したい」といった観光開発より上位の目的を明確に意識し、その目的を達成するために、観光開発はどうあるべきかという考え方を共通して持っていた。

いずれの例でも基本的な考え方として共通するのは、「観光は何かを実現するための手段である」ということである。また観光開発に限らず、様々な経済開発や自然保護や文化保護なども同様に、それらは目的ではなく、手段に過ぎないという認識で共通していた。

このように、方向性を示す明確な哲学を持つことで、目の前のことに囚われず、文化の伝承や地域住民の幸福といった本来の目的から外れるような方向へと観光事業が向うことに釘を刺すことができるし、関係者や地域住民がその哲学を理解し、目的を共有することで、地域を挙げて観光への取り組むモチベーションを高めることにもなる。

③ 中庸を取るバランス感覚（貴州②③、ブータン①④、ＮＺ①②）

観光地づくりにおいて、「開発か保護か？」という課題は、世界的に共通するものであるが、調査対象３ヶ所のいずれもが、開発と保護のバランスを取る感覚に優れていると感じられると同時に、前項の「②方向性を示す哲学の保持」でも示したように、その哲学の中に、それらのバランスを取ることが内包されていた。

貴州省の「生きた人間による生きた文化を守る考え方」の中には、開発と保護のどちらの方向の両極端でも、そこに住む人々の生活やアイデンティティを失い、本末転倒になるという危機意識が含まれていた。すなわち、保護が行き過ぎれば、そこに生きている人間が疎外され、時代に適応した生活力が失われるし、観光開放が行き過ぎれば、コ

ミュニティの住民が拠って立つ自然環境や民族文化が失われる。また、貴州省の民族観光を行っている村々では、観光業とそれ以外の農業や手工業など主要な生業とを両立させ、観光業への極端な傾斜を避けるバランス感覚を持っていた。

ブータンでも、前述のように、国民総幸福（ＧＮＨ）を支えるのが、「経済開発」「自然保護」「文化保護」「ガバナンス」の四本柱であり、その四本柱自体は、必ずしも究極の目的ではないので、そのいずれかひとつを追求するのではなく、それら四本柱の間でのバランスを取ることが、当然のことと考えられている。様々な施策を計画し、実施するにあたって、この四本柱は、ときに矛盾することも多いが、建築様式を守ることと、木材資源を守ることを両立させるために、暫定的に屋根だけトタンを利用するといった妥協点を見つけるよう努力するなど、ＧＮＨの哲学が、バランス感覚を下支えする様子が見られた。また、外部からの国際的な「援助」と独立国としての「自立」の間のバランスにも神経を払い、その両立のために、自らの自然保護政策が地球社会に貢献するとの言説を戦略的に展開したり、大国の援助を避けたりするなど、多くの努力を行っていた。

ニュージーランドのマオリにおいても、「ツーリズムは、ビークル（乗り物）だ」という基本的考え方からすれば、「マオリ文化を内外に伝える」「地域の幸福を実現する」といった目的の達成には、必然的に開発と保護のバランスを取ることが求められる。この開発と保護の両立を図る際に、形式的な基準に基づくのではなく、「マナ」と呼ばれる独特の概念に基づいていることが、マオリにユニークな点であった。形式的な“オーセンティシティ”を守るための基準は、時代や状況の変化に応じて臨機応変に対応することが難しく、文化のエッセンスを損ね、地域で生活する住民の現実を疎外したものになりかねない。マオリのマナによる基準のように、そこに住む人々が自ら決める内在的・自立的なものであれば、地域の生活と両立させる柔軟性を持ちながら、活き活きとした文化とそのエッセンスを守り、観光魅力の維持・創造に繋げていくことが可能となる。

④ コミュニティを守りながら目指す方向に進める仕組み・政策（貴州①⑤、ブータン②⑤、ＮＺ③）

コミュニティ・ベースド・ツーリズムを進めて行く際には、開発と保護のバランスを取りながらコミュニティを守り、目指す方向に進めて行くための様々な施策や、それらを実施する効果的な仕組みが求められる。調査対象３ヶ所では、そうした施策や仕組みに優れた例が見られた。

貴州省の郎徳上寨村などの民族観光を行う村々では、観光収入の分配が不満を生まないように、民族舞踊ショーへの参加に応じて村民に観光収入を分配する公平な再配分制度が設けられている。それによって、村の中で観光収入に与る者とそうでない者の間に対立が生じることを防ぎ、村の観光魅力が減じることをうまく避けていた。

ブータンでは、今後、社会の近代化が進むにつれて、コミュニティが持っている伝統文化とその維持に必要な規範の継承という機能が弱まって来ることに備えて、学校教育でそうした面が強化されているように見受けられた。また、大量の観光客が押し寄せることによる文化、規範、環境などに対する負の影響を抑えるために、旅行者１人１泊220 ドルの旅行公定料金を定めて、良質な旅行者のみを受け入れる「ロー・ボリューム、ハイ・クオリティ」観光政策を実施し、その独自の伝統文化や自然環境の保護に効果を上げている。

ニュージーランドのマオリでは、個人や家族は、拡大家族と訳される「ファナウ」に属し、複数のファナウから、準部族である「ハプ」が構成され、さらにいくつかのハプから、部族である「イウィ」が構成されるというような血縁コミュニティの入れ子構造が見られた。こうした構造が、自分たちだけの利益や地域エゴに囚われず、富をコミュニティや地域に広く還元して共有しようという公の精神を育んでいると考えられた。また、特定のコミュニティの間の対立や問題も、上位のコミュニティによって調整される仕組みがあるのではないかと推測された。なお、貴州省では、村＜州＜省＜国というような、地方自治の入れ子構造があるが、それらの間を積極的に繋ぐパイプ役の存在が、民族観光の発展に重要な役割を果たしていた。

⑤ 外的状況を推進力に変える力（ブータン③、ＮＺ④⑤）

いかなるコミュニティや地域であっても、その外部の状況やその変化の影響を排除することはできず、近年はグローバル化の進展により、その影響も大きなものになって来ている。調査対象３ヶ所においては、地域を襲う大きなマイナス要因となる外的状況を、プラスに変える手段として観光が利用され、地域発展のチャンスとして来ている。

貴州省では、都市への人口集中で衰退の危機に瀕していた少数民族の村々が、近代化や漢族文化の影響が小さかったことを逆手にとって、漢族文化への同化傾向の中でも自分たちの民族文化にこだわった観光開放を行った。結果として、村の収入やUターン者が増え、民族文化の再評価が広がることになった。

ブータンでは、両隣りに中国とインドという大国が位置したり、過度の開発や近代化が大きな混乱を招いたり、と、自らも常に周辺の影響にさらされている。こうした状況下で、その危機感をバネに、国家防衛の戦略として、伝統文化保護と環境保護を選択し、アイデンティティ確立と強化を図った。それは同時に、観光資源の質を保ち、強化することに繋がり、引いては観光収入という形で国の自立と発展にも資するものとなっている。

ニュージーランドでも、イギリスとの貿易量の激減とオイルショックなどで不況に陥り、また政府の行財政改革で多くの失業者が発生した。カイコウラのマオリ族でも、多くの失業者が生まれ、若者は都市へ流出し、地域の衰退に瀕していたが、その危機をバネに、官に頼らない自分たち主導での起業を行い、ホエール・ウォッチング事業の成功

に繋がった。また、カイコウラに限らず、ニュージーランドは、国内市場が小さい上に、観光客の主要供給源である欧米先進国から遥かに遠いという大きなハンデがあったために、逆に観光魅力の質を高める努力が促され、国際競争力を身に付けてきたという面もある。

いずれの場合でも、ピンチ自体は好ましいものではなく、自ら招いたものでもなかったが、そこに適応しようとする中で生まれた主体性や自立性、さらには様々なアイデアと施策によって、ピンチをチャンスに変えた。その大きな道具になったのが観光であると言える。

２）コミュニティ・ベースド・ツーリズム実現のための課題

以上に挙げたコミュニティ・ベースド・ツーリズム成功のための５要件を、日本の地域でも満たすための課題は多い。

「①優れたリーダー・人材が活躍できる土壌」とは、言い換えれば、まず、外の事情を知り、コミュニティが時代に適応するための策を練り、それを実行しようとする人物が生まれる土壌であり、さらに、その人物を信頼し、コミュニティの変革を受け入れる土壌である。貴州省の民族観光の村のリーダーや投資家、ブータンの官民のエリートたち、マオリ・ツーリズムのリーダーたちは、いずれも、地域の外や海外の事情に通じながらも、地域の人々の感情を理解し、自分の思いを人々に伝えることができる人たちである。そうした人物は、元々、地域住民の１人である場合もあるし、Ｕターン者や近隣地域出身者である場合もあるが、いずれも、コミュニティの内と外の両方に通じた人たちである。地域の中にそうした人物が登場すること、そしてその人物を排除せず、その発言に聞き耳を立てる住民がいることが、優れたリーダー・人材が活躍できる土壌となる必要条件である。

まずは、コミュニティの中で、そうした候補となる人物を対象に人材育成をしたり、やる気がある人物を核にした活動を外部から支援したりする仕組みが求められよう。

また、コミュニティの側でも、よそ者や異物を受け入れる開かれたコミュニティとなることが求められるが、実際には、地域に全く縁がない者だけでなく、近隣地域出身者やＵターン者でさえも、なかなかコミュニティに受け入れてもらえなかったり、発言権を得られなかったりということも、まだまだ少なくない。貴州省では、閉鎖的だった村も、他の村の成功に刺激を受けたり、他の地域に負けたくないという意識が芽生えたりすることで、外に学ぶ気持ちが高まり、開かれて行ったケースも多い。こうした競争意識に訴えることも、ひとつの手段ではある。

「②方向性を示す哲学の保持」は、日本の地域振興や観光振興において欠けていることが多く、ここで挙げているコミュニティ・ベースド・ツーリズム成功の５要件の中で

も、最も充足することが望まれるものかもしれない。本調査で訪れた各地域では、「なぜ、地域で観光に取り組むのか？」を考え、意識していたが、日本の地域においては、「観光振興」や「地域振興」「経済発展」といったこと自体が目的化してしまい、それらがなぜ必要なのかを忘れるか、元々意識していないことが多い。そのため、観光振興が果たされて観光客が沢山訪れるようになっても、地域の環境が傷つき、伝統は失われ、観光収入を得る者とそうでない者が対立して地域が割れ、地域住民が幸福とは言えない状況にもなってしまう。

日本人は、「ＷＨＹ？（なぜやるのか？）」を問う前に「ＨＯＷ？（どうやるのか？」を求めてしまう傾向があり、一旦走り出せば、その目標達成のための能力は世界的に見ても極めて優秀であるのかもしれないが、その走り出した方向と着いた先が間違っていれば意味がない。今一度、地域で観光振興策を考える前に、なぜ観光をやるのか、観光をやって何を実現するのかを検討し、明確にすることが、まず求められる課題である。そして、その観光よりも上位の目的を果たすために、観光においては何を重視し、どのような手段が適切かということがわかるバックボーンとなる哲学や考え方を構築し、それを地域住民が共有して、１人１人がそれに基づいてモチベーションを高め、参画して行けるようにすることが望まれる。

「③中庸を取るバランス感覚」は、仏教や儒教の教えを源泉に、本来、日本人も伝統的に持っていた感覚のはずである。また、二宮尊徳の報徳思想でも、「道徳のない経済は犯罪である。経済のない道徳は寝言である。」と表現されている。しかし、戦前においては軍事の、戦後においては経済の成長が自己目的化して、軍事一辺倒、あるいは経済一辺倒となってしまい、バランス感覚もバランスを取る思想も忘れ去られてしまった。地域においても、地域振興とは、まず、第一に経済振興を意味した時代が長く、今、ようやくそこから脱しようとしているものの、いまだ「地域の生活を守る」を錦の御旗にして、一時的な経済効果を狙った公共事業を優先し、自然保護や文化振興などは、生活にゆとりができたときにだけ行う、優先度が低い事項であると本音を語る人々も多い。

しかし、自然も文化も失くした地域に、経済的な富が集まり続けるはずはなく、地域の自然や文化を守ることと経済発展は、車の両輪のようにバランスが取れてはじめて地域の持続可能性に繋がるものである。特に観光においては、自然や文化を守る意思がなく経済を優先する地域に対して、人々は観光的魅力を感じなくなってきている。目先の経済的利益に囚われず、開発と保護のバランスを取ることが、長期的視野で見た場合、地域の利益を最大化するものである。「②方向性を示す哲学の保持」ができれば、自ずとこの長期的視野から見たバランスも取れるようになるが、さらに日本人が古来、仏教や儒教から学んできた中庸の精神を思い出すこと自体も、日本の伝統文化を守ることのひとつであろう。

「④コミュニティを守りながら目指す方向に進める仕組み・政策」には、「コミュニティを守る」「目指す方向に進める」という二つの条件が含まれている。日本の場合、地域に関わる仕組みづくりや施策は、計画段階のものも含めれば、かなりの数のものが投入されてきた。しかし、それらが目指す方向というのが明確でないために、計画段階のままで終わったり、地域の実情やニーズに合わず、立派なハコモノだけができただけで、何の役にも立たなかったりするケースが非常に多い。

地域の限られた財的・人的資源を有効に活用するためには、「コミュニティを守る」「目指す方向に進める」の条件に合致しない無駄な仕組みづくりや施策を排し、地域の目指す方向を明確に定めた上で、それに合致した仕組みづくりや施策に財的・人的資源を集中させるようにすることが、まず日本の地域に求められる課題であろう。

「⑤外的状況を推進力に変える力」は、長引く不況下にある日本のほとんどの地域において求められる“自立する力”でもある。経済格差が広がる中国にあって最も貧しい省のひとつである貴州省の少数民族の村々、大国に挟まれ吸収・消滅の脅威に絶えず晒されているブータン、貿易構造の変化と行財政改革で地域での雇用をほとんど失ったニュージーランド・カイコウラのマオリ・コミュニティと、本調査で訪れた地域は、いずれも、かつて、あるいは現在において存亡の危機に瀕していた地域ばかりである。外から迫って来る危機的状況に対応し、なんとかマイナスをプラスに変えて地域が生き延びる糧とすることは、半ば必然であった。現在の日本の地方においても、危機的な状況にあるが故に、同様にそれを地域の推進力に変える力も生まれてくるかもしれないし、実際、いくつかの地域ではそれに成功しているが、その一方で、「人手がない」「若い人がいない」「時間がない」「資金がない」「余裕がない」と、ないことを嘆くばかりで手も打てない地域も多い。

貴州省、ブータン、マオリとそれらの地域で決定的に違うのは、自立心ではないだろうか。自分の知恵と力で何とかしなければならない、それができなければ、外の知恵と力を借りて自分たちが生き残るために利用する、それさえできなければ死ぬしかない…。そこまで死にもの狂いになっている地域がどれぐらいあるだろうか。今、あったとしても、国からの補助金や公共事業に頼り続けて、自分たちの知恵や力を出すことも、外の知恵や力を借りる力も、国に頼りっ切りの長い時代の間に、自立心とともに失ってしまったのではないだろうか。

紐が付いた補助金と公共事業で地方を操縦し続け、地方の自立心と自活力を奪った国は、代わりに膨大な行政コストとガバナンスの非効率性を負うことになり、国の体力をじわじわと奪っていっている。今後の地方への補助金や公共事業は、地域の自立心と自活力に繋がるものか否かという視点で精査し、さらには集中させるべきであろう。地域の側では、もはや国からの補助金や公共事業に永続性はなく、自立心と自活力がなければ、地域の存続はあり得ないという危機感をまず広く共有することが求められる。

以上に挙げた個々の課題を克服し、コミュニティ・ベースド・ツーリズム成功のための５要件のいくつかを満たしている地域は、日本においてもいくつもあるが、５つの成功要因すべてを満たしている地域となると極めて少ないのではないだろうか。ほとんどの地域で、５要件のいくつかが欠けるか、あるいは、すべて揃っているように見えても、５要件が相互に噛み合わずバラバラでまとまっていない。地域のリーダーには、この５要件を満たし、相互に噛み合うようにまとめる地域マネージャーの役割も求められるのかもしれない。

地域が生き残り、地域の幸福を目指して進むために、必ずしも「観光」という手段は必要ではないのかもしれない。地域の幸福のために、別の手段を優先すべき地域も沢山あるであろう。しかし、観光には、かつての地域の祭りがそうであったように、地域の住民が自らの地域のアイデンティティを再確認し、連帯と協力の絆を深め、地域をひとつにまとめ上げる力がある。そして、「観光はビークルだ」という言葉のように、地域を目指す方向に運ぶ力がある。観光が地域を幸福に導き、地域が観光を豊かにし、地域の外から来た旅行者をも幸福にする。そういう観光と地域の幸せな関係が、観光の真のあるべき姿ではないだろうか。そうした観光の意義に関する認識を広め、共有することも、もうひとつの大きな課題である。

（2）コミュニティ・ベースド・ツーリズムの実践に向けて
～個人・家族による小規模経営の観点から～

1）CBT の基本理念～個人・家族を基盤とした主体論・経営論

前節では、3 ヶ国の事例調査結果を踏まえ、コミュニティ・ベースド・ツーリズム（以下、CBT）成功の要件と課題について 5 つのポイントから整理を行った。では、こうしたポイントを実際に地域で実践し、自律的に CBT を展開していく際、主体（観光開発の担い手）となるのは誰であるべきであろうか。

今回の調査を通して感じたのは、それは、“個人”あるいは“家族”であるということである。なぜなら、“個人”こそがコミュニティを構成する最小単位であり、“個人”が集まって構成される最も小さなコミュニティ――そして最も重要な、生活上の基盤となるコミュニティ――こそが“家族”だからである。つまり、個人・家族といった単位が自律性を持って開発に参与してこそ、その集合体としての地域コミュニティの自律的発展が担保されるのである。そしてさらには、観光開発の結果得られる利益は、こうした地域生活の基本単位にこそ還元されなければならないのである。

このように考えれば、実は、この個人・家族という小規模な単位を基盤とした開発主体論・観光地経営論こそが、CBT という理念の根幹をなす部分となる。したがって CBT の具体的実践において最も重要な論点のひとつは、こうした開発の担い手としての個人・家族が、如何にして前節でまとめたような要件・課題に対応し、観光地経営に主体的に参画することができるのかを検討することにあると言えよう。すなわち、3 ヶ国の事例でも見てきたように、コミュニティの構成員である個人・家族が以下のようなプロセスを通して観光開発に参与できるかどうかを検討することである。

- コミュニティの構成員個々が、私利私欲を超えたところで共通の価値を共有すること。
- コミュニティの構成員個々が、何らかの形で組織化されることで、開発の意思決定のプロセスに参与し、地域を主体的に管理・運営していく能力を身につけていくこと。
- こうした動きが政策的に支援されること。
- コミュニティ内に過度の貧富の差が生じないよう、観光開発の利益をできる限り多くのコミュニティ構成員に再配分すること。

また、こうしたプロセスに個人・家族が参与し、主体性を発揮するためには、自ずと適切なコミュニティの規模というものも想定されよう。お互いの顔が見え、相互扶助が機能し、意思決定の際にひとつにまとまることができる範囲、である。これこそが住民

がひとつの集団として自律性を発露するための最適単位であり、CBT におけるコミュニティの定義であると考える。本調査において、特に貴州の伝統的集落で典型的な成功事例を確認できたのは、伝統的集落というものが、歴史的に形作られてきた自律性を発揮するための最適単位であるからに他ならない。

以下、こうした観点に立脚し、CBT の実践における主体としての個人・家族のあり方、個人・家族経営のあり方について、その特徴と課題を整理し、今後の地域開発手法としての CBT の可能性を提示することでまとめに変えたい。

２）個人・家族経営による CBT 実践～その意義と課題

かつて観光人類学者のスミス（Valene L. Smith）は、第三世界における地方レベルの観光開発のあり方について、小規模観光企業による所有と経営が果たす役割の重要性に着目、「私企業化（privatization）」という観点から論考を発表している（Smith 1998）。この論考では、それまでの観光研究においては地域開発のあり方としてほとんど無視されてきたインやゲストハウスのような家族経営による小規模な観光施設（small-scale tourism enterprises）を議論の俎上に載せ、それら施設の地方レベルでの観光開発における役割を積極的に評価している（スミスは家族経営による企業を“小規模企業”と呼んでいる）。これらの点は、CBT のあり方を考えるうえでも非常に有用な基礎的知見となるものである。

そこでここでは、スミスの論考を参照しつつ、今回の三カ国での調査結果を踏まえることで、CBT 実践の基盤としての小規模経営の利点と課題についてまとめておく。

■小規模経営の利点

まず、利点については、以下のような点を指摘することができる。

① 地域住民は既存の社会的ネットワークを有する。住民個人あるいは家族が開発の担い手となれば、こうした既存のネットワークを有効に活用することが可能となる。そうすることで、コミュニティ内の他のメンバーに開発に関する合意や協力を得たり、様々な利害関係の調整を行ったりすることができる。あるいは、既存のネットワークをベースとしながらも、彼らの意思決定者としての力を強めるための特別な組織を設立することも可能である。

② 事業を個人あるいは家族で所有することは、地域社会における個人・家族の地位を確立し、広範なネットワークへのアクセスを可能とする。

③ 個人・家族経営という形態は、個人的な学習や努力が所得増に直結する経営形態であり、個々の責任感や能力、自尊心を高める機会を多く提供する。また、独立した企業家（起業家）としての心理的満足感も高い。

④ 家族経営という形態は、女性や高齢者など、一般に他では職を得ることが難しい

であろう家族構成員に収入獲得の機会を与えることができる。

⑤ 個人や家族による経営は、例えば農業生産活動と観光経営といったように、相互に関連する事業の兼業を可能とし、経営リスクを分散できる。さらには両事業の相乗効果を期待することも可能である。

⑥ 経営のための資源・設備や備品として、個人・家族の資産を活用することができる。したがって、経営環境の整備は個人・家族資産の蓄積を意味する。しかもこれらの多くはいざというときに売却可能である。

このように小規模経営を基盤に観光開発を据えることの重要性は、CBT を通して個人・家族に、経済的・社会的な便益をもたらす点にある。

すなわち経済的には、小規模経営を基盤とすることで、家族や地域社会の成員に雇用を創出することができ、観光収益を個人・家族に直結させることができる。そして小規模経営を通して、観光産業の少なくともある側面を地域社会が直接管理することによって、経済的利益の域外への漏出を最小限に抑える取り組みが可能となる。また地域の小規模経営による産業同士が相互依存・連関を高めることで、地域の幅広い業種に経済波及効果を生みだすことができ、全体として地域経済の底上げを図ることもできよう。

そして、小規模経営が、単に経済的便益だけではなく、社会的便益をももたらす可能性があることにも十分注目すべきであろう。例えば個人で事業を行うことがその個人の自尊心を高めることにつながったり、地域内の産業連関を高めることが、地域内の社会的な交流をより活発化させることにつながったりすることも、地域を社会的に豊かにしていくうえで非常に重要な観点である。

■小規模経営の問題点

一方、小規模経営の欠点としては少なくとも以下のような項目を指摘することができよう。

① 経営機会や事業所有の機会というものは、必ずしも平等に得られるものではない。そうした機会の獲得は、個人の履歴や家柄、経済状態、人格などに大きく左右される。

② 事業運営・経営が成功するか否かは、個人の能力や適切な訓練経験、そして市場の状態に比例する場合が多い。しかしながらこうした事業経営に関するトレーニングの場や、可能性を検討するための知識を得る機会といったものが、途上国や地方部においてはほとんど存在しないか、あったとしても極めて限られている。

③ 途上国や地方部においては、伝統的な社会組織が保持されている場合が多い。その一方で観光開発は、こうした枠組みとは異なる、観光収入に基盤をおく新たな指導者や組織を出現させることがある。こうした場合、新旧の指導者間や組織間

でのもめごとが発生したり、社会秩序の混乱が生じたりすることがある。

④ 小規模経営者は、適切に組織化されない限り、地域の観光活動の動向を管理することは難しい。また、そもそも途上国や地方部においては、地域社会の側に、観光活動を管理する充分な能力がなかったり、そうした能力を遙かに超えた速度と規模で観光地化が起こったりする場合が多い。したがってこうした場合も社会的な混乱が発生してしまう恐れがある。

⑤ 起業資金・初期投資やその後の経営環境は、個人の財産や経済条件、技術や能力に大きく左右される。結果として、同一の地域社会内で、条件的に恵まれている者と恵まれない者との間に収益の格差が生じてしまう。

⑥ 小規模経営は、彼らの住居（持ち家あるいは借家）を店舗や宿泊施設に改造することによって展開されることがしばしばである。この場合、上下水道などインフラストラクチャーの不備が、直接、経営上のハンディキャップとなる。

小規模経営を基本とすることによって、観光産業における所有と経営を地域にできる限り属させ、観光開発が地域の経済的・社会的発展に寄与するようにするためには、小規模経営の持つ利点に着目するだけでは不十分である。少なくとも、上述したような短所もある。したがって、こうした欠点を補うため、経営者の組織化と行政など第三者によるきめ細かいサポートが必要不可欠になる。ニュージーランドの事例にあったトラストなどはこうした支援体制のあり方として非常に示唆に富むものである。

また、小規模経営が、経営者や家族のメンバーに過剰な労働を強いている可能性もある点には注意が必要である。こうした欠点が表面化した場合、当然のことながら、設備や福利厚生の整った大型ホテルや大企業の従業員として働いた方が、小規模経営より経済的・社会的に、より質の高い暮らしが可能となる、という考え方が生まれる。そして、こうした大型ホテルや大企業が、地域の環境や社会・文化に対して理解の少ない、自社営利第一主義の組織であった場合、結果として既存中小企業や地場産業の衰退や地域社会の混乱を招き、地域全体としての活力を奪ってしまうことにつながりかねない。

まさに、こうした経緯こそが、これまで多くの観光地が辿った、観光開発が特定の企業利益に結び付くものの、地域全体としては疲弊していく、というシナリオである。この点については、本研究で取り扱った内容からのみではこれ以上の議論は不可能である。しかしいずれにせよ、地域開発上、自律性を発露するうえで有効な手段と考えられる小規模経営が、現状では、生活の質の保証という面で、より大きな企業の賃金労働者に及ばない可能性があること、そしてそれが住民の小規模観光経営への参与意欲の低下と強い相関を持つかも知れないということについては、CBT 実践のうえで、今後さらなる調査が必要なテーマであることには間違いない。

■小規模経営と第三者組織

これまで述べてきたように、小規模経営を基盤としたCBTの実践は、地域社会が自律性を発露するうえで有効な手段と考えられる一方で、小規模経営の欠点も多く存在する。したがって、こうした欠点を如何に補っていくかが、今後のCBTの実践における大きな課題となる。そしてそのためのひとつの有効な方法と考えられるのが、上述したように経営者の組織化と行政など第三者によるきめ細かいサポートである。つまり、観光経営者としての住民個人が、如何に当事者として組織化され、住民に対する第三者としての行政や企業、NGOなどと関係性を構築していくかが重要な課題となる。

デイヴィッド・コーテンはその著書『NGOとボランティアの21世紀』において、こうした課題について考えるうえで非常に示唆に富む提言を行っている。すなわち、コーテンは、住民に対する第三者という意味で、政府、企業、そしてVoluntary Organizations（＝NGO）を一括して“third sector organizations（第三者組織）”と呼び、こうした第三者組織の多くが、開発の現場に最も近いところにいたとしても、それはあくまでも外部から働きかける存在であり、当事者自身ではないという点に着目した。そして、「社会構造を下から構築しなおし、政治的、経済的な機能をもっと民衆組織に分割、移管していくこと」の必要性を指摘、地域における自律的な開発を進める上では民衆組織（people’s organization）＝当事者組織の組成が重要であることを論じている（コーテン 1995: 126）。

さらにコーテンは、この民衆組織＝当事者組織は、次の3つの特性を備えるものであると定義している（コーテン 1995: 125）。

① メンバーの利益への奉仕に正当性の根拠を置く、互恵的な集まりであること。
② 最終的な権限がリーダーになく、メンバー自身にある、民主的な構造を持つこと。
③ 存続していくうえで、部外者のイニシアティヴや資金に依存しない、自立的な組織であること。

なお、具体的な民衆組織の例としてコーテンが挙げているものには、協同組合、土地なし農民の組合、水利組合、労働組合などがあるが、重要なのはこの民衆組織が当事者組織であるという点であり、こうした当事者、すなわち開発の担い手の組織化こそが、地域において自律的な開発を進めるうえで重要な要件であるとしている。

そしてさらに、開発の担い手の組織化には、「民衆組織を新たにつくったり、既存の民衆組織を強化したりするだけでなく、第三者組織を民衆組織に転換することも含まれている」としている（コーテン 1995: 126）。コーテンによれば、第三者組織を民衆組織に転換する例としては、地方自治体を民衆組織に発展的に改組する可能性があり、そのためには、自治体の長を真に住民から選ばれたものにすること、住民に関係する事柄をめぐる政策決定に住民自身の参加を促すこと、などが必要とされるとしている。さらにボランタリー組織も、地域社会の外部から発展プロセスに関わる第三者組織にとどまらず、地域の民衆に直接責任を持ち、そのサービスに対して民衆組織のメンバーから

報酬を受け取る立場に転換することが可能である、としている（コーテン 1995: 127）。

■旅客誘致と観光市場コントロール

こうした当事者の組織化、第三者組織の民衆組織への転換という観点は、CBT の具体的な実践においても非常に重要な論点となる。

例えば、具体的に例をあげれば、旅客誘致と観光市場コントロールに関する問題がある。すなわち、ホスト社会がその産業の顧客を如何にして域外から誘致するかという命題である。観光開発の場合、一般の開発と比べ、その顧客としての観光客の動向が予測困難な不確定要因として存在する。これは観光開発においては特に重要となる点で、持続可能性を確保するうえで非常に大きな課題となる。つまり、観光客の量や動向が、政治的・経済的要因や観光客の好み、流行、旅行形態などによって極めて敏感に左右されてしまうのである。

こうした観光市場の持つ特性を踏まえると、CBT においても、大きく次の二点への対応が必要不可欠となる。すなわち、地域資源の再評価を行い、それによって観光開発の初期段階において、観光振興の方向性として依って立つべき地域のアイデンティティを明確に打ち出し、市場価値の高い地域ブランドを確立すること。そして、観光市場の不確定要因をコントロールする何らかの組織や手段を地域側が構築すること、の二点である。

こうした点は、CBT の持続的な展開のためにも極めて重要な課題なのであるが、小規模経営者個人で取り組むことは非常に困難である。こうした点からも開発の担い手の組織化と行政によるサポートが極めて重要になってくる。今後更なる理論の精緻化と事例による検証作業が望まれるところである。

３）おわりに

本報告書において展開してきた議論は、あくまで三つの国・地域のケース・スタディを元に筆者らが深めてきたものであり、当然のことながら議論を普遍化するには限界がある。観光産業自体がその国や地域の自然・文化資源に依拠した産業であり、これら資源の多様性ゆえに、万能の普遍的開発手法は存在しない。すなわち地域 A で成功したからといって、その手法を単純に地域 B に持ち込んだとしても、必ずしもそれは有効性を発揮するとは限らない。

しかしながら、筆者らが観光形態として敢えて CBT に着目したのも、まさにこうした観光産業の特性による。つまり、観光開発とは、地域固有の自然・文化資源に依拠するがゆえに、観光地として成立するためには、これら資源の人為的な開発行為と商品化が必要不可欠となる。そしてそうした多様な資源を地域の“コンテンツ”として再構成・演出し、観光産業を創出することができるのが、同じく地域資源のひとつである“人的

資源”としての地域住民なのである。一言で言えば、地域住民が、観光を通して地域の誇りと資源の独自性･価値を見せることこそがCBTである。旅行者の視点から言えば、地域住民を通して、地域の誇りと独自性を感じ取ることこそがCBTなのである（実は、この報告書自体が、地域の方々との出会いを通して、その地域の誇りと独自性を感じ取ったことによる結果である）。

現代の観光活動は地球規模の経済活動であることは否めない事実である。したがって、地域資源や地域既存のコンテンツは否応なく世界的なシステムの中に組み込まれていく。

こうした状況においては、観光開発の地域社会に対するインパクトを“善”か“悪”か、といった二分法で捉えることはもはや無意味である。つまり重視すべきなのは、観光開発による地域資源への負のインパクトを最小限に抑え、その一方で、観光を利用することで地域資源を守り、既存資源をより付加価値の高い商品として再構築し、さらには次世代に残る新たな資源を生みだしていくことにある。

本報告書で扱ってきた三つの事例から学ぶべきことは、観光開発により既存の地域資源が活性化し、新たな資源として再構築されていくプロセスである。そして、それを可能とするコミュニティの自律的な活動と、開発に関わる多様なアクターの役割についてである。また、本研究では異なる社会構造を持つ対象を事例として取り上げ、同一の分析視座で検証を試みたことにより、伝統的な地域社会が維持されている場合とそうでない都市社会の場合における、それぞれ異なる観光の方向性を示唆することができたとも考える。

また“Community Based（コミュニティに根差した）”という概念は観光開発に限ったものではなく、他の地域開発問題にも適用が可能な概念である。実際、今日の地域開発においては、進行するグローバル化経済の中で、地域としての独自性や誇り、アイデンティティを求める動きが強まっている。また、単なる経済指標による豊かさの判断への反省から、人間の内面的な幸福を実現することを目的とした、コミュニティに根差した様々な取り組みが生まれていることも確かである。ここ数年来、我が国において「まちおこし」という言葉が様々な場面で用いられるようになっているのも、こうした流れに位置づけられるものであろう。

こうした多様化する社会における開発行為が依拠すべきは、自らの地域への愛、文化への誇り、社会的・文化的アイデンティティ、に他ならない。こうした要素は全てコミュニティにおいて育まれるものであり、繰り返しになるが、そうした要素を継承するコミュニティの最小単位こそが家族なのである。

三カ国の調査を経て、翻って我が国の現状を見るにつけ、様々な問題の核心となる部分に、この家族の再生というテーマがあるように思えてならない。戦時中の個や家族と

いうものをおし殺しての国家への忠誠、戦後の高度経済成長における個や家族を顧みない企業への奉仕、こうしたプロセスを経て、我々は個や家族の価値を忘れ、そしてその延長線上にある地域コミュニティをも崩壊させてきた。

もはや右肩上がりの経済発展は望めず、人口減少も予想される。我々は、経済・社会構造の大転換期の真っただ中にいる。今一度、我々は個・家族・コミュニティの意味を考え、Community Based＝コミュニティに根差した生活のあり方を取り戻さなければならない。

貴州省少数民族集落における住民の助け合い意識も、ブータンにおける仏教的幸福の概念も、ニュージーランドにおける先住民族の権利回復やアイデンティティの復興も、突き詰めていけば、全てこうした生活・生き方の基盤としてのコミュニティのあり方に関する議論であった。

我々は CBT の研究を通して、単なる観光振興論ではなく、こうした、より深い示唆――人として地域に根を張って生きていくうえでの重要な哲学的教示――を得たように思う。そしてそうした哲学が確立して初めて、ツーリズムは本当のイズム（ism: 主義）になるのではないだろうか。

こうしたことを考える機会を与えて頂いた、貴州省、ブータン、ニュージーランドの関係各位に心から御礼を申し上げたい。

参考文献

シーアボルド，ウィリアム. F 編（1995）『観光の地球規模化――次世代への課題――』玉村和彦監訳，京都：晃洋書房。

コーテン，D. C.（1995）『NGO とボランティアの 21 世紀』渡辺龍也訳，東京：学陽書房。

Smith, Valene L.（1994） Privatization in the Third World: Small-Scale Tourism Enterprises. In W. F. Theobald（ed.）*Global Tourism, Second Edition: The next decade*, pp.205-215. Oxford, Woburn and Massachusetts: Butterworth-Heinemann.（初版：First Edition は 1994 年刊行。なお初版については、前掲：玉村 1995 の邦訳がある）

付属資料

© OGAWA Hirotaka, 2010

（1）貴州省の民族観光地と観光地ライフサイクル論

緒川弘孝

○はじめに

中国・貴州省は、省政府や州政府の支援のもと、ミャオ族やトン族などの少数民族が実際に生活する村が観光開放され、住民が意見を出しながら、労力や資材の提供などを通じて積極的に参加する観光開発が行われている。今回、我々は視察旅行を通じて、成功例と言われる郎徳上寨村をはじめ、そうした観光開発が行われているいくつかの村を巡り、「少数民族による持続可能な自立開発型の観光開発が行われてきた」［曽：1998.3、1998.4］経緯や状況などについて関係者からヒアリングを行って、実際にその成功の様子を確認できた。ただし、それぞれの観光地の様子を観察して見ると、観光地化の進展の度合いが様々に異なり、その成功の要因や直面する課題についても、各地で異なっているように見受けられた。また、貴州省内には、自立開発型とは異なる形での開発が行われている観光地も存在する。そこで、近年、議論されている観光地のライフサイクル・モデルを用いて貴州省の各観光地の位置づけを整理しながら、観光地を構成する魅力ごとに各観光地の成功要因と課題を分析することとする。

○観光地のライフサイクル

観光地のライフサイクル論の歴史については、「観光地発展段階論の系譜」［石井：2002］に詳説されているので、ここでは詳細は避けるが、1950 年代から観光地の盛衰に関する議論が始まり、現在では、1980 年、R・W・バトラーの論文「観光地の発展周期に関する考察：観光資源管理のための一視点」において発表された観光地のライフサイクル論をベースに議論されることが多い。バトラーは、旅行者の特性や観光地の空間整備などと関連付けて、観光地が①探検段階、②参画段階、③発展段階、④確立段階、⑤停滞段階、⑥衰退または再生段階の６段階を経て発展・進行していくと論じ、人気の増加と衰退を単純な曲線を用いて説明している［Butler：1980］。バトラーは、それまで考えられていたように観光地が無制限に右肩上がりの発展を続けることはあり得ず、観光魅力の質は、意識を持った対策なしには、徐々に悪化するという視点を提示した。

その後、バトラーの論文に言及した研究者たちの多くが指摘しているように、すべての観光地の観光客数の推移が必ずしもこの曲線と同じようなカーブを示すわけではない［Kovács：1997］。また、すべての観光地が必ずこの６つの段階を経験するわけではなく、計画的な開発から始まった観光地であれば、①探検段階や②参画段階を飛ばして③発展段階から始まると考えられるし、観光客を引き寄せる魅力に欠けるために③発展段階や④確立段階を経ることなく、⑥衰退段階を迎える観光地も存在すると考えられ

る。各発達段階の境界の定義も曖昧であり、ある観光地が単純に特定の発達段階に位置づけられるよりも、同時に複数の発達段階の特徴を持つことの方が多いとも思われる。つまり、バトラーの観光地のライフサイクル・モデルやその発達段階論は、そのままの形ですべての観光地に適用できるとは考えられない。しかし、観光地の成功要因や課題は、発達段階ごとに異なった様相を持っていると思われ、発達段階を無視して一括して考える弊害よりも、それぞれの発展段階ごとに整理して考える意義の方が大きいと考えられる。

そうした考えのもと、まずは観光地のライフサイクルの各発達段階をバトラーの論文から整理し、観光地発展の曲線と併せて表現し（図 1）、次に観光地の魅力を構成する要素が、観光地のライフサイクルに及ぼす一般的な傾向を検討し、資源、インフラ、市場条件、外的要因の要素ごとに整理した（表 1）。こうした整理に基づいて、観光魅力の要素ごとに貴州省の各観光地を概観していくこととする。

○自然資源

今回の視察旅行では、主として少数民族文化を観光資源とする地域を巡り、自然資源を主とする観光地は、東洋一と称される黄果樹瀑布および巨大な鍾乳洞である龍宮のみを訪れたため、貴州省の自然資源の状況について全体像は掴みにくいが、黄果樹瀑布に関しては、滝の周辺が地元政府が管理する有料入場のエリアとなっており、滝へとアプローチする片道徒歩 30 分以上の道のりの山道は一定以上荒れないように舗道が整備され、土産物屋も出口付近に集められるなど、自然景観が損なわれないような配慮がなされているように見受けられた。そのため、今後、この自然資源の魅力が大きく損なわれるとは考えられない。現在は、観光地のライフサイクル曲線上で言えば、地方政府の開発と宣伝・広告により、急速に観光客数が増加している「発展段階」にあると思われるが、今後は、“東洋一”という看板もあるとこから、バトラーが永続的な魅力を持つ観光地として挙げたナイアガラのように、確立段階、停滞段階、再生段階と進んでいくものと思われる。龍宮鍾乳洞についても、観光化により鍾乳石が若干、黒ずんで来てはいるが、同様の傾向を示すものと思われる。

○インフラ

前述の黄果樹瀑布や龍宮鍾乳洞は、貴州省内の高速道路の延伸により明らかに観光客数が増加しており、インフラ整備による観光客数の増加効果は明らかである。それらに対して少数民族観光地の多くは山間部にあり、従来、道路の整備状況は悪く、路面状態も劣悪だったが、ここ数年のうちにようやく道路が舗装化されつつある。少数民族観光の中心となっている黔東南苗族侗族自治州内の黎平には、近年、小規模な空港も整備された。貴州省全体として見ても、隣接する四川省、雲南省、広西チワン族自治区といった有名観光地を要する地域との間で高速道路などの整備が進行中であり、インフラ整備

© OGAWA Hirotaka, 2010

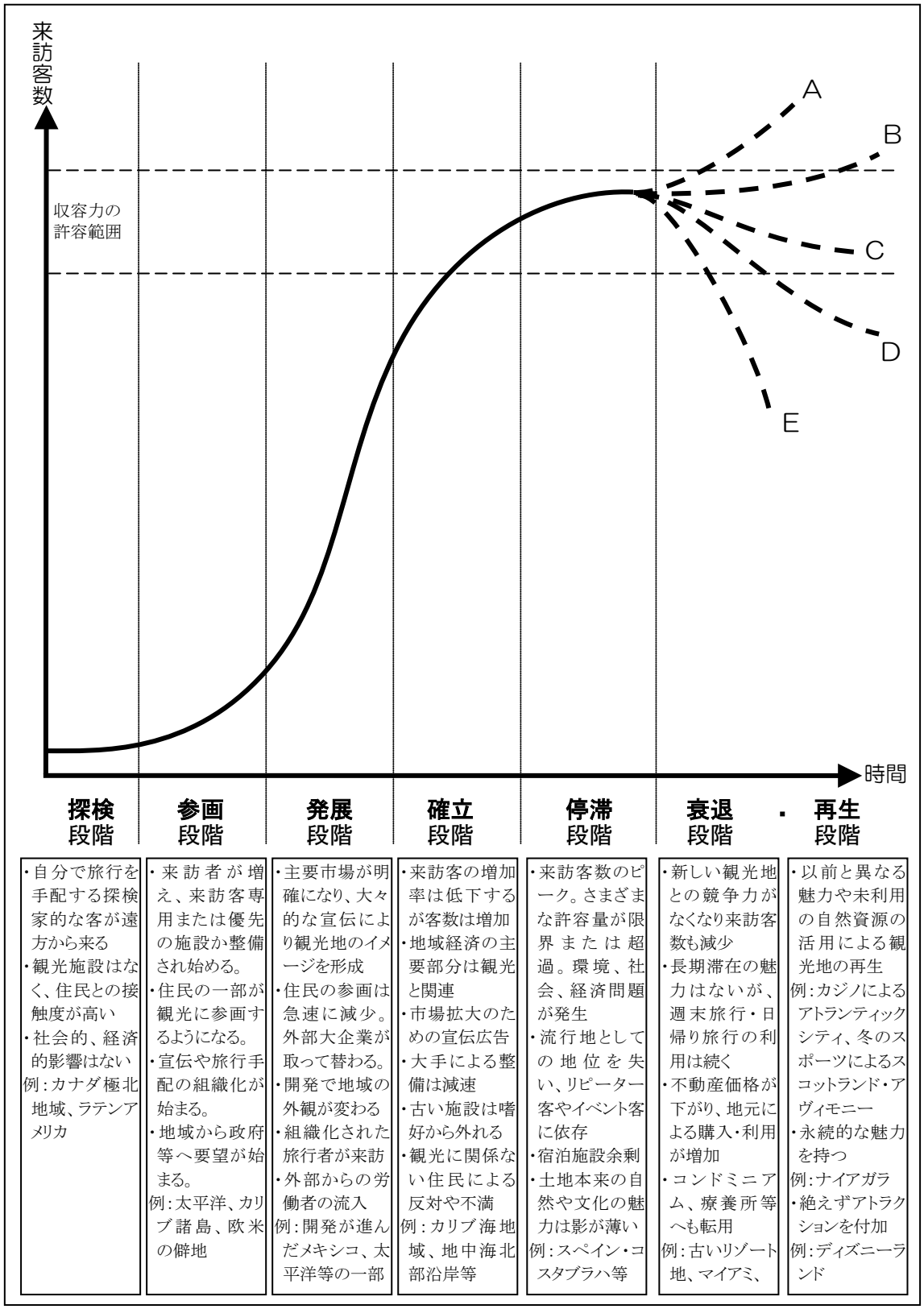
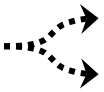
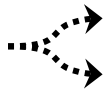
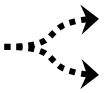


図１　観光地のライフサイクル

（出所）Butler, R.W.（1980）The concept of tourism area cycle of evolution: implications for management of resources. *Canadian Geographer* 24（1）等をベースに筆者作成。

表１　観光地の魅力を構成する要素が観光地のライフサイクルに及ぼす一般的傾向

魅力の要素		一般的傾向	
資源	自然資源		インフラや観光施設の整備が進み、交通量や観光客数が増加するとともに自然環境が汚染、損耗、または破壊され、自然資源の価値は失われる方向に向かう。
	観光施設		増加する観光客を予想または対応するために観光施設が増加し、観光地のメニューも多様化する。ただし必ずしも質的な向上が伴うとは限らない。
	景観		急速な近代化や乱開発で地域の自然景観や伝統的な景観が失われることが多いが、一方で観光地化を契機に景観規制や町並み整備が行われることもある。
	文化資源		観光地化に伴い地域が近代化したり俗化することで伝統的な文化が失われることも多いが、一方で観光地化が保存・伝承の契機となることもある。
	特産品（地場産業）		観光産業への依存度によっては、旧来の地場産業が廃れることもあるが、共存したり、観光産業と結びついて需要を増やしたりブランド形成が図られる場合もある。
	ホスピタリティ		初期においては旅行者に対する慣れがでてきて心を開いたり、対応するスキルを身につけることによってホスピタリティが向上することがあるが、観光地化が進展するにつれて、ホスト側にルーチン作業的な意識が出てきたり商業主義的な意識が強まるなどして、ホスピタリティが減少する傾向がある。
インフラ	交通インフラ・宿泊施設		観光客数増加への対応または観光地計画により、道路、鉄道、空港、港湾等の交通インフラや各種の宿泊施設などの整備が進む。
市場条件	認知度・ブランド力		観光客数のより一層の増加を図るため、市場への広告・宣伝量が増加し、市場での認知度が高まる。それはやがて地域のブランド力にもなり、定番的観光地として一般的な消費者も惹きつけるようになる。
	市場トレンド・競合地／連携地	?	観光客数が増えるようになると、より遠くの観光地と競合するようになり、近くの観光地との連携も必要になってくるということが言えるが、地理的条件、観光地の種類や規模、市場のトレンドなどの要素が複雑に絡むので、観光地の発展段階との関係は明確ではない。
外的要因	その他	?	災害、伝染病、戦争、テロ、治安悪化、景気、為替相場、制度や法令の変化などの観光の外的要因も観光地の衰退に影響するが、観光地の発展段階との直接的な関係は明確ではない。
（地域調和）			初期においては地域が広く認識されて地域へのプライドが醸成されたり、経済的恩恵が得られる効果などにより、地域が一体感を持って観光開発に取り組むことも多いが、観光地化が進展するにつれて、交通渋滞、ゴミやトイレの問題などの地域負荷が高まり、地域住民と旅行者、あるいは観光受益者とそれ以外の者、地元資本と外部資本などの間で利害が対立するようになる。また産業構造の変化により、地域住民内での格差も生じ、観光に対する温度差が生じる。こうした地域不調和の要素が、ホスピタリティにも影響する。

© OGAWA Hirotaka, 2010

による観光客数の押し上げ効果は今後大きいと思われ、「発展段階」の状態が今後長く持続する可能性もある。

〇宿泊施設

貴州省の省都である貴陽市や黔東南苗族侗族自治州の州都凱里市では、近代的な高級ホテルをはじめ様々な宿泊施設が数多く整備されており、従来の少数民族居住地目当ての外国人のバックパッカー的な観光客だけでなく、国内の家族連れやツアー団体客に至るまで大きく観光客の層を広げる役割を果たしている。また、外国人バックパッカーが数多く集まる観光地として有名な山間地のトン族の村・肇興村でも、最近、漢族資本による高級ホテルが整備されるなど、宿泊施設の整備が進んでおり、こちらでも国内団体ツアー客をはじめ客層が広がっていると思われる。こうした変化は、一方では、従来のバックパッカー客など“探検的な”観光客離れを起こすと考えられるが、量的な面だけ見れば、収容力の限界に至るまでは一般的な観光客数を押し上げる効果が期待できる。

〇観光施設

少数民族観光を求めて貴州省を訪れる観光客にとっては、観光に特化したような施設の整備は必ずしも必要でないどころか、本来の風情を損なうものとしてマイナスに作用する場合さえあると考えられる。実際、省文化庁文化処所長・呉正光氏の指導で観光開発が始まった郎徳上寨村など少数民族の観光地では、トイレ、広場、風雨橋、歩道などの他には、あまり積極的な観光施設の整備が行われていない。

その一方で、省都・貴陽市の近郊に立地する紅楓湖旅游村は、模造の伝統建築や宿泊施設、土産物屋をはじめとした人工的な少数民族の集落が整然と整備されたテーマパークとなっている。こちらには、今までのところ、中国人観光客が数多く訪れている。現地旅行社のガイドの話によると、ホンモノ性を求めるフランス人や日本人などの外国人旅行者が紅楓湖旅游村を訪れることはほとんどなく、少数民族が実際に住む山間の村の方に訪れるという。逆に中国人旅行者は、そうした村に対して「汚い、道が悪い、ホテルも悪い」というイメージを持っており、訪れることに抵抗があるようである。そうした中国人旅行者に対しては、紅楓湖旅游村のように貴陽市内の近代的なホテルから高速道路で短時間にアクセスでき、清潔で整然と整備された人工的な観光施設の方が、現時点では、まだ有効だということになる。しかし、紅楓湖旅游村は 1991 年の整備後、既に 15 年を経て、施設や設備の劣化が始まり、新たな魅力を付け加える余地も少ないように見受けられるところから、ライフサイクル上では、既に「確立段階」から「停滞段階」に差し掛かっているように思われる。今後は、山間部への道路条件が良くなり、中国の旅行市場が成熟化していくにつれ、中国人旅行者の足もホンモノの少数民族の村へと向かうようになると、観光客離れが生じ「衰退段階」へと進んでいく可能性が予感された。

○景観

前述の紅楓湖旅游村が立地する紅楓湖は、貴州省では数少ない湖沼空間として貴陽市民などの別荘地、リゾート地としての開発が進んでおり、湖の周辺には数多くのリゾート・ホテルや別荘が建ち並んでいる。しかし、それらの整備にあたっては、景観への配慮があまり見られず、開発に伴う景観劣化の 1 つの例と言える。

一方、少数民族ミャオ族の村である郎徳上寨村、南花村、季刀村、青曼村などでは、観光開発をスタート後に伝統的な木造家屋が連なる村の景観の保全に注意を払っており、新築のコンクリート造りの建物は制限され、規制の制定以前に建てられた建造物には表面に木の板を貼るなどして景観の統一感が損なわれることを防いでいる。周辺の観光開発を選択しなかった村々では、コンクリート造りの建物が目立ち始めているところから、観光地化が景観を守る方向に作用していると考えられる。

ただし、南花村については、州政府などが開発に大きく梃入れしていることなどが災いしてか、新築の建物が目立ち、石畳も整然としすぎているなど、真新しく整備しすぎの感がある。観光客に伝統的な踊りを披露する広場は、従来から使用して来た場所ではなく新たに整備されたもので、中心にトーテンポールを立てるなど、民族の伝統からすると違和感がある景観が見られた。現時点ではマジョリティを占める中国人旅行者が、このような整然とした空間を好むとしたらプラスに作用するのかもしれないが、旅行市場の成熟化によっては、こうした景観整備がマイナスに作用するかもしれない。

観光開発に伴う景観整備は、観光魅力を維持・向上させ、観光地の「発展段階」を持続させたり、衰退を防いだりする効果があると考えられるが、コントロールの方向性によっては観光地の魅力にとってマイナスになる可能性を孕んでいると言える。

○文化資源

元黔東南州苗族侗族自治州副州長でミャオ族出身の呉徳海氏によると、ミャオ族の民族文化の主な特徴は、言語、歌、踊り、蘆笙、民族衣装、闘牛、建築に現れていると言う。これらの民族文化は、中国の共産化に始まり、文化大革命や漢民族の同化政策、近年では社会の近代化、情報化などによって大きく損なわれて来ている。また、一般的にも観光化によって、伝統文化が失われたり、俗化したりする傾向がよく指摘される。貴州省においても、伝統的な踊りが演出色を強めて改変されたり、従来踊っていなかった他の地域の踊りのスタイルを取り入れたりといった現象が見られる[曽:1998.4]。我々は民族衣装についても、紅楓湖旅游村にて、デザインを極端に現代風に改変した民族衣装を目撃した。

しかし、その一方で、観光化が伝統文化の存続に繋がる効果を挙げているという面も見られた。呉正光氏は、ミャオ族の村は民族衣装を着て踊りを披露する機会が減少していたが、観光開放することによって、そうした機会が増えた意義が大きいと語った。例えば、伝統的に村の女性は、必ず嫁入り前に民族衣装の晴れ着と銀細工の髪飾りのセッ

© OGAWA Hirotaka, 2010

トを揃え、それが娘を持った親の義務とも言えるものだったが、近年はその風習が廃れ、郎徳上寨村では観光開放前に村の女性が持っている民族衣装の晴れ着と銀細工の髪飾りのセットが 18 着しかなかった。しかし、観光開放後、徐々に新たに作られるようになり、現在では 120 着にも増えていると言う。民族衣装は手作りであるため、裁縫や刺繍の技術も伝承されるようになる。また、他の村で廃れつつある歌や踊りも、観光開放された村に嫁入りすると習わなければならなくなる。男性の若者も、観光開放以降、村に伝わる歌や踊り、蘆笙の演奏などを身につけるようになった。呉正光氏は、社会が近代化することによってある程度文化が変わって行くことには逆らえないが、そうした中でも観光開放により、いくつかの重要な伝統文化を維持・発展させることができると主張している。こうした村では、文化資源が観光客を集め、観光発展が文化資源の維持・伝承に役立つという良循環が成立していると言える。

○特産品（地場産業）

貴州省の少数民族の村は、もともと農業がほとんど唯一の産業というところが多く、観光化した村でも、農業収入が半分以上を占めているところが多いようである。郎徳上寨村では、観光化により農業にも大きなメリットがあると言う。観光客が増えることにより農産品が村内で消費されるようになり、農産品を遠くの市場に運ぶ多大な時間と人件費が節約されるだけでなく、市場で売るよりも村内で観光客向けに加工販売した方が高く売れ、しかもほとんど無駄なく売れる［陳：2006.4］。村内で生産される食材は、ほとんど農薬を使わない緑色健康食品として、観光客から好評を得ている。我々も現地でご馳走になったが、採り立ての新鮮さということもあり、その美味しさは村への良いイメージを構成する一つになりうるものであると感じた。

貴州省の工芸品としては、ろうけつ染め、銀細工、刺繍などが有名であり、観光開放されてからは、それらが土産物として売れるようになり、北京や上海から買い付けに来るほどである。中でもミャオ族の刺繍の質は高く、貴州省を旅した日本人がそれに惚れ込んで、北京でミャオ族の刺繍製品を売るセレクトショップを開店し、また、貴州省内で刺繍学校を設立して、ミャオ族の子供たちへの伝統技術の伝承を図るほどである［佐藤：2006］。刺繍自体は産業と言えるほどの規模ではないと思われるが、ミャオ族の刺繍が内外のマスコミで紹介されるようになり、特産品が観光地のイメージを押し上げ、それによって集まった観光客によって特産品が買われ、さらに評価が広まっていくという良循環がここでも成立しているものと思われる。ただし、こうした工芸品が高く売れることがわかり始めたため、今後、村人が農作業に費やす時間が減少するのではないかとの懸念もある［陳：2006］。

○ホスピタリティ

一般的に観光開発の初期においては、外部の異人たる旅行者に対する警戒心が徐々に

解かれ、旅行者に対応するスキルが身についてくにつれ、ホスピタリティは上昇し、その後、観光地化が進展して旅行者に慣れるようになるにつれて、ホスト側に商業主義やルーチン作業的な意識が広まって、旅行者から見たホスピタリティの印象は低下していく傾向があるものと考えられる。

ただし、元々住民が旅人に対してもてなす習慣を持っている地域では、最初の警戒段階を素早く飛ばして、ホスピタリティが最も高い段階からスタートすることもあり得る。今回、我々が視察した季刀村は、既に近辺の村が観光化に成功したこともあり、そのケースに当てはまると考えられる。季刀村は、2004 年の観光開放からわずか２年しか経過していないにも関わらず、少数の旅行者グループに対しても村人総出で出迎え、ほぼ全員が心からと思える笑顔で挨拶を交わしてきた。しかし、同じ地域の同じミャオ族の村である南花村、郎徳上寨村では、観光開放からそれぞれ 10 年、20 年が経過しており、当然のことながら渾身の笑顔での出迎えというわけにはいかない。いずれの村も、季刀村から数キロしか離れていないだけに、印象的だった。また、現地ガイドによると、こうした村ではモノ売りがしつこくなってきており、それによって村の印象が悪くなっていると言う。

我々は、プイ族の鎮山村やトン族の肇興村でも同様の傾向を経験しており、こうしたホスピタリティの低下は、観光地の魅力低下の要素にもなると思われる。しかし、観光受け入れの常態化や収入の増加に伴い、素朴さや歓迎心が薄らぎ経済観念が発達することを咎めることは難しい。住民の心性に訴えるばかりではなく、経済的あるいは名誉的な報酬に裏付けられたホスピタリティ向上へのモチベーションを高める仕組みが必要と思われる。

観光客側、送客側にも大きな問題がある。長期間、郎徳上寨村などを中心に貴州省に滞在して研究活動をしていた法政大学教授曽士才氏によると、旅行社側に「連れてきてやってる」「見せてやってる」という意識があり、都市から来た漢族の客にも少数民族に対して上から見下ろすという態度が見られるようである。また、ガイドがツアー客に対して、地元の習慣や文化を説明しないために、少数民族の文化に対して敬意を払わず、マナーや礼儀を守らないこともあり、実際、我々も、そのようなシーンを目にすることがあった。そうしたケースが続けば、住民側のホスピタリティが低下するどころか、村内で観光受け入れの是非も問われることになるであろう。

○認知度・ブランド力

貴州省は、1985 年、呉正光氏が中心となって北京での展示イベント「貴州 侗族建築及び風情展覧」を実施してトン族の鼓楼や風雨橋などの建築文化を紹介したことを皮切りに、北京や上海などの国内大都市や日本などの海外において少数民族文化を紹介するイベントなどを実施したり、宣伝・プロモーション活動を実施してきた。近年、海南省で観光振興の経験を持つ王富玉氏が貴州省委員会副書記として赴任後は、「多彩貴州」

© OGAWA Hirotaka, 2010

のキャッチコピーを掲げるなど宣伝・広告には特に力を入れており、爆発的な観光客数の増加にも繋がっている。現地ガイドによると、中国人による認識度が高いのは、東洋一の滝である黄果樹瀑布や龍宮鍾乳洞および毛沢東がリーダーとしての地位を確立する会議を開いた遵義市であり、中国人ツアー客が貴州省内で巡るのは、省都・貴陽とそれらの観光地だけの場合が大半のようである。それらと比べるとはるかに認知度が低い少数民族の村に行く中国人旅行者はまだまだ少数派であり、認知度・ブランド力が観光地の入込客数に与える影響は非常に大きいと言える。

○市場トレンド・競合地／連携地

現在のところ、「民族風情」が貴州省の観光イメージの一つとなってはいるが、ほとんどの中国人旅行者は少数民族の村よりも前述の有名観光地を巡る旅行をしている。そのため、同じように少数民族観光が大きな柱となっている隣接する雲南省や広西チワン族自治区と貴州省は競合関係にあるとは言えず、むしろ隣り合う省を一緒に周遊する中国人旅行者は多い。この傾向は、高速道路などの交通条件の改善により、さらに強まるものと思われ、今後しばらくは、貴州省と周辺地域の観光地は競合関係ではなく、連携的な関係が続くものと思われる。

一方、貴州省内の少数民族の村同士の関係に目を向けると、郎徳上寨村の成功を見て観光開発に着手する村が増えており、村同士の競合関係が発生していると思われる。ただし、こうした競合関係は、村同士の切磋琢磨を促したり、特定の村に観光客が集中するのを防ぐ効果もあるため、必ずしもマイナスに作用するとは限らない。

ミャオ族の村では、観光客を歓迎する歌や踊りの儀式を行う村の広場の大きさは何百人も収容できるような大きさではなく、儀式を行う回数も１日２回が原則である。現在、爆発的に増えている国内観光客に対応するために、それ以上の頻度で行えば、今は農業と両立する生活を維持している村人のライフスタイルが、今後、大きく崩れたり、現在、観光客を迎える場を取り仕切っているシャーマンが、本来の神聖な伝統儀式を執り行うことに支障を来たすと考えられる。あるいは、押し寄せる観光客に対応するために今は村にはほとんどいない観光プロパーが誕生し、“観光村”的な色調がより強く出てくる可能性もある。しかし、少数民族の村同士が競合し、特定の村への観光客数の集中が抑えられれば、収容力の限界を超えて観光客を受け入れて観光魅力が損耗するようなことを防ぎ、観光地としての持続可能性に繋がるのではないかと思われる。

○観光地の魅力の背景にある地域調和

今回の調査では、「地域調和」ということが、以上に挙げたような観光地の魅力を構成する要素の影で大きな影響を与えていると感じられた。特に地域内で統一感が必要な景観については、村内でルールを作ったり規制をかけたりするためには村民の総意が必要である。また、ホスピタリティに関しても、観光関係者とそれ以外の者の間に観光に

対する温度差が大きければ、旅行者はその村のホスピタリティに不自然さやわざとらしさを感じるであろう。

また、観光開放当初は表面化しなくても、観光化の進展に伴い、交通渋滞やゴミ、トイレの問題などで観光受益者とそれ以外の者に対立や溝が生じれば、村が一致団結して観光振興に取り組むということは難しくなるであろう。そうした現象を、筒井は「観光疲れ」と称している［筒井：2005］。筒井は、湯布院（旧湯布院町。現在は由布市の一部）を例に挙げ、重要な観光資源となっている湯布院の田園風景を維持している農民、および乱開発の防止や景観条例の制定などに大きな役割を果たしてきた町当局と、観光受益者である旅館経営者や土産物屋などとの間に利害関係の不一致が生じ、市町村合併問題などの町内対立に発展していることを指摘している。それは、それまで地域が一致団結して観光振興に取り組み、経済優先の乱開発を防いで、温泉の湯煙と田園風景が調和した魅力を形成してきた湯布院にとっての危機を意味している。

そうした点で、郎徳上寨村など観光開発に成功したミャオ族の村では、地域一体となった取り組みが行えるようないくつかの仕組みが働いていた。その一つが農業と観光を両立させた生活の維持である。原則として村民全員が農民でありかつ観光関係者であるため（正確には希望者全員が観光に参加できる仕組みだが、観光による現金収入が大きいため村民の大半が観光に参加している）、湯布院のように観光業者と農民との分化が生じていない。

もう一つの仕組みが、人民公社時代の仕組みを活かした「工分（コンフン）制度」である。工分制度とは、コミュニティ内における点数査定制度ともいうべきものであり、リーダーが各労働者ごとに働いた時間や内容によって毎日、点数を付けて計算し、それに応じた給与を支払う仕組みである。現在の観光利益の配分方法は厳密には以前の工分制度とは違うようだが、まず、村が一括して歓迎儀式上演料として観光客から１グループあたり 500 元を徴収する。その歓迎儀式に参加した村民には、民族衣装着用、盛装着用、踊り参加、蘆笙演奏、歌唱などといった役割ごとに、三角、四角、丸などの形の点数が書かれた板が渡される。そして、１ヶ月ごとに、観光総収入から蘆笙の修繕費や管理費などを村の経費として 10～20％差し引いた後、各人の累積点数に応じて現金を分配する仕組みである。

郎徳上寨の観光開発を始めた当時、現場で指揮をした村の元共産党書記陳正涛氏も、このような村民全員参加の原則と工分制度により、村民の間での収入の分け方が公平であったことが、大きな成功要因だったと振り返っている。その仕組みにより郎徳上寨村の観光開発は成功し、大きな発展の推進力となったと思われるが、同時に、湯布院のように成熟化した観光地が抱える地域不調和とそれによる将来の衰退の芽を、既に先取りして摘んでいるとも考えられる。

貴州省のミャオ族の他の村では、郎徳上寨村に倣い、同様の制度を導入しているところが多いようであるが、今回の視察では、他の少数民族で同様の制度を導入しているか

© OGAWA Hirotaka, 2010

どうかはわからなかった。例えば、貴陽市の西の老漢族（明時代に貴州省に移住した漢族の子孫）の村である天龍屯堡古鎮では、地元出身者の民間資本による天龍旅游公司という会社が設立され、村内を案内するガイドや地劇と呼ばれる伝統演劇の出演者に給与を支払っており、村民全員が観光に参加しているわけではない。

また、トン族の中心的な観光地である肇興村では、前述のように外部の漢族資本による高級ホテルが整備されているだけでなく、同じ資本により、伝統的な歌と踊りのショーを上演する舞踏団が組織されており、その団員の３割は村外の周辺地域出身者である。つまり、ここでも郎徳上寨村のように観光に村民が全員参加するわけではない。そればかりか、外部資本が入った上に、域外からの労働者まで導入されているのである。また、彼らは農業などと兼業しているわけではなく、漢族資本の会社に所属する従業員という立場であり、歌や踊りを専門の仕事として行っている。

そのショー自体は、２年間の訓練を経て出演が許され、日々練習を続けているだけあって、賞賛に値する非常に質が高いパフォーマンスを示していた。また、周辺地域のものも含めて、伝統の歌や踊りをよく研究し、質を高める努力をしており、伝統文化の維持・発展という意味でも大きな意義を有していると言える。しかし、ここでは郎徳上寨村には存在しない観光プロパーが歴然と存在するわけである。村の人口が郎徳上寨が 800 人弱なのに比べ、天龍屯堡古鎮は 6,000 人、肇興が 5,000 人と規模が大きく違うことも、こうした観光に取り組む体制の違いの背景としてはあるが、これらの村では将来的に観光受益者とそれ以外の温度差というものが生じ、何らかのマイナス要因となる可能性はある。

○おわりに

今回の視察調査では、既存の論文や文献などにより傍証が得られる部分もあるが、基本的には現場を見たり、関係者のヒアリングで聞いたりして得た印象をベースに議論や検討を行ったため、正確性が必ずしも確保されていない点は否めない。しかし、観光地の盛衰に関係する観光魅力のコントロールという観点で大まかに分析してみた結果、持続可能な観光地の仕組みづくりの一つの可能性を、貴州省の少数民族の村に見た気がした。

特に郎徳上寨村などミャオ族の村では、多くの成熟化した観光地が抱える地域不調和という問題を解決していると思われる。

ただし、収容力の限界という点から見ると、郎徳上寨村は観光地ライフサイクルの上で既に「確立段階」におり、成熟した「停滞段階」をどう迎え、「衰退段階」を避けるためにどうソフトランディングし、あるいは次のステップを創造するのかという課題を、他の貴州省内の観光地に先立って解決し、新たな観光地ライフサイクルのシナリオを描くべき位置にあるのかもしれない。

その解決策の一つの糸口として考えられるのは、ミャオ族が持つ観光資源は、形がな

い文化資源をメインとしている点である。これらの文化資源は、特定の村に集中して存在しているものではなく、他の村でも担うことができ、周辺地域が一体となって互いに競合しつつ共存するという関係が可能であると思われる。そのためには、今後、観光客がさらに増えた場合（おそらく貴州省への観光客は今後も大幅に増加するであろう）、すべての観光客を自分の村に囲い込むという姿勢を避けるべきであろう。今のところは、農業と観光の両立のために観光客の歓迎儀式を１日２回に限っていることが、受け入れ人数を抑制することにもなっている。

「全員参加」「農業と観光の両立」「工分制度」といった原則や仕組みは、収容限界を超えて観光客を受け入れる危険と、観光受益者とそれ以外の者による村内対立の危険の両方を避け、自らの観光魅力の損耗を回避するように働いていると思われる。バトラーの観光地ライフサイクル・モデルに当てはめてみるならば、将来の「停滞段階」の次は「再生段階」に入ることが期待でき、しかも、バトラーが再生段階の「以前と異なる魅力や未利用の自然資源の活用による観光地の再生」として挙げたアトランティックシティや、「絶えずアトラクションを追加」することで再生を繰り返すディズニーランドのようなタイプの観光地ではなく、「永続的な魅力を持つ」ナイアガラのようなタイプの観光地［Butler：1980］となり得る可能性がある。しかも、それはナイアガラが持っているような資源そのものの特徴によるのではなく、地域が自ら創り上げた仕組みによってそのような持続的観光地となるのであり、本質的にはより大きな意義を持ちうるのかもしれない。

※ 本稿は財団法人日本交通公社 2006 年度自主研究として実施されたコミュニティ・ベース・ツーリズムの研究（中国・貴州省調査）報告書に執筆した原稿をもとにしたものである。

参考文献

Butler, R.W.

1980 The concept of tourism area cycle of evolution: implications for management of resources. *Canadian Geographer* 24 (1), 5-12

2002 「観光地の発展周期に関する考察：観光資源管理のための一視点」『立教大学観光学部紀要』4, 98-103, 毛利公孝・石井昭夫訳。

Hovinen, Gary R.

2000 「観光地域サイクル論のランカスター郡への適用」『社会学部論叢』10(2), 101-110, 中崎茂訳。

Kovács Dezső

1997 "Phases of rural/village tourism development (An interpretation of Butler's tourist area life cycle concept for rural tourism)" 'Actors of

the European Countryside' - Seminar 1-5 October 1997 Erdőtarcsa, Hungary. < http://miau.gau.hu/miau/60/fanclub/mfc02/1.doc > (accessed 2006-11-3).

石井昭夫

2002 「観光地発展段階論の系譜－新時代の観光開発と観光マーケティングのための基礎理論を求めて－」『立教大学観光学部紀要』4, 52-56。

石川真澄

2001 「観光地のライフサイクルと持続可能性」多方一成・田渕幸親編著『現代社会とツーリズム』pp.99-120, 神奈川：東海大学出版会。

佐藤雅彦・みずよ

2006 「中国少数民族苗族の世界」(online)。
< http://www.geocities.jp/miao_masamizu/asiato.htm > (accessed 2006-11-3).

曽士才

1998 「民族観光による村おこし－中国貴州ミャオ族地区の事例研究－」『旅の文化研究所研究報告』6, 57-67。

1998 「中国のエスニック・ツーリズム－少数民族の若者たちと民族文化－」『中国 21』3, 43-68。

2001 「中国における民族観光の創出：貴州省の事例から」『民族學研究』66(1), 87-105。

2002 「中国における少数民族の「観光出稼ぎ」と村の変貌」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造』pp.32-54, 東京：弘文堂。

2005 「ミャオ 交差する民族エリートたちの思いと願い」綾部恒雄監修, 末成道男編『講座 世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在〈01〉東アジア』pp.244-260, 東京：明石書店。

陳晶

2004 「中国における観光の新しい動向－貴州省少数民族の観光を中心に」『社会学論叢』150, 23-42。

2005 「中国の黔東南苗族侗族自治州における観光調査－観光村と普通の村を比較して」『社会学論叢』153, 25-44。

2006 「観光開発が少数民族観光村に与える影響について」ツーリズム学会編集委員会編『新ツーリズム学言論―自由時間社会の豊かさの質とは』pp.89-107, 東京：東信堂。

筒井隆志

2005 「観光地のライフサイクルに関する試論－大分県湯布院町に見る観光地衰退の萌芽」『経済学年誌』48, 28-45。

（2）曽士才教授インタビュー

日時：2006 年 7 月 6 日木曜日 14:00～16:00
場所：法政大学ボアソナードタワー 2209 号室（曽先生研究室）
出席者：法政大学国際文化学部　曽 士才 教授
財団法人日本交通公社　小林 英俊 理事
緒川 弘孝 客員研究員

〇論文、記事、文献等の検索、参考の結果、中国貴州省の観光研究に第一人者と考えられる法政大学の曽士才教授を訪れ、貴州省の観光状況や現地調査に対するアドバイスをうかがった。

＜貴州省の観光開発の流れ＞

・ 貴州省の観光は、80 年代の環境観光、90 年代の民族観光、21 世紀に入ってからの生態観光という形で重点を変えてきている。
・ 生態観光は、エコツーリズムとも言えるが、環境観光や民族観光をひっくるめてトータルで考えていこうとするものである。中国でも、今はエコツーリズムに関する研究が多い。
・ 貴州省の観光は、80 年代初頭、西線と呼ばれる西側の地域が先行した。貴州省内に国際空港がなく、国外からの観光客は雲南省の昆明から入ってくるために、西側の黄果樹瀑布に代表されるような環境観光が中心となっていた。当時の貴州省への国際観光客の７～８割は香港とマカオからであり、その関心は名所・旧跡、歴史・文物、自然だった。そうした観光客のニーズに、従来型の環境観光がマッチしていた。
・ 西部に比べて東部は観光開発が遅れ、85 年ごろからである。東部にも、梵浄山自然保護区や舞陽河[1]の川下りといった環境観光の資源があり、桂林とはまた違った石灰岩の風化した自然景観も美しい。
・ しかし、それらの観光資源は国家級の国立公園内にあるため、観光振興をしても、その利益は中央政府に行ってしまう。そこで、黔東南苗族侗族自治州では民族観光に目をつけたのだと思われる。民族観光であれば、収入が国ではなく、自治州のものとなる。貧しい地域であり、収入源となるものが他になかったところから、民族観光による開発が始まった。

[1] “舞”の字は現地では“さんずいに舞”の字で表記。フォントが無いため以下、“舞陽河”と表記する（編者注）。

＜貴州省の観光の最近の動き＞

・ 1998 年 10 月には、ノルウェー王国と中国政府が協定を結んで、六枝梭戛生態博物館が設立された。その後、生態博物館は貴州省内に合計４ケ所（六枝梭戛を含む）設立されている。生態博物館は、風景名勝区、自然保護区、森林公園のいずれにもならない地域ではあるが、その環境を維持し、文化的な資源を観光利用することで地域振興につなげようというものである。生態博物館は、上から進めたものではあるが、地元住民がどう関わっているのかが注目される。頭の上に横木を乗せて髪の毛を巻きつけていく髪型で有名な六枝梭戛のミャオ族は、フジテレビの「なるほど・ザ・ワールド」が 2004 年に取材している。交通の便は良くない。
・ 貴州省の面積の 70％はカルスト地形と言われていて、カルストを資源として押し出していくことが今の方針の一つとしてあるようだ。新たな観光地では、カルスト地形を意識したものが多い。
・ 貴州省の観光は、これまで西線と東線が中心だったが、最近では、北線、南線と呼ばれる新しい観光地が登場してきた。北線としては、赤水のあたりが、むかし夜郎国があったところで、国王は川の上流から竹が女性の股を通ったことから生まれたという竹王伝説がある。日本のかぐや姫伝説は、竹の中から生まれた女の子だが、ここでは竹から男が出てくるという話である。この地域は「竹子（ちくし）の里」として売り出そうとしており、竹博物館をつくる構想もある。
・ 1989 年以降、貴州省はフランスからの観光客が多い。それ以前は日本人が多かった。
・ 貴陽市内の省体育館にバス発着場があり、そこから貴州省の各方面へのバスが出ている。

＜黔東南苗族侗族自治州での民族観光開発の流れ＞

・ 雲南省は「滇」、湖南省は「湘」という別名があるように、貴州省は「黔（チェン）」という別名がある。自治州の名前はそこに由来している。
・ 曽先生が、1994 年から貴州省の東線と呼ばれる地域で、観光に関連した研究を始めたのは、少数民族を調べるために現地に入った頃が、偶然にも観光開発の時期と重なったためである。最初は、郎徳上寨に観光客として入って、その後、徐々に深く入っていった。観光をきっかけにインフラ整備が行われ、村の様子が変わって来たのには驚いた。
・ 観光行政側では、呉徳海さんが副州長で観光を担当し、現場作業は潘心雄さんが行っていた。潘さんは上海外国語大学の学生だったが、文革で台江の農村に下放され、その後中学校の英語教師、さらに外事弁公室主任に抜擢された。旅游局が設立されると局長になった。民族風情旅游点の選定は、彼らが行った。
・ 一方、文化行政の側としては、貴州省文化庁文物処処長だった呉正光さんが、少数

民族の文化が新中国になって急速に衰退しているという危機感を持っており、民族文化振興の方策を模索していた。呉正光さんは、ミャオ族だが貴州省全体のために動いており、当初はトン族に関する施策で北京とのパイプ役だった。

・ 呉正光さんが、南部トン族の鼓楼・風雨橋の認知を図るために北京から人を呼んだ視察の過程で、たまたま道すがら寄ったのが郎徳上寨である。当時は、トン族についてばかり考えており、ミャオ族については、まだ十分には考えてなかったが、村のホスピタリティが高いため、このミャオ族の村でも観光開発がうまくいくと考えたのが、自治州での民族観光開発の始まりである。
・ 1986 年から始まった民族観光は、10 年で郎徳上寨のように成功した村の様子が他の地域にも伝わっていった。1995 年に自治州は、中核産業として観光産業を発展させていくことを明確に方針として打ち出した。
・ 野外博物館構想は、おそらく 1970 年代のフランスにおけるエコミュージアムの動きにヒントを得たのではないかと思われる。同時期にも、雲南省で野外博物館構想を持っており、おそらく書物などを通して、そうしたヒントとなる情報が入ったのではないか。後のノルウェーが関与した生態博物館を除き、外国人が直接、指導しているということは聞いていない。
・ 野外博物館構想は、ちょうど貴州省の状況と合致していた。そこで、ミドルマンである自治州副州長、外事弁公室、旅游局などの人たちが積極的にイニシアティブを執って、現地調査や通達・法律の整備など、実現に向けて動いていった。地元の文化人が自覚して、観光面で動いたという話は聞いていない。

＜民族風情旅游点の指定＞

・ 1986 年「民族風情旅游点」として、最初に郎徳上寨を含む７ケ所が指定された。この七ケ所とは、７つの村とは限らない。凱里市内にある舟渓という地域も、村ではないが７ケ所の中に含まれている。
・ 最初に指定されたこれら７ケ所が、その後、どうなったか興味深いところである。恐らく失敗したところもあるのではないか。成功例と失敗例を比較研究するのも面白いのではないか。
・ 黔東南国際旅行社の人たちによると、村の担い手がしっかりしているか否かが、観光開発成功のポイントになっているようだ。
・ 当初、民族風情旅游点を指定するときに、文化の特徴、アクセス性、リーダーシップを執れる人材、ホスピタリティなどを考慮しており、指定されているところはそれらの条件をクリアしているはずだが、長い目で見たときに維持できているかどうかが問題である。
・ 報京という北部トン族の村は、７ケ所の一つだが、南部トン族と違って、衣装に特徴が少なく、距離が遠いということもあって、あまり賑わってない。

＜観光開発の積極化に転じた台江県＞

・ 郎徳上寨と同じ黔東南苗族侗族自治州にある台江県の施洞では、フルシーズンの観光でなく「節日観光」と呼ばれる祭りのときだけ集客する形式をとっており、姉妹飯と龍舟祭が二本柱になっている。
・ 台江では、ドラゴンボートレースができるように川を堰き止めたり岸辺を整備したりしている。十年ほど前は、台江県は伝統文化に冷淡で、観光開発にも一番消極的だったところである。そうした意味で郎徳上寨がある雷山県とは対極的だった県だが、今やホテルも沢山整備されており、信じられないほどの変化となっている。
・ 台江県は、以前、ダム整備に積極的だったが、今は、経済効果を狙って、世界遺産登録を申請しようという動きがあり、伝統文化を観光と結びつけることに力を入れている。

＜南部侗族風情旅游区＞

・ 黔東南苗族侗族自治州の観光地は、大きく舞陽河風景名勝区、苗族風情旅游区、南部侗族風情旅游区と３つにわかれているが、舞陽河風景名勝区は自然観光、川下りがメイン、苗族風情旅游区はミャオ族の民族観光が資源、南部はトン族の観光資源を中心とした地域である。
・ 南部侗族風情旅游区は、鼓楼の本家争いのようなところがあり、村同士でも競争をしている。旅行社は、火災で鼓楼を再建した高増よりも、古い鼓楼が残る肇興や紀堂の方が、より真正性が高いということで、客を連れて行くことが多い。
・ 旅行社は、漢族地域から遠いところに連れて行く傾向があり、これには欧米系の観光客の考え方が反映されていると思われる。
・ 自治州内を東西に分水嶺が横断しており、それを越える道が良くない。南部はむしろ桂林の方から入るのが便利であり、南部への観光客は、桂林の旅行社が桂林から連れてきて、ローカルなアテンダントを凱里の旅行社に頼んでいるというケースが多い。
・ 日本のトン族の研究は、広西壮族自治区の三江が多いが、黔東南苗族侗族自治州内は相対的に少ない。

＜郎徳上寨の若者たちの観光出稼ぎの影響＞

・ 『中国における少数民族の「観光出稼ぎ」と村の変貌』という論文は、郎徳上寨村の出身者を中心に若者に１人ずつインタビューし、どんな形で外に出て行って働いたのかを年表形式で記述するとともに、民族文化に対してどのような思いを持っているのか、ということも調査したものである。彼らの希望はＵターンではなく、Ｊターンである。村には戻りたくないが、外のテーマパークやレストランで働いたノウハウとお金で、将来は、故郷の近くの町でショーと食事をセットにしたようなレ

ストランを開くのが夢という若者が多い。しかし、残念ながらほとんど達成できていない。他村の出身者だが、１人だけ達成できそうな若者がいる。

・ また、村の祭や若者たちの状況を、新中国が出来てからの変化、観光開発後の変化（1980 年代後半から）、出稼ぎで働くようになってからの変化という３つのステップごとに、描いている。
・ 郎徳上寨がある地域は、同じ祭りを村ごとに日を違えて行っており、本来、郎徳上寨は川筋では最初に行っていたが、今では、川筋で最後に祭りを行うようになった。これは、若者たちが祭日に戻ってきても、出稼ぎ先の仕事で踊り飽きているために、まず他の村で遊んでから最後に自分たちの村で踊るようになったからである。
・ 従来なら若い男女は恋の歌をかけあうことで語っていたが、今はテレビの普及や出稼ぎで外の世界の情報を知るにつれて、そういう風習を恥ずかしくなり、やらなくなっている。

＜郎徳上寨の状況＞

・ 一番観光で成功した郎徳上寨の近くに郎徳下寨という村があり、こちらの方がむしろ車道に近いところにある。この二つの村は同じ一族と言える近い関係にある。郎徳上寨への道は悪かったが、今はかなり整備されている。季節のお祭りなど、観光ではない本来の生活の中では、上と下の村で共同で行うことは沢山ある。
・ 郎徳上寨の観光客を受け入れている広場は、観光用につくられた広場である。本来は、広場とも言えない小さな空間で踊りをやっていた。今でも、本当のお祭りのときは、最初にそこで踊り始める。しかし、人数的に収容しきれないので、観光用の広場に移動し、さらに村の門の外の川岸につくったバスケットボール場を使っている。闘牛だけは、郎徳下寨の下の河原まで降りてやっている。
・ 郎徳上寨への個別客は、村の中を勝手に歩いて、家を覗いたりしている。村人は、それをよしとしている。観光客が村に入るときは、取りこぼしもあるようだが、基本的に料金を徴収し、統計も取っている。
・ 郎徳上寨は、観光開発の成功例として取り上げられることが多いが、問題もある。村の前の川に架かっている屋根付きの橋は、壊れたままで修復されていない。伝統的な景観にそぐわないものは排除しているが、１軒だけテラスを青のガラス張りにした家もある。
・ 今は、若者たちの方が、観光客が多いことに反発している。踊りの輪の中に入ってまで写真を撮る客に対して癇癪を起こした若者と、それをなだめる年長者というシーンを見たことがある。12 年に一度のお祭りのときにも、あまりに観光客が多いので若者たちが反発していた。通常とは反対に、観光開発を担ってきた年長者に対して、若者の方が「行き過ぎだ」という批判が出るようになってきている。世代によって考え方が、かなり違うようだ。ただし、それが大きな声になっているかどう

かはわからない。転換期に来ているのかもしれない。

＜オーセンティシティ＞

・ 地元民にとってのオーセンティシティと、評論家や文化行政官のオーセンティシティは別である。中国、特に民族観光の場合、観光客は何がホンモノで、何がニセモノかについて、あまり頓着しない。ただし、バックステージの本当のお祭りの踊りと、観光の踊りは別個に考えられているなど、本来のものは村の若者たちに認識されており、創意工夫で作られた踊りは、本当のお祭りのときはやっていない。しかし、古い踊りを知らないで育ったさらに若い世代がどういう態度を持つかはわからない。数年後、十年後と見ていく必要があるだろう。
・ 文化というものは強いところが勝つ。やがて強い文化が、弱いところに入っていき、本物になっていく。それを審査したり、認定したりする文化行政官などにとってのオーセンティシティと、地元にとってのオーセンティシティは、また違うものである。

＜旅行社や観光客の少数民族に対する態度＞

・ 中国では、旅行社が、絶えず上から現地を見下ろすという態度が見られる。ツアーガイドやアテンドの人たちの意識は、かなり低い。そうしたガイドが、地元のコードを観光客に説明しないために、観光客が地元のマナーについて理解していないと感じることも多い。
・ 中国では都市と農村の格差は、意識面でも激しい。「連れてきてやっている」「見せてやっている」という意識は、中央に近いガイド側に多い。
・ 地元側が自律的に「この日はダメ」と言えるところまでは行っていない。自主性が実現できる範囲は限られている。
・ ただし、この４年間で電話が普及し始めたので、観光客がいつ来るかという情報の入手が早まってきた。それにより、少しは余裕を持って対応できるようになったのではないかと思われる。

＜観光スポットの一点集中化の構想＞

・ 台江県や丹寨県では、周辺地域の観光スポットを一ケ所に集め、そこに各村から参加して観光提供しようとする構想が進められている。台江県では、フルシーズンの観光地がないが、一ケ所に集めればフルシーズンで提供できると考えている[2]。
・ そうした構想に対して、各村がのるかどうかだが、のる可能性は十分にある。現在のように個々に民族観光村として存在するやり方だと、潤う村と外れる村との格差

[2] 曽先生注：明確にこの構想を語ったのは丹寨県旅游局主任でした。台江県では、すでに、姉妹飯節の時、県城の広場で県内各地の演者が集まって演じています。

が出るが、一ケ所集中型であれば、演技の機会と収入を得る機会を享受できる村の範囲が広がる。

＜その他のヒアリング対象者候補＞

・ 潘心雄さんは、香港に行かれたことまでは知っているが、その後の行く先はわからない。この方と副州長だった呉徳海さんが組まれて、最初に 1986 年に 7 ケ所の観光スポットを選定した。
・ 郎徳上寨党支部書記の陳正涛さんのお話は、ときとして不確実なこともあるので、傍証なども取った方が良い。
・ 郎徳上寨の旅游指揮を執った陳光輝さんは既に亡くなっている。有能なシャーマンは早死にすると本人が言っていたが、実際に 50 代で亡くなってしまった。ご子息はいるが、シャーマン特有ののりうつった状態（巫病）がまだ来ていないようである。
・ 反排木鼓舞の考案者である万正文さんは、故郷の反排村に戻っている。
・ 紅楓湖民族旅游村で上刀山のアトラクションを行っている龍虎さんは、紅楓湖民族旅游村に土地ももらっているので、今も弟子でもある奥さんと一緒にいると思われる。

＜その他の視察対象地候補＞

・ 一番、情報を持っているのは黔東南国際旅行社だと思われる。
・ 曽先生が知る紅楓湖民族旅游村の演者は、ほとんど故郷に戻っており、今の演目がどうなっているかはわからない。客のメインは、貴陽の富裕層と四川省、上海などの企業の慰安旅行である。客層などを見るためにも、週末に行くのが良いのではないか。貴陽からだと片道２時間はかからない。
・ 南花村は、凱里市から郎徳上寨に行く途中にある村で、今、勢いがある村である。村人たちの、ホスピタリティが高く、質問にも応じてくれるかもしれない。村は、雷山県ではなく凱里市に属しており、観光収入は凱里市の方に入るため、凱里市から南花に案内されることが多くなっているようだ。婦女主任（婦女連合会のような組織の役職）は、郎徳上寨の観光開発で功があった党支部書記の娘であり、村の踊りなどは彼女が教えている。日本人が寄付した小学校がある。キリスト教徒がいるので教会もある。最近、新しい広場を村の奥につくって、そこで踊りを見せようとしている。
・ 榕江県擺貝村は、昔のままだとしたら、辿り着くのは山登りの道で大変だと思われる。旅行業者に言わせれば、この村の男子の服装は、白い鳥の羽が裾に付いていて独特である。村民は、まだ素朴で、観光開発を希望していた。これから成功する候補地かもしれない。しかし、既に観光開発を断念しているかもしれない。

- 民族風情旅游点に 1986 年指定された７ケ所のひとつ麻塘村は、革家人[3]の村で、成功例と言える。休憩所やトイレが整備されている。
- 生態博物館の一つである錦屏県隆里などは面白いかもしれない。
- 屯堡古鎮は、明代に移り住んだ漢族がいるところで、安順の住民はイ族、平壩の住民は漢族と名乗り続けている。仮面劇でも有名であり、国立民族学博物館の塚田誠之さんが、この集団について研究している。
- 同じような場所として、恵水県青岩古鎮があり、村人たちが素朴で、新しい観光地として脚光を浴びるようになっている。歴史文化名城に指定されているが、村人の参与の度合いはわからない。
- 湖南省の鳳凰古城では、一業者が観光開発の権利を買い取って、事業を進めている（東北大学の方の博士論文の発表による）。
- 興義県では、貴州醇の酒造所を工業観光の観光地として売り出している。マオタイ酒は高くて地元の人には手が出ず、貴州醇の方が人気がある。

[3] “革”の字は、現地表記では“にんべんに革”の字で表記（編者注）。

© YAMAMURA Takayoshi, 2008 / 2010

（３）ブータンに学ぶ観光開発の哲学
ＧＮＨとツーリズムの関係性についての一考察

山村　高淑

○はじめに

我々、北海道大学観光学高等研究センターは、2006 年度より財団法人日本交通公社の特定研究プロジェクト「コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する研究」に共同研究の形で参画させていただいている。コミュニティ自身が自律的にツーリズムをコントロールし、自らの社会・文化の発展につなげていくための方策を、国内外の先進事例から探っていこうというものである。

さて 2007 年 11 月 24 日から 12 月 4 日にわたり、この研究の一環として、ブータン王国での実地調査を行った。その目的は、ずばり「GNH（Gross National Happiness：国民総幸福量）とツーリズムとの関係性」について、調査団員各自の専門分野の視点から考察することであった。本稿では筆者の専門分野であるヘリテージツーリズム（文化遺産観光）の観点に偏ることをお断りしつつ、このブータン調査で得られた知見の一部を報告したい。

○GNH（国民総幸福量）とツーリズム

GNH は 1976 年、当時 21 歳だった第 4 代ブータン国王により提唱された、社会経済開発のための概念である。1999 年、当時の首相であったロンポ・ジグメ・ティンレイは GNH を構成する四つの柱を明らかにした。すなわち、(1)健全な経済成長と開発、(2)環境の保全と持続可能な利用、(3)文化遺産の保護と振興、(4)良き統治、の 4 つである。ではこうした GNH の考え方とツーリズムとの関係性はどのようなものなのか。

今回、幸運にも我々調査団はこのジクメ・ティレン元首相に直接お会いしてお話を伺う機会を得た。我々の問いに対する元首相の回答は極めて明快だった。元首相によれば、ブータンの観光政策における GNH の意味は、上述した 4 つの柱のうち、(4)良き統治によって、観光をその他 3 つの柱の実現に貢献させていくことにあるという。すなわち、

1）ツーリズムを雇用の創出、地域の経済発展に役立てること
2）ツーリズムを自然環境の保全に役立てること
3）ツーリズムを文化遺産の保全に役立てること

である。

そしてそのために「クオリティ・ツーリズム」の推進が重要であると言う。「ハイ・クオリティ、ロー・ボリューム（ロー・インパクト）」という原理原則に従って観光開

発を行うべきだというのである。

つまりこういうことである。1)の経済発展のためには観光収入増を目指すべきである。しかし 2)や 3)にある自然環境や文化遺産の保全のためには観光客数が地域のキャパシティを越えないようにすべきである。ではどうするか。量より質を目指すのである。自然や文化について十分な理解と敬意を示し、かつ高い客単価で滞在する旅行者に来てもらおう、というのである。

ジグメ氏によれば、こうした理念を実行に移す際に重要なことは、まずは自らが提供するサービスの質を向上させ、その結果として質の高い旅行者に来てもらう、という順序であるとのこと。そして最終目標は「ハイ・クオリティー・デスティネーション（質の高い目的地)」としてブータンの国際的地位を確立することにあるという。

「高い質」を実現するためには、国民が環境と文化に対して、より教育を受け、敏感になり、敬意を持つようにならなければならない。その根幹を成すものが「センス・オブ・プライド（自尊心)」である、とジグメ氏は繰り返し強調する。「自尊心」―我々日本人が忘れて久しい言葉である。

○ブータンのヘリテージツーリズムの持つ意味

このようなブータンの観光開発哲学は、外交面でも極めて重要な意味を持つ。なぜなら、中国とインドという超大国に挟まれた小国ブータンが国際社会にアピールできるものは軍事力でも経済力でもなく、豊かな自然とユニークな文化でしかないからだ。特にブータンの政策のあらゆる面で「ユニークな文化」は強調される。独自の文化こそが「自分が何者であるかの定義」なのであり「自尊心」の源である。そしてこれこそが国家が独立の体を保っていくための根幹となる。このような意味でブータンにおいては文化遺産の保護、さらにはそれを活用したヘリテージツーリズムのあり方は特別な意味を持っているのである。

こうした姿勢は、むやみやたらに世界遺産を登録しないという態度にも表れている。目下、ブータンは世界遺産登録物件をひとつも持たない。しかし内務文化省文化局の建築遺産保護担当者によれば、登録申請については決して急がないし、また無理にする必要もないという。担当者は言う。世界遺産に登録する方法を考えるより、建築遺産をそのまま使い続ける手法を考えることの方が大切なのだ、と。

ブータンの建築遺産の特徴は、寺院やチョルテン（仏塔)、ゾン（寺院と地方行政府としての機能を併せ持つ複合建築）や民家に代表されるように、昔ながらの用途で使われ続けている点にある。そのため世界遺産に登録するとなると、様々な制約が出てくる。一言でいえば、保護建築になってしまい修改築がままならなくなると、使い続ける上で困ることが多いのだ。

世界遺産に代表される建築遺産の保護に関する国際的な議論はあくまでも西洋的価値観主導の論理であり、決してブータンの文化にそのまま適用できるものではない。ま

© YAMAMURA Takayoshi, 2008 / 2010

た木造建築は絶えざるメンテナンスが必要で、木造文化としての保存の枠組みと理論が必要である。したがって、もちろん世論の一部には世界文化遺産を登録したい、という議論はあるものの、目下じっくり今後のあり方を検討しているのだという。そう、自らの頭で、自文化の価値について考えているのだ。世界遺産制度に価値判断を委ねてしまわない。これこそが「自尊心」である。

まさにこうした態度こそがブータンの文化遺産を、そしてヘリテージツーリズムを極めて魅力的なものにしているのである。我々旅行者は、ブータンのどこへ行っても、活きた建築遺産に触れることができる。そして旅行者自身があたかも巡礼の旅をしているかのような感覚にとらわれる。常に細やかに手入れされた建物には歴史の連続性があり、住民の生活にあふれ、祈りの姿が心を打つからだ。

ひとつ具体的な例を挙げよう。ブムタン県にクジェラカンという、王族ゆかりの寺院がある。建造年代の異なる巨大な三棟の建物が並ぶ寺院である（それぞれの建造年代は、1652 年、1900 年、1990 年）。この寺院を前にして、誰もが驚くことは、これら歴史的に建造年代の異なる三つの建物が、まったく違和感なく、その時代差を感じさせずに堂々たる存在感を示していることである。これこそがまさに使われ続けている証拠であり、活きた建物としての圧倒的な存在感である。

写真１　民族衣装「キラ」
伝統的な民族衣装「キラ」を身に纏うトンサ県職員。公務員の制服は男女ともに民族衣装である／トンサ県にて。筆者撮影。

写真２　クジェラカン
向かって右の棟が1900年、左の棟が1990年の建造である／ブムタン県にて。筆者撮影。

○では一体「幸福」とは何なのか

ブータンの旅は、町や村の美しさは決して建築の様式美からなるものではない、ということを教えてくれる。真の美しさとはそうした建築や景観を創り出している生活の美しさに他ならないのだ。では美しい暮らしとは何だろう。それはきっと人の心・精神の美しさに帰結するのだと思う。寺院で無心に祈る人々を見て、我々は心や精神の美しさの根底に信仰の力があることに気づく。ブータンでのそれは「仏の教え」である。

仏典に「因縁生起」という言葉がある。「縁起」の語源で、世界の一切は直接的にも間接的にも何らかのかたちでそれぞれ関わり合っており消滅変化している、という考え方である。ブータン研究センターのカルマ・ウラ氏によれば、この考え方が「幸福」を理解するうえで非常に重要であると言う。つまり、幸福は相互に与える関係であり、相互信頼に基づく有意義な関係性を持つことにある、と言うのである。

さて、冒頭で述べた、観光の質を上げることで、結果として質の高い観光客に来てもらうというクオリティ・ツーリズムの考え方における質とは何であろうか。実は「幸せ」こそが「質」なのではないか。つまり、因縁生起の考え方に照らし、こう考えてはどうだろうか。地域住民は旅行者の幸福に貢献できるよう振舞う。そして旅行者は地域住民の幸福を実現するための助けとなるよう行動する。地域住民と旅行者は相互に幸せを与え合うことができるのだ。こうした相互信頼の関係を観光の現場において構築していくことこそがブータンの GNH の概念に基づく観光開発なのではないか。

しかしことはそう簡単ではない。なぜなら、「幸せ」とは各人それぞれで異なる価値を持つからだ。つまり多様な価値観の存在が担保されてはじめて「幸せ」は成立するのだ。今後、ブータンにおいても各人の価値観はますます多様性を高めるであろう。そうしたときに果たして仏教的価値観はそれを束ねる求心力を依然として持ち続けることができるであろうか。

写真 3　ダルシン（経文旗）
ブータンの旅は巡礼である。至るところにダルシン（経文旗）がはためく。旗布には経文が印刷されており、風に乗って仏の教えが広まるのだという／ヨトン・ラにて。筆者撮影。

ブータンの現在から我々が学ぶことは多い。しかし GNH の考え方自体が未だ答えの出ていない大いなる社会実験であることも確かである。また政治的にも君主制から本格的な議会制民主主義への移行の途上にある（今年 2008 年、新たに国会を開会し、立憲君主制に移行する予定）。ブータン国民は自らどのような「幸せ」の答えを出すのであろうか。今後の推移を見守りたい。

© YAMAMURA Takayoshi, 2008 / 2010

○ブータンから学ぶこと～おわりに代えて

ブータンの観光は決して「ハレの観光」ではない。あくまでもローカルな生活そのものが主体であり、宗教や信仰の現在そのものを目の前に提示する。これはもはや見る旅ではなく感じる旅である。こうした「生活文化を感じる旅」こそコミュニティ・ベースド・ツーリズムのあるべき姿であり、それを成立させるためのヒントがブータンにはある。

もちろん、ブータンの良い面ばかりを取り上げて美化することは本稿の目的とするところではない。当然のことながらブータンも様々な社会問題を抱えている。紙幅の都合上、こうした点については別の機会に譲るが、しかしいずれにせよ、ブータンは我々日本人に多くの示唆を与えてくれる事例であることは間違いない。大国の狭間で小国はどう生き延びて行けば良いのか。ユニークな伝統文化をどのように継承していったら良いのか。我が国にも共通する課題ではないか。

写真４　伝統舞踊の練習をする地域住民
トンサ・ゾン（トンサ県庁舎）で伝統舞踊の練習をする地域住民。ゾンは地方行政と宗教施設の複合建築でその中庭は地域の広場としての役割も担う／トンサ県にて。筆者撮影。

観光開発について言えば、ブータンの事例は、開発にはそれを支える哲学が必要不可欠であることを示している。今後、我々日本人はその哲学を一体どこに求めたら良いのか？果たしてビジット・ジャパン・キャンペーンで一千万人来日すれば我が国民は幸せになれるのか？これは高度経済成長を支えた数の理論とどこが違うのか？そう考えると現行の観光立国の議論が極めて表層的であることに気付く。

我々日本人は「幸せ」について、今一度しっかり考えるべきである。ブータンから学ぶことはまさにこの一点に集約される。生き方や幸せそのものについて、我々の風土に即して指針を与えてくれる哲学が、我々の歴史と文化の中にきっとあるはずである。自文化としっかり向き合い、過去の歴史を紐解いていけば、答えは自ずとわかってくるのではないか。21 世紀とはそういう時代なのである。

※ 本稿は『観光文化』第 188 号に掲載された拙稿「ブータンに学ぶ観光開発の哲学：GNH とツーリズムの関係性についての一考察」を本叢書向けに整形して再録したものである。

山村高淑（2008）「ブータンに学ぶ観光開発の哲学：GNH とツーリズムの関係性についての一考察」『観光文化』第 188 号, pp.18-21, 財団法人日本交通公社。

Web 公開版：

http://www.jtb.or.jp/themes/content/img/publish/bunka/bunka188.pdf

（4）参考論文・記事・文献

1）貴州省調査

①参考論文・記事

著者	題目	掲載誌・文献
馬建釗	中国の少数民族と民族観光業	『文化のディスプレイ ： 東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編 』瀬川昌久編, 風響社, 2003/3
陳晶	中国における観光の新しい動向--貴州省少数民族の観光を中心に	社会学論叢 (150), 23～42, 日本大学社会学会, 2004/7
陳晶	中国の黔東南苗族侗族自治州における観光調査--観光村と普通の村を比較して	社会学論叢 (153), 25～44, 日本大学社会学会, 2005/7
陳晶	観光開発が少数民族観光村に与える影響について : 中国貴州黔東南苗・ドン族自治州郎徳上村を中心に	『新ツーリズム学原論』ツーリズム学会編集委員会編, 東信堂, 2006/4
市川捷護	貴州の山に分け入る	『中国 55 の少数民族を訪ねて』市川捷護, 市橋雄二, 白水社, 1998/1
兼重努	エスニック・シンボルの創成－西南中国の少数民族トン族の事例から	東南アジア研究 35(4), 京都大学東南アジア研究所, 1998/3
兼重努	トン 民族一体化の動きと民族内部の多様性	『講座 世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在 〈01〉 東アジア』綾部恒雄監修・末成道男・曽士才編, 明石書店, 2005/1/15
瀬川昌久	中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義	東北アジア研究 3, 東北大学東北アジア研究センター, 1998
瀬川昌久	中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義	『文化のディスプレイ ： 東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』瀬川昌久編, 風響社, 2003/3
曽士才	民族観光による村おこし－中国貴州ミャオ族地区の事例研究－	旅の文化研究所研究報告 6, 旅の文化研究所, 1998
曽士才	中国のエスニック・ツーリズム－少数民族の若者たちと民族文化－	中国 21 3, 愛知大学現代中国学会, 1998/4
曽士才	中国における民族観光の創出 ： 貴州省の事例から(<特集>観光の人類学 ： 再考と展望)	民族學研究 66(1), 87-105, 日本文化人類学会, 2001/6/30
曽士才	中国における少数民族の「観光出稼ぎ」と村の変貌	『拡大する中国世界と文化創造』吉原和男編, 弘文堂, 2002/12
曽士才	ミャオ 交差する民族エリートたちの思いと願い	『講座 世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在 〈01〉 東アジア』綾部恒雄監修・末成道男・曽士才編, 明石書店, 2005/1/15
鈴木正崇	「民族意識」の現在・・・ミャオ族の正月	『民族で読む中国(朝日選書 595)』綾部恒雄監修・末成道男・曽士才編, 朝日新聞社, 1998/3/1

②参考文献

著者名	書名	出版社等
阿部泉文, 岩間幸司, 柳木昭信, 邸景一	桂林・貴州省・海南島―山水画の世界と民族文化の旅	日経ＢＰ社, 2005/7/25
浅川滋男	住まいの民族建築学―江南漢族と華南少数民族の住居論	建築資料研究社, 1994/6
綾部恒雄監修・末成道男・曽士才編	講座　世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在〈０１〉　東アジア	明石書店, 2005/1/15
「地球の歩き方」編集室編著	地球の歩き方 成都・九寨溝・麗江 雲南・四川・貴州の自然と民族	ダイヤモンド社, 2006/7/1
市川捷護, 市橋雄二	中国 55 の少数民族を訪ねて	白水社, 1998/1
池上正治	中国貴州の旅	第一書房, 1998/11
鎌沢久也	藍の里―西南中国の人びと アジア民俗写真叢書	平河出版社, 1994/5
鎌沢久也	シーサンパンナと貴州の旅	めこん, 2004/9/10
金丸良子	中国少数民族ミャオ族の生業形態	古今書院, 2005/8
鳥丸貞恵, 鳥丸知子	布に踊る人の手―中国貴州苗族 染織探訪 18 年	西日本新聞社, 2004/2
小林正典	中国の市場経済化と民族法制―少数民族の持続可能な発展と法制度の変革	法律文化社, 2002/03
工藤隆	歌垣と神話をさかのぼる―少数民族文化としての日本古代文学（新典社選書）	新典社, 1997/7
工藤隆	中国少数民族と日本文化―古代文学の古層を探る（遊学叢書）	勉誠出版, 2002/6
町田雅保	苗の風―プロジェクト・ミャオ	ふくろう出版, 2005/4
松田貴子	中国ビックリドキドキ的旅―雲南省から貴州省そして三峡下りへ	文芸社, 2004/6
三村隆茂	神秘な雲貴高原―誇り高き少数民族を訪ねて	光村印刷, 1996/11
水上章	布依族―貴州省・小数民族光彩の里	光村印刷, 1996/5
宮城の団十郎	貴州旅情―中国貴州省少数民族を訪ねて	近代映画社, 1997/10
大石惇, 森誠	中国少数民族 農と食の知恵	明石書店, 2002/04
王柯	多民族国家 中国（岩波新書）	岩波書店, 2005/3
佐々木信彰編	現代中国の民族と経済	世界思想社, 2001/7
瀬川昌久編	文化のディスプレイ ： 東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編	風響社, 2003/3
曽士才・西沢治彦・瀬川昌久編	暮らしがわかるアジア読本 中国	河出書房新社, 1995/4/25
田畑久夫	照葉樹林文化の成立と現在	古今書院, 2003/04
田畑久夫, 金丸良子	中国雲貴高原の少数民族	白帝社, 1989/03
田畑久夫, 金丸良子	雲貴高原のヤオ族―中国少数民族誌	ゆまに書房, 1995/6
田畑久夫, 新免康, 索文清, 金丸良子, 松岡正子	中国少数民族事典	東京堂出版, 2001/10
鳥居龍蔵	中国の少数民族地帯をゆく	朝日新聞社出版局, 1980/1
塚田誠之	民族の移動と文化の動態―中国周縁地域の歴史と現在	風響社, 2003/5
山口修・鈴木啓造編	アジア歴史散歩シリーズ中国の歴史散歩〈４〉	山川出版社, 1997/08
吉原和男編	拡大する中国世界と文化創造	弘文堂, 2002/12

2）ブータン王国調査

①参考論文・記事

著者	題目	掲載誌・文献
福永正明	民主化の道歩み始めたヒマラヤの王国ブータン--「国民総幸福量」の国造り	世界週報 87(39)（通号 4265), 10～13,2006/10/17
久田博幸	フォトエッセイ 国民総生産より国民総幸福を尊ぶ--ブータン王国史に見る伝統文化の維持（特集 いま、「平和」を問う）	環 19,116～121,2004/Aut
今枝由郎	「国民総幸福」から「国民総充足」へ--ポスト物質主義時代と仏教国ブータン	21 世紀フォーラム(101),28～35,2006/2
河合明宣	ブータンの地方制度と開発の課題	ヒマラヤ学誌(5), 1994.12
河合明宣	ブータンの中央 - 地方関係	ヒマラヤ学誌(6), 1996.5
河合明宣	ブータンの持続可能な開発と農林業政策	放送大学研究年報 17,121-141,2000.03
河合明宣	森林保全重視の開発－ブータン－	『持続的発展と国際協力』河合明宣,浜口恒夫編、放送大学教育振興会、2003.3
河合明宣	GNH 政策理念における森林保全重視の位置づけ	『東部南アジア地域の地域関係』荒井悦代編、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2004
渾大防三惠	憲法制定を待つブータン--桃源郷の近代化と「国民総幸福量」のバランス	朝日総研リポート (197),74～93,2006/10
栗田靖之	鎖国と観光	『観光の二〇世紀』石森秀三編、ドメス出版、1996.2
栗田靖之	ブータンにおける開発と自然保護	『発展途上国の開発戦略:南アジアの課題と展望』河合明宣編、放送大学教育振興会、1999.3
前平泰志	ブータン人の生活史の一断面 生活と自己教育の結合	ヒマラヤ学誌(7), 2000.6
宮本万里	現代ブータンにおける森林政策の変遷と環境保全体制の成立（特集 森からみたアジア・アフリカ）	アジア・アフリカ地域研究 (4-1),86～110,2004
宮本万里	書評 上田晶子著『ブータンにみる開発の概念--若者たちにとっての近代化と伝統文化』	アジア経済 48(3),101～106,2007.3
宮本万里	現代ブータンにおけるネイション形成--文化・環境政策からみた自画像のポリティクス	人文学報 (94),77～100,2007
西川潤	ブータンに見る「国民総幸福」--理論と実際	アジア太平洋討究 (8),17～28,2005/10
Ross McDonald	Television, materialism and culture an exploration of imported media and its implilcations for GNH	Journal of Bhutan studies 11, 2004 Winter
杉本均	ブータン王国における公教育と青年の意識	ヒマラヤ学誌(7), 2000.6
Tandi Dorji	Sustainability of tourism in Bhutan	Journal of Bhutan studies 3(1), 2001 Summer
徳安祐子	伝統文化の商品化とそこに生きる人々--ブータン王国の事例から	福岡発・アジア太平洋研究報告 11,147～156,2002
辻本雅史	「実験国家」ブータン教育調査の課題と概要	ヒマラヤ学誌(7), 2000.6
月原敏博	持続的開発の「中道」を歩むブータンの森林政策（特集=山の現在）--（山の危機と保護）	科学 72(12)（通号 844),1267～1270,2002/12

②参考文献・レポート

著者名	書名	出版社等
ブータン政府観光局	雷龍の王国ブータン	ブータン政府観光局、2005
Chhewang Rinzin	On the Middle Path – The Social Basis for Sustainable Development in Bhutan	Koninklijk Nederlands Aardrijkskundig Genootschap, Copernicus Institute for Sustainable Development and Innovation, 2006
『地球の歩き方』編集室編著	地球の歩き方 ブータン 2007～2008 版	ダイヤモンド・ビッグ社、2007.3
平山修一	現代ブータンを知るための 60 章	明石書店、2005.4
John Hummel	Community tourism along the Nabji Trail in the Jigme Singye Wangchuck National Park: An example of sustainable rural tourism development in Bhutan	Netherlands Development Organisation SNV, 2007
栗田靖之訳・編	窓から見るブータン 2005	日本ブータン友好協会、2005
Lindsay Brown, Bradley Mayhew	Lonely Planet Bhutan 3rd Edition	Lonely Planet Publications Pty Ltd、2007.4
本林靖久	ブータンと幸福論 宗教文化と儀礼	法蔵館、2006.12
Royal Government of Bhutan	Bhutan 2020 : a vision for peace, prosperity and happiness	Planning Commission, Royal Government of Bhutan, 1999
Royal Government of Bhutan	Ninth plan, 2002-2007:main document.	Planning Commission, Royal Government of Bhutan, 2002
上田晶子	ブータンにみる開発の概念―若者たちにとっての近代化と伝統文化	明石書店、2006.5

3）ニュージーランド調査

①参考論文・記事

著者	題目	掲載誌・文献
青柳光郎	ニュージーランドの「旅人の木」--観光と環境の共存を目指す町	AIR21. (174) , 2004.11
青柳光郎	ニュージーランドで観光を考える 先住民、マオリの参入相次ぐ	AIR21. (188) , 2006.1
青柳光郎	緑のニュージーランド物語(5)旅人の木--観光客も訪問先の環境保全に一役 苗木を買って、二酸化炭素を減らす	グリーン・パワー. (通号 336) , 2006.12
David Simmons; Niel Leiper; 大谷裕文訳	資料 ニュージーランド・オーストラリアの観光システム	西南学院大学国際文化論集. 16(2) , 2002.2
市川昌	ニュージーランドの博物館とマオリ文化--多民族社会と規制緩和のコミュニケーション活動	日本生涯教育学会論集. 26 , 2005 年度
井上繁	世界の都市づくり ハード&ソフト(113)マオリ文化と温泉を大切に ロトルア(ニュージーランド)活動中の地熱地帯のまち	地方財務. (567) , 2001.8
笠間弘美	「アイヌ文化振興法」における一考察--ニュージーランドにおけるマオリ語・マオリ文化振興策との比較	金沢学院大学経営情報学部紀要. 5(1) , 1999
笠間弘美	アイヌの法制化に関する一考察--ニュージーランド政府の対マオリ政策の視点から	季刊教育法. (通号 123) , 2000.03
宮平望	アメリカの「コミュニタリアン綱領(1991)」の解説	西南学院大学国際文化論集. 13(1) , 1998.9
宮里孝生	マラエをめぐる観光人類学的考察--現代マオリの「伝統文化」と観光の相関性	愛知県立大学大学院国際文化研究科論集. (6) , 2005
Ngaroma Tahana; Karen Te O Kahurangi Grant; David G Simmons; John R Fairweather	Tourism and Maori Development in Rotorua	Tourism Research and Education Centre (TREC) Report No. 15, Lincoln University, February 2000
大庭由子	先住民マオリの文化再生と教育政策--ニュージーランドにおける教育及び国民意識に与えた影響	社学研論集. (1) , 2003
小野有五	シレトコ世界自然遺産へのアイヌ民族の参画と研究者の役割--先住民族ガヴァナンスからみた世界遺産 (特集・小特集 世界遺産)	環境社会学研究. 12 , 2006
杉原利治	持続可能な社会と多様性--エコ都市ワイタケレ(ニュージーランド)におけるマオリ	岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学. 52(2) , 2004
玉井昇	現代環境問題とマオリの自然観--カイティアキタンガ:ニュージーランド環境政策に対するマオリの役割	太平洋学会誌. 26(1・1) (通号 92) , 2003.10
Tania Waikato; 田上麻衣子訳	ニュージーランドにおけるマオリの知的財産の保護 (特集:伝統的知識・遺伝資源)	知的財産法政策学研究. (19) , 2008.2

②参考文献・レポート

著者名	書名	出版社等
青柳まちこ編著	ニュージーランドを知るための 63 章	明石書店、2008.7
青柳光郎	ニュージーランド エコ紀行	七つ森書館、2008.8
Charles Rawlings-Way; Brett Atkinson; Sarah Bennett; Peter Dragicevich; Errol Hunt	Lonely Planet New Zealand 14th Edition	Lonely Planet Publications Pty Ltd、2008.9
『地球の歩き方』編集室編著	地球の歩き方 ニュージーランド 2008～2009 版	ダイヤモンド・ビッグ社、2007.10

調査参加者紹介

≪北海道大学観光学高等研究センター：CATS≫

石森 秀三（いしもり しゅうぞう）
北海道大学観光学高等研究センター長・教授。甲南大学経済学部卒業。京都大学人文科学研究所研究員、国立民族学博物館教授を経て、2006年から現職。北大大学院観光創造専攻長（兼務）。内閣府観光立国懇談会委員などを歴任。次世代ツーリズムに関する政策提言を行っている。

山村 高淑（やまむら たかよし）
北海道大学観光学高等研究センター 准教授。2002年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。中国・日本の地方都市を中心に、文化資源の保護・創出と観光活用に関する現地調査活動を継続中。世界中の民宿に泊まりながら郷土料理をいただく旅に出るのが夢。

≪財団法人日本交通公社：JTBF≫

小林 英俊（こばやし ひでとし）
財団法人日本交通公社 常務理事。北海道大学大学院非常勤講師。1972年東京大学農学部卒業。㈱JTB海外旅行虎ノ門支店長など旅行業界での経験と観光研究を融合させた実践的な観光マーケテイング論を展開。90年代初めより世界各地の環境や健康と観光との関わりを視察しエコ発想の必要性を訴えてきた。

黒須 宏志（くろす ひろし）
財団法人日本交通公社 主任研究員。1987年、京都大学文学部卒業。専門は旅行マーケット研究。山歩きから転じてテレマークスキーにはまるも、現在は3児の子育てに休暇のほとんどを費やす。

相澤 美穂子（あいざわ みほこ）
財団法人日本交通公社 主任研究員。1998年、北海道大学大学院理学研究科修了、2006年、筑波大学大学院芸術研究科修了。国内・海外旅行市場研究に携わる。趣味と実益を兼ね、暇を見つけては海外に出かけている。

緒川 弘孝（おがわ ひろたか）
財団法人日本交通公社 客員研究員。1994年、東京大学大学院農学系研究科修士課程修了。フリーランスのコンサルタントとして、主に地域振興の計画づくりや調査を行ってきた。誰もが長期旅行できる社会を目指し、まずは自らできるだけ実践中。

本書の著作権の取り扱いについて

★ 付属資料（1）（3）を除く、本書の著作権は、北海道大学観光学高等研究センター・財団法人日本交通公社に帰属します。また、付属資料（1）（3）の著作権は原著作者に帰属します。なお、出典を明記された上での学術・非営利目的の引用はこれを禁じるものではありません。記載内容に関するお問い合わせは北海道大学観光学高等研究センターまたは財団法人日本交通公社（連絡先は下記を参照）までお願い申し上げます。

★ なお、Web 版についてはクリエイティブ・コモンズの表示-非営利-継承 2.1 日本ライセンスの下でライセンスされています。詳しい利用条件に関してはライセンスページ記載事項 http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/ をご参照ください。

CATS 叢書　第３号

コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究

～観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けて～

2010 年 2 月 1 日発行

編　　者　：　山村高淑・小林英俊・緒川弘孝・石森秀三

調査参加者　：　≪CATS≫

石森秀三（北海道大学観光学高等研究センター長）

山村高淑（同准教授）

≪JTBF≫

小林英俊（財団法人日本交通公社常務理事）

黒須宏志（同主任研究員）

相澤美穂子（同主任研究員）

緒川弘孝（同客員研究員）

ﾃﾞｻﾞｲﾝ･表紙　：　山村高淑

編集協力　：　宮野幸岳（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院）

発　　行　：　北海道大学　観光学高等研究センター

〒060-0817　札幌市北区北 17 条西 8 丁目

TEL：011-716-2111（代表）

e-mail: kankosozokenkyu@gmail.com

財団法人日本交通公社

〒100-0005　東京都千代田区丸の内 1-8-2　第一鉄鋼ビル 9 階

TEL：03-5208-4704

e-mail: jtbfbook@jtb.or.jp

印刷・製本　：　北海道印刷企画株式会社

Case Studies of Community-Based Tourism:

Towards a Sustainable Happy Relationship between Tourism and Community

Edited by Takayoshi YAMAMURA, Hidetoshi KOBAYASHI,
Hirotaka OGAWA and Shuzo ISHIMORI

CATS Library VoL 3

Center for Advanced Tourism Studies, Hokkaido University

Japan Travel Bureau Foundation